

群馬県高崎市

宮 元 町 遺 跡

—店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2023

高崎市教育委員会

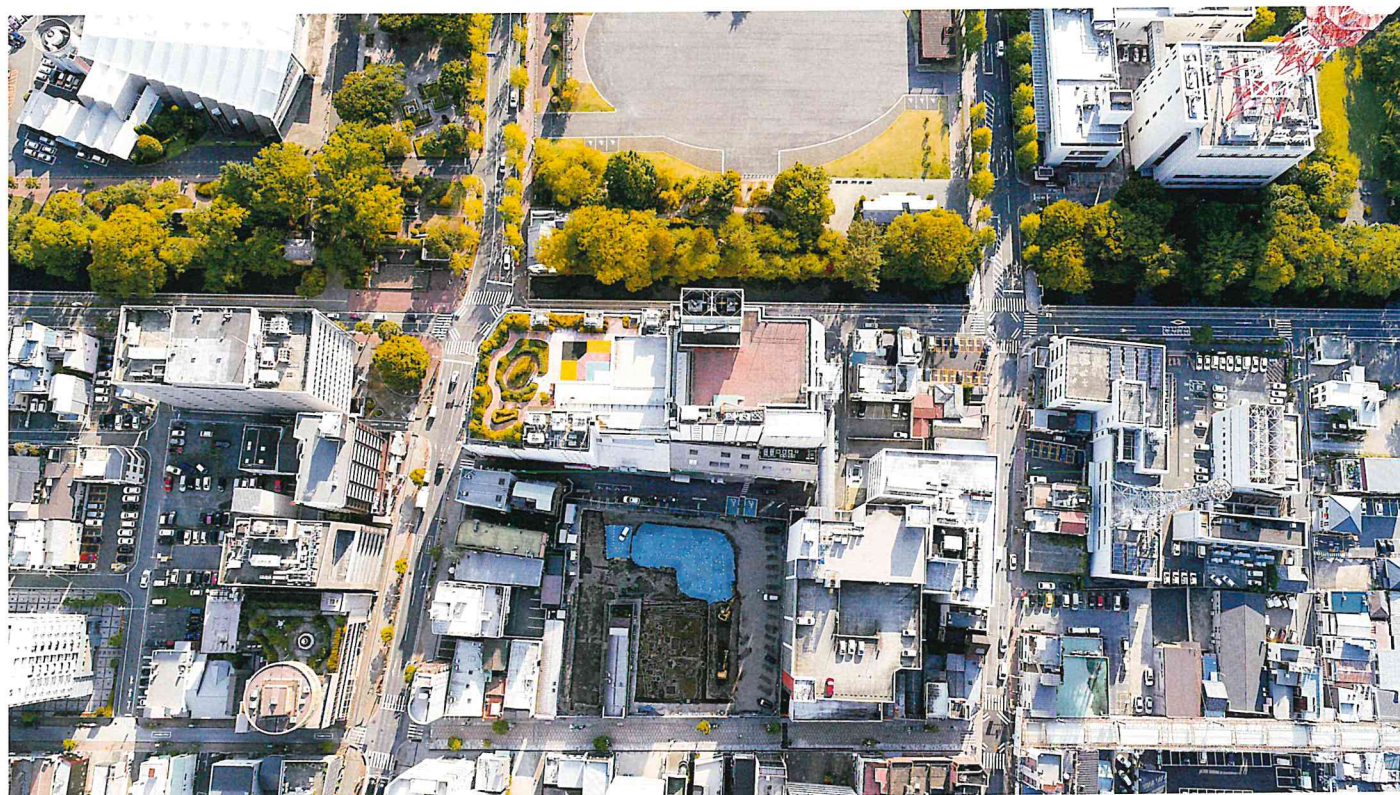
宮元町第二地区優良建物等整備事業共同施行者協議会

山下工業株式会社



調査区上空から見た高崎城（東から）

带状の立木は三ノ丸の堀と土塁。囲まれた城内には平成初期の市役所移転以降、多くの公共施設が集約された。これらに先立ち 25 地点の発掘調査が行われ、中世和田城→近世高崎城→県庁→陸軍歩兵第十五連隊という変遷を跡付ける成果が重ねられている。今回の調査地点はこの高崎城の東側、追手門の目の前で、城下町の中では最も城に近いエリアに相当する。



調査区と高崎城追手門（垂直・右が北）

写真調査区の左上の交差点脇に、移築された乾櫓が立木の間に見える。調査区はこの追手門の食い違い木戸のあった北側に位置し、現在の町名でもある宮元町と鞘町に跨る。藩士と町人の領域の境界でもある。

鞆町
↓
宮元町



第1面垂直（合成・左が北）近代主体面

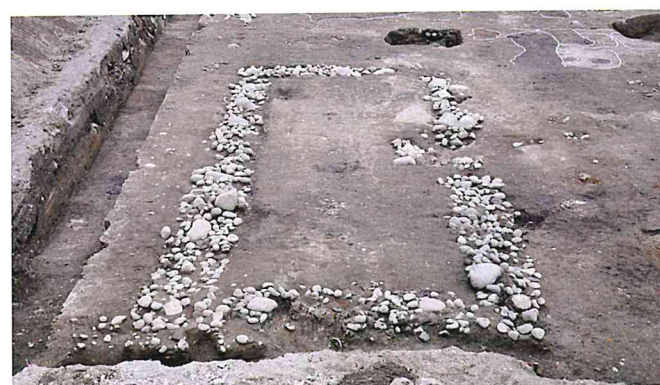
現在は商店街となっている鞆町の下には、江戸時代から続く町屋の痕跡が残っている。江戸後期以降になると、それぞれの家の奥には土蔵が並んでいたようだ。反面、宮元町は大規模な礎石建物が目立つが閑散とした印象。



土層断面には、江戸時代以降頻発した大火に見舞われるたび、人々が復興を遂げてきた痕跡が幾重にも刻まれている。



長方形に規則正しく掘られた穴には焼土と共に生活用品が片付けられている。

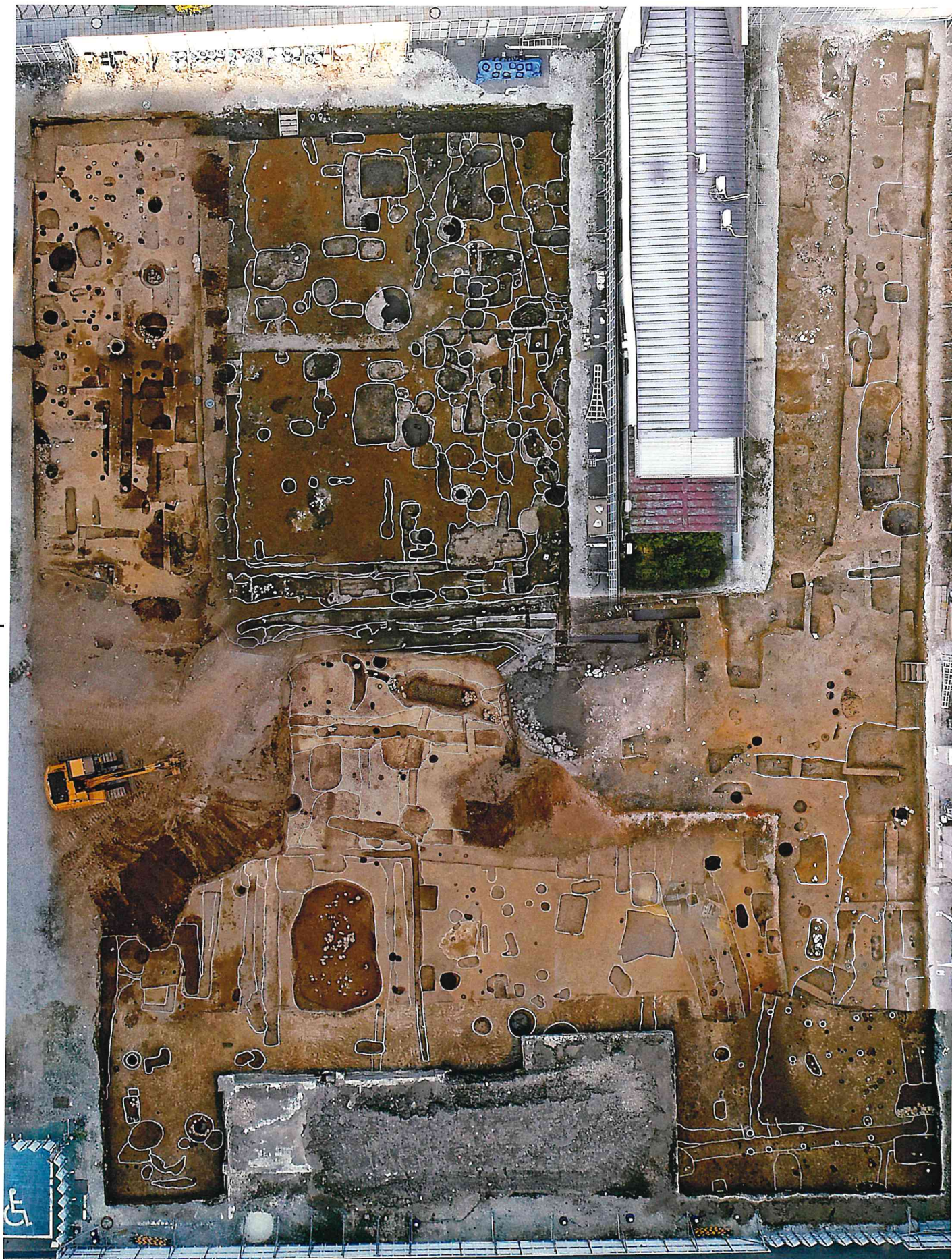


町屋の裏手には蔵が並ぶ。地盤に木の杭を打ち込んだ頑丈な基礎が残っていた。



繰り返し掘られた溝が家境を教えてくれる。石組み・木組みから、土管、塩化ビニール管となり現代に引き継がれていく。

鞆町
↓
宮元町



第2面垂直（合成・左が北）近世主体面

さらに下に掘り進めると、鞆町と宮元町の町境を区画する溝と、無数の土坑が浮かび上がってきた。鞆町側には、刀の鞆や柄、金具類の他に、金属加工や漆加工の痕跡が数多く残されていた。宮元町側には、揃いの磁器の供膳具や、上手の茶道具などが出てくる。



区画溝は度々掘り返され、付近には土取り穴や廃棄土坑も多い。町境は間隙地として、また別の変遷をたどるようだ。



鞘町側には炭化物で埋まる方形の土坑が並ぶ。



鞘や刀装具と共に取鍋を出土する遺構は複数回掘り直されているものが多い。漆碗の出土という共通項がある。



両町の境には大型の池状遺構がある。溝底は湧水層に達し、当初は水をたたえていたが、多量の遺物で埋まっていく。



第3面垂直（合成・左が北）古代末の水田跡

高崎城以降の市街化によって残存状態は思わしくなかったが、As-B（1108年）テフラ下の条里型地割水田跡が検出された。



中世の遺構 1001 (東から)



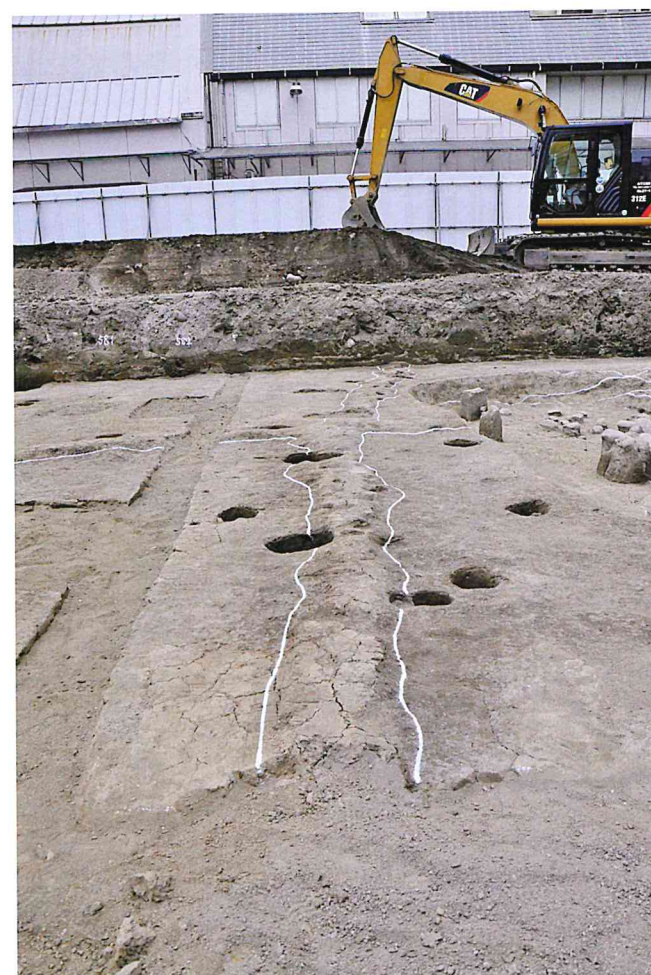
大畦畔と歩行列 1 (西から)



田面②③⑥⑦畦畔の交点 (西から)



右：田面⑪、左：田面⑫ (東から)



右：田面②、左：田面⑥ (東から)



田面①②⑤⑥畦畔の交点 (北から)



205 出土遺物



211 出土遺物



440 出土遺物



244 出土遺物



252 出土遺物



253 出土遺物



250 出土遺物



284 出土遺物



201 出土遺物



201 出土遺物



314 出土遺物



330 出土遺物



製造関連遺物



漆関連遺物



322 出土遺物



348 出土遺物



678 出土遺物



665 出土遺物



673 出土遺物



285 出土遺物



314 多数の鞘の他、金属切片が多数検出された。



322 鞘・柄の他、頭金具や漆濾し紙が出土。



314 切断された鞘には刀身の刳り込みがはっきりと残り、鞘羽口と共伴する。



330 目貫の完形品が出土。



314 箱状の木製品内面は焦げている。



330 水差しや漆紙のついた壺の他、カワラケに金銀銅などが付着。



314 鞘は漆が厚く重ねられ、切断されたものが多い。



348 多量の木材と錨・当て小判などが廃棄されている。



355 カワラケ取鍋と共に赤漆の板材等が重なる。



399 磁器碗を裏返すと鮮やかな赤漆が現れた。



355-1 筒状と円盤状の漆紙が出土。



635 井戸の石組みにカワラケ取鍋がかかる。



673 カワラケ・漆碗・陶磁器碗類が混在する。



665 板状の木材に挟まれるように鞘や柄が出土。



678 多量の木材と共に金箔付きの鞘や眼鏡が廃棄される。



665 鞘出土地点の隣には板材下に湧水層に達する深い穴。





刀装具類 木製品 (2)



例 言

1. 本書は、宮元町第二地区優良建物等整備事業共同施行者協議会による店舗建設に伴う宮元町遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査は高崎市教育委員会による指導のもと、事業者（宮元町第二地区優良建物等整備事業共同施行者協議会）から委託を受けた山下工業株式会社（代表取締役 山下 尚）が実施し、その費用については事業者が全額負担した。
3. 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡所在地	群馬県高崎市宮元町 10-2 外、鞆町 1-1 外
遺跡番号	840
調査面積	1 面：1,791.07㎡ 2 面：2,938.25㎡
期間【現地調査】	令和 4 年 4 月 11 日～令和 4 年 7 月 25 日
【整理期間】	令和 4 年 7 月 26 日～令和 5 年 3 月 19 日
調査監督員	清水 豊（高崎市教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財担当 課長補佐）
調査担当者	永井智教 調査員 関口信夫 辻口菜穂子 調査補助員 蓮沼幸仁
作業員	新井利廣 石井 豊 石原三郎 岩崎のぞみ 大河原晃 片石信彦 加藤龍夫 金井恭子 樺澤礼子 唐澤久美子 木村紀久 栗田 満 桑原 清 高橋富美男 木暮 勉 小和瀬深夏 齋藤 勝 佐藤敏夫 塩野谷和夫 白石真知江 高橋 均 塚本隆夫 土屋孝司 中島高也 野村高久 原澤賢吉 堀口満夫 堀越 芳 丸山嘉之 武藤竹雄 矢島昭司 和田 進 渡辺寿美子
4. 整理作業及び本書作成は、永井指示のもと辻口を中心に青木利文・青木ゆかり・岩崎のぞみ・大島郁美・樺澤礼子・川邊みずき・谷藤龍太郎・津田千鶴・富田和美・渡辺寿美子が行った。
5. 遺構図の作成は戸部孝一・黒岩拓也・吉崎洋介（有限会社 天田安平商店）による。
6. 本書使用写真は、遺構を永井・関口・辻口が、遺物を橋本 優（hs 研究所高崎）、空中写真は神崎龍太が撮影した。
7. 遺物実測は有限会社歴史考房まほら、トレースから観察表までは株式会社ラクロの協力を得た。また、陶磁器類の選別と観察表作成は長井光彦が行った。
8. 自然科学分析は株式会社古生態研究所（担当 高橋 敦）に依頼した。
9. 木器・金属器の三次元計測とトレースは川邊、作図を辻口、挿図・図版作成は辻口の指示のもと川邊、谷藤が行った。
10. 本書の執筆は第 I 章 1 を高崎市文化財保護課、第 III 章 6・7 と補足を永井、第 IV 章を高橋、他を辻口が行った。
11. 本書の編集は辻口・永井・谷藤・川邊が行った。
12. 発掘調査資料及び出土遺物は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
13. 本書作成に伴い、2023 年 1 月 14 日に山下工業文化財整理室において遺物検討会を開催し、参考とさせて頂いた。以下に参加者を記して感謝の意を表します。
（五十音順・敬称略）大西雅弘・小野田 恵・清水 豊・鈴木裕子・中野高久・水村雄功・村山 卓
14. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の機関・諸氏からご助言・ご協力を賜った。
（五十音順・敬称略）赤井博之・池田敏弘・石塚久則・大江正行・大賀備平・木村夏月・齋藤 聡・齋藤達也・津野 仁
外山政子・中村岳彦・南田法正・平野進一・吉田智哉

凡 例

1. 図中の X・Y 値は、平面直角座標 IX 系（世界測地系 2011）の座標値、作図中の北は座標北である。
2. 本報告書で用いる遺跡地図・遺構図・遺物実測図等の縮尺はすべてにスケールを表示した。
3. 本書掲載の第 1 図には国土地理院発行 1/25,000 地形図、第 4 図は高崎市発行 1/2,500「高崎市都市計画図」を一部改変して使用した。
4. 遺構及び遺物の色調観察は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修 2011）を用いた。
5. 土層注記中の「し」はしまり「粘」は粘性を表し、各記号は◎強い ○普通 △やや弱い ×なしを表す。
6. 本文中に用いたテフラの略称は以下の通り。
浅間 A テフラ：1783 年（天明 3 年）：As-A、浅間 B テフラ：1108 年（嘉承 3 年、天仁元年）：As-B、
浅間 C テフラ：3 世紀末～4 世紀初頭：As-C
7. 遺構は全て通し番号とし 3 桁または 4 桁で附番、混乱を避けるため本書を通じゴシック体で表記した。

目 次

巻頭図版

例言

凡例

目次

第Ⅰ章	調査に至る経緯と調査の経過	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査経過	2
第Ⅱ章	遺跡をとりまく環境	3
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	3
第Ⅲ章	検出された遺構と遺物	6
1.	基本層序	6
2.	調査区概観	7
3.	近世・近代の遺構	8
4.	近世・近代の特徴的な遺構	28
5.	近世・近代の出土遺物概要	30
6.	中世の遺構と遺物（第 45 図）	77
7.	古代の遺構と遺物（第 46 図）	77
第Ⅳ章	宮元町遺跡の自然科学分析	78
第Ⅴ章	総括	86
1.	城下町の区画	86
2.	遺構の時期別変遷	86
3.	刀装具類	93
4.	職人町の成立と変遷	93

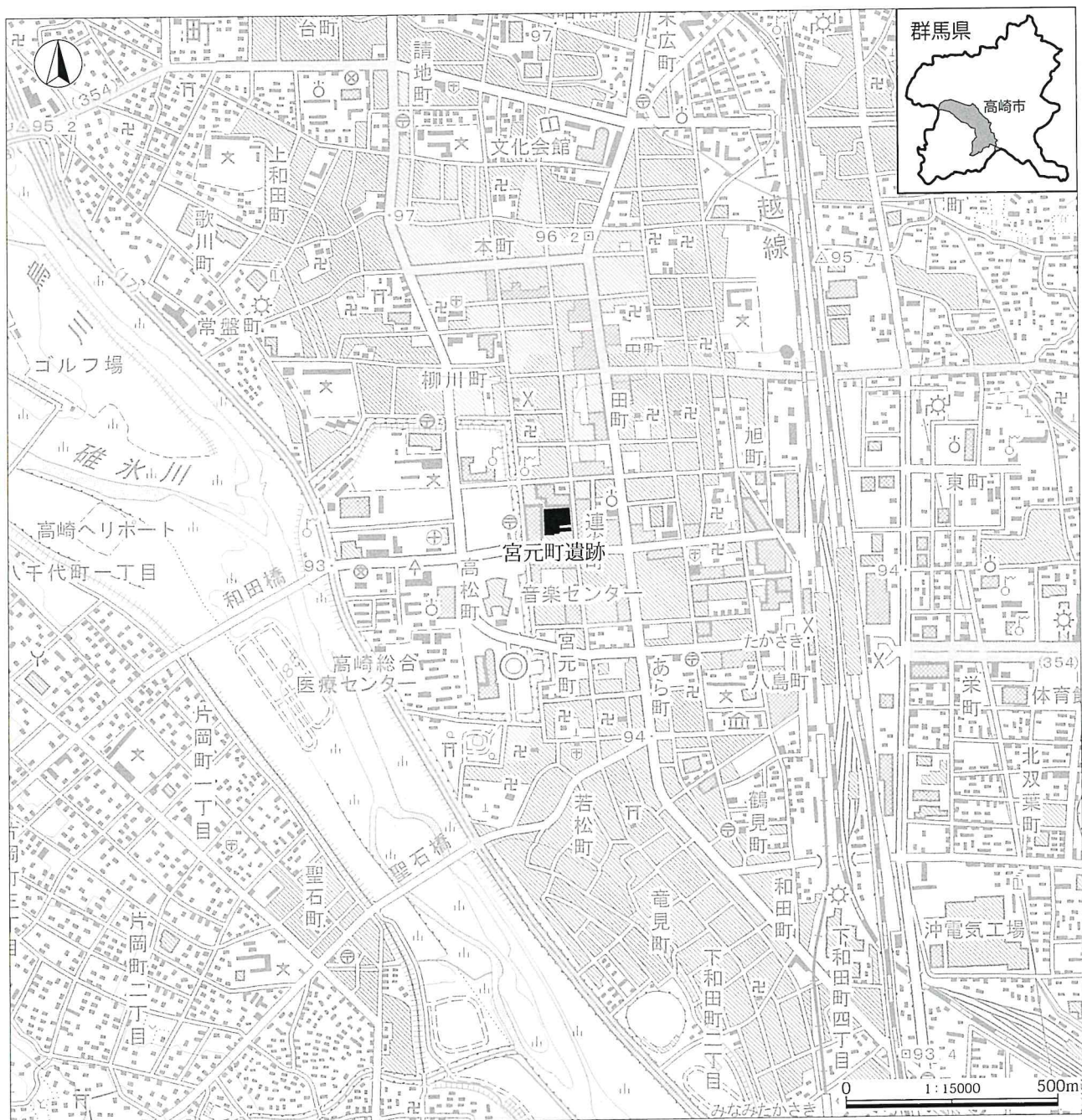
宮元町遺跡写真図版

報告書抄録

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過

1. 調査に至る経緯

令和4年1月、土地所有者から高崎市宮元町、鞘町において計画している既存建物の解体および新規商業施設の新築に先立ち、埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、「市教委」と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地に該当するため、工事に際し協議が必要の旨、回答した。同年1月21日、市教委に試掘確認調査依頼書が提出され、同年2月2日に試掘確認調査を実施した。その結果、近現代の遺構および古代水田跡を確認した。この結果を踏まえ、開発者と市教委とで遺跡の保存に係る協議を行ったが、現状保存は困難との結果となり、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意した。遺跡名は「宮元町遺跡」とし、発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」に順じ、令和4年3月1日、土地所有者・山下工業株式会社との間で契約締結を行い、調査指導・監督は市教委が実施することとなった。



第1図 遺跡の位置

2. 調査経過

宮元町遺跡の発掘調査は、令和4年4月から現地への資器材搬入等の準備を経て、同月11日から重機掘削を開始した。文化財保護課によって指定された調査区は宮元町と鞆町に跨っており、地形的には東へ緩く下る傾斜地に相当する。従って基本層序の把握と今後の調査スケジュールを検討する為の情報収集のため、調査区南端に東西方向のトレンチを開削した。このトレンチ断面を元に第1面として順次北側へと表土を除去し、作業員を投入して精査を行ったところ、近代を中心とした遺構が浮かび上がった。とはいえ先に開削した南端のトレンチの所見では、その下に最低二面の調査を控えていることが明白であった。従って第1面については確認遺構を平面図化した上で附番、遺物を回収するに止めた。ここまでで5月連休までを要した。連休明けから第2面まで再度重機を入れ、近世を中心とした遺構の調査に移行、この段階で発生土の処理が問題となった。

発生土は当初場外搬出、最終的に搬入して埋戻しの計画であったが、各調査面間は比較的薄く、一度に多量の土砂が発生する訳でもなく、対象地内に土山集積での対応が現実的であった。また、ダンプトラックでの場外搬出は、歩行者の多い市街地では交通誘導員を配したとしても危険を伴い、何よりも作業自体が遅延する事が懸念された。かかる状況の中、監督員との協議を経て、これ以降の発生土は場内処理の方で進めるものとした。その後の調査は、作業員の駐車スペースを確保しながら常時土山を移動させる状況下で進めた。

調査期間の多くは梅雨に相当し、雨に悩まされた。地形的には湿地ということから排水も問題となった。幸いにして公共下水道へと通じる排水桝が調査区内に存在していたので、東京電力に依頼して電源を設置し、24時間排水が可能となった。それでも梅雨明け以降に頻発した夕立の被害は調査区を完全に水没させるほどのもので、その都度復旧に丸一日を要した。調査もたけなわの6月19日には、地元対象の説明会を開催した。梅雨晴れの中、熱心な見学者からの質問に窮する場面もあったが、文化財保護の普及・啓発に貢献したという充実感のある一日であった。

7月21日には監督員による完了立会いを受け、その後は埋戻しや資器材の撤収を行った。終盤は工事と並行する慌ただしい状況ではあったが、事故もなく無事に調査完了して安堵したのも束の間、翌月からは整理作業へ移行した。

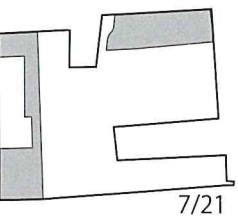
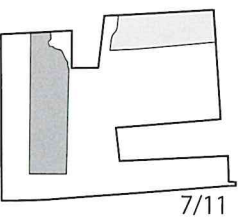
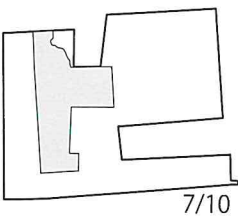
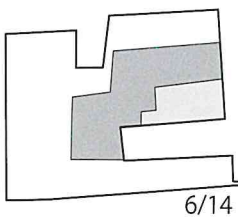
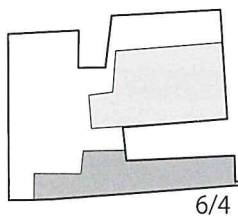
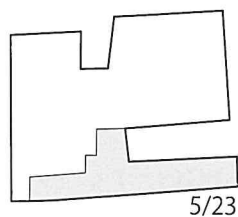
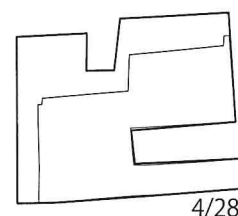
整理作業は約半年と非常にタイトなスケジュールであった為、各専門家を招聘ないしは依頼することで効率を重視した。令和5年1月には報告書の編集作業に着手、4月初旬に印刷業者へ入稿、数回の校正を経て報告書刊行となった。また、出土遺物のうち、木製品・鉄製品はエスカル・ネオフィルムでパッキングし、後日の保存処理までの応急措置とした。



常時2台のバックホウで土を移動



完全に水没した調査区



第1面
 第2面
 第3面

1/2000

第2図
調査の推移

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

1. 地理的環境

宮元町遺跡は高崎市宮元町と鞆町に位置する。榛名山南東麓に広がる火山山麓扇状地（相馬ヶ原扇状地）とそれ続く台地は前橋泥流によって形成され、前橋台地と呼ばれる。前橋台地の中央付近を流れる井野川の流域に広がる井野川低地帯を境とした西域は高崎台地と呼ばれ、土台となる前橋泥流の上に軽石に富み軟弱な土層である高崎泥流を特徴的に見ることができる。烏川左岸には氾濫原が形成され、烏川にえぐられた氾濫原の東端は急崖となっている。高崎台地の西側には岩野谷丘陵が、北西には若田・八幡台地が広がり、その間を流れる碓氷川と烏川の合流点の下流、氾濫原に形成された微高地の東側に続く後背湿地上に当遺跡は位置する。

2. 歴史的環境

宮元町遺跡西方の烏川右岸微高地には、平成初期の高崎市役所移転を契機とし、大規模な公共開発等に伴う記録保存調査が重ねられ、弥生時代から古墳時代、古代に至るまで集落や寺院、墳墓が営まれていることが明らかとなっている。この微高地に対する後背湿地に相当する本遺跡周辺は、弥生時代以降水田として土地利用がなされてきたものと推定される。

弥生時代以来の集落遺跡は、中世に至り烏川の崖線を天然の要害とした和田城が築かれ一変する。さらに近世には和田城跡を取り囲むように高崎城が築かれ、後背湿地は城下町として整備され、居住域に変化した。

近傍の発掘調査履歴

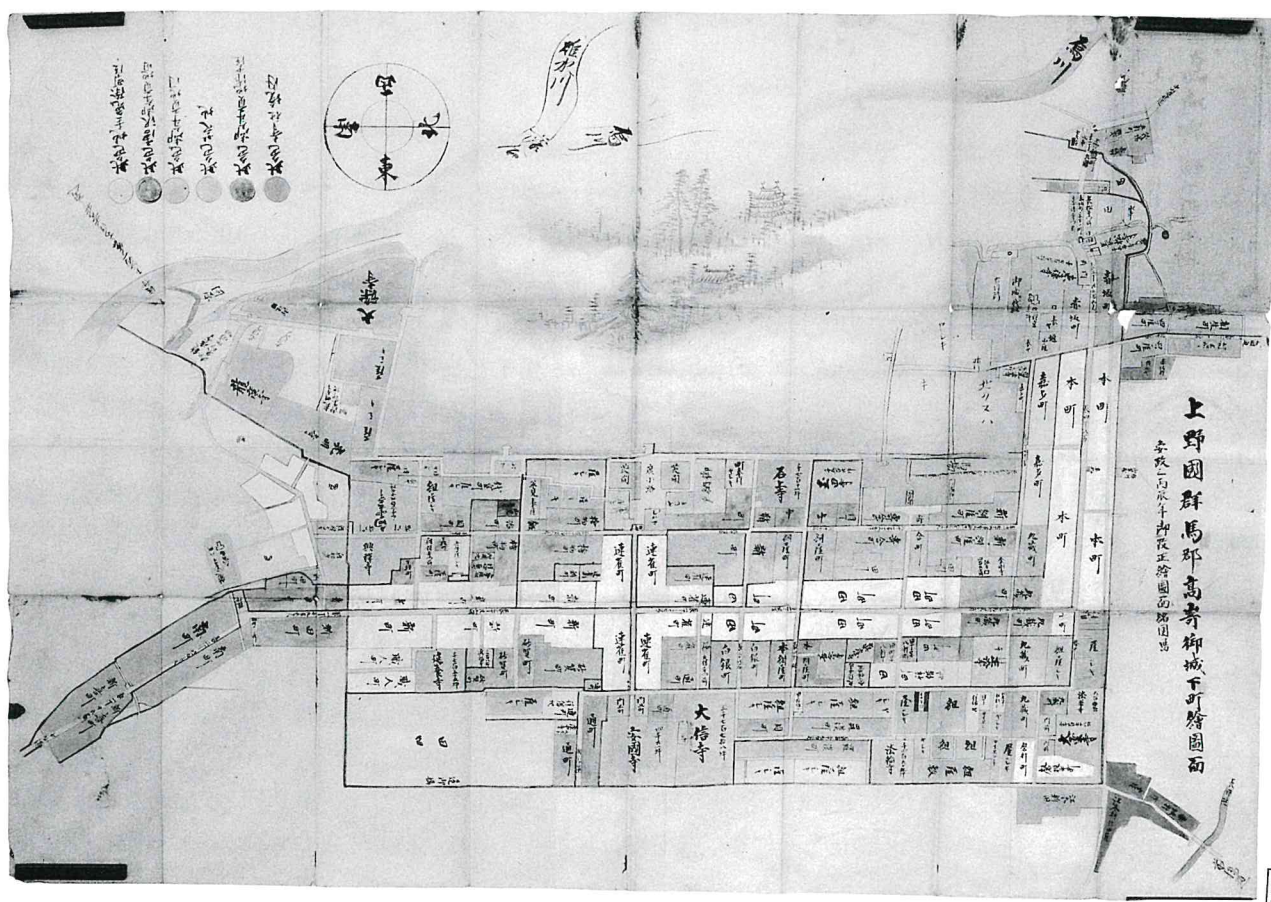
高崎城における発掘調査履歴について、以下時期別にまとめておきたい。中世における代表的な成果として、高崎城 10 次の和田城及び馬上宿に関する石積み土坑、13 次で水路や墓壇の可能性のある土坑、19 次では中世の溝・井戸・土坑、22 次では和田城の堀・井戸・溝・土坑、23 次では和田城の掘割、24 次では薬研状の和田城の堀が確認されている。近世においては各地点で堀や土塁、建物跡等が調査されている。15 次では従来和田城櫓台と考えられていた部分が近世初頭の高崎城築城期のものであることが確認されたのをはじめ、9 次では二の丸の堀の一部が障子堀であることなどが確認されている。対して城下町部分は、今日まで市街地として機能を継続しているため、発掘調査事例は多くはない。高崎城下遺跡では檜物町、鍛冶町、宮元町の各地点で調査が行われている。檜物町遺跡では攪乱により明確な遺構は不明だが多量の近世遺物が出土、真町Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ遺跡や旭町Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ遺跡では城下町を区画する遠構の遺構を、羅漢町遺跡では法輪寺境内の墓域と遠構の遺構が検出されている。その中でも、比較的城下町の様相が判明しているのが連雀町遺跡である。調査地点は連雀町・田町・白金町・通町の境界部分にあたり、白金町と大信寺境内地が調査されている。

歴史的事象等

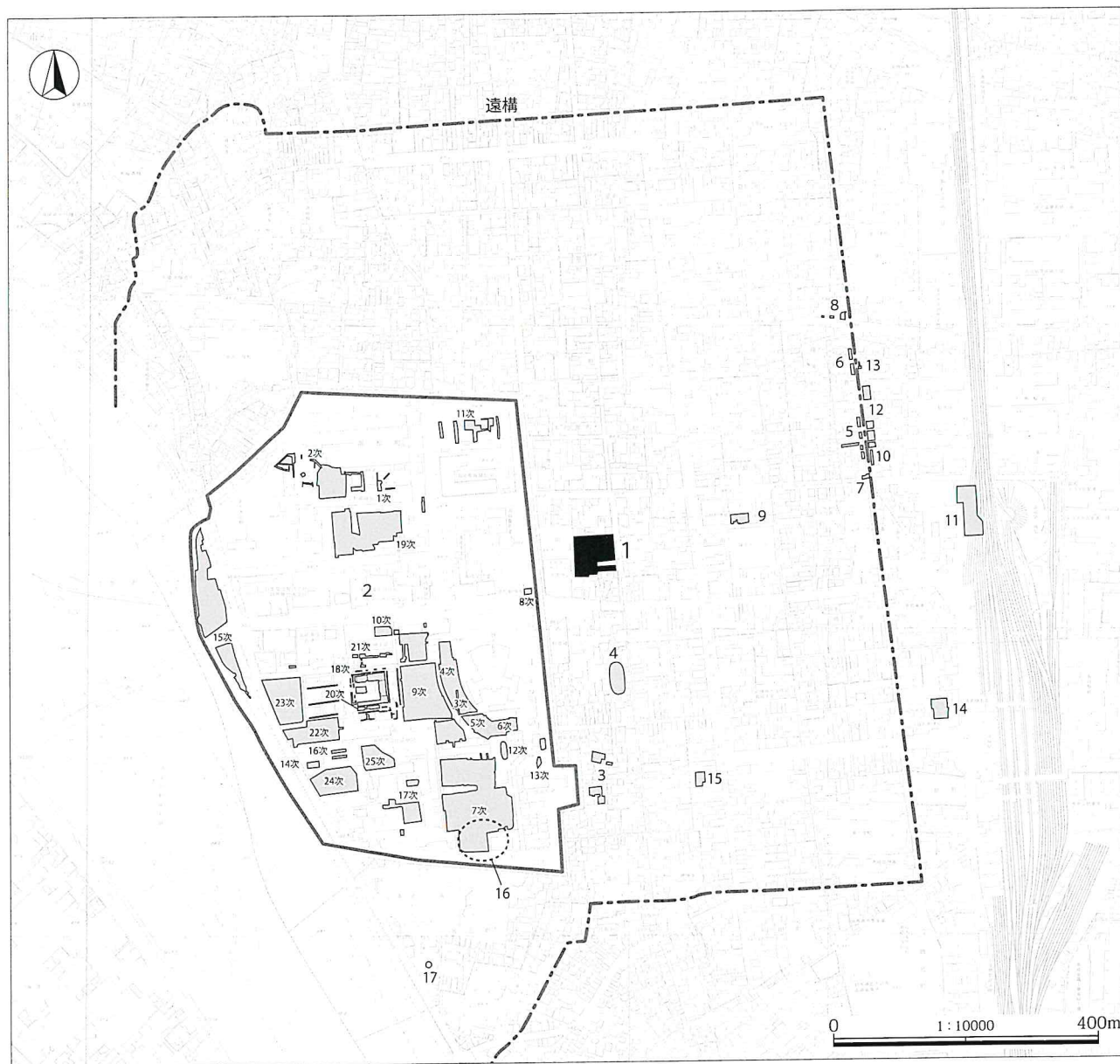
中世において、当地和田郷を中心に活躍した和田氏によって築かれた和田城の築城時期ははっきりしないが、1428 年頃ともいわれ、烏川沿いの断崖を天然の要害として築城された。和田城は武田方と上杉方の激しい戦乱にさらされる。城下には馬上宿、金井宿が置かれ、和田の地は交通の要衝として発展する。豊臣秀吉による小田原攻めの際、北条氏に従っていた城主の和田信業は小田原城籠城戦に加わっており、和田城は小田原城落城とともに廃城となった。

小田原城落城後、豊臣秀吉の命により徳川家康は江戸に移り、江戸の北辺にあたる重要な防衛拠点であった上州に重臣である井伊直政を配し、直政は 12 万石で箕輪城に入城し、城下町の整備を行った。慶長 2 年（1597）、徳川家康の命により直政は箕輪城を廃し、交通の要衝にあり、広大な城下町を備え、守りにも徹した新たな城の適地として和田の地を選定する。この際、龍門寺の和尚の勧めで城の名を「成功高大」の意味をとって高崎城とし、慶長 3 年（1598）に入城し、高崎藩が成立する。高崎城は和田城跡に本丸、二ノ丸、さらに外側に三ノ丸を配して堀や土塁で取り囲み、城内に家臣を住ませた。城下には箕輪より龍広寺、石上寺をはじめとした寺社を配し、連雀町や田宿と呼ばれていた田町等商人町、今回の調査地を含む鞆町の他、鍛冶町、白金町、檜物町、本紺屋町、中紺屋町をはじめとした職人

町を移転させて城内に住む臣下の需要を満たした。さらに城下の外側を遠構と呼ばれる堀で取り囲んだ。高崎藩の礎を築いた直政であったが、関ヶ原の合戦の功により、僅か2年で佐和山に転封となり、以後高崎藩は城代や藩主が目まぐるしく入れ替わり、築城工事は中断され、城下町の整備は遅れる。その中でも慶長9年（1604）、2代城主酒井家次は、中山道の道筋を変更し、城下の中心部である本町の東端より九蔵町、田町、連雀町、新町を通るようにし、街道沿いの商業都市として発展の礎を築いた。元和5年（1619）安藤重信が入封し、以後重長、重博と安藤氏3代76年の支配が続く、高崎藩の治政はようやく安定する。重博は寛文7年（1667）本丸の工事を再開し、翌寛文8年追手門を建立、城前に配された連雀町の民家を一部移動して枳形を作るなど城下の整備を行い、市日を設定し商業の町としての礎を築いた。元禄8年（1695）松平（大河内）輝貞が藩主に就任する。一時は間部詮房と交代するが、享保2年（1717）輝貞が10代藩主として復帰すると、幕末の19代輝聲に至るまで松平（大河内）家の支配が続く。明治維新後、高崎城の跡地には明治4年県庁が置かれたが兵部省の管轄となり前橋に県庁が移転したのは明治6年東京鎮台高崎分営が設置、明治17年歩兵第十五連隊が創設されたことで、高崎は終戦まで軍需都市としての側面を持つようになる。第二次世界大戦終戦直前、高崎市街は広範囲にわたり空襲にあい、近世以降の街並みは失われ商業都市としての発展を遂げるが、町名や町割に当時の名残を留めている。



第3図 上野国群馬郡高崎御城下町絵図面 安政三年 『新編高崎市史資料編7 近世Ⅲ』より転載



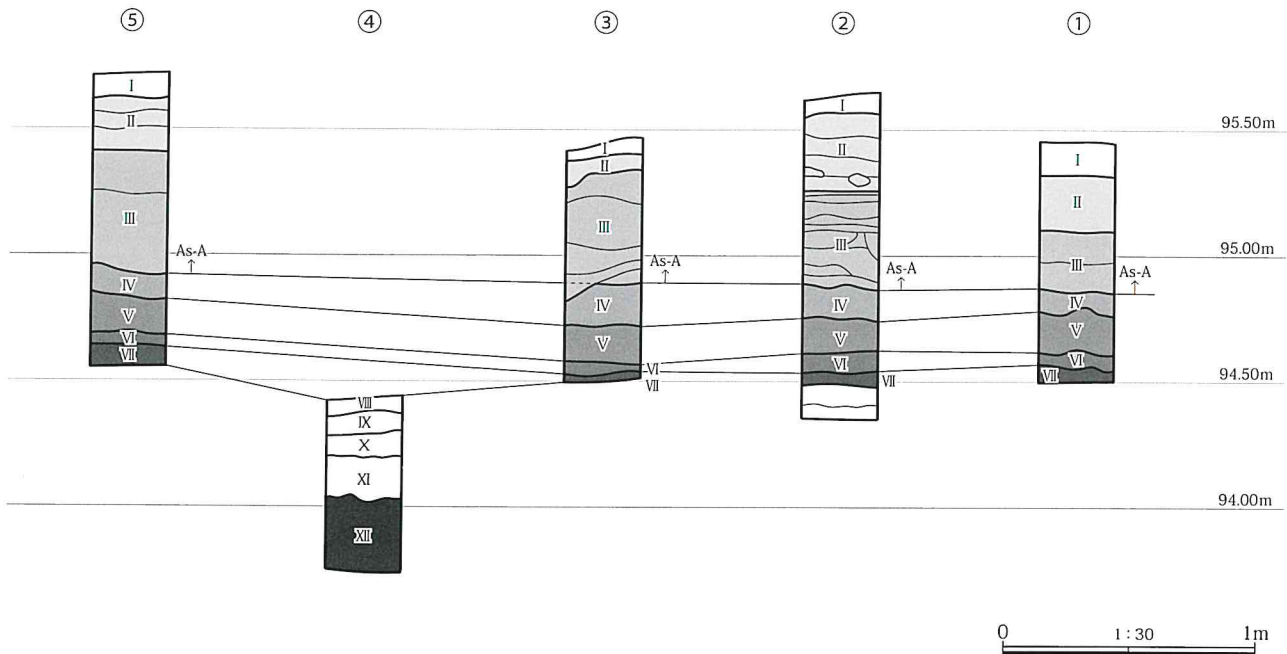
第4図 周辺遺跡

第1表 周辺遺跡一覧

	周辺遺跡	近世	中世	B 下水田	古墳	弥生	縄文	文献
1	宮元町遺跡	○	○	○				本報告書
2	高崎城遺跡 1～25 次	○	○	○	○	○		『高崎城遺跡Ⅱ』1998、『高崎城遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』1990、『高崎城Ⅷ(追手門)遺跡』1992、『梅ノ木郭遺跡』1993、『高崎城三ノ丸遺跡』1994、『高崎城ⅩⅣ遺跡』1997、『高崎城ⅩⅦ遺跡』2006、『高崎城遺跡 18』2011、『高崎城遺跡 19』2010、『高崎城遺跡 20』2013、『高崎城遺跡 22』2015、『高崎城遺跡 23』2016、『高崎城遺跡 24』2017、『高崎城遺跡 25』2018 高崎市教育委員会、『高崎城ⅩⅤ遺跡』2006、『高崎城遺跡 21』2013 (財) 群馬県埋文調査事業団
3	高崎城下町遺跡	○						『高崎城下町遺跡』1993 高崎市教育委員会
4	桧物町遺跡	○						『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』1991 高崎市教育委員会
5	真町Ⅰ遺跡	○		○				『真町Ⅰ遺跡』1996 高崎市教育委員会
6	真町Ⅱ遺跡	○						『真町Ⅱ遺跡』1999 高崎市教育委員会
7	真町Ⅲ遺跡	○			○			『真町Ⅲ・旭町Ⅳ・弓町Ⅰ遺跡』2002 高崎市教育委員会
8	羅漢町遺跡	○						『羅漢町遺跡』2011 (財) 群馬県埋文調査事業団
9	連雀町遺跡	○		○				『連雀町遺跡』2016 高崎市教育委員会
10	旭町Ⅰ遺跡			○				『平成7年度 高崎市内小規模埋蔵文化財発掘調査概報 三島塚古墳・旭町Ⅰ遺跡』1996 高崎市教育委員会
11	旭町Ⅱ遺跡			○				『旭町Ⅱ遺跡』2000 高崎市教育委員会
12	旭町Ⅲ遺跡	○		○				『旭町Ⅲ遺跡』2001 高崎市教育委員会
13	旭町Ⅳ遺跡	○		○	○			『真町Ⅲ・旭町Ⅳ・弓町Ⅰ遺跡』2002 高崎市教育委員会
14	八島町遺跡	○		○	○			『八島町遺跡』2019 高崎市教育委員会
15	あら町遺跡	○						『あら町遺跡』2013 高崎市教育委員会
16	浅間山古墳				○			『高崎城三ノ丸遺跡』1994 高崎市教育委員会
17	頼政神社古墳				○	○	○	『国道17号線拡充工事に伴う頼政神社古墳の調査』1974 高崎市教育委員会

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

1. 基本層序



第5図 基本土層

基本層序は以下のように整理される。

I層	碎石層	
II層	黒褐色土	焼土ブロック、漆喰、亜炭層含む 近現代の盛り土。調査区により差が大きい
III層	暗褐色土	しまりふつう 砂質 As-A を含む 近世後期の生活面。幾重にも重なる
IV層	褐灰色土	しまりふつう 砂質 As-B を含む
V層	明黄褐色土	しまりふつう シルト質 As-B を含む二次堆積層。鉄分の沈着あり
VI層	暗褐色土	しまりふつう シルト質 As-B を含む二次堆積層
VII層	褐灰色土	しまり弱い シルト質 As-B 一次堆積層
VIII層	褐灰色土	しまり強い 粘質土 As-B 下水田土壌
IX層	灰黄褐色土	しまり強い 粘質土
X層	黒褐色土	しまり強い 粘質土 As-C 含む
XI層	にぶい黄褐色土	しまり強い 粘質土
XII層	浅黄土	しまり強い 粘質土 高崎泥流層

検出面は第1面をIV層上位で、第2面をV層上位で、第3面をVII層とVIII層の層界で検出した。

現況地表面はアスファルト舗装の駐車場跡地が大半を占め、調査区北側、西側と南側の一部では既存建物の基礎による攪乱を受け失われている部分が多い。高崎泥流層上には粘土層の堆積が見られ、平安以前の水田利用の可能性もあるが、一部深掘りを行った北側の調査区で確認できたのは風倒木の痕跡のみで、明確な遺構は認められなかった。調査区からは縄文時代の打製石斧、台付甕脚部、埴輪片、布目瓦等もわずかであるが検出されている。いずれも近代の遺物に混入する形で検出されているため、微高地上からの流れ込みであろう。As-B 一次堆積層上面で、西端は東端に比べ7～10cmほど高くなっており、東に向かって下がっていく地形が観察できる。水田の床土である粘土層上にはAs-B 降下後、中世あるいは近世初頭まで自然堆積による漸移層を形成する。この時期の遺構は少ないが、近世以降はAs-Bの漸移層上に客土による盛り土が幾重にも重なり、特に東の鞘町側では顕著である。調査区内でAs-Aの一次堆積層は確認されなかったが、As-A 降下時には東西の高低差は解消されてきている。

2. 調査区概観

調査区は合計 66,480㎡に亘り、検出した遺構は遺構番号を付したもののだけでも 600 を超える。3 面に亘って調査を行ったが、特に近世の生活面は幾重にも重なり、遺構の重複も激しかったため、同時期の遺構が複数面に亘って検出されている。限られた頁数ですべての遺構を詳細に紹介することは困難であるため、各面の検出遺構について概説したのち全体図と遺構の観察表の提示を行ったうえで遺構の事実記載については主要遺構のみに止め、総括で時期別の変遷を辿ることによって不足を補いたい。

まず近世の複数の生活面を含む基本層序Ⅳ層のうち、建物基礎や焼土坑、As-A 坑が比較的明瞭に検出できた面を第 1 面として検出した。近世～近現代までの遺構を含む。蔵の基礎と思われる複数の遺構や焼土坑などを検出した。

次にⅣ層のうち近世期の濃厚な遺構分布が予想された下層面を検出したが、Ⅳ層中では遺構の重なりが激しく明瞭でないため、中世期の自然堆積層Ⅴ層上面を第 2 面として検出した。一部近代の遺構を含むが、主体は近世期である。調査区の中央付近に池状遺構 201 を、また南北方向、東西方向にそれぞれ区画溝を検出し、各調査区から多くの土坑や柱穴を検出している。中世あるいは近世初頭と考えられる溝 350 もこの面で検出した。

第 1 面、第 2 面を通し数多くの近世遺構を検出したが、近世初頭の様相ははっきりしない。ピット等一部の遺構は認められるものの、出土遺物、遺構とも多くない。遺構の様相がわかってくるのは 17 世紀後葉～18 世紀初頭で、遺構数は少ないが南北の溝 322 と 677 がある。この頃から町の区割りがなされているようであり、これらの溝に挟まれた中間地点は、区画溝を掘り直しながら両町の間隙地としての性格を有しているようである。また、この時期に廃絶する遺構は少ないが、遺物は後続する時期の遺物の中に散見される。明確な時期の比定は困難であるが、江戸中期の遺構下層から検出される柱穴があることから、掘立柱建物の存在が考えられる。

遺構の中心となる時期は 18 世紀中葉である。17 世紀後葉に掘られた南北の区画溝はこの時期にも再掘削され、東の鞘町側と西の宮元町側の様相の違いがかなり明確になる。鞘町側にはさらに東西方向の石組みの排水溝状の遺構が掘られ、東西に長い町屋の区割りが完成され、このころの地割が現代まで踏襲されている。宮元町側も南北方向の区画が現れる。鞘町側では鞘をはじめ製作関連の遺構が濃厚に分布し、宮元町側では上手の陶磁器が出土するなど、様相の違いが見て取れるようになる。

1783 年浅間山の噴火による火山灰の降下(As-A)は、一次堆積はないものの遺跡内各所で取り片付け坑として確認できる。この時期の遺構や遺物は前後に比べやや希薄になり、停滞期間があるようである。

19 世紀前葉になると、再び遺構の検出数が増加する。鞘町側は製作関連遺構が多く検出され、このころ調査区中央南西寄りに池状遺構 201 が掘削されたと考えられる。201 は開削時石組みと 2 重の堰を持つ施設であったが、幕末頃には多数の遺物や有機物で埋まり、明治期には 294 と接続する溝が上層に掘り込まれる。近代期の溝は木枠で固定しており、当初は水流があったが、近代期の内に木の葉などの有機物と大量の遺物で埋没する。その後大正～昭和期には石組み 003 が作られる。区画溝西側は桶埋設遺構等も多くみられ、また雑多な遺物が入る廃棄土坑等も多くみられる。

第 3 面は As-B(Ⅶ層)直下で、古代末の水田関係遺構と、第 2 面で確認できなかった中世の溝・土坑・Pit 等を調査した。本章 6・7 節で再述するので、代表的な遺構について説明しておく。中世の溝跡である 350・1001 は本来同一遺構で、烏川沿いの自然堤防として形成された微高地に直行する角度であることから、基本的には地形に応じた区画と思われる。ただ、底面にラミナ状に細砂が堆積していることから、常時ではないにせよ、水流を想定する必要がある。また、1001 とした西側では複数回掘りなおされた状況で、この場所での区画・水流に強い意図を感じる。中世和田城との関係も想起される。古代末水田跡は、低く風化した畦畔によって区画された田面を計 16 面確認した。畦畔は蛇行気味なもの等様々であるが、基本的には正方位なので条里型地割と判断される。しかしながら先述のように畦畔は低く風化したもので、牛馬や人の歩行列が畦畔を潰している様相からは、耕作放棄地であったと思われる。

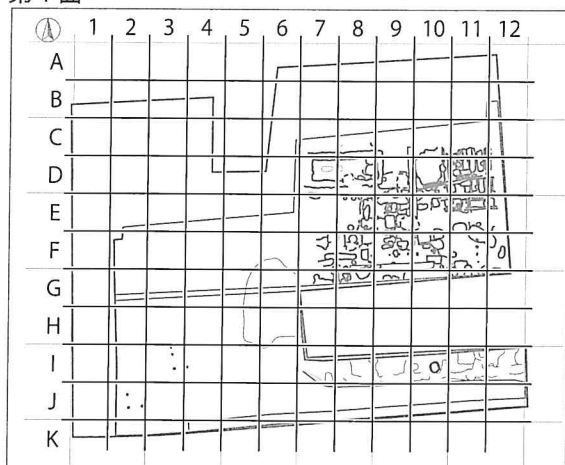
第 3 面下については、調査区南端のトレンチ等、排水作業用に深く下げた部分で適宜観察している。結果として古代末水田跡の耕作土であるⅧ層の下、洪水堆積物と思われるⅨ層を挟んださらに下から As-C を含む黒褐色のⅩ層を認め、古代の土師器・須恵器の細片が混入していることを確認した。断面観察で落ち込みも確認され、その部分を追跡して掘ってみたが、倒木痕と考えられた。現状でⅩ層中の遺物は西方の集落域からの流れ込みと判断せざるを得ないが、水田関係層と仮定すると、耕作土の改良に伴って持ち込まれた土の中に混入していた可能性も残る。

3. 近世・近代の遺構

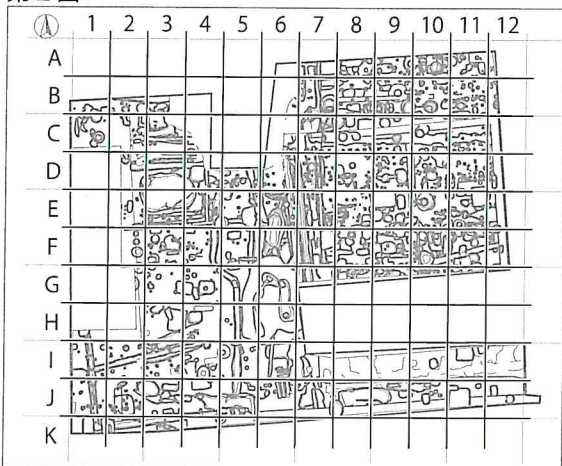
今回の調査における中心的存在である。高崎城下の成立から、明治・大正時代頃までを扱う。第1面が近代主体、第2面は近世主体であるが、これは調査の技術的側面から設定した恣意的な調査面であり、時期別に分離して報告・記述することは困難であった。想定を遥かに超えた遺構数を短期間に完了させなければならないという、いわば不可抗力の事態もあり、個々の遺構について丁寧な調査を行うことは叶わなかった。特に近代の遺構については、表土除去早々「見えてしまった」ため、文化財保護課が事前作成した仕様書に指定されていない調査面を、調査者の判断で増やしたものである。こうした経緯から、近世・近代の遺構は以下の凡例に基づいた一覧表形式での報告とした。

遺構観察表 凡例

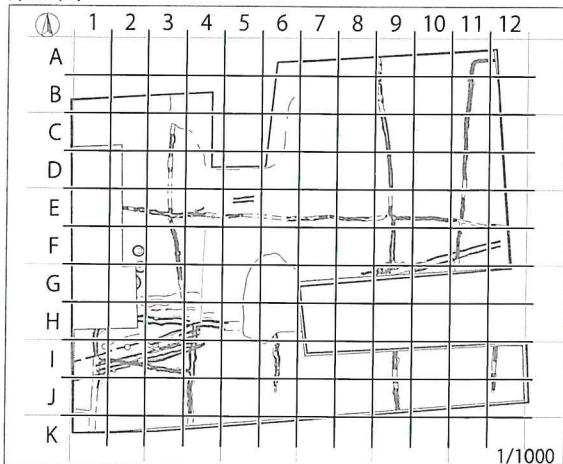
第1面



第2面



第3面

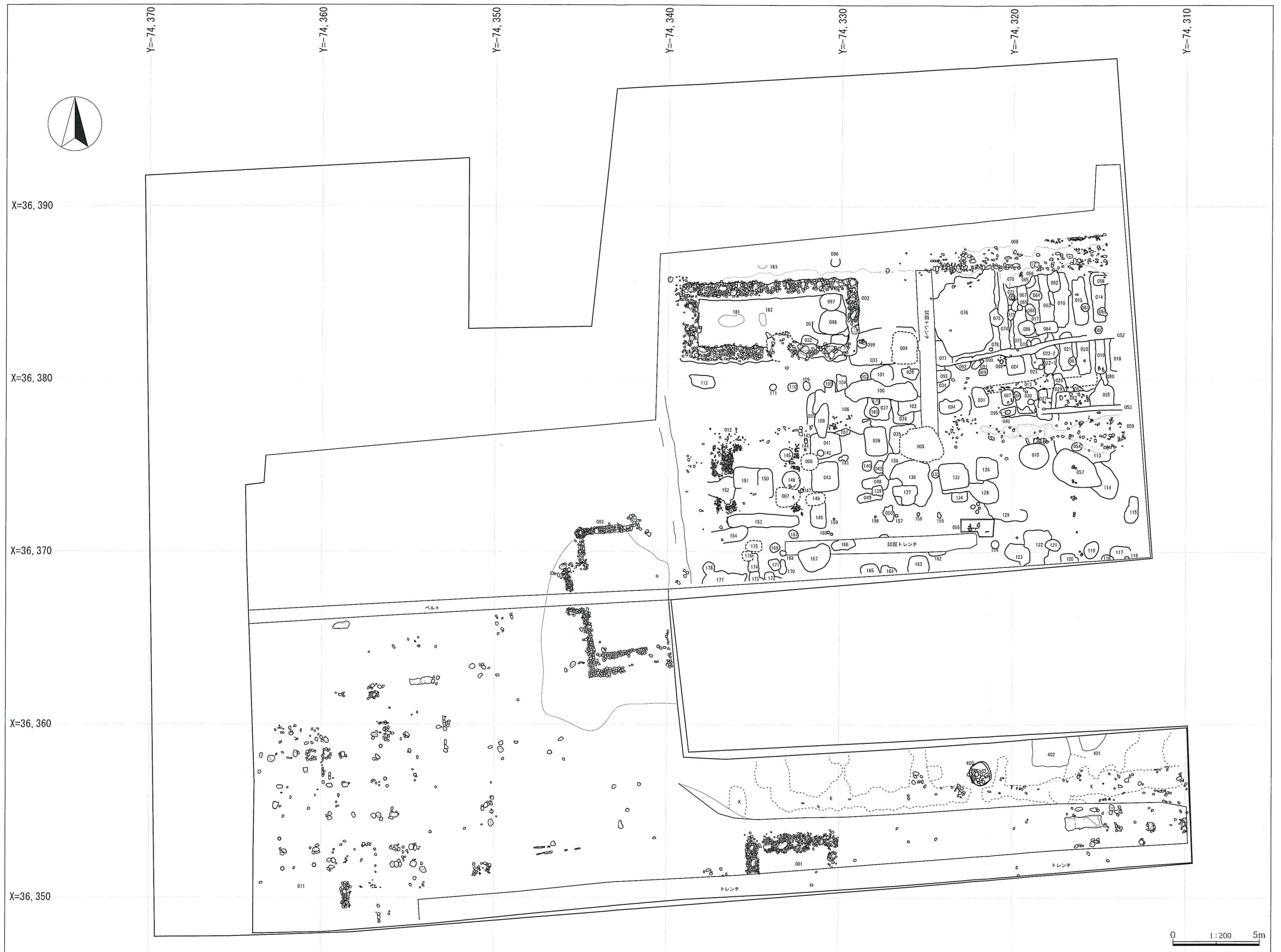


第6図 宮元町遺跡全体図グリッド

調査開始前に多量の遺構検出が予想されたため、遺構番号はすべて通し番号とし、観察表にそれぞれの遺構の性格を示した。スイッチバック方式で複数の面や調査区を並行して調査したため区や面のまとまりごとに附番した。切り合いの激しい大量の遺構を処理するため、検出時に附番してから遺構掘削を行ったため、遺構とならず欠番としたものの、逆に下層遺構等様相の違いが認められた場合等は枝番を付している場合もある。整理段階で同一遺構であると判明した場合やその可能性のあるものは無理に統合せず備考に記載し、遺物等の対照に不都合が生じないよう極力調査時の附番を残した。遺構廃絶年代は出土陶磁器類の年代の下限を表し、切り合いは調査時の所見をもとに記載している。結果、遺構廃絶年代と齟齬が生じている遺構もみられる。調査時の不備によるものもあると考えるが、そのまま記載した。遺構の位置を示すため左記のようにグリッドを設定した。

第1面に関しては平面的な検出状況で覆土の観察を、第2面、第3面に関しては可能な限りセクション図を作成し土層観察を行ったが、紙面の都合ですべてを掲載することは難しい。セクション図の提示は主要遺構に止め、観察表では全体の様相を提示することを優先し当該遺構面で特徴的であった焼土、炭化物、火山灰の多寡を記号で付すこととした。未掲載のセクション図に関しては高崎市教育委員会で保管してあるので参照されたい。また、遺構の重複が激しい部分では上層遺構の平面図を作成した上で下層遺構を掘り下げているもの、上層で完掘できず第3面調査時に調査できた柱穴類で近世以降に帰属するものは第2面図に統合を行ったため、遺構図に重複がある。

遺物に関しても出土量が膨大なため実測図で示せたのは一部である。巻頭の集合写真で主要遺構に関しては様相の提示を試みた。生活面の重複や遺構の切り合いが激しく、遺構面は任意で設定せざるを得ず、掘り込み面から完掘できた遺構はほとんどないため、正確な組成を示しているわけではない。同様の理由により、一覧表の深さは遺構面からの高低差ではなく、最深部の標高とした。



第7図 宮元町遺跡全体図 現代・近代面(第1面)



第 6 図 宮元町遺跡全体図 古代面 (第 3 面)

第2表 遺構一覧表(1)

No.	長軸 [m]	短軸 [m]	底面標高 [m]	性格	掲載 面	検出 面	主 G	副 G	切る	切られる	平面形態	主軸	焼土	炭化 物	火山 灰	所見	遺構発掘下限年代
001	5.41	(2.14)		石組	1	1	J 8	J 7			長方形	不明				第7図参照	19C 中葉
002	10.27	4.67		石組	1	1	D 8	D 7	032・033・097・ 098・099		長方形	東西				第7図参照	近代
003	8.73	(4.90)		石組	1	1	F 6	G 5	201		長方形か	南北				東側に張り出し部あり	近代
004	1.88	1.50		土坑	1	1	D 9		033		隅丸方形	南北				防空壕か	近代
005	2.45	2.06		土坑	1	1	E 9	E 10	035・138		不整形	東西				廃棄坑	近代
006	0.99	0.98		土坑	1	1	E 8		041・043		隅丸正方形	東西				廃棄坑	
007	1.41	1.15		土坑	1	1	F 8		012・146		不整形	東西				廃棄坑	近代
008	—	—		溝	1	1	C 11	C 10	014・066・076		—	—				第7図参照	19C 中葉
009	—	—		溝	1	1	E 12	E 11	083・113	010・027・054	—	—				第7図参照	18C 中葉
010	1.72	1.48		井戸	1	1	E 10		009		円形	—				桶状 木組み2段以上	近代
011	—	—		石組	1	1	J 3	I 3			—	—	◎			礎石列 床面焼土・漆喰片	19C 前葉
012	4.08	(1.25)		石組	1	1	E 7	F 7		007・145・146・ 147・151・152・ 153	方形か	南北				石組み内黄褐色土 柱穴なし雨落ち状	
013	4.20	(0.42)		石組	1	1	E 11			019・020・022-1・ 025・026・030・ 031・082・087		東西				雨落ち状の石列	
014	2.89	0.79		土坑	1	1	C 11	D 12		008・058・059	隅丸長方形	南北	◎	◎		火災処理坑	不明
015	2.79	0.89		土坑	1	1	D 11	C 11		061	隅丸長方形	南北	◎	◎		火災処理坑	
016	3.19	0.81		土坑	1	1	D 11	C 11	063	062・084	隅丸長方形	南北	◎	◎		火災処理坑	
017	3.50	0.82		土坑	1	1	D 11	C 11		064・065・066・ 067・068・084・ 085	隅丸長方形	南北	◎	◎		火災処理坑	
018	1.87	(0.36)		土坑	1	1	D 12			052	隅丸長方形	南北	◎	◎		火災処理坑	19C 前葉
019	2.01	0.57		土坑	1	1	D 12	D 11	013・080	052	隅丸長方形	南北	◎	◎		火災処理坑	19C 前葉
020	1.90	0.70		土坑	1	1	D 11		013	052・081	隅丸長方形	南北	◎	◎		火災処理坑 021・022 接合	19C 前葉
021	2.20	0.79		土坑	1	1	D 11			052・081	隅丸長方形	南北	◎	◎		火災処理坑 020・022 接合	19C 前葉
022-1	2.38	0.70		土坑	1	1	D 11		013	022-2・052・084	隅丸長方形	南北	◎	◎		火災処理坑 020・021 接合	19C 前葉
022-2	1.34	0.71		土坑	1	1	D 11		022-1・023	052	隅丸長方形	東西	◎	◎		火災処理坑	
023	1.80	(0.60)		土坑	1	1	D 11		079	022-2・052	隅丸長方形	南北	◎	◎		火災処理坑	
024	3.18	1.10		土坑	1	1	D 11	D 10		052	隅丸長方形	南北	◎	◎		火災処理坑 瓦片多量 261 上層	
025	1.53	1.36		土坑	1	1	E 12	E 11	083	053・080	不定形	—	○	○		火災処理坑?	
026	1.11	0.63		土坑	1	1	E 11	D 11	013	029・083	不定形	南北	◎	◎		火災処理坑?	
027	1.82	0.89		土坑	1	1	E 11		009・030	029・053	不定形	南北	◎	◎		火災処理坑?	
028	1.00	0.62		土坑	1	1	D 9				不定形	南北	◎	◎		火災処理坑?	
029	1.41	0.66		土坑	1	1	E 11		013・026・027	053・083	不定形	南北			A ◎	As-A 処理坑	
030	1.75	1.51		土坑	1	1	E 11		013	027・086	長方形	東西			A ◎	As-A 処理坑	
031	1.19	0.85		土坑	1	1	E 10		013		不定形	南北			A ◎	As-A 処理坑	
032	0.96	(0.53)		土坑	1	1	D 8			002	不定形	—			A ◎	As-A 処理坑	
033	3.79	2.11		土坑	1	1	D 9			002・004・099	不定形	東西			A ◎	As-A 処理坑	19C 中葉
034	1.46	(0.76)		土坑	1	1	E 10			077・093	不定形	—			A ◎	As-A 処理坑	
035	1.58	1.46		土坑	1	1	E 9		138	005	長方形	南北			A ◎	As-A 処理坑	
036	1.46	1.16		土坑	1	1	E 9			100・103	長方形	南北			A ◎	As-A 処理坑	
037	1.46	(1.21)		土坑	1	1	E 9		106	100・179・180	長方形か(正 方形に近い。 北側100に 切れ不明)	南北			A ◎	As-A 処理坑	
038	1.70	1.24		土坑	1	1	E 9		106		長方形	南北			A ◎	As-A 処理坑	
039	1.85	(0.44)		土坑	1	1	E 8			106・108	不定形	—			A ◎	As-A 処理坑	
040	0.94	0.47		土坑	1	1	E 10			095	不定形	東西			A ◎	As-A 処理坑	
041	1.74	1.51		土坑	1	1	E 8			006・106・107・ 108・142	長方形	東西			A ◎	As-A 処理坑	
042	0.73	(0.50)		土坑	1	1	E 9	F 9		138	不定形	—			A ◎	As-A 処理坑	
043	1.71	1.53		土坑	1	1	F 8	E 8		006	長方形	南北			A ◎	As-A 処理坑	19C 前葉
048	1.52	0.88		土坑	1	1	F 9		138	139	不整形	東西			A ◎	As-A 処理坑	不明
049	1.47	0.50		土坑	1	1	F 9			139	不整形	東西			A ◎	As-A 処理坑	
050	0.94	0.64		土坑	1	1	F 9				不整形	南北			A ◎	As-A 処理坑	
051	2.06	(0.75)		土坑	1	1	D 8			098	楕円形	—			A ◎	As-A 処理坑	不明
052	9.31	(0.32)		溝	1	1	D 11	D 12	018・019・020・ 021・022-1・022- 2・023-1・023-2・ 024・028・073・ 074・077・079・ 091・092			東西				土管列	
053	4.60	(0.32)		溝	1	1	E 11	E 12	025・027・029・ 083			東西				土管列	
054	0.62	0.48		土坑	1	1	E 11		009・113		楕円形	東西				桶埋設遺構	不明
056	1.92	1.03		土坑	1	1	F 10				不整長方形	—				方形木枠・底板あり	近代
057	3.05	1.87		土坑	1	1	E 11	F 11	113・114	捨杭列	涙形	東西		◎		314 上層遺構	19C 前葉
058	0.87	0.59		土坑	1	1	C 12	C 11	014		長方形	東西	○	○			
059	0.60	0.47		土坑	1	1	D 12	D 11	014		不整楕円形	—		○			
060	0.43	0.43		土坑	1	1	D 11	D 12			円形	—					
061	0.48	0.47		土坑	1	1	D 11		015		円形	—	○	◎			
062	1.20	0.75		土坑	1	1	C 11		016・063	066	楕円形	南北	◎	○		焼土坑	
063	0.87	(0.26)		土坑	1	1	D 11	C 11		016・062	楕円形か	南北	○	○			
064	0.69	0.53		土坑	1	1	C 11	D 11	017		楕円形	東西	○	○			

() は残存値を表す。

第3表 遺構一覧表(2)

No.	長軸 [m]	短軸 [m]	底面標高 [m]	性格	掘削 面	検出 面	主 G	副 G	切る	切られる	平面形態	主軸	焼土	炭化 物	火山 灰	所見	遺構発掘下限年代
065	0.85	(0.33)		土坑	1	1	C 11		017	066・067	不明	—	○	○			
066	3.12	(0.36)		土坑	1	1	C 11		017・062・065・ 067・070	008	不明	—		○			
067	1.22	0.61		土坑	1	1	D 11	C 11	017・065・070	068・069・066	楕円形か	南北		○			
068	0.75	0.49		土坑	1	1	D 11		017・067		楕円形	南北					
069	0.34	0.31		土坑	1	1	D 11	C 11	067		円形	—	○	○			
070	1.34	(0.82)		土坑	1	1	C 10	D 10		066・067・071・ 074	不明	—	○	○			
071	0.40	0.38		土坑	1	1	D 10	D 11	070		円形	—	○				
072	0.65	(0.45)		土坑	1	1	D 10		073	074	不整楕円形	—	○				
073	1.79	2.02		土坑	1	1	D 11		074	052・072	長方形	南北	◎	◎		焼土坑	
074	4.55	0.59		溝	1	1	D 10	C 10	070・072	052・073・075		—		◎			
075	1.05	0.77		土坑	1	1	D 10		074・076		不定形	南北	○				
076	4.51	3.78		土坑	1	1	D 10	C 10	077	075	不定形	南北				廃棄坑の集積、複数土坑切り合う	近代
077	1.50	(0.96)		土坑	1	1	D 10		052・034	076	長方形	南北	○				
078	0.21	0.18		柱穴	1	1	D 10				楕円形か	—	○				
079	0.38	0.23		土坑	1	1	D 11			023-1・023-2・ 052・022-2	不定形	—					
080	0.67	0.29		土坑	1	1	D 12	E 12	025	019	不整方形か	南北	◎	◎			
081	0.56	0.48		土坑	1	1	D 11		020・021		円形	—				糞埋設 便槽か	
082	0.46	0.49		土坑	1	1	E 11		013	083	不定形	—	○	○			
083	2.21	(0.90)		土坑	1	1	E 11		026・029・082	025・053	長方形	東西	○				19C 前葉
084	1.40	0.63		土坑	1	1	D 11		016・017・022- 1・085		長方形	東西	○	○			
085	1.00	0.92		柱穴	1	1	D 11		017	084	円形	—	○				
086	0.44	0.37		土坑	1	1	E 11		030		不定形	—	○				
087	0.90	0.72		土坑	1	1	E 10		013		長方形	南北	○	○			
088	0.23	0.21		柱穴	1	1	D 10				円形	—	○	○			
089	0.49	0.39		土坑	1	1	D 10				長方形	東西	○	○			
090	0.21	0.19		柱穴	1	1	D 10		091		円形	—	○				
091	0.61	0.35		土坑	1	1	D 10			052・090	楕円形	—	○				
092	0.88	(0.45)		土坑	1	1	D 10			052	半円形	—				円形土坑の南半のみ残存	
093	0.85	0.68		土坑	1	1	D 10	E 10	034		楕円形	東西	○				
094	1.25	0.95		土坑	1	1	E 10				不定形	東西					不明
095	0.32	0.21		柱穴	1	1	E 10		040		楕円形	—	○				
096	0.54	(0.51)		土坑	1	1	C 8				円形	—		○			
097	1.19	(1.02)		土坑	1	1	D 8		098	002	不整円形	—	○	◎			
098	1.68	1.45		土坑	1	1	D 8		051	002・097	不整円形	東西	○	○		焼土坑	19C 前葉
099	0.54	0.45		柱穴	1	1	D 9		033	002	円形	—					
100	4.15	1.11		土坑	1	1	E 9		036・037・101・ 102・103・106・ 179	104	不定形	東西		◎			
101	1.32	(0.90)		土坑	1	1	D 9			100	不整楕円形	東西					
102	0.41	(0.41)		土坑	1	1	D 9			100	円形	—		○		漆喰片含む	
103	1.39	0.89		土坑	1	1	E 9		036	100	不整形	東西	○	○			
104	0.98	0.57		土坑	1	1	E 9	E 8	100・106		不整方形	南北	○	○			
105	0.52	0.45		柱穴	1	1	E 8		106		楕円形	—		○			
106	3.45	2.34		土坑	1	1	E 8	E 9	039・041・107	037・038・100・ 104・105・108	不整形	—					
107	0.97	(0.45)		土坑	1	1	E 9		041	106	不整形	—					
108	2.00	0.82		柱穴	1	1	E 8		039・041・106		不整楕円形	南北	◎	○			
109	0.52	0.40		柱穴	1	1	E 8				楕円形	南北		○			
110	0.55	0.48		柱穴	1	1	E 8				楕円形	東西					
111	0.38	0.39		土坑	1	1	E 8				円形	—		○			
112	1.56	0.76		土坑	1	1	E 7	D 7			不整楕円形	東西					
113	3.57	(1.01)		土坑	1	1	E 11	E 12	114	009・054・057	不整形	東西		○			19C 前葉
114	2.30	1.50		土坑	1	1	F 12			057・113	不整楕円形か	—	○	○			19C 前葉
115	1.54	0.78		土坑	1	1	F 12				不整楕円形	南北					
116	0.25	(0.14)		柱穴	1	1	G 12				楕円形	—					19C 前葉
117	1.21	(0.46)		土坑	1	1	F 12	G 12		118	隅丸方形か	東西					
118	0.71	(0.28)		土坑	1	1	G 12		117		楕円形か	—					
119	1.05	0.78		土坑	1	1	F 11	G 11			楕円形	南北	○	◎			19C 前葉
120	1.00	(0.48)		土坑	1	1	G 11				不整形	—					不明
121	0.89	0.69		土坑	1	1	F 11		122		楕円形	東西	○	○			
122	2.04	1.63		土坑	1	1	F 11	G 11		121・123	不整形	南北					不明
123	1.62	1.05		土坑	1	1	G 11	F 11	122		不整形	—		○			19C 前葉
124	0.46	0.44		土坑	1	1	F 10				円形	—	○				不明
126	1.34	1.28		土坑	1	1	F 10	E 10	128		不整方形	—					近代
128	3.26	1.21		土坑	1	1	F 10		129・134	126・133	不整形	東西					19C 前葉
129	2.32	(0.69)		柱穴	1	1	F 10	F 11		128	不明	東西	○	○			
133	1.69	1.49		土坑	1	1	F 10	E 10	128・135		正方形	東西		○			近代
134	0.93	(0.53)		土坑	1	1	F 10			128	方形か	—	○	○			

() は残存値を表す。

第4表 遺構一覧表(3)

No.	長軸 [m]	短軸 [m]	底面標高 [m]	性格	掘載 面	検出 面	主 G	副 G	切る	切られる	平面形態	主軸	焼土	炭化 物	火山 灰	所見	遺構発掘下限年代
135	0.47	0.44		土坑	1	1	F 10			133	円形	—	○				
136	2.75	2.33		土坑	1	1	F 9	E 9	138	005・137	不整形	南北		○			
137	1.37	1.13		土坑	1	1	F 9		136		不整形	東西		○			近代
138	1.55	(0.60)		石組	1	1	E 9	F 9	042	005・035・048・ 136	方形	—					
139	0.64	0.61		土坑	1	1	F 9		048・049		不整形	—					不明
140	0.62	0.55		土坑	1	1	E 9	F 9			不整形	南北	○				
141	0.58	0.37		柱穴	1	1	E 9	E 8			不整形	—		◎			
142	0.38	0.38		柱穴	1	1	E 8		041		円形	—		◎			
143	0.30	0.20		柱穴	1	1	E 8				円形	—					
144	0.12	0.11		柱穴	1	1	E 8				不整形	—					
145	0.76	0.72		土坑	1	1	E 8		012		円形	—		◎			
146	1.12	1.02		土坑	1	1	F 8		012	007	円形	—		○			不明
147	0.24	0.19		柱穴	1	1	F 8		012		円形	—		○			
148	1.14	0.72		土坑	1	1	F 8		149		楕円形	東西					近代
149	1.50	0.89		土坑	1	1	F 8			148	不整形	南北			A ◎	As-A 処理坑	
150	1.71	0.87		土坑	1	1	F 8		151		隅丸長方形	南北					
151	1.58	1.24		土坑	1	1	F 7		012・152	150	長方形	東西					
152	1.62	1.43		土坑	1	1	F 7		012	151	不整形	—					
153	4.15	0.79		土坑	1	1	F 8	F 7	012	154	隅丸長方形	東西					19C 中葉
154	2.13	0.79		土坑	1	1	F 7		153		不整形	東西	◎	◎		火災処理坑	
155	0.34	0.22		柱穴	1	1	F 10				—	—					
156	0.21	0.15		柱穴	1	1	F 9				—	—					
157	0.16	0.14		柱穴	1	1	F 9				—	—					
158	0.11	0.09		柱穴	1	1	F 9				隅丸長方形	南北					19C 中葉
159	0.10	0.10		土坑	1	1	F 8				円形	—		◎			
160	0.16	0.16		柱穴	1	1	F 8				円形	—					
161	0.58	0.46		土坑	1	1	F 8				楕円形	—					不明
162	1.04	(0.25)		土坑	1	1	F 10				不明	—					近代
163	1.24	(0.94)		土坑	1	1	G 9				不整形	—		○			19C 前葉
164	0.89	(0.42)		土坑	1	1	G 9				隅丸方形	—		○			
165	1.00	(0.54)		土坑	1	1	G 9				不明	—		◎			19C 前葉
166	1.39	(0.58)		土坑	1	1	F 9	F 8			不整形	—					
167	1.85	1.35		土坑	1	1	G 8	F 8			不整形	東西					19C 前葉
168	0.37	0.33		土坑	1	1	G 8	F 8			円形	—		○			
169	0.57	0.57		土坑	1	1	F 8				円形	—	○	○			不明
170	0.86	0.47		土坑	1	1	G 8			171	不整形	南北	○	◎			19C 中葉
171	0.69	0.61		土坑	1	1	G 8		170		不整形	—		○			19C 中葉
172	0.94	(0.44)		土坑	1	1	G 8				不整形	—					不明
173	0.85	(0.54)		土坑	1	1	G 8	G 7	174		不整形	—	○	○			19C 前葉
174	1.07	0.62		土坑	1	1	G 7	G 8		173・176	長方形	南北		○			近代
175	0.96	0.63		土坑	1	1	F 8	F 7			不整形	東西		◎			
176	0.60	0.60		土坑	1	1	G 7		174	175	正方形	—	○	◎			近代
177	2.49	(0.70)		土坑	1	1	G 7				不整形	東西		○			19C 中葉
178	0.71	(0.65)		土坑	1	1	G 7				円形	—		○			
179	0.40	(0.37)		土坑	1	1	E 9		037	100	楕円形	—					
180	0.55	0.52		土坑	1	1	E 9		037		円形	—	○				
181	1.49	0.70		土坑	1	1	D 7				楕円形	東西					19C 中葉
182	0.74	0.38		土坑	1	1	D 8				楕円形	南北					19C 中葉
183	0.54	(0.19)		土坑	1	1	C 8				楕円形	—					19C 中葉
201	11.86	(7.97)	93.2	土坑	2	2	G 6	H 6	423・425	003・294	不定形	—				池状遺構 事実記載参照 227・294・接合	近代
202	1.41	0.67	94.6	土坑	2	2	J 11		203		長方形	東西	◎	◎		焼土坑	18C 後葉
203	2.35	2.65	94.4	土坑	2	2	J 11			202	長方形	南北	◎	◎		焼土坑 213・214 接合	18C 後葉
204	1.41	0.91	94.5	土坑	2	2	J 12				長方形	南北					18C 末葉～19C 中葉
205	1.45	0.79	94.5	土坑	2	2	J 4	K 4	248		不定形	東西	◎	◎		焼土坑 遺物集合写真参照	18C 前葉
206	1.05	0.44		土坑	2	2	J 4		248		不整形	南北				浅い土坑	17C 後葉
207	4.23	(0.81)	94.5	土坑	2	2	J 5		244・247・248		不定形	東西					18C 前葉
208	0.77	0.56	94.5	土坑	2	2	J 11				円形	東西					不明
209	0.49	(0.23)		土坑	2	2	I 11				円型	—				桶埋設遺構 石入る	19C 初頭
210	0.47	0.35	94.6	土坑	2	2	J 10				円形	東西	○				
211	0.49	0.46	94.5	土坑	2	2	J 10				円形	—	◎	◎		桶埋設 焼土で埋まる	18C 前葉
212	0.56	0.52	94.6	土坑	2	2	J 10				円形	—		○			18C 前葉
213	1.43	1.08	94.0	土坑	2	2	J 10				長方形	南北			A ◎	As-A 処理坑 木材多量 203・ 214 接合	18C 後葉
214	6.95	2.24	94.5	土坑	2	2	J 10	J 9		215	不定形	東西		○		土坑複数連続 203・213 接合	18C 後葉
215	1.33	(0.76)	94.3	土坑	2	2	J 9		214		長方形	東西	○	○			19C 前葉
216	1.48	0.44	94.7	土坑	2	2	J 7	I 7			不定形	南北				区画溝の一部	19C 前葉
217	4.76	2.04	94.5	土坑	2	2	I 6		225		不定形	東西				廃棄土坑 遺物木材多量	近代
218	1.80	1.23	94.7	土坑	2	2	J 6	J 5			不定形	東西				底凹凸あり	19C 前葉

() は残存値を表す。

第5表 遺構一覧表(4)

No.	長軸 [m]	短軸 [m]	底面幅高 [m]	性格	掘削面	検出面	主G	副G	切る	切られる	平面形態	主軸	焼土	炭化物	火山灰	所見	遺構廃絶下限年代
219	0.44	0.38	94.6	土坑	2	2	J 6				円形	—				桶埋設か	不明
220	0.42	0.40	94.6	土坑	2	2	J 6				円形	—				桶埋設遺構	19C 前葉
221	0.44	0.42	94.7	土坑	2	2	J 6				円形	—				桶埋設遺構	
222	0.43	0.39	94.5	土坑	2	2	J 6	J 5			円形	—	○			桶埋設か	
223	2.70	(2.25)	94.5	土坑	2	2	J 2				不整長方形	—	◎	◎		焼土坑	不明
224	1.38	0.58		土坑	2	2	J 3				長方形	東西				廃棄土坑	不明
225	3.19	(3.05)	94.6	土坑	2	2	J 7				不定形	—				廃棄土坑 掘り込み複数回	近代
227	8.21	(1.50)	94.4	土坑	2	2	J 8	J 9			不定形	東西				近世廃棄土坑 001 下土壌改良か 甍出土	近代
228	1.41	0.45		土坑	2	2	K 3				不定形	北西—南東				南壁にかかる 239 接合	18C 中葉
229	2.23	0.93	94.6	土坑	2	2	J 3		230		長方形	東西				多量の石と共に遺物廃棄	19C 中葉
230	1.28	(1.25)	94.7	土坑	2	2	J 3		244	229	不整円形	—	○	○			
231	—	—		溝	2	2			248	205・206・207・ 226		—				243 接合	19C 中葉
232	3.15	2.20	94.5	土坑	2	2	J 3	J 2	244		不整楕円形	東西	○	◎		鉄釘多く含む	18C 中葉
233	7.24	1.21	94.4	溝	2	2	I 5	J 5		244・246		南北				428 と接続	17C 後葉～18C 初頭
234	0.58	0.46		土坑	2	2	I 5		235		円形	—					
235	0.54	(0.44)		土坑	2	2	I 5		234		円形	—					
236	0.53	0.49		土坑	2	2	K 2		248		円形	—				238 と同種遺物あり	19C 前葉
237	0.96	0.63		土坑	2	2	J 3		248		不定形	南北					18C 中葉
238	0.52	0.41		柱穴	2	2	K 2		248		円形	—					不明
239	0.98	0.67		土坑	2	2	J 4		244		不定形	南北				229 接合	18C 中葉
240	0.63	0.51		土坑	2	2	J 4		241		円形	東西					近代
241	2.56	(1.68)	94.7	土坑	2	2	J 4			240・242	長方形	東西	○	◎		炭化した木片と共に遺物廃棄	18C 前葉
242	1.88	1.67	94.5	井戸	2	2	I 4		241・1004		円形	—				桶状・瓦大量廃棄 232 と接合	近代
243	2.30	1.11	94.6	土坑	2	2	J 3	J 4	244		不定形	東西					19C 前葉
244	14.91	3.55		溝	2	2	J 4	J 5	233	206・207・230・ 232・239・248・ 253		東西		◎		南北に広がる不定形な溝状遺構	18C 中葉、19C 前葉
245	1.82	1.74		井戸	2	2	I 5				円形	—				桶状	19C 前葉
246	1.00	0.46		土坑	2	2	I 5		233		不定形	南北					19C 前葉
247	1.57	1.41	93.9	井戸	2	3	K 5	J 5	248			—				丸木組み・石込める 558 接合	18C 中葉
248	13.69	1.11	94.3	溝	2	2	K 3	K 2	244	205・206・207・ 236・237・238・ 247・1019	溝状遺構	北東—南西				東側は 244 上層 下層は As-A 降下前	19C 前葉
249	1.23	1.12		土坑	2	2	G 6	H 5	201		方形	南北				三方木板で囲み内側杭で止める	
250	0.49	0.47		土坑	2	2	D 11		251・252		円形	—	◎	◎		焼土坑・第 12 図参照 遺物主体 252・284 接合	18C 中葉
251	1.14	0.66	94.3	土坑	2	2	D 11		252	250	楕円形	南北	◎	◎		焼土坑・第 12 図参照	18C 中葉
252	3.97	1.93	94.4	土坑	2	2	D 11		253・258	250・251	長方形	東西	◎	◎		焼土坑・第 12 図参照 250・284 接合	18C 中葉
253	2.68	2.31	94.1	土坑	2	2	E 11	D 11	255・256	252・254	正方形	南北	◎	◎		焼土坑・第 12 図参照	18C 中葉
254	1.15	(0.51)	94.5	土坑	2	2	E 11		253・255・302		円形	—	◎	◎		焼土坑・第 12 図参照	18C 中葉
255	1.10	(0.87)	94.5	土坑	2	2	E 12		453	253・254・302	円形	—	◎	◎		焼土坑	18C 中葉
256	0.41	0.26	94.6	土坑	2	2	E 12			253	円形	—	◎	◎		焼土坑	18C 中葉
257	1.07	0.82		土坑	2	2	E 11				不定形	—					
258	1.09	1.05		土坑	2	2	E 11	D 11		252	長方形	東西	◎	◎		焼土坑・第 12 図参照	19C 前葉
259	0.98	0.35	94.5	土坑	2	2	E 11				楕円形	東西					
260	1.42	1.15	94.3	土坑	2	2	E 10				長方形	南北					不明
261	1.91	1.04	94.3	土坑	2	2	D 11	D 10			長方形	南北				瓦片多数	19C 中葉
262	0.93	0.59	94.3	土坑	2	2	D 12		263		長方形	南北	◎	◎		焼土坑	19C 前葉
263	0.65	0.63	94.3	土坑	2	2	D 12			262	長方形	南北					
264	1.42	0.60	94.5	土坑	2	2	D 12	D 11			不定形	東西					
265	1.76	0.55		土坑	2	2	D 12	C 12			長方形	南北					
266	2.75	1.68		土坑	2	2	D 10	C 10	267・268・301		長方形	南北	◎	◎		焼土坑	不明
267	1.19	0.99		土坑	2	2	D 11	D 10		266	円形	—					不明
268	1.75	(0.53)		土坑	2	2	D 10	C 10		266	楕円形	—					不明
269	0.54	0.43		柱穴	2	2	C 10		271			—					
270	1.65	(0.76)		土坑	2	2	D 10				不定形	南北			A◎	As-A 処理坑	
271	1.62	1.19		土坑	2	2	D 10	C 10		269	不整長方形	南北					19C 中葉
272	0.68	0.65		土坑	2	2	D 10		273		円形	—					近代
273	0.94	(0.30)	94.3	土坑	2	2	D 10			272	不定形	—					
274	1.41	1.30	94.5	土坑	2	2	D 10				隅丸長方形	東西	◎	◎		焼土坑	19C 中葉
275	1.74	0.76	94.5	土坑	2	2	D 10				不定形	南北					
276	1.11	1.05	94.0	土坑	2	2	C 10		301		不整円形	—					近代
277	1.12	1.06		井戸	2	2	C 9				円形	—				木枠・テラス状	近代
278	0.95	0.92	94.3	土坑	2	2	C 9		279		不整円形	—					19C 中葉
279	0.47	(0.20)		土坑	2	2	C 9			278	不定形	—					
280	1.92	(1.51)	94.3	土坑	2	2	D 9		282		不定形	南北					
281	1.22	1.01	94.5	土坑	2	2	D 9		282		不定形	—					
282	1.03	0.43	94.5	石列	2	2	D 9			280・281	長方形	東西				石列状遺構東側で屈曲	
283	1.88	1.07	94.4	土坑	2	2	E 9				長方形	南北			A◎	As-A 処理坑	不明
284	3.35	2.41	94.3	土坑	2	2	E 9		285		長方形	東西	○	◎	A○	焼土坑 第 8 図 250・252 接合	19C 前葉

() は残存値を表す。

第6表 遺構一覧表(5)

No.	長軸 [m]	短軸 [m]	底面幅高 [m]	性格	掘削 面	検出 面	主 G	副 G	切る	切られる	平面形態	主軸	焼土	炭化 物	火山 灰	所見	遺構発掘年代
285	2.71	(0.88)	94.3	井戸	2	2	E 9			284・368	不定形	—				素掘り 368 下層	18C 中葉
286	1.24	0.68		土坑	2	2	D 9				不定形	—					
287	1.30	0.82	94.5	土坑	2	2	D 9				楕円形	南北					不明
289	0.68	0.64	94.7	土坑	2	2	D 8	C 8			円形	—					不明
290	1.60	1.30	94.3	土坑	2	2	D 8		291		不定形	—					19C 前葉
291	2.60	1.30	94.3	土坑	2	2	D 8			290	不整長方形	南北					不明
292	0.76	0.79	94.0	井戸	2	2	D 8				円形	—				素掘り	
293	1.34	0.38	94.3	土坑	2	2	D 8				不定形	—					不明
294	17.75	1.04	94.4	溝	2	2	C 6	F 6	201・420・421・ 451・531・532・ 539・1012・ 1015・1016	451		南北				区画溝 201 上層に接続する	近代
295	0.45	0.44		土坑	2	2	I 5				円形	—					
296	0.53	0.49	93.9	土坑	2	2	I 5				円形	—				垂直で深い	
297	0.92	0.56		土坑	2	2	J 5				楕円形	東西					
298	0.42	0.42		土坑	2	2	J 5				円形	—					
299	0.66	0.61		土坑	2	2	J 5				円形	—					
300	1.35	(1.41)		土坑	2	2	F 11		308・309・310・ 350		不定形	東西					
301	8.58	(1.76)	94.3	溝	2	2	C 11	C 10		276		東西				008 下層遺構 第8図参照	不明
302	8.27	(2.16)	94.5	溝	2	2	E 12	E 11	453・454	318・328		東西				009 下層遺構 第8図参照	不明
303	1.48	1.44		井戸	2	2	E 11		314・332		円形	—				桶状 亜炭含む	19C 中葉
304	2.46	2.42	94.4	井戸	2	2	E 10				不定形	—				桶状か 亜炭含む	19C 前葉
305	0.54	(0.15)		土坑	2	2	F 12		307		不明	—					不明
306	1.19	(0.28)	94.3	土坑	2	2	G 12	G 11		307	不明	—					不明
307	1.23	(0.75)	94.5	土坑	2	2	G 12	F 12	306	305	不明	—					18C 中葉
308	1.95	1.36	94.2	井戸	2	2	G 11		350	300	不定形	—				素掘り	19C 前葉
309	0.82	(0.53)		井戸	2	2	F 11		310	300・321	円形	—				素掘り	
310	1.31	(1.27)	94.0	土坑	2	2	F 11		350	300・309・321	不定形	—					
311	0.55	0.51	94.1	柱穴	2	2	F 12				円形	—					中世か
312	1.60	0.87	94.6	土坑	2	2	F 11		350		楕円形	南北					18C 中葉
313	0.99	0.97	94.5	土坑	2	2	F 11		314		円形	—					不明
314	4.52	3.22	94.1	土坑	2	2	F 11		315・317	303・313	不定形	東西				第8図参照	19C 前葉
315	0.94	0.74	94.5	土坑	2	2	E 12	F 12	316・317・318	314	楕円形	東西	◎	◎		焼土坑	不明
316	—	—		土坑	2	2	E 12	F 12	317・318	315	円形	—					
317	0.56	0.26		土坑	2	2	F 12			314・315・316	不定形	東西				土坑	
318	1.30	(0.74)	94.4	土坑	2	2	E 12		302・316	315	不定形	東西					19C 前葉
320	0.62	0.37		土坑	2	2	E 10		321・322・334		楕円形	東西					19C 前葉
321	1.41	(1.11)	94.2	土坑	2	2	G 11	F 11	300・309・310		不定形	—					18C 後葉
322	1.83	1.75	94.5	土坑	2	2	E 10	E 11	455	330	不定形	南北				第8図参照	18C 中葉
323	1.60	1.11	94.0	土坑	2	2	F 10		330		不定形	南北					19C 前葉
324-1	1.15	(0.99)	94.5	土坑	2	2	E 10		541	324-2	不定形	—					19C 前葉
324-2	1.77	(0.99)	94.5	土坑	2	2	E 9		324-1・541	336・339	不定形	—					不明
325	1.63	1.47	94.5	土坑	2	2	E 10		324-1・395	326-1	不定形	—					18C 中葉
326	—	—			2	2					不定形	—				326-1、326-2 上層	18C 中葉、19C 前葉
326-1	1.29	1.19	94.5	土坑	2	2	F 10		325・456	330・326-2	不整方形	—					
326-2	1.53	(0.67)	94.4	土坑	2	2	F 10		326-1		楕円形	南北	◎	◎		焼土坑	
327	0.81	0.60		土坑	2	2	C 11				不定形	—					
328	0.69	(0.18)		土坑	2	2	E 12		302		円形か	—					
329	0.69	0.35		土坑	2	2	E 10			320	不定形	東西					
330	3.13	(3.08)	94.4	土坑	2	2	F 10		322・331	323・326-1	長方形	南北					19C 前葉
331	1.41	(0.67)	94.3	井戸	2	2	F 11			330	—					素掘り 上方漏斗状	18C 中葉
332	1.16	0.90	94.6	土坑	2	2	F 11			303	楕円形	南北					18C 中葉
333	0.69	0.52	94.1	土坑	2	2	E 9	E 10			楕円形	—					
336	0.74	0.70	94.4	土坑	2	2	F 9		324-2・339・ 395-3		円形	—					19C 前葉
338	1.05	(0.70)		土坑	2	2	F 9	E 9	339・341・357・ 358		不定形	南北		A◎		As-A 処理坑	不明
339	1.98	(1.59)	94.4	土坑	2	2	E 9	F 9	324-2・341・ 342・458	336・338	不整円形	—		○			18C 中葉
341	0.86	(0.49)		土坑	2	2	E 9			338・339	不定形	—					18C 中葉
342	1.41	1.26		土坑	2	2	E 9		458	324-2・339	隅丸方形	—		A◎		As-A 処理坑	
343	0.43	0.33		土坑	2	2	E 9			342	円形	—		A◎		As-A 処理坑	
345	1.77	0.95	94.3	土坑	2	2	F 10		348・350・361		長方形	東西					19C 前葉
346	0.89	0.44	94.6	土坑	2	2	G 10	F 10	350		楕円形	南北					不明
347	0.52	0.43	94.5	土坑	2	2	G 10		350		円形	南北					
348	2.08	1.57	94.0	土坑	2	2	F 10		350	345・349・395-1	不整楕円形	南北				第8図参照	19C 前葉
349	1.06	(0.27)	94.5	土坑	2	2	F 10		348・350		不定形	—				ブリキ片多量に含む	近代
350	—	0.91	94.5	溝	2	2	F 12	G 9		300・308・310・ 312・345・346・ 347・348・349・ 351・352・361・ 570・571		北東—南西		B◎		1001 と同一	中世か
351	4.45	(1.47)	94.3	井戸	2	2	G 9		350		不定形	—				素掘り→石組み	19C 前葉

() は残存値を表す。

第7表 遺構一覧表(6)

No.	長軸 [m]	短軸 [m]	底面標高 [m]	性格	掘削 面	検出 面	主 G	副 G	切る	切られる	平面形態	主軸	焼土	炭化 物	火山 灰	所見	遺構発掘下限年代
352	1.00	0.86	94.5	土坑	2	2	G 9		350		円形	東西					18C 中葉
353	0.82	0.66	94.3	土坑	2	2	F 9		355・359		不定形	東西					19C 前葉
354	1.99	1.57	94.3	土坑	2	2	F 9		355-2・357・365		不定形	東西	◎	◎	A◎	As-A 処理坑 板材敷く	不明
355					2	2	F 9				不定形	—				355-1、355-2 上層	18C 中葉
355-1	1.63	0.50		土坑	2	2	F 9			325-1・325-2・396	長方形	東西					不明
355-2	2.19	1.79	94.5	土坑	2	2	F 9		355-1	353・354・357・396	長方形	東西					
357	2.37	(1.10)	94.5	土坑	2	2	F 9		355-2	338・354・365	長方形か	東西					18C 中葉
358	1.70	0.56	94.4	土坑	2	2	F 9		449	338	長方形	東西					18C 中葉
360	1.69	1.47	94.1	土坑	2	2	F 9	G 9			楕円形	—					
361	0.65	0.55		土坑	2	2	F 9		350	345	不定形	—					不明
362	0.55	0.54	94.6	土坑	2	2	G 9	G 8			円形	—					
363	0.54	(0.24)		土坑	2	2	F 9		364		不定形	—		◎		364 上層	19C 前葉
364	1.73	1.62		土坑	2	2	F 8	F 9		363・381	不定方形	—					18C 中葉、19C 前葉
365	2.04	1.96		土坑	2	2	F 9	F 8	357・378・379	354・366	不定形	—					18C 中葉
366	0.84	0.78	94.5	土坑	2	2	F 9			365	円形	—					
367	1.20	0.99	94.5	土坑	2	2	F 9				不定形	東西					不明
368	1.72	1.61	94.1	井戸	2	2	F 9		285・370		円形	—				素掘り 285 と同一	18C 中葉
370	1.56	(1.43)	94.6	土坑	2	2	E 8		285・540		不整形円形	—					不明
372	1.59	1.41		土坑	2	2	F 8		375・377		円形	—			A◎	As-A 処理坑	不明
373	1.17	1.04	94.5	土坑	2	2	F 8		395	374	不定形	—					19C 中葉
374	1.12	1.08	94.7	井戸	2	2	F 8		373・375		円形	—				木組み・桶状	19C 中葉
375	2.60	0.71	94.6	土坑	2	2	E 8	F 8	540	372・374	不整形長方形	東西					18C 前葉
376	3.66	0.71	94.5	土坑	2	2	F 8		389・395		長方形	東西		○			19C 前葉
377	0.99	0.73		土坑	2	2	F 8			372	不定形	南北		○			
378	0.77	(0.62)		土坑	2	2	F 8			365・379	不定形	—					18C 中葉
379	1.62	0.88		土坑	2	2	F 8		378	365	長方形	東西	○	○			19C 前葉?
381	1.67	1.21	93.7	土坑	2	2	G 8	F 8	364・386		不定形 (検出時)	—				木材多量	19C 前葉
383	1.20	1.15	94.3	土坑	2	2	G 8		386・388-2		楕円形	南北					18C 中葉
384	1.57	0.88	94.3	土坑	2	2	G 8	G 7	385・387		不整形長方形	南北	◎	◎		焼土坑 東西方向木板	19C 前葉
385	1.08	(0.78)	94.5	土坑	2	2	G 8		388-2	384・387	方形か	—					18C 中葉
386	0.94	(0.68)	94.3	土坑	2	2	F 8	G 8		381・383・388-2	方形か	—					19C 前葉
387	2.87	(2.03)	94.3	土坑	2	2	G 7		385・534・537	384・536	楕円形	北西—南東					18C 中葉、19C 前葉
388	1.40	1.03	94.4	土坑	2	2	F 8				楕円形	東西					18C 中葉
388 - 2	1.83	0.96	94.4		2	2	F 8	G 8	386	383・385	不定形	南北					
389	1.93	1.65	94.5	土坑	2	2	F 7	F 8	395	376・390	長方形か	南北					18C 中葉
390	2.64	2.62	94.5	土坑	2	2	F 7	F 8	389・395・534・537		不整形台形	—					18C 中葉
391	1.30	0.91	94.5	土坑	2	2	E 7	E 8	417		不整形円形	南北					近代
392	1.22	0.51		土坑	2	2	E 8			391	不定形	東西				土坑の連続	不明
393	1.00	0.63		土坑	2	2	E 8			394	不定形	—					不明
394	2.16	0.40		土坑	2	2	E 8		393		長方形	東西					不明
395	1.62	1.42	94.7	土坑	2	2	F 8			373・376・389・390	不定形	—				ネーミングミス・枝番なしが西側	18C 中葉
395 - 1	1.71	1.48	94.5	土坑	2	2	F 8		348	355-1・395-2・395-3	不定形	—				土坑切り合う	
395 - 2	2.41	(1.29)	94.5	土坑	2	2	F 10		395-1	326-1	不定形	—				土坑切り合う	
395 - 3	1.79	(0.99)	94.5	土坑	2	2	F 10	F 9	395-1	336・325	不定形	—				土坑切り合う	
396	2.50	(0.53)		土坑	2	2	F 9		355-1・355-2		長方形	東西					不明
397	1.57	0.77		土坑	2	2	F 7		529		不整形楕円形	南北					18C 中葉
398	2.35	0.74		土坑	2	2	E 7		533		不整形楕円形	南北					19C 前葉
399	5.11	(1.91)	94.3	溝	2	2	C 8		413・414・415・416			東西				301 の延長か	19C 前葉
401	1.57	(0.90)	94.4	土坑	2	3	I 11	I 12			不定形	—	◎	◎		焼土坑	18C 中葉
402	2.17	(1.66)	94.3	土坑	2	3	I 11				長方形	—	◎	◎		焼土坑	18C 中葉
403	1.42	1.12	94.3	土坑	2	3	I 10				楕円形	南北		◎			18C 中葉
413	1.23	0.99	94.3	土坑	2	3	C 8				円形	—					18C 後葉
414	1.14	1.09	94.2	土坑	2	3	C 3				円形	—				桶埋設遺構	19C 前葉
415	1.72	(0.87)	94.3	土坑	2	3	C 7			416	不整形円形	—					18C 中葉、19C 前葉
416	2.24	(1.35)	94.1	土坑	2	3	C 7		399・415・533・534		不定形	—				複数土坑	18C 中葉、19C 中葉
417	0.70	0.68	94.2	土坑	3	3	E 7	E 8		391	円形	—					
420	0.36	0.30		柱穴	2	3	E 6			294	円形	—					近代
421	0.30	0.88	94.4	柱穴	2	3	E 6			294	円形	—					不明
422	—	—		柱穴	2	3	D 12				円形	—					不明
423	8.01	0.76	94.4	溝	2	3	D 5	E 6	424・425・451・1009	201・426・445		南北					19C 前葉
424	6.64	2.41	93.2	土坑	2	3	E 6	F 6	423・426・451	423	不定形	南北					18C 中葉
425	12.04	0.97		溝	2	3	D 5	F 5	426	201・423・443・452・1009		南北					18C 中葉、19C 前葉

() は残存値を表す。

第8表 遺構一覧表(7)

No.	長軸 [m]	短軸 [m]	底面標高 [m]	性格	掘削 面	検出 面	主 G	副 G	切る	切られる	平面形態	主軸	焼土	炭化 物	火山 灰	所見	遺構発掘下限年代
426	19.03	0.54	94.3	溝	2	3	E 5		423	424・425・427・ 443		東西					18C 中葉
427	1.86	1.78		土坑	2	3	E 4	E 5	426・428・444		円形	—					近代
428	16.55	0.99	94.3	溝	2	3	F 4	G 5	444	233・427・433・ 587		南北				区画溝 233 と接続	18C 前葉
429	2.15	1.91	94.4	土坑	2	2・3	G 4				長方形	東西	◎	◎		焼土坑 205 と同一遺物あり	19C 前葉
430	2.64	0.68		土坑	2	2・3	H 4			431	長方形	東西					18C 中葉
431	1.86	1.61	94.4	土坑	2	2・3	H 4		430		長方形	東西	◎	◎		焼土坑	19C 前葉
432	0.48	0.41	94.3	土坑	2	3	H 5				円形	—					
433	1.05	0.69		土坑	2	3	G 5		428		楕円形	北西—南東					19C 中葉
434	1.49	1.62	94.1	土坑	2	3	F 5	G 5			長方形	東西					近代
435	1.00	0.69	94.4	土坑	2	3	F 5				長方形	南北					近代
436	1.68	1.06	94.3	土坑	2	3	F 5				長方形	東西					近代
437	1.05	1.04	94.4	井戸	2	3	E 12	F 12		315・316・317・ 318	円形	—				素掘り	
438	0.95	0.38	94.0	土坑	2	3	F 12				不定形	南北					
439	1.36	(0.68)	93.6	土坑	2	3	D 5				円形	—					近代
440	4.57	2.57		土坑	2	3	D 4	E 4		441・444・447	長方形	東西					18C 中葉、19C 前葉
441	6.81	0.49		溝	2	3	E 4		440・447・588	587		南北					19C 前葉
443	2.78	(1.85)		土坑	2	3	E 5		425・426		不定形	南北					近代
444	4.55	0.94		溝	2	3	E 4			427・428・440		南北					不明
445	2.69	1.83	94.6	土坑	2	3	D 5		423	446	隅丸長方形	東西					19C 前葉
446	0.76	(0.57)		土坑	2	3	D 5		445		不定形	—					19C 前葉
447	3.83	2.08	94.4	土坑	2	2	D 4		440・1017	441	長方形	南北					18C 前葉
448	—	—		土坑	2	3			413	414	不定形	—					18C 中葉
449	0.32	0.28	94.4	柱穴	2	2	F 9			358	円形	—					不明
450	0.21	0.21	94.0	柱穴	2	2	E 9				円形	—					不明
451	2.63	(1.63)		溝	2	3	F 6		423・424	294		東西					19C 前葉
452	2.48	0.45		溝	2	3	F 5			425		東西					近代
453	0.47	0.42	94.3	柱穴	2	2	E 12	E 11	255	302	円形	東西					
454	0.50	0.43	94.4	柱穴	2	2	E 11		302		円形	南北					
455	0.38	0.30	94.3	柱穴	2	2	E 11			455	円形	南北					
456	0.36	0.33	94.2	柱穴	2	2	F 10			456	円形	—					
458	0.50	0.39		柱穴	2	2	E 9			339・342	円形	—					
459	1.21	1.02	94.1	井戸	2	3	J 12				円形	南北				素掘り	
520	0.71	0.68	94.7	土坑	2	2	J 3				円形(東側捨 杭に切られる)	—					不明
521	0.45	0.42	94.7	土坑	2	2	I 4				円形	—					近代
522	0.72	0.72	94.5	土坑	2	2	I 5	I 4			円形	—				桶埋設遺構	不明
523	0.35	0.31	94.8	柱穴	2	2	J 3		244			東西					
528	0.61	0.35		土坑	2	2	D 7				楕円形	南北					
529	(2.13)	0.53		溝	2	2	F 7			397・536		南北					
530	1.19	1.12		土坑	2	2	D 7		533		円形	—					
531	6.37	0.77	94.6	溝	2	2	G 7	F 7		294		南北				区画溝 角材の杭の打ち込みあり	近代
532	17.82	0.94	94.3	溝	2	2	D 7	G 7		294		南北		A◎		区画溝	18C 後葉
533	11.39	0.89	94.4	溝	2	2	D 7	E 7		398・416・530・ 534		南北				区画溝 677 旧	18C 中葉
534	11.67	0.67	94.3	溝	2	2	C 7	E 7	399	387・390・416・ 533・535		南北				区画溝 677 新	19C 前葉
535	3.54	0.51	94.6	溝	2	2	D 7		410	538		南北				区画溝	近代
536	1.53	1.08		土坑	2	2	F 7		387・529・537		不整形	南北				土坑	不明
537	3.51	0.45		溝	2	2	F 7			387・536・390		南北				区画溝	不明
538	1.05	0.44		土坑	2	2	D 7				楕円形	東西					19C 中葉
539	0.49	0.40		土坑	2	2	E 6			294	不整形	南北				カワラケ出土	不明
540	1.41	0.67	94.4	土坑	2	2	E 8			370・375	楕円形	東西					18C 前葉
541	1.23	0.81	94.5	土坑	2	2	E 9		324-1・324-2・ 340		円形	—				桶埋設遺構	不明
550	0.87	0.86	94.5	土坑	2	2	F 4				隅丸正方形	—					19C 中葉
551	0.72	0.64	94.6	土坑	2	2	F 4	F 3			不整形円形	—					
552	0.40	0.40	94.6	土坑	2	2	G 4				円形	—					不明
553	0.60	0.59	94.5	土坑	2	2	G 4				円形	—				桶埋設遺構	19C 前葉
554	0.58	0.53	94.4	土坑	2	2	G 4				円形	—					不明
555	0.23	0.21	94.6	柱穴	2	2	G 3				円形	—					不明
556	0.69	0.63	94.6	土坑	2	2	G 3				円形	南北					
557	0.91	0.74	94.5	土坑	2	2	G 3				不定形	—					不明
558	1.56	0.68	94.7	土坑	2	2	H 3		559		長方形	北西—南東	◎	◎		焼土坑	19C 前葉
559	2.84	2.31	94.5	土坑	2	2	H 3	H 4		558	長方形	南北よりや や東にずれる	◎	◎		焼土坑	18C 中葉
560	0.82	0.61	94.5	土坑	2	2	G 3				正方形	南北					
561	2.25	1.58	94.4	土坑	2	2	H 3				長方形	東西方向より やや南にずれる	◎	◎		焼土坑 559 と同時期か	18C 中葉
562	1.69	1.18	94.5	土坑	2	2	G 4	G 3			不整形円形	北東—南西					不明

() は残存値を表す。

第9表 遺構一覧表(8)

No.	長軸 [m]	短軸 [m]	底面標高 [m]	性格	掘削 面	検出 面	主 G	副 G	切る	切られる	平面形態	主軸	焼土	炭化 物	火山 灰	所見	遺構発掘下限年代
563	1.37	0.98	94.4	土坑	2	2	F 3				長方形	東西					19C 前葉
564	0.82	0.62	94.5	土坑	2	2	G 3				長方形	東西					近代
565	1.04	0.76	94.5	土坑	2	2	F 3		567		長方形	東西					
567	1.32	(0.85)	94.6	土坑	2	2	F 3			565	長方形	南北					
568	1.48	1.37	92.6	井戸	2	2	G 2	F 2			円形	—				素掘り 上方漏斗状 1028 と同一	
570	0.65	0.58	94.5	土坑	2	2	H 4		350		隅丸長方形	東西					不明
571	0.32	0.30	94.5	柱穴	2	2	H 4		350		円形	北東—南西				南北よりやや北西にふれる	19C 前葉
572	1.64	0.77	94.7	土坑	2	2	G 4				長方形						
573	0.82	(0.80)		土坑	2	2	F 4					東西					19C 前葉
574	1.55	0.36	94.6	土坑	2	2	F 3				長方形	東西					不明
575	0.69	0.69	94.4	土坑	2	2	F 3		576		円形	—					
576	1.22	0.65	94.5	土坑	2	2	F 3		586	575	楕円形	南北					19C 前葉
577	1.29	1.00	94.2	土坑	2	2	F 3	F 4	586		不整形円形	東西					不明
578	0.82	0.77	94.6	土坑	2	2	F 3		586		不整形円形	—					不明
579	0.59	0.54	94.6	土坑	2	2	F 3		586		円形	—					
580	1.51	1.31	93.2	土坑	2	2	F 2				円形	東西					近代
581	0.79	0.73	94.6	土坑	2	2	F 2				円形	—					19C 中葉
582	0.65	0.65	94.5	土坑	2	2	F 2				円形	—				桶埋設遺構	近代
584	1.47	(1.05)	94.4	土坑	2	2	F 4	E 4	587		長方形	東西					近代
585	1.53	0.90	94.3	土坑	2	2	F 3		587		長方形	東西					不明
586	2.06	1.91	94.7	陥床 状	2	2	F 3			576・577・578・ 579	不定形	東西					不明
587	9.58	0.93	94.5	溝	2	2	G 7	E 2	428・441	584・585		東西				区画溝	不明
588	7.92	0.57	94.5	溝	2	2	E 3	E 4		441		東西				区画溝	不明
589	9.59	1.00	94.4	溝	2	2	D 3	D 2	447			東西					近代
590	7.93	1.06	94.5	溝	2	2	D 3		1017			東西					不明
591	—	0.97	94.5	溝	2	2	C 3	C 4		592		東西					18C 中葉
592	3.85	(1.42)	94.3	溝	2	2	C 3		591	597	L 字状溝	東西—南北					18C 中葉
593	2.74	0.50	94.5	溝	2	2	C 2		594・597			南北—東西				南西隅で直角に曲がる	
594	1.98	1.47	94.4	土坑	2	2	B 2	B 3		393・597	円形	東西					18C 中葉
595	7.48	(0.87)	94.3	溝	2	2	B 3	B 2		598		東西					18C 中葉
596	1.65	(0.75)		土坑	2	2	B 3	C 3	597・598		円形か	—					
597	2.15	(2.06)	94.3	土坑	2	2	C 3		593・594・598	596・592	長方形	南北					19C 後葉
598	1.81	(1.74)	94.3	土坑	2	2	B 3		595	596・597	不定形	東西					18C 中葉
601	1.58	(1.01)	94.6	土坑	2	2	A 11				長方形か(ト レンチに切ら れ不明)	—	◎	◎		焼土坑	
602	0.71	0.59		土坑	2	2	B 11				円形	南北	◎			焼土あり 炉か	
603	0.85	0.65	94.2	土坑	2	2	B 11				不整形円形	東西					
604	0.99	0.73	94.3	土坑	2	2	B 11				楕円形	南北					18C 後葉
605	2.38	0.99	94.5	土坑	2	2	B 11	C 11			不整形楕円形	東西	◎	◎		焼土坑	18C 前葉
606	1.08	0.92	93.3	井戸	2	2	B 11				円形	東西				素掘り	中世か
607	2.01	1.15	94.5	土坑	2	2	B 10	B 11			不整形隅丸長 方形	東西	◎	◎		焼土坑	
608	0.41	0.27	94.4	柱穴	2	2	B 11				隅丸長方形	東西					
609	0.61	0.62	94.6	土坑	2	2	B 10				円形	—				桶埋設遺構	
610	0.47	(0.45)		柱穴	2	2	A 11		611		円形	—					不明
611	0.47	(0.16)		土坑	2	2	A 11		612	610	不整形円形	—					19C 前葉
612	0.54	(0.35)		土坑	2	2	A 11			613・611	不整形円形	—					
613	0.54	(0.53)		柱穴	2	2	A 11		612・614		円型	—					不明
614	0.33	(0.30)		柱穴	2	2	A 11			613	—	—					
615	1.10	(0.59)	94.6	土坑	2	2	A 11				楕円形か	南北	◎	◎		焼土坑	
616	1.30	1.20	94.5	土坑	2	2	A 11				不整形円形	—	◎	◎		焼土坑	
617	2.04	(0.83)	94.5	土坑	2	2	A 10		621		長方形	南北	◎	◎		焼土坑	近代
618	2.40	1.56	94.4	土坑	2	2	A 10	B 10			隅丸長方形	東西	◎	◎		焼土坑	18C 中葉
619	—	—		土坑	2	2					楕円形	—	◎	◎		焼土坑	不明
621	1.51	1.43	94.4	井戸	2	2	A 10			617	円形	—					18C 中葉
622	1.35	0.76	94.4	土坑	2	2	A 10		683	621	楕円形	南北				瓦大量廃棄土坑	不明
623	0.96	(0.28)	94.6	土坑	2	2	A 10				不明	—				土坑	不明
624	1.89	2.22		井戸	2	2	A 9	A 10	683		円形	—	◎			素掘り 覆土焼土ブロック多量	18C 前葉
625	2.43	2.42	94.6	井戸	2	2	B 9		629		円形	—				桶状 コンクリート補強	近代
626	0.85	0.63		土坑	2	2	B 10				不定形	—				下層に柱穴あり 内耳竈出土	中世か
627	0.74	0.40		土坑	2	2	A 9	B 9			長方形	南北					不明
628	0.39	0.26	94.2	土坑	2	2	A 9				不整形円形	東西					18C 前葉
629	1.66	0.51		土坑	2	2	B 9	B 10		625	長方形	東西	◎	◎		焼土坑	不明
630	0.54	0.37	93.8	土坑	2	2	C 10				楕円形	東西					
631	6.28	0.34		溝	2	2	B 10	C 10		633・637・648	溝	東西					
632	1.81	1.57	93.6	井戸	2	2	B 10			633	円形	—				素掘り テラス状 川原石敷く	不明
633	2.57	1.60	94.5	土坑	2	2	B 10	C 10	631・632・635	634	長方形	東西				底面平坦	19C 前葉
634	1.20	0.65	94.5	土坑	2	2	B 10		633		不定形	東西				633 最終堆積	不明

() は残存値を表す。

第10表 遺構一覧表(9)

No.	長軸 [m]	短軸 [m]	底面幅高 [m]	性格	掘 面	検出 面	主 G	副 G	切る	切られる	平面形態	主軸	焼土	炭化 物	火山 灰	所見	遺構発掘下限年代
635	1.96	1.84	93.9	井戸	2	2	B 9			633	不整円形	—				石組み 木組み	不明
637	1.18	(0.98)	94.5	土坑	2	2	C 9	B 9	631		楕円形	南北				川原石、瓦多い	19C 前葉
638	1.02	0.47		土坑	2	2	A 10				不整円形	—					不明
639	0.57	0.54		土坑	2	2	B 9		640		円形	—					
640	0.70	0.59		土坑	2	2	B 9			639	楕円形	南北					不明
641	1.43	(0.86)		土坑	2	2	A 9	A 8	651・642		不明	—					近代
642	2.34	1.28	94.5	土坑	2	2	A 9			641	隅丸長方形	東西					不明
643	0.95	0.90		土坑	2	2	A 9	B 9	652		不整形	南北					近代
644	1.12	0.94	94.4	土坑	2	2	B 9				不定形	—			A ◎	As-A 処理坑	
645	1.44	0.81	94.6	土坑	2	2	B 9			625	不整形	東西					不明
646	1.64	1.58	94.5	土坑	2	2	B 8			670	不定形	—					不明
647	2.91	(2.28)	94.2	土坑	2	2	B 9			648・653		—				桶抜き取りか	18C 前葉
648	1.46	(0.60)		土坑	2	2	C 9	B 9	631・647		楕円形	東西					近代
650	1.34	(1.22)	94.6	土坑	2	2	C 9				隅丸方形	—			A ◎	As-A 処理坑	不明
651	0.70	(0.60)		土坑	2	2	A 8			641	不明	—					
652	0.71	0.63		柱穴	2	2	A 8			643	円形	—					
653	1.68	1.46	94.1	土坑	2	2	B 8		647・672		隅丸方形	東西			A ◎	As-A 処理坑 下層遺物混入あり	18C 前葉
654	1.76	1.11	94.4	土坑	2	2	B 8		673		隅丸方形	東西			A ◎	As-A 処理坑 下層遺物混入あり	18C 中葉
656	0.68	0.34		柱穴	2	2	B 11				連続する円形	南北					不明
657	0.54	0.43		土坑	2	2	B 11				円形	南北					
658	1.87	1.18	94.5	土坑	2	2	C 8		673		隅丸長方形	南北			A ◎	As-A 処理坑 下層遺物混入あり	18C 中葉
659	1.77	1.61	94.6	土坑	2	2	C 8	C 7	673・682		隅丸長方形	南北			A ◎	As-A 処理坑 下層遺物混入あり	18C 中葉
660	1.79	0.45	94.5	土坑	2	2	B 7		677		長方形	東西					
661	2.82	0.72	94.3	土坑	2	2	A 7	B 7	677		楕円形	東西					18C 前葉
663	0.96	0.59	94.5	土坑	2	2	B 7		675		楕円形	東西					18C 中葉
664	0.66	0.63	94.5	土坑	2	2	A 8		666		円形	—					18C 中葉
665	3.01	(0.91)	94.3	土坑	2	2	A 8			666・667	楕円形か	東西				木材を敷く	19C 前葉
666	0.90	(0.80)	94.5	土坑	2	2	A 8		665	664	不整円形	—					不明
667	0.86	0.72	94.3	土坑	2	2	A 8		665・679		不整円形	—					18C 中葉
669	1.61	(1.11)		土坑	2	2	B 8		670		不定形	—					18C 中葉
670	1.28	(1.06)		土坑	2	2	B 8		646	669	不定形	—					18C 中葉
671	2.30	(1.30)	94.5	土坑	2	2	C 8				長方形	東西					18C 中葉
672	1.34	(1.11)	93.9	井戸	2	2	B 8			653	円形	—				素掘り 絶えず透明な水が湧く	18C 中葉
673	2.86	1.60	94.7	土坑	2	2	B 8		675・682	654・658・659	正方形	東西				床面平坦	18C 中葉、19C 前葉
674	1.34	0.81		土坑	2	2	B 8	A 8			楕円形	南北					
675	2.34	(2.31)	93.9	井戸	2	2	B 7			663・673	円形	—				素掘り 上方漏斗状 テラスあり	18C 前葉
676	1.92	(1.43)	94.1	土坑	2	2	C 7		677		不定形	—				複数回掘りなおされている	18C 中葉、19C 前葉
677	4.26	(0.41)	94.4	溝	2	2	A 7	B 7		660・661・676・685	溝	南北				区画溝 新旧2条の溝切り合う	18C 前葉
678	4.68	(1.39)	94.1	土坑	2	2	B 7	A 7		西側カクラン	不整長方形	南北				木材等多量に集積する 遺物多数	18C 後葉
679	0.90	(0.83)	94.4	土坑	2	2	A 8		680	667	円形	—					18C 中葉
680	1.66	(1.55)	94.4	土坑	2	2	B 8	A 8	681	679	不定形	東西					18C 中葉
681	1.17	0.81	94.6	土坑	2	2	B 8	B 7		680	楕円形	—					18C 中葉
682	1.50	1.38	94.1	土坑	2	2	C 7			659・673	不整形	東西					18C 前葉
683	1.05	0.95	94.0	井戸	2	2	A 10			622・624	円形	—				素掘り	
685	1.89	1.02	94.5		2	2	A 7		677		隅丸長方形	南北					
1000	1.93	0.55	94.6	土坑	2	2	I 3		1001		長方形	北西—南東					不明
1001	8.14	3.24	94.5	溝	2	2	I 3	H 4		1000・1007・1018		北東—南西				350 と同一	不明
1002	0.69	0.57	94.5	土坑	2	2	I 4		1003		円形	東西					不明
1003	1.11	(0.69)	94.5	土坑	2	2	I 4		1004		円形	—					
1004	0.54	0.60	94.7	土坑	2	2	I 4			242・1003	円形	—					19C 中葉
1005	2.47	(1.61)	94.5	土坑	2	2	I 4				不定形	東西					18C 中葉
1006	1.37	0.65	94.2	土坑	2	2	I 4				楕円形	東西					18C 中葉
1007	0.93	0.88	93.6	土坑	2	2	I 4		1001		不整円形	—					不明
1008	7.33	4.91	94.1	土坑	2	2	D 3	E 3		447	楕円形	東西					18C 中葉
1009	0.43	0.42	93.5	柱穴	2	2	E 5			425	円形	—					不明
1010	1.20	1.07	93.7	土坑	2	2	F 3				円形	—					
1011	0.35	0.33	94.5	柱穴	2	2	F 4				円形	—					不明
1012	0.46	0.36	94.2	土坑	2	2	D 6			294	不定形	南北					不明
1013	0.33	0.28	94.4	柱穴	2	2	E 4				円形	—					不明
1014	0.40	0.34	94.4	溝	2	2	E 6			424・1016	—	—					18C 中葉
1015	0.84	0.78	93.8	土坑	2	2	E 6			294	円形	—					不明
1016	3.14	0.80	93.8	土坑	2	2	E 6		1014	294	三日月形 (下弦を南側に持つ)	東西					
1017	1.16	(0.86)	94.3	土坑	2	2	C 4	D 4		590	不整円形	東西					不明
1018	12.26	0.87	94.5	溝	2	3	H 1		1001	1019・1020・1024		南北					18C 後葉
1019	2.00	1.87	94.3	土坑	2	3	K 2	K 1	248・1018		長方形(西側に石組)	南北				西側に石組みあり	18C 中葉

() は残存値を表す。

第11表 遺構一覧表(10)

No.	長軸 [m]	短軸 [m]	底面標高 [m]	性格	掘削 面	検出 面	主 G	副 G	切る	切られる	平面形態	主軸	焼土	炭化 物	火山 灰	所見	遺構発掘下限年代
1020	2.09	1.50	94.3	土坑	2	3	K 1		1018		長方形	南北					18C 中葉
1021	1.30	0.56	94.2	土坑	2	3	J 2				不整楕円形	北東-南西					18C 後葉
1022	1.95	1.44	94.5	土坑	2	3	I 1				長方形	東西	◎	◎		焼土坑	
1023	0.60	0.70	94.4	土坑	2	3	I 1				長方形	東西より 傾く					
1024	1.49	(0.87)	94.5	土坑	2	3	H 1		1018		不定形	—					
1025	0.97	0.71	94.5	土坑	2	3	I 1				不整長方形	東西					不明
1026	0.81	0.72	94.2	土坑	2	3	I 2				円形	南北					
1027	1.79	(0.55)	94.0	井戸	2	3	G 2	F 2			円形	—				素掘り	
1028	—	—	—	井戸	2	3	G 2				円形	—				素掘り 漏斗状 568 と同一	
1029	1.58	0.72	94.5	土坑	2	3	E 2		東西畦畔 9-1		楕円形	南北					不明
1030	1.04	(0.96)	94.3	土坑	2	3	D 2		1031		円形	東西					
1031	1.03	0.70	94.3	土坑	2	3	D 2			1030	不定形	南北					19C 前葉
1032	1.55	0.88	94.2	土坑	2	3	C 2				クランク状	南北				石多い	19C 前葉
1033	0.98	0.98	93.6	井戸	2	3	B 2				円形	—				桶状 垂炭層で埋没	
1034	0.58	0.37	94.5	土坑	2	3	B 2				長方形	南北					不明
1035	1.41	0.81	94.3	土坑	2	3	B 1				長方形	東西					18C 中葉
1036	1.96	1.49	94.3	土坑	2	3	C 1	B 1	1037		不整円形	南北					18C 中葉
1037	1.81	(1.24)	94.5	土坑	2	3	B 1	C 1	1036・1039		不定形	南北					
1038	0.75	0.53	94.4	土坑	2	3	C 1				円形	東西					不明
1039	1.94	(0.53)	94.4	土坑	2	3	C 1		1037		三日月形 (西側に下弦)	南北					18C 中葉
1040	2.35	0.51	94.5	土坑	2	3	C 1				不整楕円形	南北					18C 後葉
1041	0.64	0.56	94.5	土坑	2	3	C 1				円形	南北					
1042	1.03	0.85	94.3	土坑	2	3	C 1		1043		不整円形	南北		○			
1043	1.53	1.50	93.7	井戸	2	3	C 1			1042	円形	—				木組み (三角形) + 石組み	18C 中葉

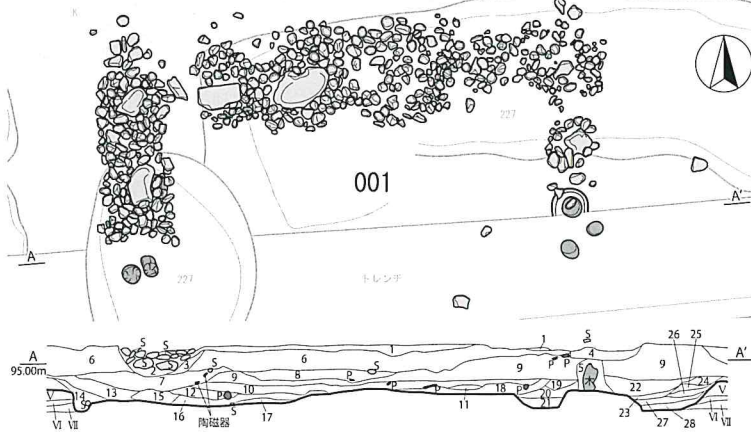
() は残存値を表す。

補足1

三輪車ないしは幼児用小型自転車と推定される鉄製品。前輪からハンドルにかけての部分が 201 (池状遺構) 上層、後輪部分が 584 (土坑) から出土。共に重機掘削中に出土しており、前輪部分の変形はその際のものであると思われるが、リム部分には本来存在していたはずのゴムタイヤが無いことから、火災を受けた可能性が窺える。所有者の安否が気になるところである。



001



15. N 3/ 暗灰色 粘○ し○ 粘質土
 16. N 4/ 灰色 粘○ し○ 粘質土
 17. N 3/ 暗灰色 粘○ し○ 砂質土
 18. 10YR4/1 褐色 粘○ し○ 砂質土
 19. 10YR5/1 褐色 粘○ し○ 砂質土 礫多く含む
 20. 10YR5/2 灰黄褐色 粘○ し○ 砂質土
 21. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘○ し○ 砂質土

22. 10YR5/1 褐色 粘○ し○ 砂質土 炭化物含む
 23. 10YR4/1 褐色 粘○ し○ 砂質土 炭化物含む
 24. 10YR3/2 黒褐色 粘○ し○ 砂質土 黄褐色ブロック (地山) 含む
 25. 10YR3/1 黒褐色 粘○ し○ 砂質土
 26. 10YR3/2 黒褐色 粘○ し○ 砂質土 黄褐色ブロック (地山) 含む
 27. N 4/ 灰色 粘○ し○ 砂質土
 28. 10YR4/1 褐色 粘○ し○ 砂質土

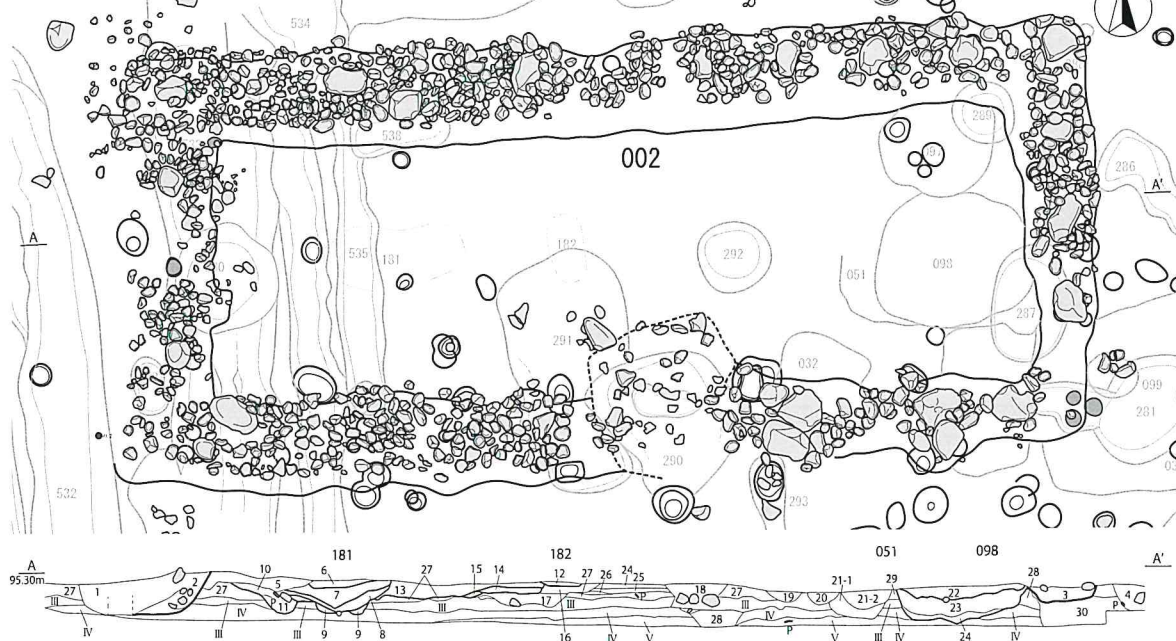


0 1:80 2m

001 A-A'

1. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘○ し○ 粘質土 床土貼ったもの
 2. 10YR4/4 褐色 粘○ し○ 粘質土 黄褐色のブロックを含む
 3. 10YR4/2 灰黄褐色 粘○ し○ 粘質土 炭化物と赤褐色粒を含む
 4. 10YR4/4 褐色 粘○ し○ 粘質土 黄褐色のブロックを多く含む、灰白色粒を含む
 5. 5Y5/1 灰色 粘○ し△ 砂 腐食した木坑変質したもの
 6. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘○ し○ 砂質土 炭化した木片と赤色粒を含む、陶磁器片含む
 7. 10YR3/2 黒褐色 粘○ し○ 砂質土
 8. 10YR3/1 黒褐色 粘○ し○ 粘質土 炭化した木片と赤色粒を含む、瓦や石多く含む
 9. 10YR4/1 褐色 粘○ し○ 砂質土 炭化物と赤色粒を含む
 10. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘○ し○ 砂質土 炭化した木片と腐食した木片を含む
 11. 10YR4/1 褐色 粘○ し○ シルト 底に厚さ2mmほどの板状の木片、わずかに炭化した木片を含む
 12. 2.5Y4/1 黄灰色 粘○ し○ シルト 炭化した木片含む
 13. 10YR4/2 灰黄褐色 粘○ し○ 砂質土 白色粒含む
 14. 10YR4/1 褐色 粘○ し○ 砂質土 白色粒含む

002



002 A-A'

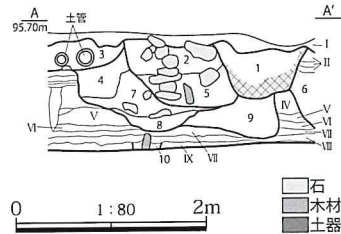
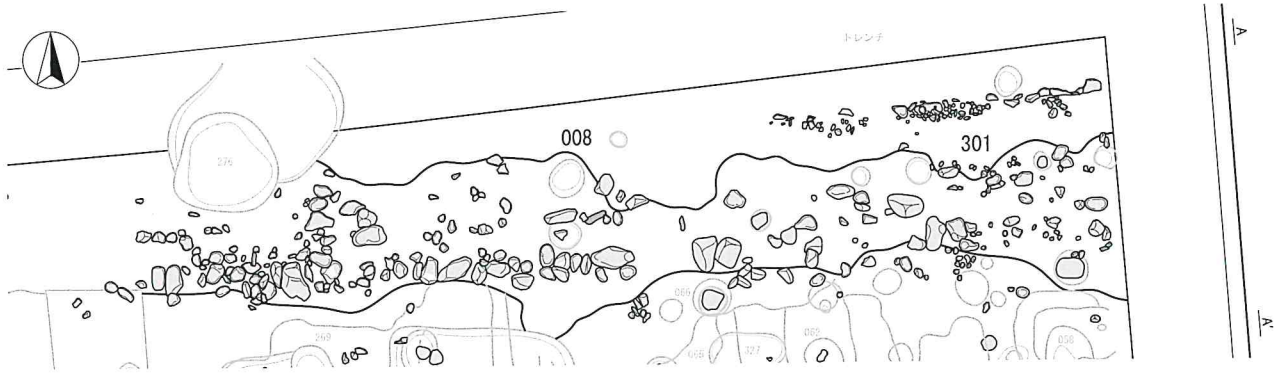
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘× し× 砂質土 攪乱 現代
 2. 10YR4/2 灰黄褐色 粘○ し○ 粘質土 川原石、黄褐色ブロック含む
 3. 10YR4/2 灰黄褐色 粘○ し○ 粘質土 15~21cm大の川原石、黄褐色ブロック含む
 4. 10YR4/6 褐色 粘○ し○ 砂質土 炭化物 10%含む 検出面地山にあたる堆積
 5. 10YR3/2 黒褐色 粘○ し○ 砂質土 小礫・炭化物 10%、赤色粒 3%含む
 6. 10YR3/2 黒褐色 粘○ し○ 砂質土 灰白色粒・炭化物・褐色土とブロック状に混在
 7. 10YR4/2 灰黄褐色 粘○ し○ 砂質土 赤褐色ブロック 23%、黄褐色ブロック・炭化した木片 3%含む
 8. 7.5Y2/1 黒色 粘○ し○ 砂質土 炭化した木片含む 主に炭化物で構成
 9. 5Y4/1 灰色 粘○ し○ 粘質土 褐色土をブロック状に含む
 10. 10YR5/2 灰黄褐色 粘○ し○ 粘質土 赤褐色粒含む
 11. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘○ し○ 粘質土 炭化した木片を含む
 12. 10Y2/1 黒色 粘○ し○ 粘質土 赤褐色粒含む 主に炭化物で構成 182土坑
 13. 2.5Y3/2 黒褐色 粘○ し○ 粘質土 黄褐色ブロック・炭化した木片・赤褐色粒含む 182土坑
 14. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘○ し○ やや粘質土 黄褐色ブロック含む 182土坑
 15. 2.5Y2/1 黒色 粘○ し○ 砂質土 炭化物・黄褐色ブロック含む 182土坑
 16. 2.5Y4/1 黄灰色 粘○ し○ 粘質土 赤褐色ブロック・炭化物含む
 17. 2.5Y3/2 黒褐色 粘○ し○ 粘質土 石・赤褐色ブロック (壁土か) 含む
 18. 10YR5/2 灰黄褐色 粘○ し○ 粘質土 24・25層混合したもの 底面に石をすえる
 19. 10YR5/2 灰黄褐色 粘○ し○ 粘質土
 20. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘△ し× 砂 石 40%含む 粘性土 砂の混成
 21-1. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘○ し△ 石と砂 Ⅲ層由来粘性土の互層 粘質土
 21-2. 10YR4/2 灰黄褐色 粘○ し△ 石と砂 Ⅳ層由来粘性土の互層 粘質土は 29層と近似する
 22. 5Y4/1 灰色 粘○ し○ やや粘質土 礫含む
 23. 2.5Y3/1 黒褐色 粘○ し△ 砂質土
 24. 10YR2/1 黒色 粘△ し△ 砂質 主に炭化物で構成 板状の木片含む
 25. 10YR4/1 褐色 粘△ し△ 砂 As-A 混火災取り片付け坑
 26. 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘○ し○ 粘土 黄褐色土混成する 床土として貼ったものか
 27. 2.5Y6/4 にぶい黄色 粘○ し○ 粘土 非常にきめ細かく混入物の少ない粘土 床土として貼ったものか
 28. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘○ し○ 砂質土
 29. 10YR4/1 褐色 粘○ し○ 砂混
 30. 10YR6/1 褐色 粘× し× 砂 As-A 取り片付け坑 純度高い



0 1:80 2m

第 10 図 001・002

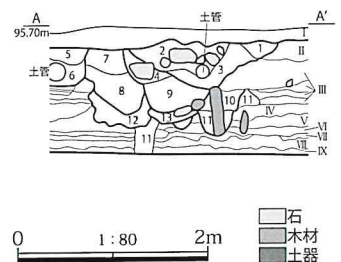
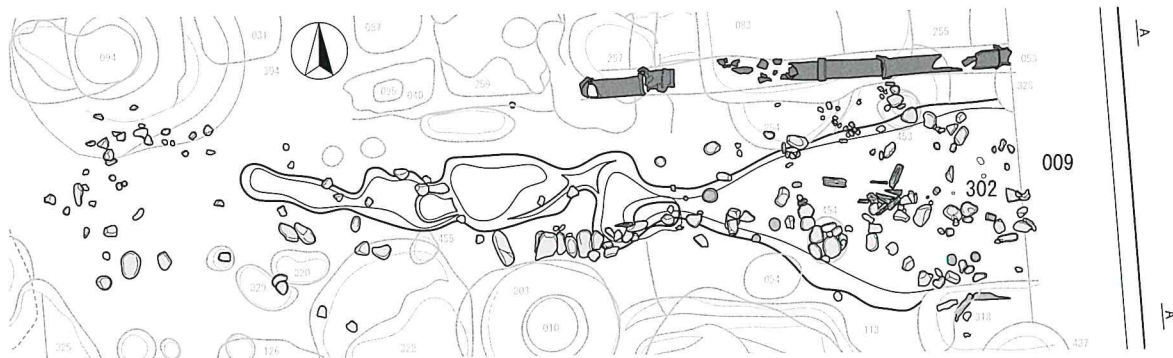
008



008 A-A'

1. 5YR6/8 褐色 粘× し× 砂質土 焼土主体に構成される 炭化した莫盛状のものが散らかれている
2. 5YR3/3 暗赤褐色 粘○ し○ 砂質土 焼土 炭化物 大型の碎石多く含む 5層を水路補修したものか
3. 7.5YR4/3 褐色 粘○ し○ 砂質土 焼土 土管埋設
4. 7.5YR4/2 灰褐色 粘○ し○ 砂質土 川原石多量に含む
5. 10YR4/2 灰黄褐色 粘○ し○ 粘質土 焼土微量 北側は大型の川原石積みを木杭で支える構造 南側は崩れているがやはり石積みあり
6. 5YR4/6 赤褐色 粘× し× 砂質土 焼土 炭化物主体に構成される
7. 10YR4/2 灰黄褐色 粘○ し○ 粘質土 川原石含む
8. 2.5Y3/1 黒褐色 粘○ し○ 粘質土 溝状の堆積 石は含まない
9. 7.5YR4/2 灰褐色 粘○ し○ 粘質土 黄色ブロック含む
10. 10YR4/1 褐色 粘○ し○ 粘質土 上層水路に伴う打ち込み杭周囲の変色

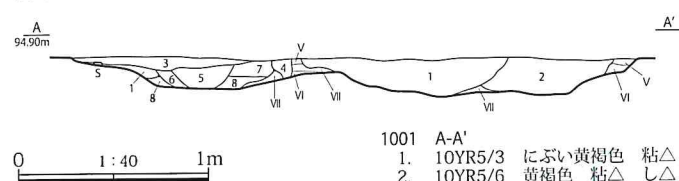
009



009 A-A'

1. 10YR3/3 暗褐色 粘○ し○ 粘質土
2. 10YR4/2 灰黄褐色 粘○ し○ 砂質土 焼土 碎石多く含む
3. 10YR2/2 黒褐色 粘○ し○ 砂質土 焼土 黄褐色ブロック含む 土管埋設
4. 10YR3/3 暗褐色 粘○ し○ 砂質土 コンクリートブロック含む
5. 10YR4/2 灰黄褐色 粘× し× 砂質土 碎石含む
6. 10YR3/1 黒褐色 粘○ し○ 粘質土 土管埋設
7. 10YR3/2 黒褐色 粘○ し○ 砂質土
8. 10YR3/2 黒褐色 粘○ し○ 砂質土 川原石多い
9. 2.5Y3/1 黒褐色 粘○ し○ 粘質土
10. 10YR3/1 黒褐色 粘○ し○ 粘質土
11. 10YR4/1 褐色 粘○ し○ 粘質土 上層水路に伴う打ち込み杭周囲の変色
12. 10YR3/1 黒褐色 粘○ し○ 粘質土
13. 10YR4/2 灰黄褐色 粘△ し× 砂質土 砂混 水性堆積

1001



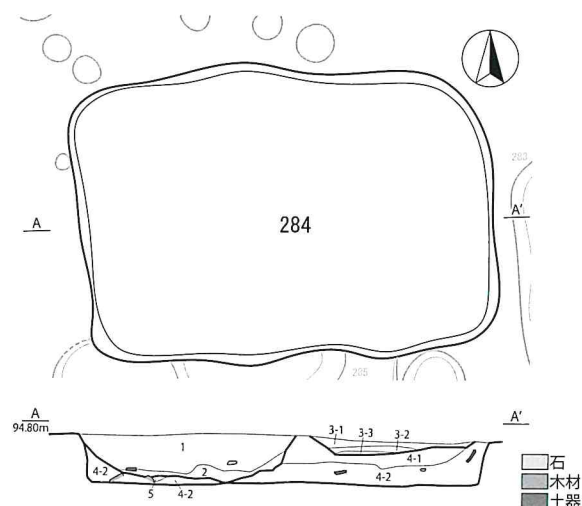
1001 A-A'

1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘△ し△ 砂質土 V・VI・VII層混成しラミナ状
2. 10YR5/6 黄褐色 粘△ し△ 砂質土 1層と近似するが砂質土多い
3. 10YR5/2 灰黄褐色 粘× し× 砂 砂中心にやや粘性ある砂質土がラミナ状に入る
4. 10YR4/2 灰黄褐色 粘○ し○ 砂質土 V・VII層混成
5. 10YR4/2 灰黄褐色 粘○ し○ 砂質土 VII層中心にVII層ブロック状に入る
6. 10YR4/1 褐色 粘○ し○ 砂質土 As-B中心に粘質土ブロック入る
7. 10YR4/1 褐色 粘○ し○ 砂 As-B多く含む VII層由来
8. 10YR4/1 褐色 粘△ し△ 砂 VII層由来 水性堆積

平面図は第8図を参照

第11図 008・009・1001

284

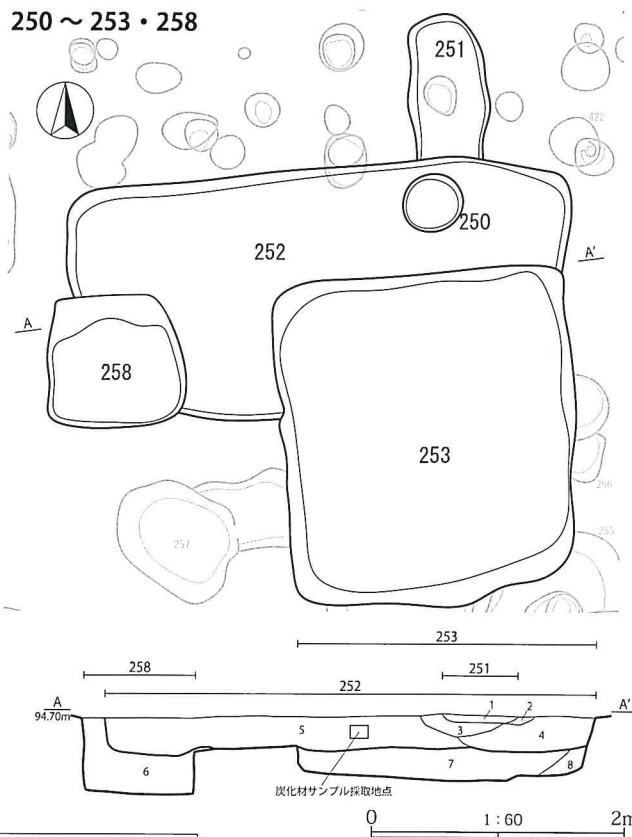


284 A-A'

1. 10YR4/1 褐灰色 粘○ し○ 粘質土 炭化物 1% 含む
2. 10YR5/2 暗灰黄色 粘× し× 砂 As-A 主体 やや粘質土混ざる
- 3-1. 2.5Y6/4 にぶい黄色 粘× し× 砂 As-A
- 3-2. 10YR2/1 黒色 粘× し× 主に炭化物で構成される
- 3-3. 10YR7/1 灰白色 粘× し× 砂 As-A
- 4-1. 10YR3/2 黒褐色 粘○ し△ 砂質土 炭化物 50%、焼土ブロック φ 1~3cm 含む
- 4-2. 10YR2/1 黒色 粘△ し△ 主に炭化物で構成される 焼土 3% 含む
5. 10YR4/2 灰黄褐色 粘○ し○ 黄褐色ブロック含む

0 1:60 2m

250 ~ 253・258



251 ~ 253・258 A-A'

1. 10YR3/2 黒褐色 粘○ し○ 炭化物を含む 土に陶磁器が 50% 含まれる
2. 7.5YR3/2 黒褐色 粘○ し○ 他層に比べ砂質多い 赤褐色ブロック 25%、炭化物 20% 含む
3. 10YR1.7/1 黒色 粘○ し○ 炭化物主体に構成される 1.5cm 角ほどの木炭 20% (切りそろえられている)、明赤褐色のブロック土 (壁土? 断面長方形) 含む
4. 7.5YR2/1 黒色 粘○ し○ 焼土 15%、炭化物 50% 含む 全体的に φ 1cm 前後のブロックで構成される 大きなブロックが入る
5. 10YR2/1 黒色 粘○ し○ 炭化物主体に構成される 木炭のように焼けた木材 壁土? 明赤褐色ブロック
6. 7.5YR3/2 黒褐色 粘○ し○ 砂質土 炭化物主体に焼土ブロック含む
7. 7.5YR3/2 黒褐色 粘○ し○ 壁土のような明褐色ブロック 20% を含む 主に炭化物で構成される
8. 7.5YR2/2 黒褐色 粘○ し○ 7 層に近似するが炭化物粒子細かい

0 1:60 2m

201



201 A-A'

1. 5YR5/6 明赤褐色 粘△ し△ 砂質土 焼土
2. 2.5Y3/1 黒褐色 粘○ し○ 砂質土 ブロック土含む
3. 7.5YR4/2 灰褐色 粘○ し○ 砂質土 現代の客土
4. 10YR3/2 黒褐色 粘○ し○ 砂質土 石 003 石組みの基礎
5. 2.5Y3/1 黒褐色 粘○ し○ 砂質土 炭化物
6. 7.5YR4/2 灰褐色 粘○ し○ 砂質土 焼土微量
7. 7.5YR3/3 暗褐色 粘○ し○ 砂質土
8. 10YR3/3 暗褐色 粘○ し○ 砂質土 区画溝覆土
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘○ し○ 砂質土 有機物多い
10. 2.5Y4/1 黄灰色 粘○ し○ 粘質土
11. 10YR6/6 明黄褐色 粘○ し○ 砂質土
12. 2.5Y3/1 黒褐色 粘○ し△ 砂質土 木材 多量の遺物含む 近代
13. 2.5Y4/1 黄灰色 粘○ し○ 粘質土 水性堆積
14. 2.5Y3/1 黒褐色 粘○ し○ 粘質土 水路覆土
15. 2.5Y4/1 黄灰色 粘○ し○ 粘質土
16. 7.5YR3/2 黒褐色 粘○ し○ 砂質土 焼土微量
17. 10YR3/1 黒褐色 粘○ し○ 粘質土 木製品 多量の遺物含む 幕末頃
18. 5Y4/1 灰色 粘○ し○ 粘質土 水性堆積

0 1:120 4m

第 12 図 201・250 ~ 253・258・284



第 13 図 鞘 製作関連土坑集中地点

- 南北セクション B-B'
1. 10YR3/1 黒褐色 粘○ 砂質土
 2. 10YR3/2 黒褐色 粘○ 砂質土
 3. 10YR3/3 黒褐色 粘○ 砂質土
 4. 10YR4/1 黒褐色 粘○ 砂質土
 5. 10YR3/1 黒褐色 粘○ 砂質土
 6. 2.5Y3/2 黒褐色 粘○ 砂質土
 7. 2.5Y3/2 黒褐色 粘○ 砂質土
 8. 2.5Y3/1 黒褐色 粘○ 砂質土
 9. 10YR4/1 黒褐色 粘○ 砂質土
 10. 10YR4/1 黒褐色 粘○ 砂質土
 11. 10YR3/2 黒褐色 粘○ 砂質土
 12. 10YR4/2 黒褐色 粘○ 砂質土
 13. 10YR4/2 黒褐色 粘○ 砂質土
 14. 10YR2/2 黒褐色 粘○ 砂質土
 15. 10YR2/1 黒褐色 粘○ 砂質土
 16. 10YR4/2 黒褐色 粘○ 砂質土

- 東西セクション A-A'
1. 10YR4/1 黒褐色 粘○ 砂質土
 2. 10YR4/2 黒褐色 粘○ 砂質土
 3. 5Y4/1 灰色 粘○ 砂質土
 4. 10YR4/2 黒褐色 粘○ 砂質土
 5. 5Y4/1 灰色 粘○ 砂質土
 6. 10YR4/1 黒褐色 粘○ 砂質土
 7. 10YR5/3 黒褐色 粘○ 砂質土
 8. 2.5Y3/3 黒褐色 粘○ 砂質土
 9. 2.5Y3/2 黒褐色 粘○ 砂質土
 10. 2.5Y4/4 黒褐色 粘○ 砂質土
 11. 2.5Y3/1 黒褐色 粘○ 砂質土
 12. 2.5Y4/2 黒褐色 粘○ 砂質土
 13. 2.5Y4/2 黒褐色 粘○ 砂質土

14. 2.5Y5/3 黒褐色 粘○ 砂質土
15. 10YR4/3 黒褐色 粘○ 砂質土
16. 2.5Y3/2 黒褐色 粘○ 砂質土
17. 7.5Y3/2 黒褐色 粘○ 砂質土
18. 7.5Y2/2 黒褐色 粘○ 砂質土
19. 10YR3/1 黒褐色 粘○ 砂質土
20. 10YR3/2 黒褐色 粘○ 砂質土
21. 2.5Y3/2 黒褐色 粘○ 砂質土
22. 10YR5/3 黒褐色 粘○ 砂質土
23. 10YR4/1 黒褐色 粘○ 砂質土
24. 10YR3/1 黒褐色 粘○ 砂質土
25. 2.5Y3/1 黒褐色 粘○ 砂質土
26. 10YR4/1 黒褐色 粘○ 砂質土

4. 近世・近代の特徴的な遺構

建物基礎

001、002 共に近代に廃絶する建物基礎遺構。それぞれ3本を単位とする丸木の捨杭を打ち込んだ上に30～63cmの礎石を配し、布掘状に栗石を配し、その中に黄褐色の客土により床面を形成する点で共通する。002は西側の一部に礎石が2段残る部分があり、石組み中央部に支柱痕とみられる土坑がある。

焼土坑

250～258

250、251は焼土坑であり陶磁器類を密に含む。250は円形、251は隅丸長方形を呈する。252は東西に長軸を持つ長方形であり、垂直に掘り込まれ底は平坦である。覆土は黒褐色で均等大きさの木炭を多く含み、陶磁器類は被熱を受けておりスサが入り焼けた土塊が入る。253は252に先行し、南北に長軸をもつ長方形であり、垂直に掘り込まれ底は平坦である。覆土は252と近似しており、やや被熱した土塊が多い。258は252に先行する方形の土坑であり垂直に掘り込まれ底は平坦である。覆土は253と近似する。

250のみ19世紀遺物が入るが、251、252、253、258の遺物はすべて18世紀中葉以降廃絶の範疇であり、比較的短い期間に様相の近い土坑が繰り返し掘られている。252は下記284下層と接合関係にある。

284

284は東西に長軸を持つ土坑であり、垂直に掘り込まれ床は平坦である。最下層は黒褐色の炭化物層であり、均質な炭化物を多量に含み、被熱した土塊を多く含む。上層は再掘削されたのちAs-Aを含む土で埋まっており遺構の廃絶年代は上層の時期を反映している。下層284-4として取り上げた皿が252と接合することから当初の廃絶時期は18世紀中葉頃と考えられる。

池状遺構 201

調査区中央にある201は、江戸後期頃には掘削され、変遷をたどりながら近代まで存続していたと考えられる。遺構の中央には東西方向の丸木の杭の間に板材と竹、建築部材の転用材で堰状遺構が築かれる。堰の北側が低くなっており南側の堆積土には水流の痕跡は認められず土留めの意味合いが強い。両肩には石組みの跡が残る南側の形には板材を敷き足場を造り、北側より先に廃絶している。堰状遺構の北には石組みが築かれ、北側の溝423との接続部分は石組みが途切れることから、423の廃絶時期である19世紀前葉頃の景観に該当すると思われる。底は部分的に深く掘り込まれ最下層の堆積には遺物はほとんど含まず、掘削当初は水をたたえた施設であったと考えられるが、上層には幕末頃の陶磁器類、木製品や多量の有機物が含まれる層が重なり、一度遺構は埋没している。近代に入り再掘削されているが、遺構の中心は東側に寄り、区画溝294と接続する溝状遺構となる。この時期の溝は東西の両側の板の内側を丸木の杭で内側から支える構造をしている。当初は比較的水流があったと考えられるが、201上層地点は周囲より低いためか、流れてきた泥で木組みは埋まり決壊して水溜り状になり近代期の内に大量の遺物と有機物が廃棄され埋没している。その後は客土による盛土で整地された後、第1面で検出した石組み遺構003が築かれる。003の内側は下層の影響か検出時もやや湿った状況であった。

溝 008、009

008、009は排水溝状の遺構である。第2面で検出した301は008の、302は009の下層遺構となる。複数回掘りなおされているため開削時期は不明だが少なくとも江戸中期頃には石組みと打ち込み杭を伴う構造を持っていたと考えられ、さらにそれに先行する石組みを伴わない構造の素掘りの溝(009・8層)が確認できる。近世期は石組みと両側の木の板を丸木の杭で内側から支える構造が確認できる部分があるが、底板、天井板は確認できなかったため、暗渠状であったかは不明。近代には土管に、現代には塩化ビニール管に変遷し排水溝としての機能が維持されている。008は石組みこそないが西側は399と接続し鞘町の裏手である区画溝付近まで接続していた可能性があるが、009は

区画溝までの中間で途切れており、削平されている可能性はあるが、接続は不明である。ともに西から東への水流があったと考えられる。18世紀初頭の絵図（間部家当代）には調査区の東側にあった通りの西側に水路が見え、そこに流れ込んでいたものと考えられる。

305・1001

1001は東西方向より18度北に傾く溝である。西側の調査区では南北に数条の溝として検出できた。北側はⅤ層とⅥ層由来の土を混成したラミナ状を呈し、西側はAs-B堆積層である7層まで達し、粘質土で埋まっている。調査区中央部では後に池状遺構201に切られるため様相は不明であるが、調査区東側ではⅤ層上面から掘り込まれ、断面U字状の溝として検出した。溝底はⅦ層に達し、西側最終堆積と同じ粘質土で埋まる。東側では近世遺構の集中があり完掘できていないが、やはり砂を含む層の広がりがある。

鞆製作関連土坑集合地点

溝009南側には鞆羽口や取鍋などの製作関連遺物や鞆や柄などの木製品を出土する土坑が集中する。

322は円形に近い不定形土坑であり、掘り込みは浅い。土坑床面に多量の木片が敷かれる。頭金具・針金、鞆5点（小片多い）・柄1点、漆漉し紙などが出土し、出土した水甕は330と接合関係にある。18世紀中葉以降に廃絶する。

313は隅丸方形の土坑であり、覆土には焼土を多量に含む。床面は中央が緩やかに窪んでおり、底に丸木の炭化材が並んで配置されていた。

314は不定形土坑が複数切り合うが、東側がさらに低くなっており湧水がある。西側は南西に張り出し部を持つ。床は不整であるがテラス状の部分があるため底の平坦な時期も想定できる。板材をはじめ多くの木材が入り、目貫・小柄穂先・煙管・金属片・带状金具・飾り金具・金属切片・板状金具・鋸、鞆羽口・カワラケ取鍋（多量）・餌猪口・転用取鍋・砥石、切断された鞆12点、柄1点を含み、鞆は西側で多く出土している。また、16層の土中には金属切片が多く含まれていた。19世紀前葉以降に廃絶する。

330は南北軸の底の平坦な長方形土坑が複数切り合う。円形に深く掘り込まれている部分があり、湧水している。目貫・小柄穂先・煙管・金属片、漆椀、底に漆紙の付着した陶器中壺や水差しなど多量のカワラケ取鍋を出土する。東側の長方形の部分の底は平坦であり、中壺、水差等は床面付近で出土している。また、複数の漆椀があり、そのうちのひとつからは金属の台座を持つ玉状の遺物が出土している。19世紀前葉以降に廃絶するが、下層遺構のため複数時期の遺構が含まれており、一部が322と接合するため18世紀中葉の遺構も含まれる。

345は東西に主軸を持つ底の平坦な長方形の土坑であり、348に東側を切られる。鞆羽口が床面付近で出土している。348は不定形土坑であり、掘り込みが深く調査時湧水層に達する。やはり複数土坑が切り合う地点の下層遺構。板状、棒状の木材が多数廃棄されている状況であった。木材と共に鑑金具・带状金具・当て小判・灯心立て・和釘他曲物・漆椀・カワラケ取鍋・餌猪口・転用取鍋・瓦灯などが出土している。19世紀前葉以降に廃絶する。

355-1は南北軸を持つ細長い楕円形の遺構である。円盤状と筒状の漆紙が出土している。

355-2は平坦な床面を持つ長方形の土坑である。床面に貼り付くように赤漆を塗った板材をはじめ、木材や陶磁器類と共にカワラケ取鍋が出土している。18世紀中葉遺構に廃絶する。

5. 近世・近代の出土遺物概要

今回の調査区からの出土品は 10 万点以上にも及ぶ。大半が近世と近代に属する遺物である。限られた紙面の中ですべてを紹介することは困難であるため、陶磁器類は概略を述べた上で各遺構の時期の判定の基準になるもの、当遺跡の性格を表すものを中心に実測図を示し、木製品、金属器は当遺跡で特徴的であった刀装具類を中心に図示した。遺跡の様相を示すには不十分であるが主要遺構に関しては巻頭の集合写真で組成を示すことで理解の助けとしたい。

①土器・陶磁器類

a. 近世土器・陶磁器類の傾向

当遺跡を特徴づけるものとして、まずカワラケの出土状況がある。在地産の近世カワラケは、鞘町側で検出したものに特徴的に溶解した金属の付着と強い二次焼成が認められ、取鍋、あるいは埴塙としての使用が考えられる。一部の土坑から多量に出土する傾向がある（166、186、210、211）。それに比べ、灯明皿として煤が付着したものも少量認められるが、宮元町側の遺構に多い。また数は少ないが薄手の江戸カワラケ（103、104、122）も在地のものと共伴し、多くに墨書が認められる。これらは取鍋カワラケと共伴することもあるが取鍋として利用されたものは認められない。用途を異にしていたものと思われる。また、焼塩壺の出土も両町に認められ、その中には取鍋に転用されたもの（338）、甕羽口に転用されたもの（302）も認められる。

また、溶解した金属の付着は陶器にも認められる。最も多いのは餌猪口を転用したもの（172、173、194）で、次いで小坏（3）、せんじ碗（337）等にも認められる。

瀬戸美濃の中碗（93）、小壺（19）は外面にも多量にガラス質の溶解物が付着している。

こうした遺物を含む製作関連遺構に伴う遺物の傾向としては、組成に茶碗類が多く、灰吹きや火入れ、煙管等が多く伴い、灯火具は比較的少ないが瓦灯の共伴が目立つ。また、木質の残存が悪く図示しえなかったが、赤漆塗の椀が伴う遺構が目立った。

また、近世遺物の器種組成において皿類、徳利類、土製品や調理器具等が少なく、全体的に生活の痕跡が少ないのが特徴的であり、その傾向は鞘町側の遺構に顕著である。

上手の陶磁器類は宮元町側に多い（遺構 205、244、232 等）印象がある。鞘町側にも含まれる（遺構 211、250 等）が焼土坑に多く、周囲の遺構出土遺物と上記傾向が異なるため、必ずしも使用場所を示していない可能性も考えられる。城下を含めた広域な範囲での廃棄の可能性も検討する必要があるだろう。

b. 近代遺物の傾向

近代の遺構は遺跡全体に広がるが、近世の遺物に比べ、土製品、鍋等の調理器具、秉燭等の灯火具、徳利や猪口などの酒器類の他、植木鉢等多量に検出され、生活感のある遺物が増える。

特に中央の池状遺構 201 と周辺の溝 294、584、217 からはまとまった資料が得られた。これらの遺構で特記すべきは御神酒徳利が多量に出土することである。作りが粗いものが多く、中には製作時糸切りで穿孔したままのものもみられる。底部に墨書が見られるものもあり、35 には「四月十四日」と日付が記入されている。笹文・梅花文が施されることは共通するが、胎土や呉須の色調、施文にバリエーションが見られることから、一度に廃棄されたものではなく一定の間隔で交換され廃棄されていたと考えられる。図示していないが周辺からは土製、あるいは磁器製の狐が出土しており、稲荷信仰に伴うものであろうか。

近代遺物は、文字資料を含むものを中心に図示した。いくつかは近隣地域との関連を示すものがある。

11 は山七の屋号の入った鬼瓦である。文政 8 年の『商家高名録・商業高名録』高崎宿の項目には、同様の屋号を持つ店が 2 つ紹介されている。一つは「太物足袋品々 中山道高崎田町 和泉屋幸七」とあり、もう一つは「中山道高崎九蔵町 銅物 鐵物 萬職人道具品々 釜屋七兵衛」とある。

9 の牛乳瓶には小林養牛園のエンボスがあり、小林養牛園は『豊岡誌』によると明治期～昭和初めまで烏川を挟んで対岸に所在し、同所は現在「烏川かわなか緑の広場」として整備されている。営業所が柳川町に所在した。

『鞘町史Ⅱ』には明治末期から出版時の 2000 年の鞘町の街並みや店舗が紹介されており、21 と 22 の石塚三味線

店は大正末期から昭和 20 年頃の地図に記載され、出土地点と店舗位置が合致する。369 の岩田眼科も『鞆町史Ⅱ』の大正 5 年頃の地図に記載され、明治 37 年発行の『群馬県営業便覧』にも記載されている。

②刀装具類

今回の調査では、鞆町地域から多くの刀装具やその未成品が出土した。細かな観察は観察表に譲ることとし、ここでは要点と傾向を中心に紹介する。

柄の部分は 3 点あり、1 は目釘孔、鵜目穴を持つ柄下地であり、縁から頭部分が残る。内面は茎の形状に割り込みがあり、両側から刃物で取り外した痕跡が残る。4 は漆柄の差表・差裏が頭から縁まで残る。頭の平部分に金具が残存し、頭と縁に帯状金具、中央に筒金を巻いた痕跡が残る。筒金の下には出し目貫を止めていた針金が残存する。3 は漆柄で頭から 17.65cm が残るが縁部分は欠く。外面は厚く漆が塗り重ねられ、漆の表面に凹凸はないが濃淡の菱形痕として柄巻の痕跡が残る。漆表面には石目地塗のような凹凸の加工が施され、金具の下にも凹凸はないが下地の漆が塗られている。筒金を巻く工程の前後に漆の加工を行っていることがわかる。筒金を外した状態で差裏・差表同時に切断されている。

漆塗りの鞘は約 30 点あり、鞘の先端である小尻の部分が観察できるものは 16 点が丸小尻、残存状態が良いものは刀身を削り出した痕跡が確認できる。塗はすべて黒漆であり、よく磨かれて重ね塗りが行われ、光沢があるものが多い。完形品はなく、工具により切断された痕跡が観察できるものが多い。木質が腐り漆被膜のみ残存するものもあるが厚く漆が塗られており漆塗りの未成品は検出されていない。

2 は先端部の漆表面に細かな皺が残る部分があり、兜型の鎧金具の装着痕と考えられる。6 は刀身の割り込みが明瞭に観察できる。5 は差表・差裏が残存する。表裏合わせた状態で漆が厚く塗られ、金箔が残存する。差裏側に刃物の痕跡が残る。7、9 は同一個体であり、漆表面に同心円状の文様を施し、漆の被膜は他のものに比べ薄い。表裏合わせた状態で切断されている。内面は刀身の割り込みの先端部にさらに細い割り込みがある。差表の削り出しが明瞭なのに比べ差裏の削り出しは甘い。8 の先端部分は差裏、差表が残存、延長部分は片側のみ残存する。先端はつぶれておりふくらの向きは確認できない。10 は最も残存長があるが、鯉口側の端に鞘表面の丸みを削ぎ取ったのち小柄櫃と考えられる割り込みが彫られており、小柄櫃の残存長を考慮するとやはり切断されたものでさらに長い拵であった可能性がある。11 は端部が 45 度に整えられており、柄の可能性がある。刃物を当てて押し切られたような痕跡が残る。内面に細かな傷がある。14 はふくら部分が不明瞭だが棟部分の割り込みがはっきり残る。16 は切断された後漆表面を削り取られており、重ね塗りの痕跡がわかる。下地の漆も厚く表面がよく磨かれている。17 は鞘小尻部分であるが、漆表面に菜種状の細かな凹凸が観察でき、先端から 3.5cm は凹凸がない。やはり鎧金具装着の痕跡の可能性がある。15 は内面に小尻と思われる丸みと棟部分の割り込みが観察できる。18 は厚みが薄く内面の割り込みが明瞭でない。両側から細かい削り痕が観察できる。20 は乾燥のため残存状態が悪いが粗い刀身の割り込みが確認できる。21 は鞘の長さに対し横方向と斜め方向に鋭利な工具で切断されている。19 はやはり厚みがつぶれており不明瞭だが内面の割り込みが茎様であり柄とした。22、23、24 は小尻先端部分である。23 と 24 は棟の割り込みが確認できる。25 も鞘小尻と考えるが内面は不規則に削られており表裏判然としない。

26 は全体的に表面を削り、断面を楕円形に整えている。漆は塗られていない。4 個体あり最低 2 個体に接合する。工具により切断されている。白鞘、あるいは装飾を施す前の鞘の可能性があるが、やや細く検討を要する。27 は漆が厚く、内面は不整に削られている。差裏の鞘小尻として図示したが柄の可能性も残る。

巻頭図版 15 の 12 は鮫皮の表面に赤漆を、裏面には厚く黒漆を塗っている。目釘孔が残存し、柄に巻かれていたものと考えられる。

巻頭図版 15 の 13 は銅製の切片。表面に加工が施され、裏にわずかに木質が残る。

③金属製品

切羽 3 点、頭金具 3 点、鎧 1 点、目貫 2 点、小柄穂先、裏瓦（小柄櫃の入口に装着する金具）が出土した。その他、刀装具の可能性のあるものに複数の帯状金具、針金等がある。

目貫 2 は相馬の意匠である。足部分はなく町彫の普及品か。

3 は裏瓦（小柄櫃の入口に装着される金具）である。0.5cm 幅の金属板の両側にロウ付けで突起が作り出されてい

るが、最長 0.4cm の突起の他は欠損している。中央部分で斜めに折れ曲がっており、工具を用い外したものか。

4 は鎧金具である。2 枚の銅合金をロウ付けで接着した後、黒漆が塗られている。

切羽 7 は比較的残存が良く、金属が重ねられた痕跡と刀身にあたる部分に菊座状の鑿跡が観察でき、二次利用の際の調整が行われている。片側に削り込みがあり、筭櫃あるいは小柄櫃に合わせたものか。5 は表面の腐食が激しいが、金属の重なりが確認できる。6 も腐食が激しく変形しているが、刀身は太いものであったと考えられる。

頭金具 8 と 10 は形態が非常によく似ている。金属は薄く平の部分に二次的な窪みがある。鵜目穴は平の部分に食い込む形で穿孔されている。8 は黒漆が塗られている。9 は 8、10 よりも金属が厚く作りが良い。平部分は丸みを帯び、意匠は不明だが装飾が施されている。

带状金具 11 は中央から曲がっているが、一辺は直線、もう一辺を中央から対称に鑿状の工具を用い山形に切り出した痕跡があり、切断面は未処理のままである。長方形の金属板から鋏形様の筒金を切り出した切片と考えられる(復元模式図参照)。12 は長方形の带状金具に穿孔があり、漆塗されている。穿孔の周囲は直径 1.2cm で円形の窪みがあり、直径 2.2cm の範囲に円形の擦痕があり漆が塗られていない。筒金を出し目貫で止付けていた痕跡か。

小柄穂先 14 はやや大型であり小刀区が明瞭に残る。15 は小型であるが肉厚で作り込みが良く刀匠打ちか。14、15 とともに茎に木質の残存があり小刀転用と考えられる。

16、17 は飾り金具である。16 は七子地に唐草様の文様が彫られており、17 は花文様の切り出しがあるが表面は残存状態が悪く、刷痕が観察できるのみである。家具の飾りであるが出土状態から転用の可能性も考慮し図示した。

18 は当て小判である。上下に扇文、扇文の中と中央に刻印があり桐文模倣と思われるがはっきりしない。全体に莫盛目が施されており、裏面には刻印、莫盛目とも施されていない。19 は灯心立てである。18、19 は 4 の鎧金具と共伴する。

20 は眼鏡である。レンズは 2 枚あり、一方は片面のみわずかに凸面があり、もう一方は両面に僅かに凸面をもつ。木製品 5 の鞘と共伴する。廃棄土坑ではあるが、享保 17 年(1732)三宅也来によって編まれた『万金生業袋』によれば、「瑕目かね、刀、脇差のきすをあらため見るに用ゆ」とあり、江戸時代の刀剣類製作にすでに用いられていたことがわかる。

針金(巻頭図版 16 の 28)は刀装具関連遺物と共伴する例が多い。ねじれた状態で出土しているものもあり、固定する道具として使用された可能性もあるが、木製品 4 の柄に残存している例もあり、材料として用いられた可能性も考えられる。

④漆関連遺物

漆付着陶磁器碗、漆漣し紙、漆付着曲物、漆椀が出土した。刀装具関連の遺物を出土する土坑からは、複数の漆椀を検出する場合が多い。鞘類に比べ木質の残存が悪く被膜のみ残存している為確認できたものも多い。330 で出土した碗の中の土に玉状の石と台座が検出されており、加工に用いる材料入れとして用いていた例があるようである(巻頭図版 16 の 21)。322、330 他では漆漣し紙が出土している。磁器碗に漆が付着したものも複数ある(巻頭図版 11 参照)。漆が身近にあったためか、陶磁器類の焼継の出現は遅れる傾向にあり、幕末・近代には多く見られるが、製作関連の遺物を出土する時期、遺構には漆継が盛んに用いられている。

⑤銭貨・煙管

銭貨は遺構出土分を中心に図示した。284 からは多量の銭貨が出土したが、強い被熱を受けており癒着、破片が多い。主に下層炭化物層からの出土である。

煙管は遺構出土品を中心に写真で提示した。

⑥木製品

1 は断面円形の把手である。釘孔があり円柱状の部材を差し込み釘で止める構造をしている。2 は差歯下駄である。前歯を差し込む部分が鋭角に削られている。3 は連歯下駄である。歯は台部より幅広に削り出されている。4 はほぞ穴の開いた板材である。ほぞ穴部分とその下から 6～7 cm ほど下がったところの板幅がやや狭くなっている。

⑦瓦

今回の調査で検出された瓦類はコンテナ 28 杯にも及ぶ。すべてを紹介するのは困難なため、刻印が残るものを中心に報告する。

刻印が確認できたものは 39 点ある。棧瓦あるいは破片のため確認が困難だが棧瓦を含む平瓦類の小口に、次いで丸瓦の凸面に押されているものが多い。刻印はすべて文字を使用し、山形等で文字をすべて囲わないものと、四角、丸、扇形等で 1～3 文字を囲うものに分けられる。前者は素焼きのにぶい橙色あるいは明黄褐色の瓦に、後者は燻焼きの灰色の瓦に用いられる傾向がある。

7・8・9・30・31 は扇形で「利藤」を囲い、1・2・17・20・26・28・29・33 は□で「吉」を囲い、5・19・21・27・39 は○で「吉」を囲う。

これらの刻印と同じ意匠は明治 37 年発行の『群馬県営業便覧』の多野郡藤岡町（現藤岡市）の中で、扇形に利藤は瓦製造商高橋利八、□に吉は瓦製造商江本與吉、○に吉は寺田新蔵の名で紹介されている。

『藤岡のかわら史』によるとこの 3 軒は明治 29 年にも瓦業者として名がある（高橋利八は笠原利八と同一人物）。高橋（笠原）利八は明治中頃 10 名近い雇人を抱えて営業しており、緑町で幕政のころから瓦屋を営んでいた栄五郎が、明治 3 年の勅令により笠原姓を名乗り、明治 10 年に移り住んだ辻道に榎木が生えていたことから榎木の瓦屋と呼ばれていた。寺田家は芦田町に古くからある瓦屋で、文化 2 年（1811）に領主から下附された鑑札が現存しており、さらにさかのぼって瓦業を営んでいた可能性がある。

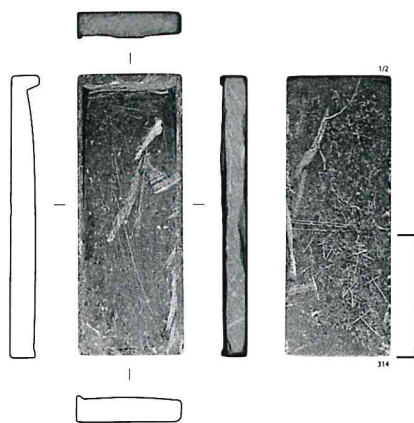
○に吉については字体が異なるものが複数認められ、全てを藤岡産と断じるのは難しい。高崎藩には吉兵衛という藩の瓦師がいたことが文献で確認できる。刻印の有無等の考古学的な事象との関係性は不明だが、吉という字が用いられていることから考慮に入れておく必要がある。しかし、同意匠のものは岩本町二丁目遺跡、汐留遺跡、萩藩毛利屋敷等でも出土しており、広域な流通に乗っている可能性を考えると検討の余地がある。

補足 2-1

本書の入稿を終え、資料返却の準備を開始したところ、報告書未掲載とした木製品類の収納箱内から、現場で取りあげたままの状態の未洗浄資料が数点確認された。基本的には第Ⅲ章で図示・説明した資料と類似のものであったが、看過できないものも含まれていた。出土遺物を総覧していない状態での報告書作成など本来「あってはならない」ことで、正に猛省である。ここでは重要と思われる資料について頁を割いて提示し、調査担当者として最低限の責任を果たさせて頂くと共に、諸賢の意見を仰ぐ。

石製硯（314 出土）

粘板岩製の小型品。両面に調査時のガジリがある。陸部分は擦り減っておらず、本来の用途（墨をする）としての使用頻度は低いように思われる。縁の大半、とくに陸部分に接する縁は意図的に欠き取ったような雰囲気、二次的な用途が想定される。漆塗膜と同じ収納ポリ袋に入っていた。

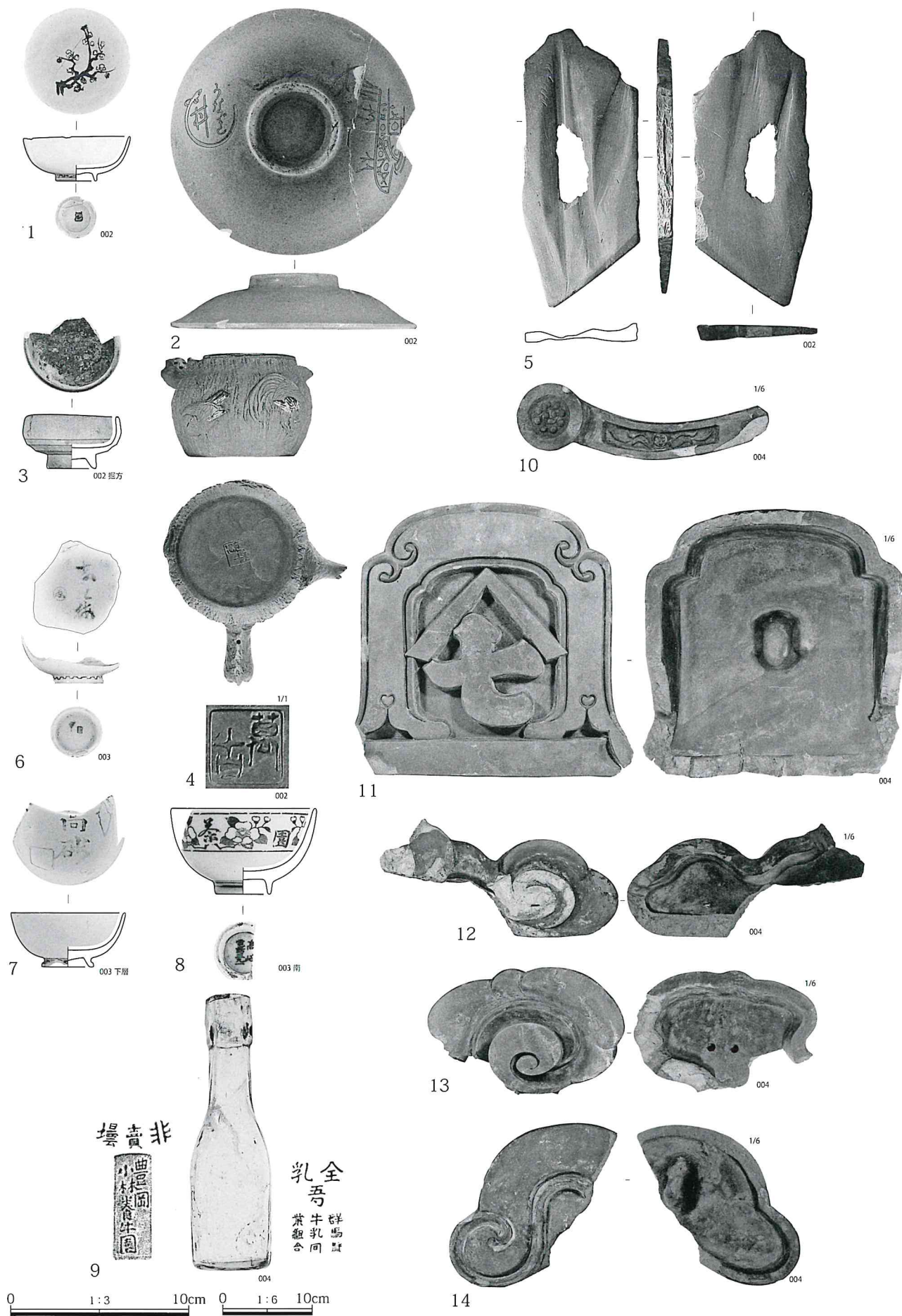


拡大
→



裏面には線刻が認められる。
「代」「矢」「や」の文字を
認めるが、その意味は不明。

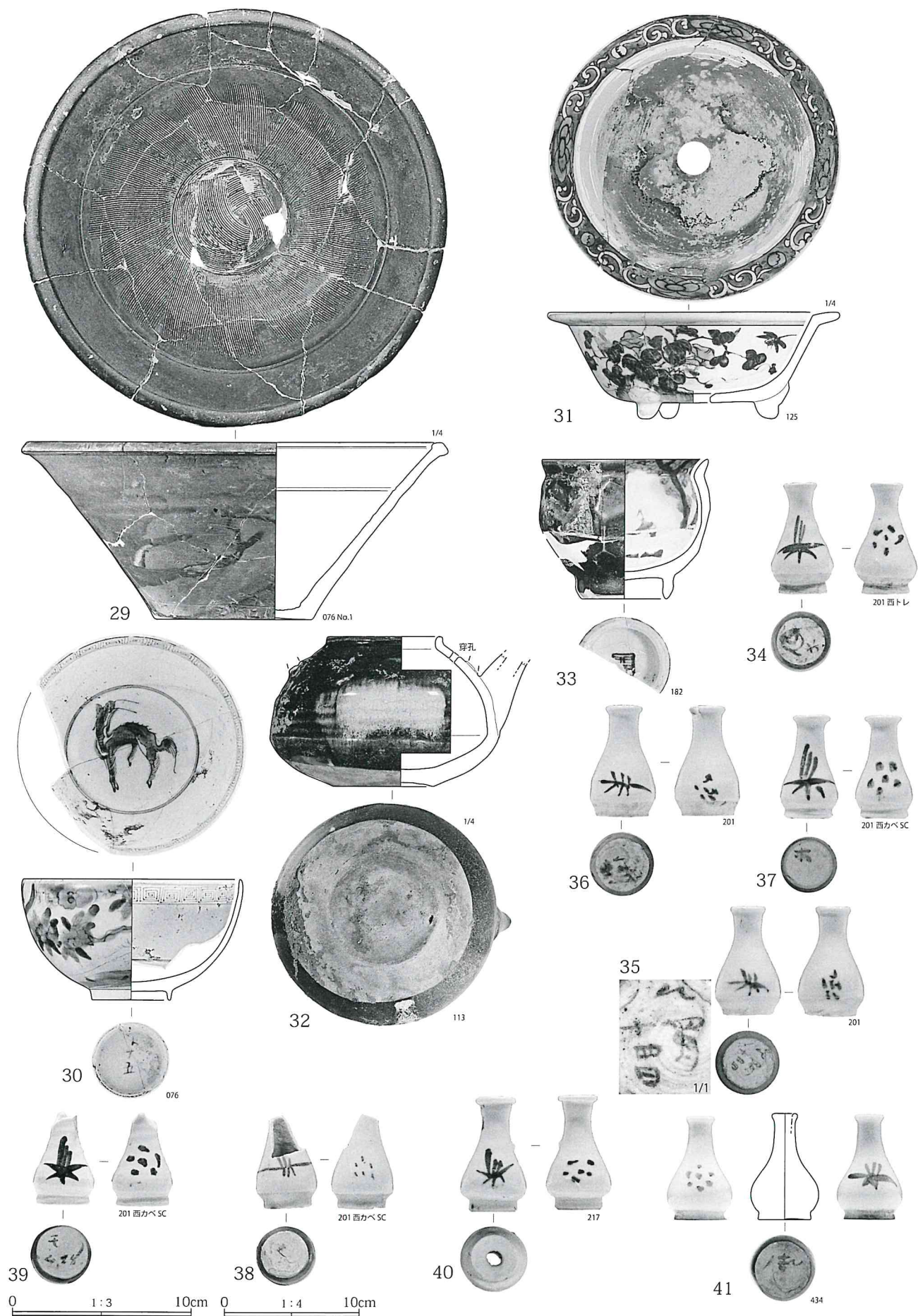
65 ページへ続く



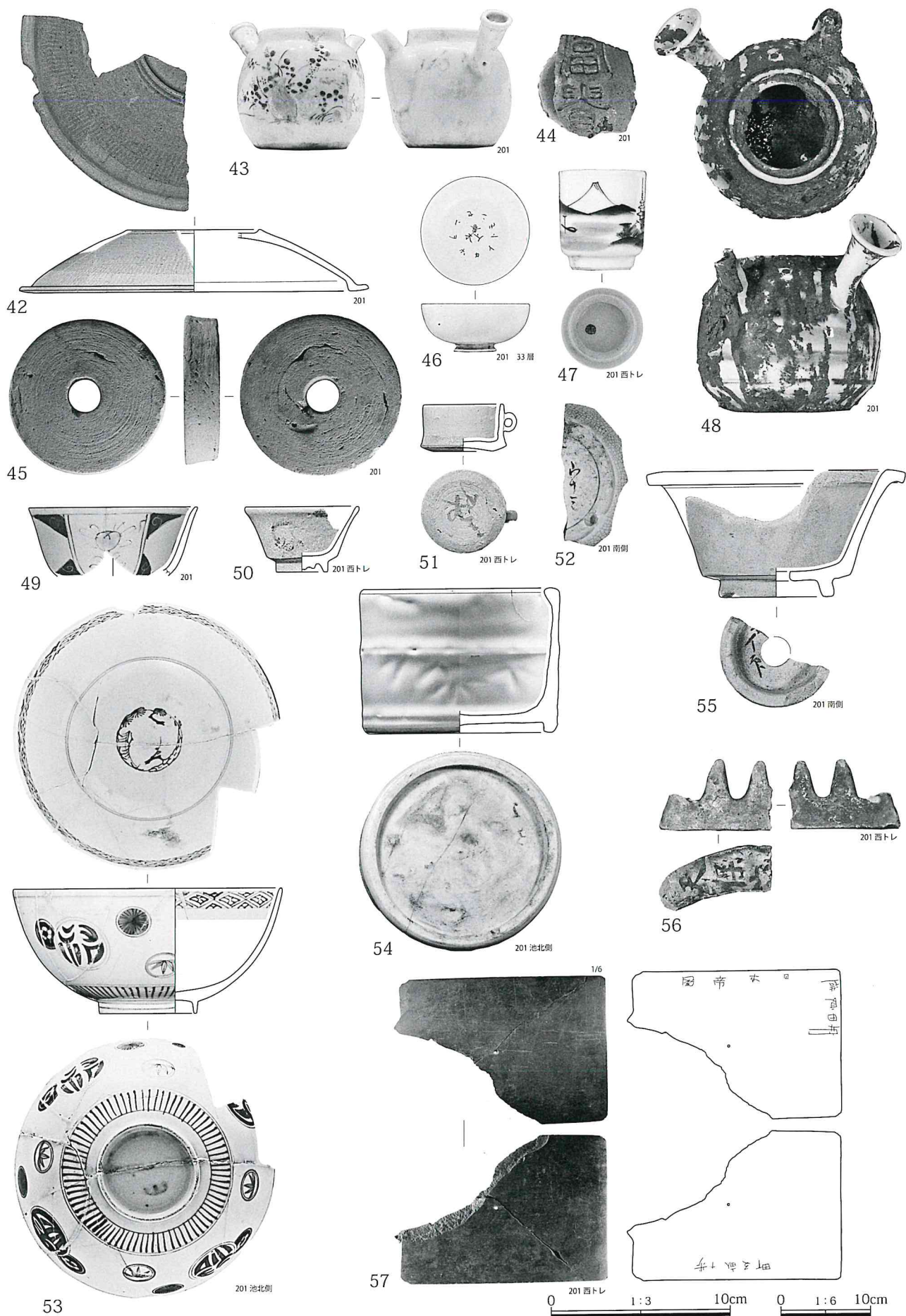
第 14 图 出土陶磁器類 (1)



第 15 図 出土陶磁器類 (2)



第 16 図 出土陶磁器類 (3)



第 17 図 出土陶磁器類 (4)

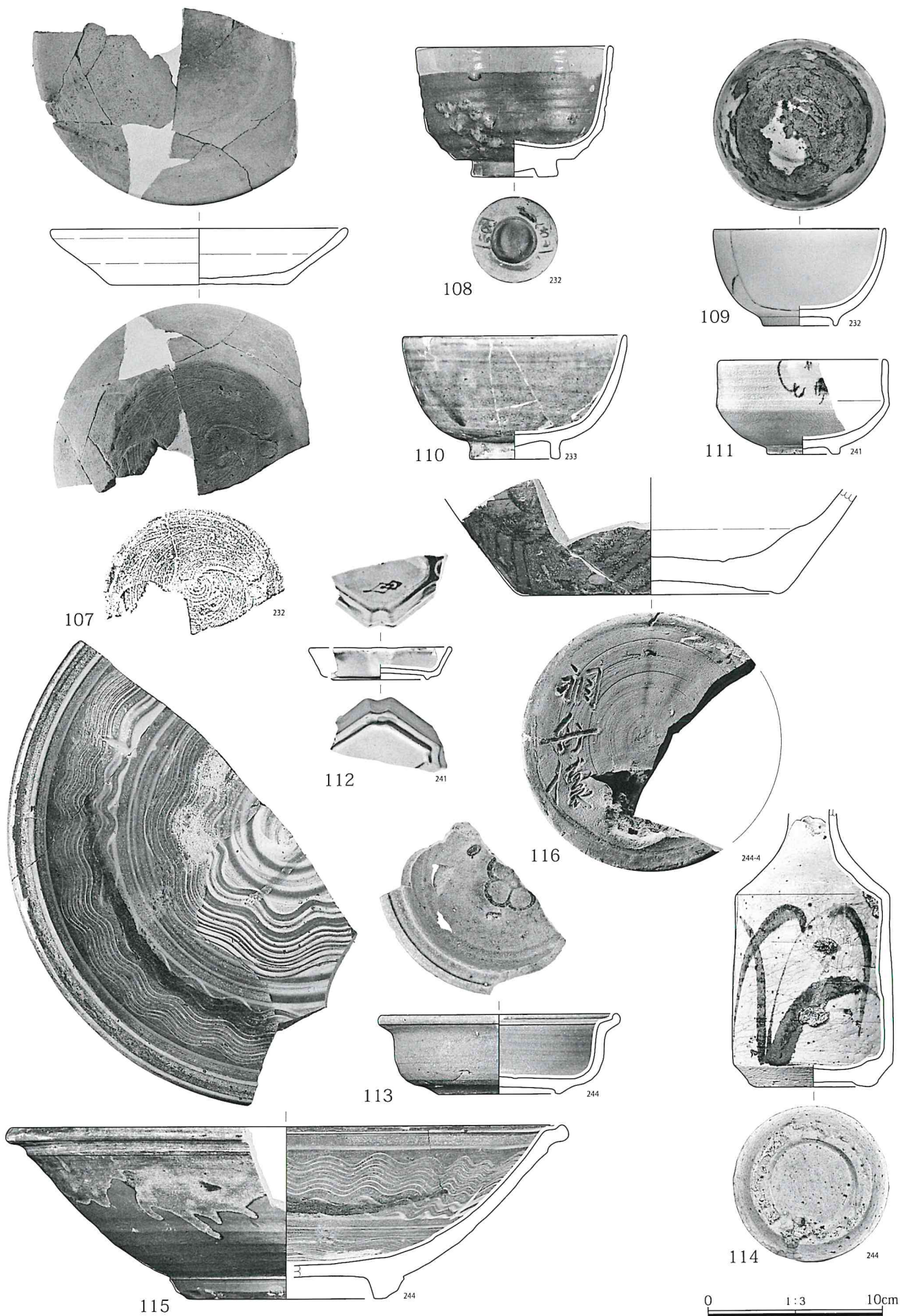


第 18 図 出土陶磁器類 (5)

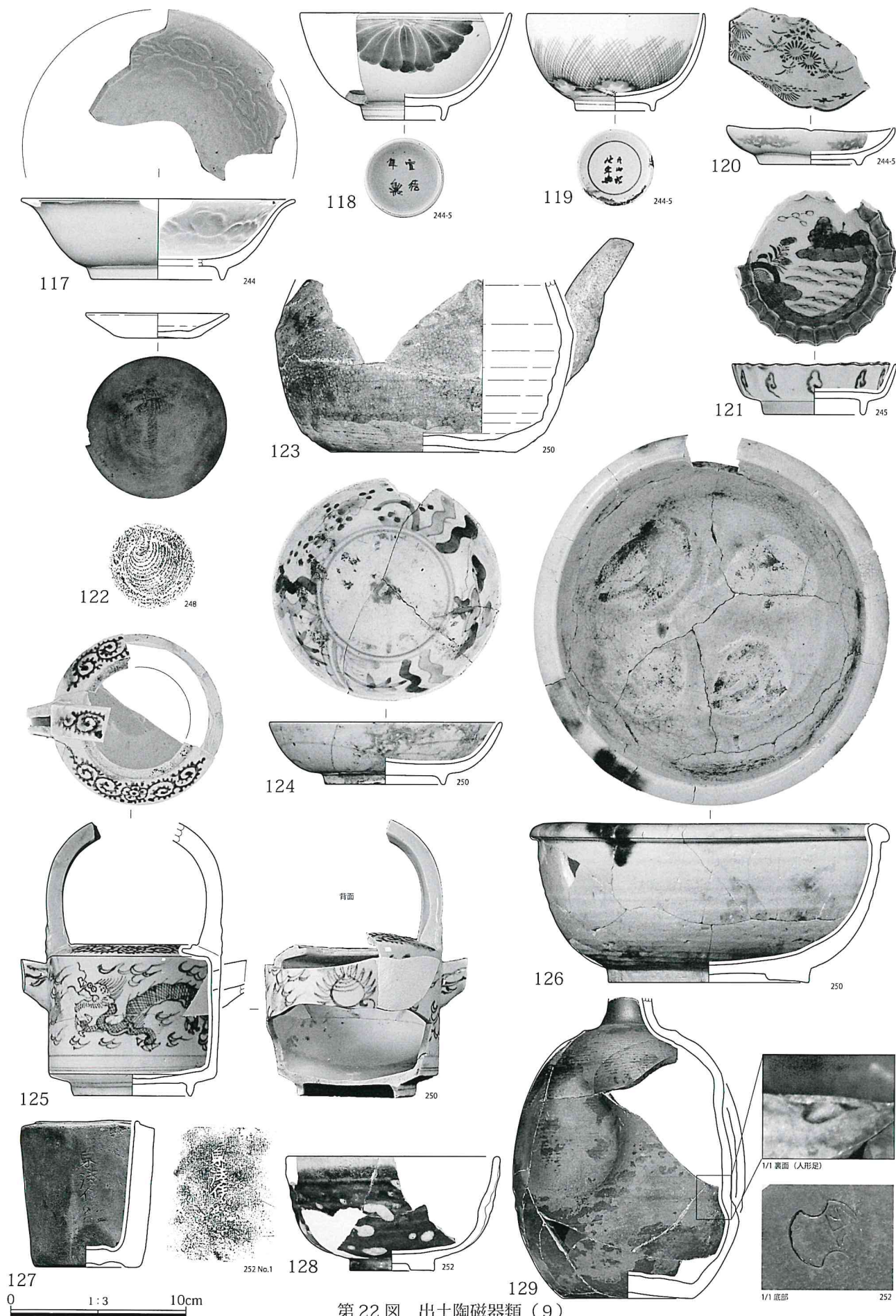


第 19 図 出土陶磁器類 (6)

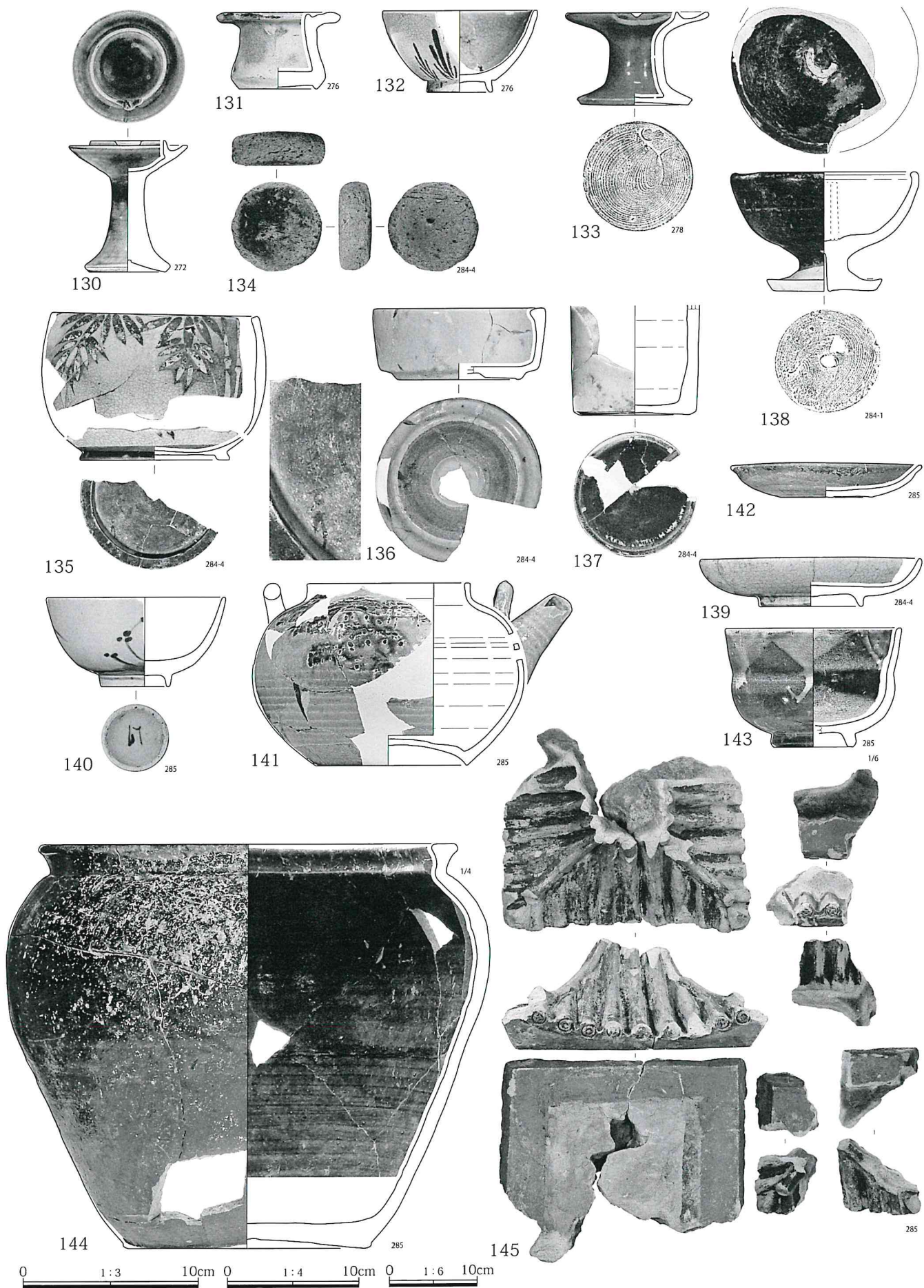




第 21 図 出土陶磁器類 (8)



第22図 出土陶磁器類(9)



第 23 図 出土陶磁器類 (10)



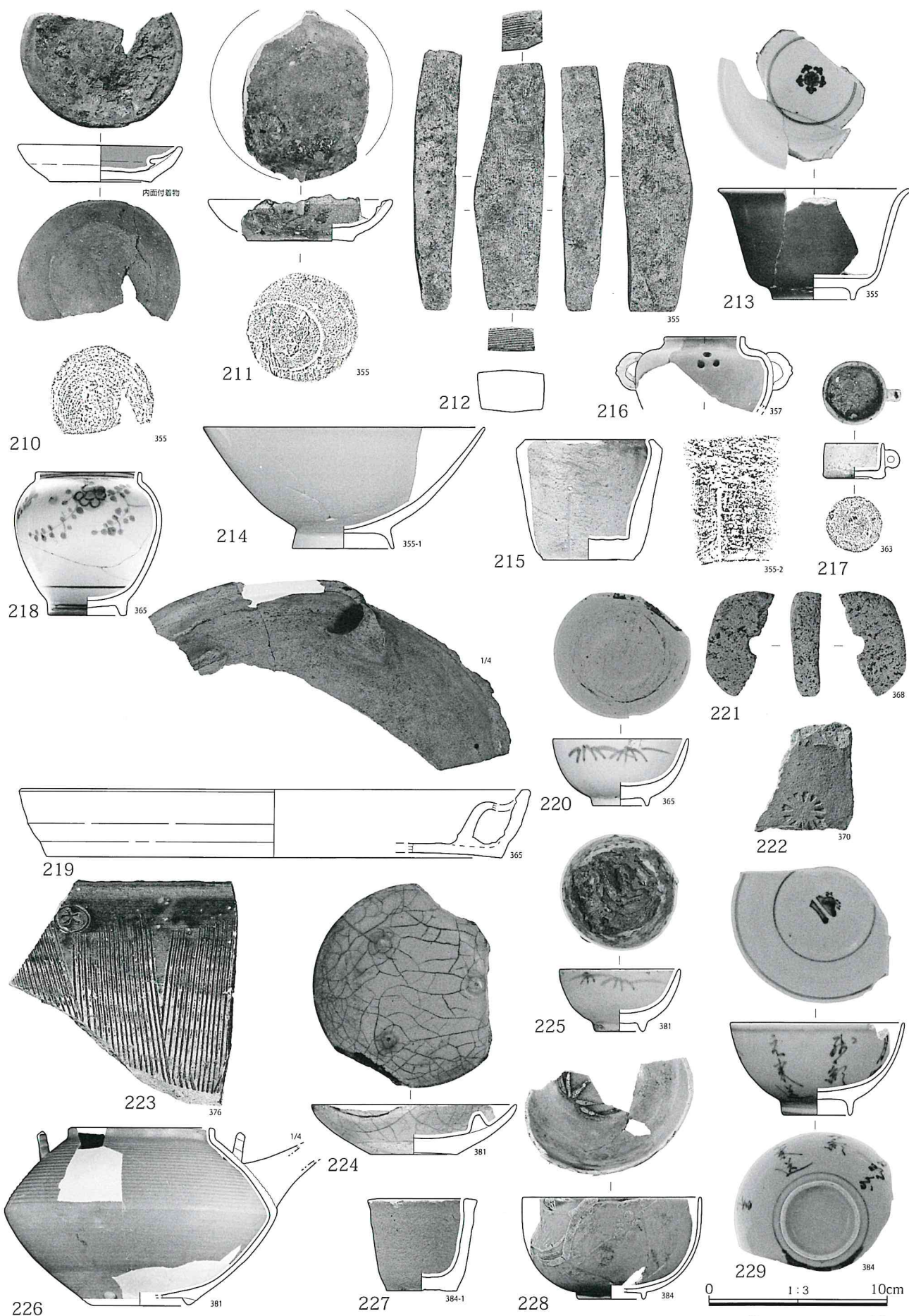
第 24 図 出土陶磁器類 (11)



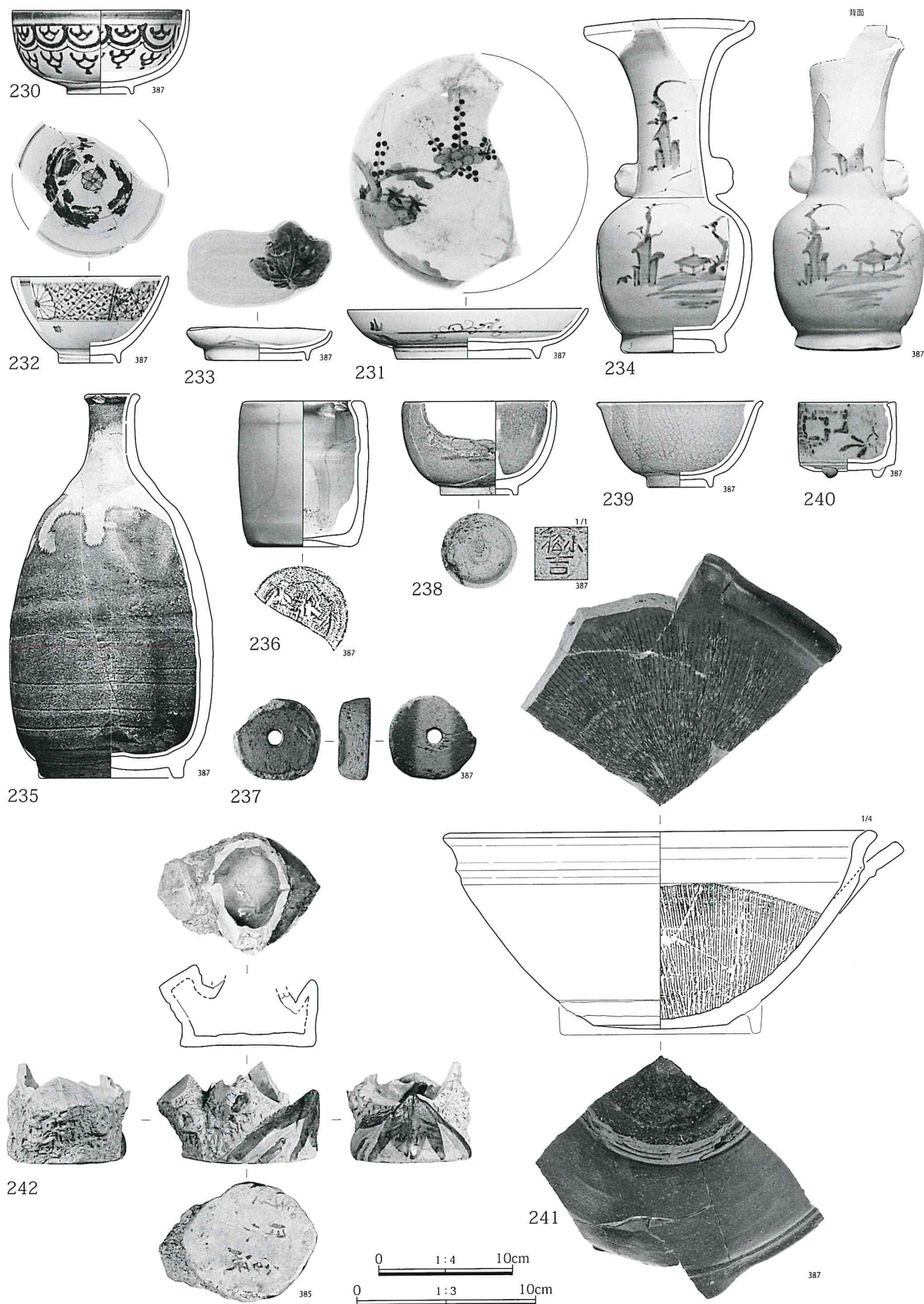
第 25 图 出土陶磁器類 (12)



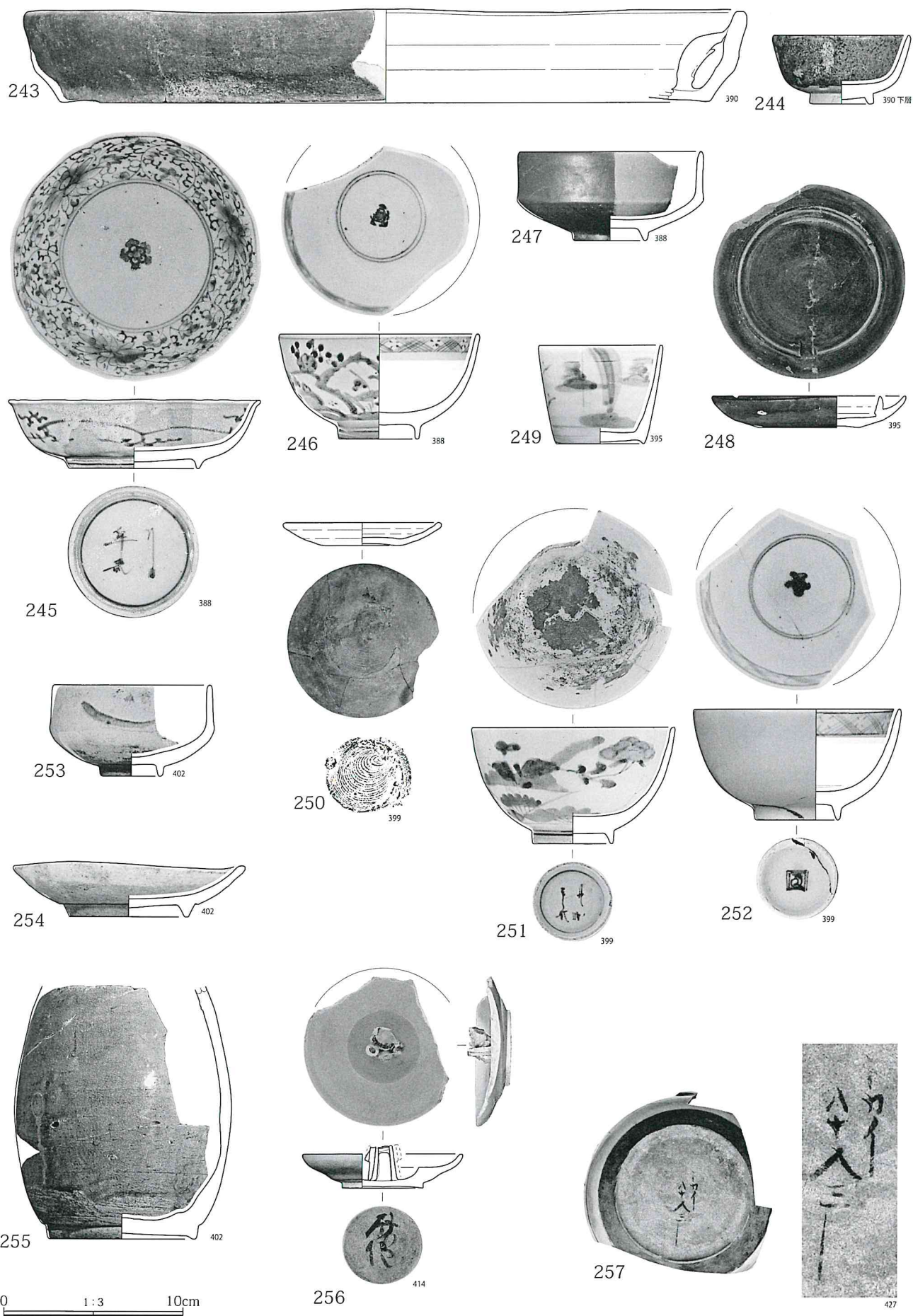
第 27 図 出土陶磁器類 (14)



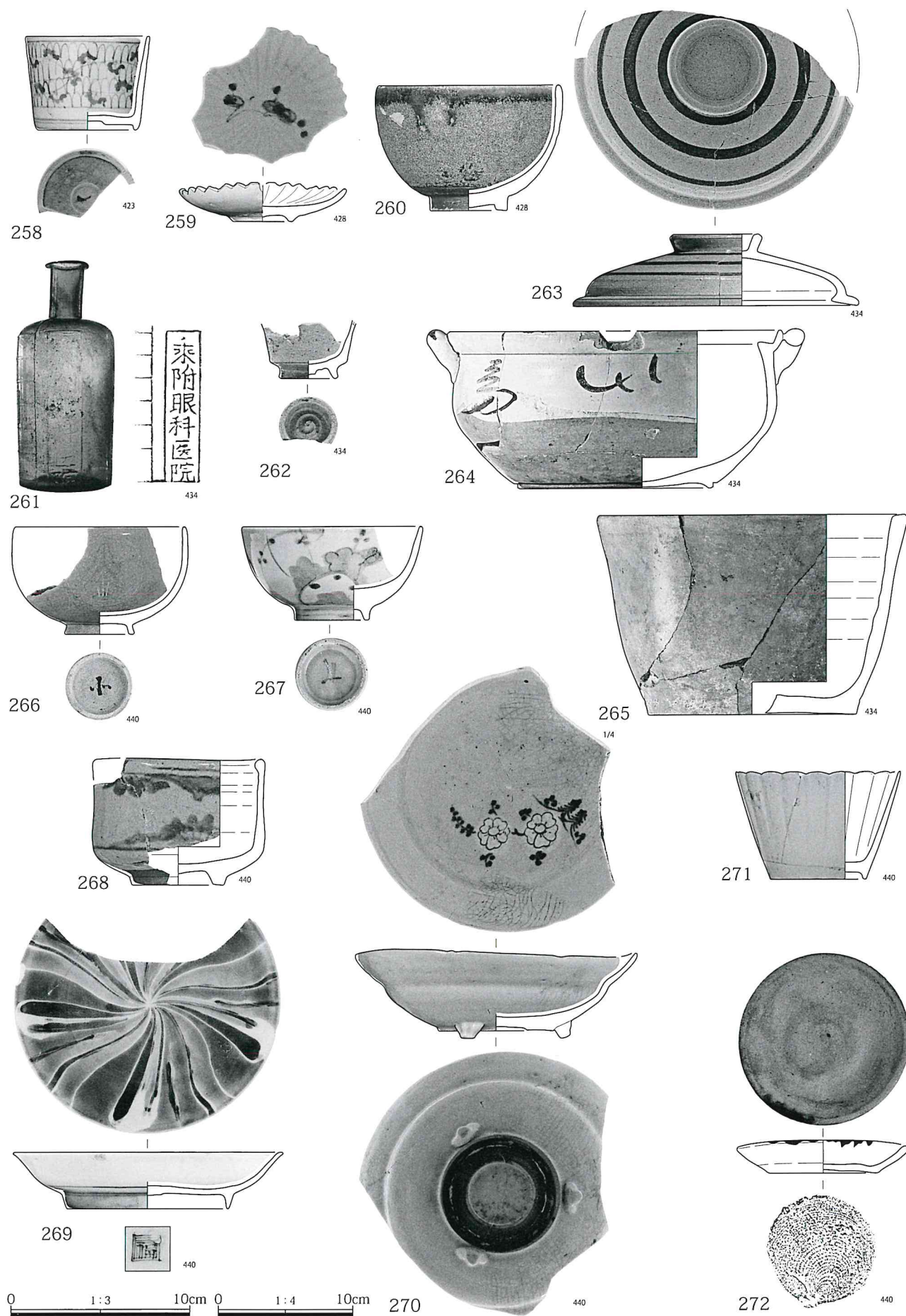
第 28 図 出土陶磁器類 (15)



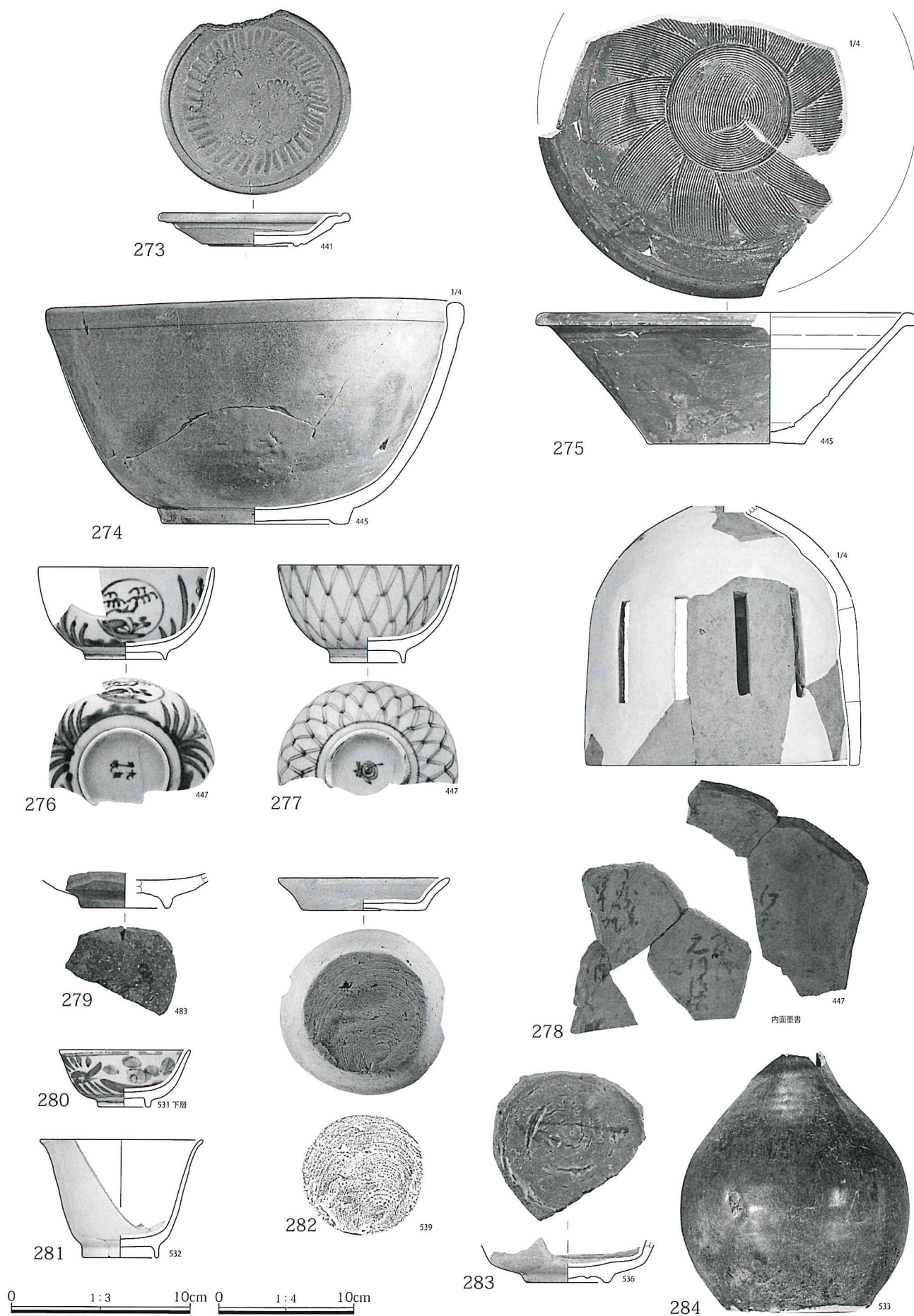
第 29 図 出土陶磁器類 (16)



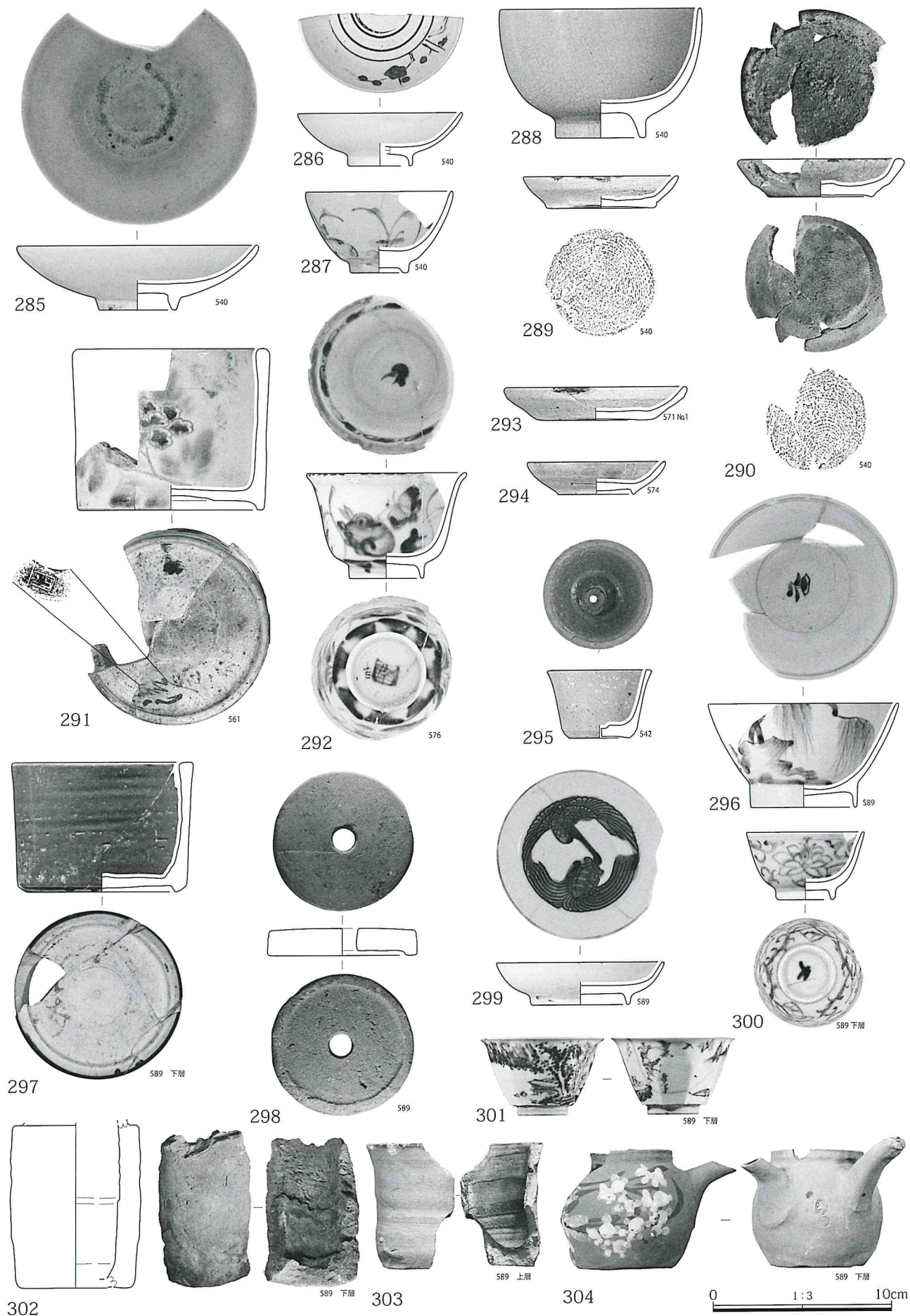
第30図 出土陶磁器類 (17)



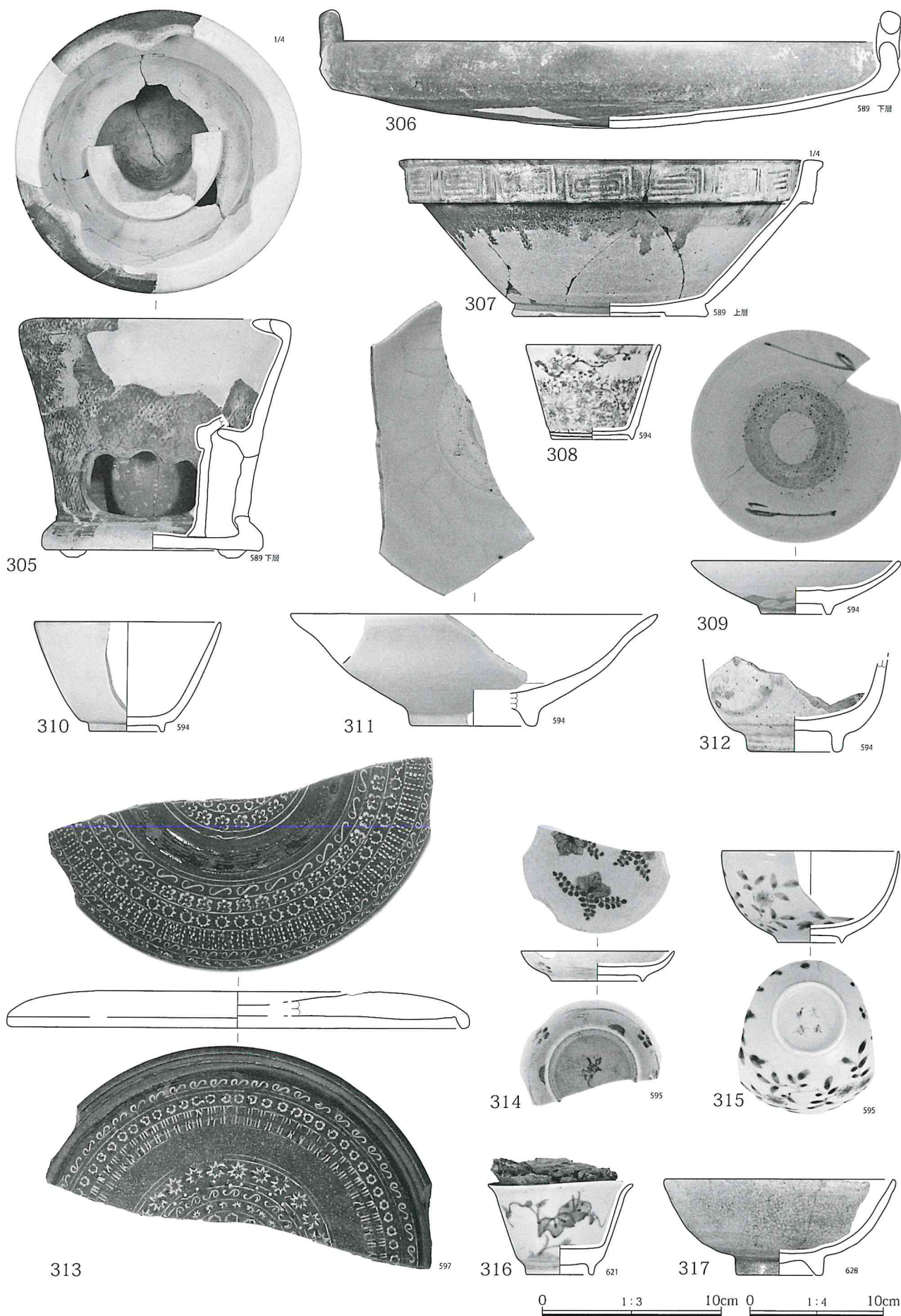
第 31 图 出土陶磁器類 (18)



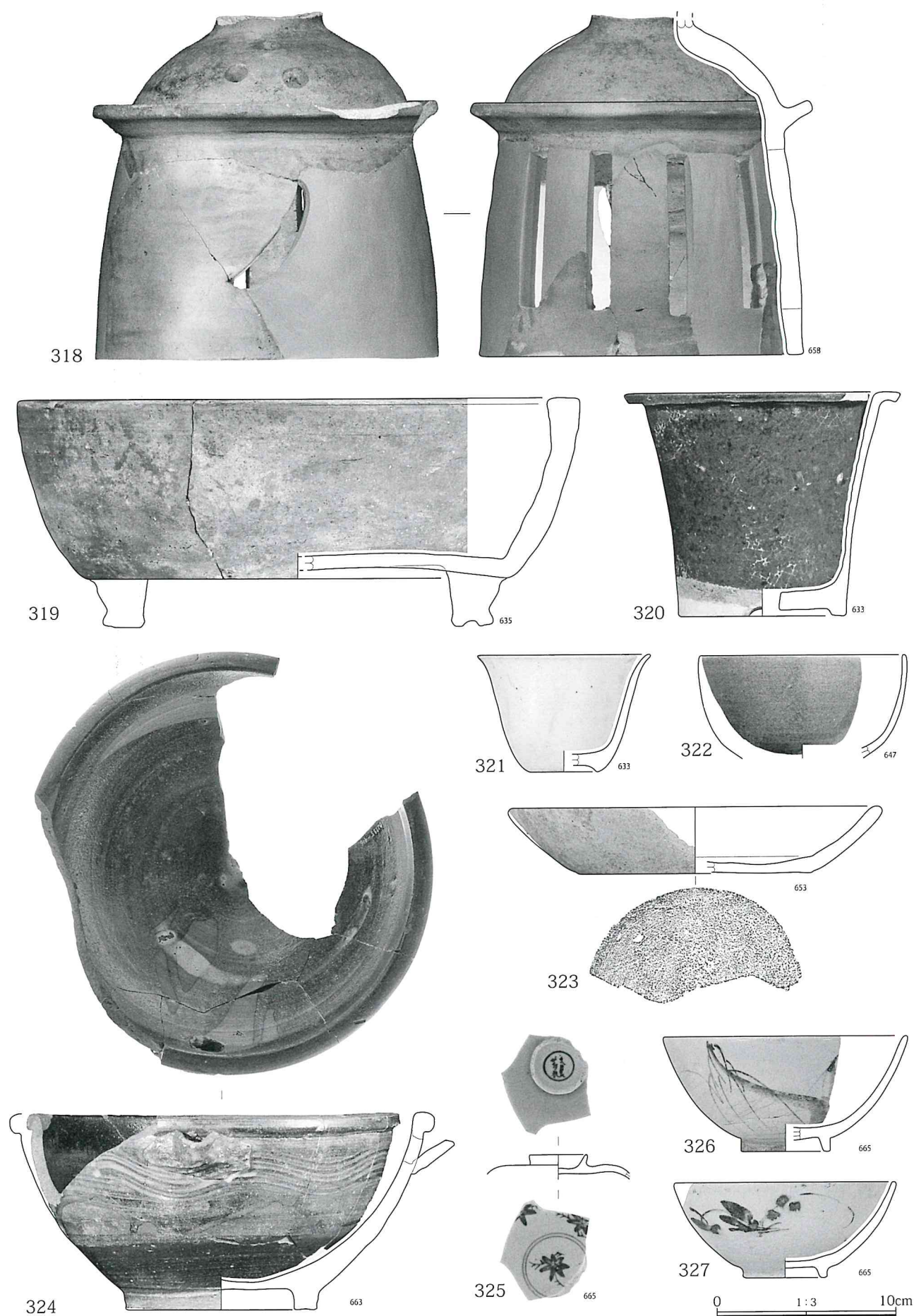
第 32 図 出土陶磁器類 (19)



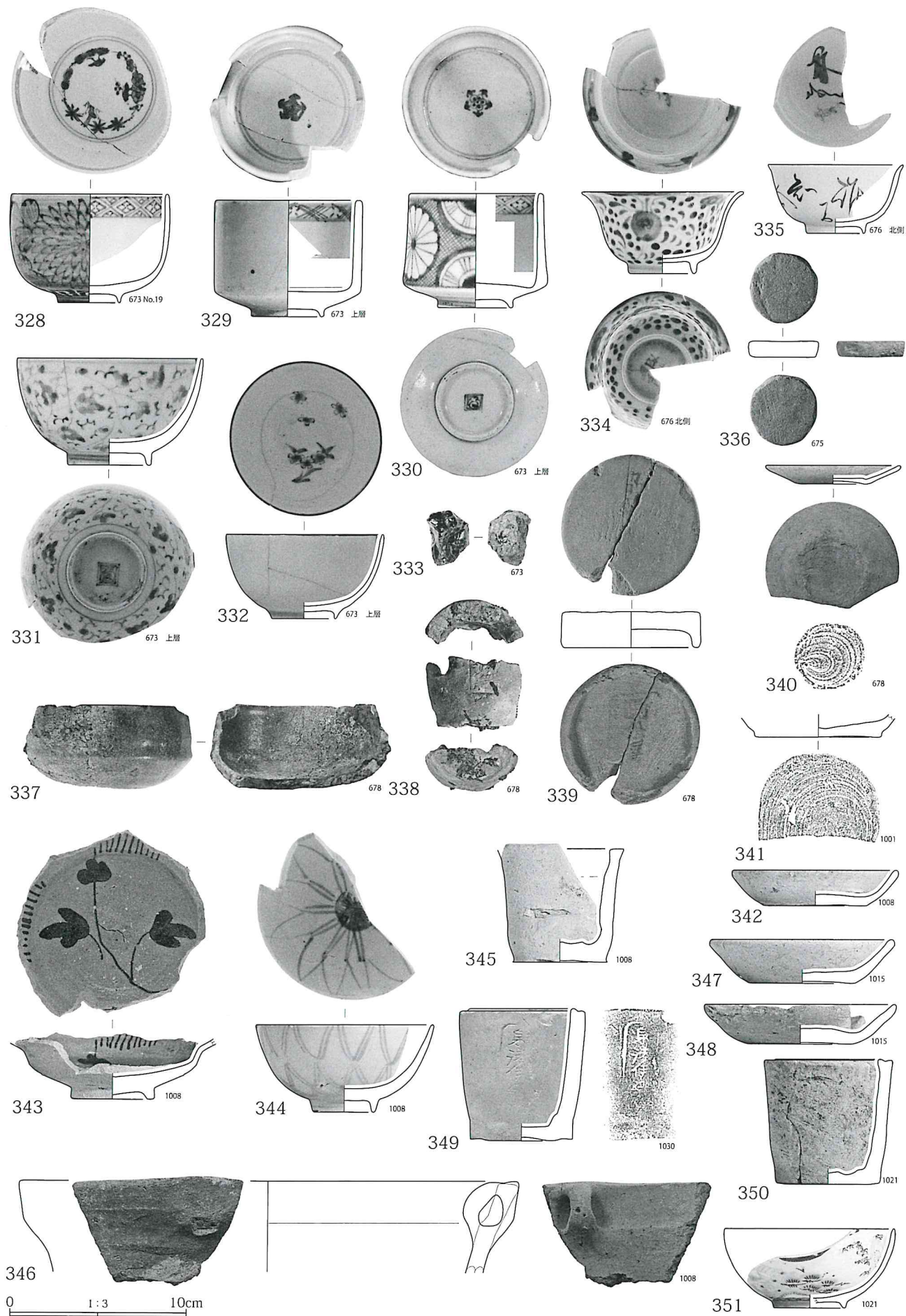
第 33 図 出土陶磁器類 (20)



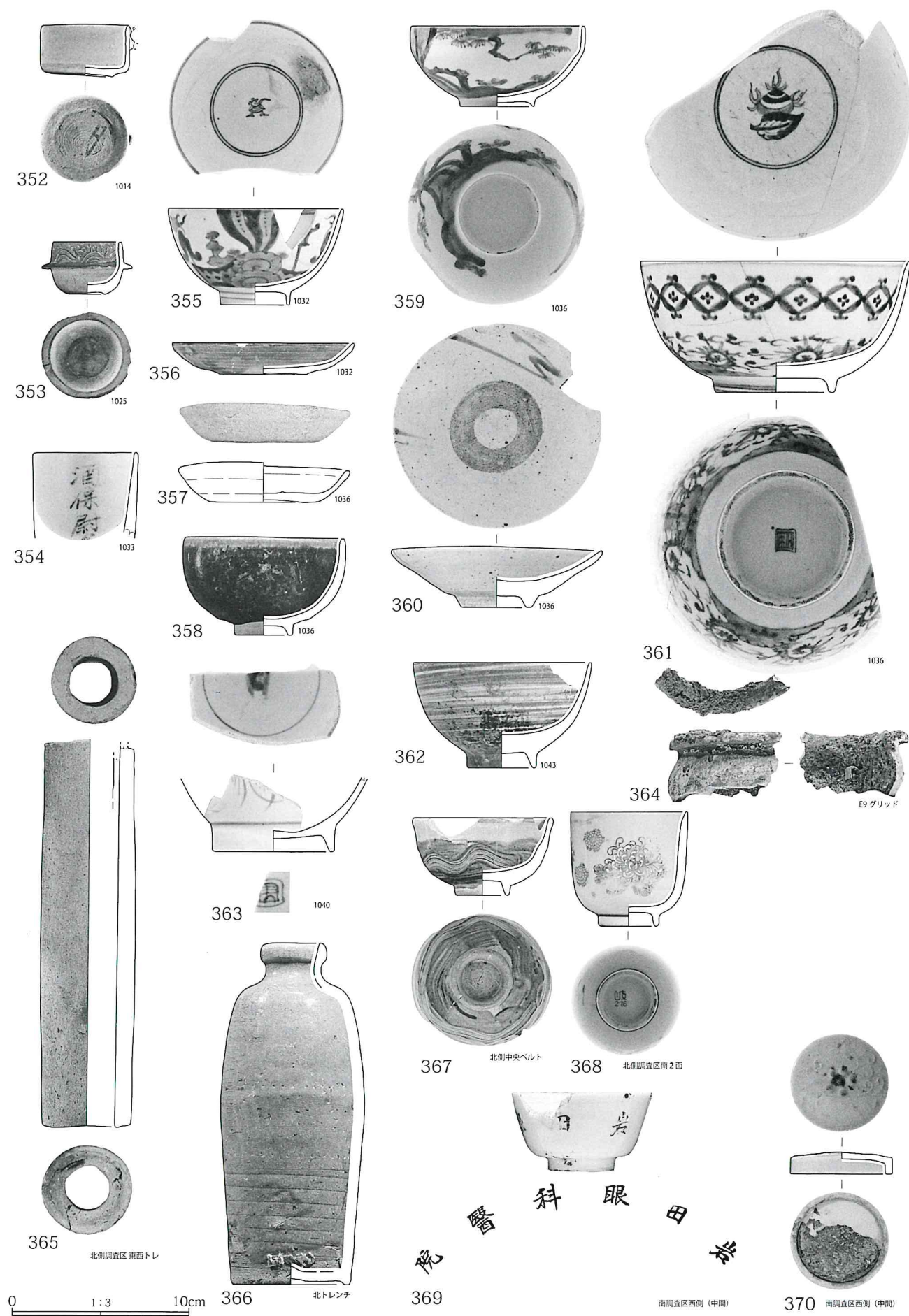
第 34 図 出土陶磁器類 (21)



第 35 図 出土陶磁器類 (22)



第 36 图 出土陶磁器類 (23)



第37図 出土陶磁器類 (24)

第12表 遺物観察表(1)

No.	出土位置	種別	器種	法量cm			胎土	焼成	色調	器形・成・整形、文様等の特徴	遺存状況	備考
				() : 推定 [] : 遺存	口径	底径						
1	002	磁器	薄手酒杯	口径 5.8	底径 2.2	器高 2.4	緻密	良	白色	卵殻手、ロクロ成形、透明釉・呉須・上絵付(青)、見込梅樹文、高台外面露歯状文、高台内路	ほぼ完形	瀬戸・美濃系、19c 前葉・19c 末葉か、二次焼成
2	002	陶器	蓋	口径 5.0	底径 13.8	器高 3.0	緻密	良	黄白色	ロクロ成形、灰釉、外面陰刻文様・丸に「うなぎ片」	ほぼ完形	益子か
3	002 掘方	陶器	小坏	口径 5.0	底径 2.6	器高 2.9	密	良	灰白色	ロクロ成形、灰釉	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、転用取柄
4	002	拓器	急須	口径 5.6	底径 6.0	器高 5.8	緻密	良	赤褐色	急須(TI-16)、木型打込み成形・注口・把手貼付、部分的に灰釉、外面陽刻地文縦位縮み文・鳥文、底部方角内「萬古」刻印	ほぼ完形	万古系、19c 前葉以降
5	002	石製品	砥石	長さ [15.7]	幅 [6.8]	厚さ 0.9	—	—	—	粘板岩・良質(京都産か)	破片	
6	003	磁器	薄手酒杯	口径 1	底径 2.9	器高 2.7	緻密	良	白色	卵殻手、ロクロ成形、透明釉・呉須・上絵付(青)、見込文字文、高台外面露歯状文、高台内路	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、19c 前葉
7	003 下層	磁器	薄手酒杯	(6.4)	口径 2.8	器高 3.1	緻密	良	白色	卵殻手、ロクロ成形、透明釉・人工呉須・上絵付(金)、見込文字「高砂」、高台外面露歯状文、高台内路	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、明治以降
8	003 南	磁器	小碗	(8.0)	口径 2.8	器高 4.8	緻密	良	白色	ロクロ成形、透明釉・人工呉須、外面茶花文・文字「茶園」、高台内一重園線内文字「高砂 電話三九一」	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、明治以降
9	004	ガラス製品	小瓶	口径 2.2	底径 4.0	器高 15.0	—	—	透明	牛乳瓶、前後型合せ、前面エンボス「豊岡 小林養牛園」、裏面「全乳 五ヶ野 群馬縣牛乳同業組合」	完形	
10	004	瓦	軒桟瓦	長さ [7.7]	幅 28.4	—	密	良	暗灰色	瓦当面判読不明刻印	1/2	
11	004	瓦	鬼瓦	長さ 31.0	幅 [31.3]	—	密	良	暗灰色	カエズ一文字瓦、板取り成形、瓦当面屋号「山七」、裏面把手	3/4	
12	004	瓦	鬼瓦	長さ [13.5]	幅 [26.7]	—	密	良	暗灰色	足付鬼足か	1/3	
13	004	瓦	鬼瓦	長さ [14.1]	幅 [20.2]	—	密	良	暗灰色	マタギ鬼瓦か、裏面未貫通穿孔(2)	2/3	
14	004	瓦	鬼瓦	長さ [18.4]	幅 [18.0]	—	密	良	暗灰色	マタギ鬼瓦、裏面把手	1/2	
15	006	陶器	中瓶	口径 2.6	底径 8.8	器高 22.2	密	良	灰黄色	ロクロ成形、灰釉・人工呉須、表面「村松酒店」、裏面屋号	完形	製作地不明
16	008	陶器	中瓶	口径 1	底径 8.0	器高 [22.0]	密	良	褐色	欄徳利(TC-4)、ロクロ成形、灰釉・白泥、刷毛目	胴部～底部	瀬戸・美濃系、19c 以降
17	008 西側	陶器	仏飯器	口径 8.0	底径 4.4	器高 4.6	緻密	良	灰白色	仏飯器、ロクロ成形、口縁玉縁状、灰釉、底部系切	口縁部～底部	地方窯か
18	008	石製品	砥石	長さ [6.0]	幅 [4.0]	厚さ 4.1	—	—	—	流紋岩・砥沢砥か	端部	
19	011 周辺	陶器	小壺	(6.2)	口径 1	器高 [5.5]	密	良	白灰色	ロクロ成形、鉄釉	口縁部～胴部	瀬戸・美濃系、増嶋転用
20	011 No.12	磁器	合子(蓋・身)	口径 6.2	底径 3.2	器高 4.2	密	良	白色	煉陶磨容器、型作り成形、透明釉・呉須、蓋上面「煉陶磨」、底部楕円内線内「地印煉陶磨 ■■■製造元 發賣 花王石炭本舗 東京馬喰町二丁目 長瀬富郎」	蓋 2/3、身完形	瀬戸、1893 年 4 月発売
21	056	磁器	小碗	口径 7.4	底径 3.2	器高 4.8	緻密	良	白色	半筒形、ロクロ成形、透明釉・人工呉須、外面系・撥・鈴の中に「■市 菊町四 ■号 ■三味線店」、高台内一重園線	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、石塚三味線店
22	056	磁器	小碗	(7.4)	(3.2)	器高 4.8	緻密	良	白色	半筒形、ロクロ成形、透明釉・人工呉須、外面系・撥・鈴の中に「高崎市 菊町四 金鈴号 石塚三味線店」、高台内一重園線	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
23	057 下層	磁器	小瓶	口径 1	底径 (6.8)	器高 [3.3]	緻密	良	白灰色	ロクロ成形、透明釉・呉須、外面草花文、高台内路「大明■■■」	高台部	肥前系、転用増嶋
24	057	陶器	中壺	口径 1	底径 3.6	器高 [2.6]	密	良	黄灰色	ロクロ成形、灰釉、高台内判読不明黒書	胴部～底部	瀬戸・美濃系
25	057	陶器	小壺	口径 1	底径 3.4	器高 [4.6]	緻密	良	黄白色	端反碗(TC-1-z)、ロクロ成形、灰釉・緑釉、疊付漆付着	胴部～底部	瀬戸・美濃系、17c 末葉以降
26	019	土器	火酒壺	(17.8)	口径 17.0	器高 20.9	密	良	褐色	輪積成形、側面把手(1)、土師質	口縁部～底部	在地系か、内面煤付着
27	018	陶器	小壺	(6.2)	口径 8.0	器高 11.7	密	良	灰褐色	ロクロ成形、鉄釉・灰釉流し	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、二次焼成
28	021	陶器	浅瓶	口径 1	底径 10.8	器高 [16.8]	密	良	灰褐色	上部紐手、ロクロ・上下貼合せ、灰釉	摘み部～底部	製作地不明、二次焼成、底部煤付着、020・022 と接合
29	076 No.1	陶器	描鉢	口径 31.0	底径 11.6	器高 13.3	密	良	白黄色	ロクロ成形、鉄釉、底部系切	完形	瀬戸・美濃系、一括と接合
30	076	磁器	大碗	口径 12.2	底径 4.2	器高 6.8	緻密	良	白色	ロクロ成形、透明釉・呉須、口縁内面雷文、見込二重園線内麒麟文、外面草花文、焼痕、高台内焼痕印(青)「ト十五」	口縁部～底部	肥前系、19c 前葉以降
31	125	磁器	植木鉢	口径 21.6	底径 11.0	器高 8.1	密	良	白灰色	ロクロ成形・付三足、透明釉・人工呉須、口唇部花唐草文、外面草花文	完形	肥前系、明治以降
32	113	陶器	土瓶	口径 8.0	底径 7.4	器高 11.3	密	良	灰白色	ロクロ成形・注口・把手貼付(欠損)、鉄釉・灰釉流し、底部判読不明黒書	口縁部～底部	製作地不明
33	182	磁器	小碗	(9.2)	口径 4.8	器高 7.9	緻密	良	白色	ロクロ成形・面取り、鉄釉・透明釉・呉須、内面風景文、高台内方角銘・焼痕印、焼痕	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、183 と接合
34	201 西トレ	磁器	小瓶	口径 1.8	底径 2.6	器高 6.2	緻密	良	白灰色	神酒徳利、ロクロ成形、透明釉・人工呉須、笹文・梅花文、底部系切・黒書「ホ」	完形	製作地不明、胎土は瀬戸・美濃系に類似、明治以降
35	201	磁器	小瓶	口径 1.6	底径 2.8	器高 6.2	緻密	良	白灰色	神酒徳利、ロクロ成形、透明釉・呉須梅花文、底部系切、底部黒書「四月十四日」	完形	製作地不明、胎土は瀬戸・美濃系に類似、明治以降
36	201	磁器	小瓶	口径 1.8	底径 3.0	器高 6.1	緻密	良	灰白色	神酒徳利、ロクロ成形、透明釉・呉須、笹文・梅花文、底部系切、底部判読不明黒書	ほぼ完形	製作地不明、胎土は瀬戸・美濃系に類似、明治以降
37	201 西壁 SC	磁器	小瓶	口径 1.8	底径 2.7	器高 6.1	緻密	良	白灰色	神酒徳利、ロクロ成形、透明釉・人工呉須、笹文・梅花文、底部系切・黒書「ホ」	完形	製作地不明、胎土は瀬戸・美濃系に類似、明治以降
38	201 西壁 SC	磁器	小瓶	口径 1	底径 2.8	器高 [5.2]	緻密	良	白色	神酒徳利、ロクロ成形、透明釉・人工呉須、笹文・梅花文、底部系切、底部黒書「☆大」	胴部～底部	製作地不明、胎土は瀬戸・美濃系に類似、明治以降
39	201 西壁 SC	磁器	小瓶	口径 1	底径 2.9	器高 [5.3]	緻密	良	灰白色	神酒徳利、ロクロ成形、透明釉・呉須、笹文・梅花文、底部系切・黒書「モ」	ほぼ完形	製作地不明、胎土は瀬戸・美濃系に類似、明治以降
40	217	磁器	小瓶	口径 2.0	底径 2.4	器高 6.4	緻密	良	白色	神酒徳利、ロクロ成形、透明釉・人工呉須、梅花文、底部系切、底部黒書	完形	製作地不明、胎土は瀬戸・美濃系に類似、明治以降
41	434	磁器	小瓶	口径 1.2	底径 2.8	器高 6.0	緻密	良	白灰色	神酒徳利、ロクロ成形、透明釉・呉須、笹文・梅花文、底部系切、底部黒書	完形	製作地不明、胎土は瀬戸・美濃系に類似、明治以降
42	201	陶器	蓋	口径 1	底径 (18.0)	器高 [3.5]	密	良	灰褐色	行平鍋蓋、ロクロ成形、灰釉	天井部～口縁部	製作地不明、589 上層と接合
43	201	磁器	急須	口径 4.4	底径 4.8	器高 6.8	緻密	良	白色	急須(TI-16)、木型打込成形・注口・把手貼付、灰釉・上絵付(緑・黄・桃・金)、外面草花文・鳥文・刻印「日本萬古」	完形	万古系、19c 前葉以降
44	201	陶器	香炉か	口径 1	底径 1	器高 [6.0]	密	良	灰褐色	ロクロ成形、灰釉、胴部印刻文字	胴部	製作地不明
45	201	陶器	戸車	口径 9.0	底径 孔径 1.9	器高 2.0	密	良	白黄色	ロクロ成形、無釉	完形	製作地不明
46	201 33 層	磁器	小坏	口径 6.0	底径 2.4	器高 2.7	緻密	良	白灰色	ロクロ成形、透明釉・上絵付(黒)、「イカホランセンノモト」「上木様」	完形	製作地不明、明治以降
47	201 西トレ	磁器	小坏	口径 4.6	底径 3.4	器高 5.6	緻密	良	白色	ロクロ成形、透明釉・呉須、外面風景文、高台内判読不明路	ほぼ完形	製作地不明、明治以降
48	201	磁器	急須	口径 5.6	底径 6.9	器高 8.7	緻密	良	白色	ロクロ成形・注口・把手貼付、透明釉・呉須、外面風景文、全面黒色付着物	ほぼ完形	肥前系か

第13表 遺物観察表(2)

No.	出土位置	種別	器種	法量cm			胎土	焼成	色調	器形・成・整形・文様等の特徴	遺存状況	備考
				〔 〕：推定 []：遺存								
				口径	底径	器高						
49	201	磁器	小碗	(9.2)	—	[3.9]	緻密	良	白色	端反碗 (JB-1-n)、ロクロ成形、透明釉・上絵付 (赤・黄)、外面区画草花文	口縁部～胴部	肥前系、1910以降、294と接合
50	201 西トレ	陶器	小坏	6.2	2.8	3.7	密	良	灰色	端反形、ロクロ成形、灰釉・鉄絵、見込走り駒文	口縁部～底部	大堀相馬系
51	201 西トレ	陶器	餌猪口	4.2	3.2	2.6	密	良	灰黄色	餌猪口 (TC-30)、ロクロ成形・環境摘み貼付、灰釉、底部糸切・判読不明墨書	完形	瀬戸・美濃系
52	201 南側	陶器	土瓶	—	(7.0)	[2.0]	緻密	良	灰色	ロクロ成形・付三足 (1)、白泥・灰釉、底部墨書「ウチミ」	胴部～底部	製作地不明
53	201 池北側	磁器	大碗	14.8	5.4	7.0	緻密	良	白色	ロクロ成形、透明釉・呉須、口縁内面四方譚文、見込二重園縁内松竹梅繫ぎ文、外面丸文・進弁文、焼継、高台内焼継印	口縁部～底部	肥前系、1790以降
54	201 池北側	磁器	火入	11.0	10.4	8.4	緻密	良	白色	ロクロ成形、青磁釉、外面陰刻篋文、底部判読不明墨書	ほぼ完形	肥前系
55	201 南側	陶器	植木鉢	(12.8)	6.2	7.1	密	良	灰黄色	ロクロ成形、灰釉、高台内判読不明墨書	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
56	201 西トレ	土器	筆置か	長さ [6.3]	幅 [6.3]	—	密	良	暗褐色	手握ね成形、鉛透明釉か、底部墨書「天保六」	端部欠損	製作地不明、二次焼成
57	201 西トレ	石製品	石版	長さ [16.5]	幅 [23.9]	厚さ 0.8	—	—	黒色	長方形、黒色頁岩製、刻書「町」「敵」「十」「歩」「日本宿国」「安田良造」	3/4	
58	203	石製品	硯	長さ 9.9	幅 4.2	厚さ 1.3	—	—	—	二面横磨、頁岩	完形	
59	214	石製品	砥石	長さ [4.5]	幅 5.4	厚さ 1.5	—	—	—	粘板岩・合わせ砥	欠損あり	鋳型転用か
60	214	石器	打製石斧	長さ [5.9]	幅 4.6	厚さ 2.0	—	—	—	ホルンフェルス？、撥形、刃部破片、表面は自然面を残す	1/3	
61	214	石製品	火打石	長さ 2.8	幅 1.8	—	—	—	—	石英	完形	
62	214	磁器	中碗	(10.0)	3.4	4.6	緻密	良	白色	半球碗 (JB-1-f)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面花唐草文	口縁部～底部	肥前系、17c 末葉 -18c 中葉
63	214	磁器	中碗	(9.8)	4.0	5.3	緻密	良	白灰色	くらわんか手 (JB-1-y)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面当輪草花文、高台内「大明年製」煎じ銘	口縁部～底部	肥前系 (波佐見)、18c 初頭 -後葉
64	214	陶器	小鉢	(12.0)	4.0	4.9	緻密	良	灰褐色	京焼陶器 (TB-1-b)、ロクロ成形、灰釉・鉄絵、見込楼閣山水文	口縁部～底部	肥前系、17c 後葉 -18c 中葉
65	214	陶器	搦鉢	(10.4)	4.0	5.0	緻密	良	橙褐色	ロクロ成形、灰釉・鉄釉、外面左右拵分け、内面5本1単位の摺目、高台基底部	口縁部～底部	製作地不明
66	214	陶器	中瓶	—	6.8	[19.2]	緻密	良	灰黄色	二合半灰釉徳利 (TC-10-a)、ロクロ成形、底部釉拭い取り、ヘラ書き「万」	頸部～底部	瀬戸・美濃系、18c 初頭 -中葉
67	215	磁器	薄手酒杯	(6.0)	2.8	2.4	緻密	良	白色	卵殻手、ロクロ成形、透明釉・呉須・上絵付 (青)、見込文様、高台外面趾間状文、高台内銘	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、19c 前葉
68	206	土器	焼塩壺	—	—	[5.7]	やや粗	良	橙褐色	板作り成形 (DZ-51-ag)、刻印「泉川■■■」	口縁部～胴部	泉州系、17c 後葉 -18c 前葉、内外面煤付着
69	202	陶器	香炉	(8.0)	5.4	5.6	密	良	灰黄色	ロクロ成形・付三足、外面鉄釉・灰釉散し、底部中央に焼成後穿孔 (1)	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
70	217	ガラス製品	小瓶	4.0	5.0	14.0	—	—	透明	牛乳瓶、前後型合せ、表印刷 (朱)「村岡牛乳 高崎市新後閑町 TEL2354」、裏印刷屋号、底部エンボス「市乳 180cc」	完形	1871以降
71	217	土器	鍋	(12.2)	5.4	4.6	密	良	褐灰色	行平鍋 (DZ-42)、ロクロ成形・把手貼付 (欠損)	口縁部～底部	江戸在地系か、全面煤付着
72	217	陶器	餌猪口	(4.6)	(3.6)	2.7	密	良	灰黄色	餌猪口 (TC-30)、ロクロ成形、灰釉、底部糸切	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
73	217	陶器	小鉢	(12.6)	(11.2)	4.8	緻密	良	白灰色	桶形、ロクロ成形、緑釉	口縁部～底部	淡路系、19c 前葉以降
74	217	陶器	小瓶	2.6	5.6	14.6	緻密	良	白黄色	燗徳利、ロクロ成形、灰釉・上絵付 (赤・黄・茶)、外面草花文・文字「耕家商店」	ほぼ完形	京・信濃系、明治以降
75	217	磁器	小瓶	長さ 4.6	幅 2.3	—	緻密	良	白色	醤油容器、型作り成形、透明釉・人工呉須、崎岡軒ひょうちゃん	完形	瀬戸、1955以降
76	217	磁器	小碗	8.0	3.0	4.9	緻密	良	白色	統制陶器、ロクロ成形、透明釉・人工呉須、外面風景文・亀甲文・草花文・進弁文、高台内統制番号「岐311」	ほぼ完形	美濃系、1940-1945
77	217	磁器	急須 (蓋・身)	6.8	6.4	11.2	緻密	良	白色	ロクロ成形・注口・耳・摘み貼付、透明釉・呉須、外面花文、高台内「川惣陶器」銘	ほぼ完形	瀬戸、1875以降
78	217	陶器	急須 (蓋・身)	5.0	5.0	8.8	緻密	良	白灰色	急須 (TI-16)、木型打込成形・注口・把手・摘み貼付、灰釉・鉄釉・上絵付 (緑・黄・桃)、外面草花文	口縁部～底部	万古系、19c 前葉以降
79	217	磁器	小碗	7.5	2.8	5.2	緻密	良	白色	ロクロ成形、透明釉・呉須・鉄絵、外面蔓草文・「電四五番 柴山商店 冷蔵部」	ほぼ完形	瀬戸・美濃系、明治以降
80	217	磁器	小皿	9.0	5.0	2.1	緻密	良	白色	ロクロ成形、透明釉・上絵付 (赤)、見込「丸新 電話一九二五番」	口縁部～底部	瀬戸・美濃系か、明治以降
81	217	磁器	小碗	7.4	3.3	5.4	緻密	良	白色	ロクロ成形、透明釉・呉須・緑釉、外面花文、高台内「川惣陶器」銘	ほぼ完形	瀬戸、1875以降
82	217	陶器	ティー カップ	7.8	3.6	6.3	緻密	良	白色	ロクロ成形・把手貼付、透明釉・上絵付 (金)、口縁口鎖、外面風景文、高台内「高崎硬質陶器、MEIGI TOKI MARU」	口縁部～底部	製作地不明、明治以降
83	205	磁器	五寸皿	16.3	10.0	3.1	緻密	良	白色	高台断面シャープなU字形 (JB-2-e)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面唐草繫ぎ文、内面型押し波濤文・花文・矢羽文、見込二重園縁内コンヤク印判五弁花、高台内一重園縁「大明年製」銘・ハリ支え (3)	口縁部～底部	肥前系、17c 後葉以降、519と接合
84	205	磁器	五寸皿	14.0	7.6	3.4	緻密	良	白色	輪花皿 (JB-2-o)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面唐草繫ぎ文、内面花唐草文、見込二重園縁内手書き五弁花、高台内一重園縁「大明成化年製」銘・ハリ支え (1)	ほぼ完形	肥前系、17c 後葉以降
85	205	磁器	蓋物蓋	—	16.6	[4.7]	緻密	良	灰白色	ロクロ成形・摘み貼付、透明釉・呉須、外面花唐草文	胴部～裾部	肥前系、18c 以降、86とセット
86	205	磁器	蓋物	18.0	9.8	8.3	緻密	良	灰白色	丸型碗 (JB-13-a)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面花唐草文、高台内一重園縁	口縁部～底部	肥前系、18c 以降、85とセット
87	205	磁器	中碗	10.6	4.2	6.3	緻密	良	白色	高台断面シャープU字状 (JB-1-e)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面花唐草文・窓松梅樹文、口縁内面四方譚文、見込二重件箱内手書き五弁花、高台内二重方角「満福」銘	口縁部～底部	肥前系、18c 前葉 -19c 前葉
88	205	磁器	中碗蓋	摘み径 3.4	9.2	3.1	緻密	良	白灰色	丸碗蓋 (JB-00-a)、ロクロ成形、透明釉・呉須、摘み内二重方角「満福」、外面花唐草文・窓松梅樹文、天井部二重園縁内手書き五弁花、裾部内面四方譚文	摘み部～裾部	肥前系、18c 前葉 -19c 初頭
89	205	磁器	猪口	(7.0)	4.6	5.8	緻密	良	白色	底部輪高台状 (JB-7-b)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面花唐草文・コンヤク印判菊文・亀甲繫ぎ文、口縁内面四方譚文、高台内一重園縁「大明成化年製」銘	口縁部～底部	肥前系、18c 前葉 -19c 初頭
90	205	磁器	小坏	5.4	2.4	3.9	緻密	良	白色	端反形、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面氷裂文、高台内二重方角「満福」銘	口縁部～底部	肥前系
91	205	磁器	小皿	10.3	5.9	3.0	緻密	良	白色	輪花皿、ロクロ・型打成形、白磁釉、内面陽刻菊文	ほぼ完形	肥前系、17c 後葉 -18c
92	211	磁器	中皿	(21.4)	13.0	3.0	緻密	良	白色	輪花形、高台断面シャープなU字形 (JB-2-d)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面唐草繫ぎ文、内面草花文・鳥文、高台内一重園縁二重方角内「福」銘・ハリ支え (3)	口縁部～底部	肥前系、17c 後葉以降
93	224	陶器	中碗	—	(7.4)	[5.6]	密	良	灰色	拳竹碗 (TC-1-p)、ロクロ成形、鉄釉	胴部～底部	瀬戸・美濃系、18c 後葉 -19c 前葉、堀場転用
94	225	磁器	小坏	5.4	2.2	3.1	緻密	良	白色	ロクロ成形、透明釉・上絵付 (赤・金・緑)、見込旭日旗・歩十五記念、高台内「松永」銘	口縁部～底部	肥前系

第14表 遺物観察表(3)

No.	出土位置	種別	器種	法量cm			胎土	焼成	色調	器形・成・整形、文様等の特徴	遺存状況	備考
				() : 推定 [] : 遺存								
				口径	底径	器高						
95	227	陶器	創猪口	4.4	4.0	2.5	密	良	灰黄色	創猪口 (TC-30)、ロクロ成形・環境揃み貼付、灰釉、底部系切、底部判読不明黒書	完形	瀬戸・美濃系
96	227	陶器	土瓶	9.4	10.0	[13.5]	密	良	灰褐色	しのぎ鉄釉土瓶 (TZ-34-f)、ロクロ成形・注口・耳貼付・付三足、鉄釉・灰釉流し、底部漆付着	口縁部～底部	製作地不明
97	227	陶器	土瓶	(11.4)	10.4	14.7	密	良	褐色	三彩土瓶 (TZ-34-c)、ロクロ成形、注口・耳貼付、灰釉、風景文 (呉須・鉄釉・緑釉)	口縁部～底部	製作地不明、19c 中葉以降、294・005・227・305・345 と接合
98	227	陶器	乗燭	5.4	4.8	14.8	密	良	灰色	ロクロ成形・把手貼付・上下貼合せ、鉄釉	ほぼ完形	肥前系、二次焼成
99	227	陶器	香炉	—	—	[13.5]	密	良	黄灰色	家形、板作り成形、透明釉・緑釉・鉄釉	屋根部・壁部	製作地不明、内面煤付着
100	227	陶器	掃鉢	—	—	[7.0]	密	良	黄白色	ロクロ成形、鉄釉、内面内に「大」刻印	破片	瀬戸・美濃系
101	227	石製品	薬研	長さ [7.1]	幅 [7.4]	厚さ 2.1	—	—	赤褐色	薬研車	破片	
102	232	土器	焼塩壺	(6.0)	6.0	9.1	密	良	褐色	板作り成形 (DZ-51-f)、刻印「泉川麻玉」	口縁部～底部	泉州系、18c 前葉・中葉
103	232	土器	カワラケ	(7.8)	4.0	1.7	密	良	褐色	カワラケ (DZ-2b)、ロクロ成形、底部系切・黒書「小」	口縁部～底部	江戸在地系、17c 中葉以降
104	232	土器	カワラケ	(8.6)	4.4	1.5	密	良	褐色	カワラケ (DZ-2b)、ロクロ成形、底部系切	口縁部～底部	江戸在地系、17c 中葉以降
105	232	土器	カワラケ	(8.6)	5.4	2.1	やや粗	良	灰褐色	ロクロ成形、底部系切	口縁部～底部	在地系
106	232	土器	カワラケ	9.0	5.0	1.8	やや粗	良	灰褐色	ロクロ成形、底部系切	口縁部～底部	在地系
107	232	土器	カワラケ	(16.8)	10.5	3.3	密	良	褐色	カワラケ (DZ-2b)、ロクロ成形、底部系切、腹衣皿か	口縁部～底部	江戸在地系、17c 中葉以降
108	232	陶器	中碗	(11.2)	4.8	7.5	密	良	灰白色	脊背碗 (TC-1-p)、ロクロ成形、灰釉・鉄釉、高台刻印「古山」	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、18c 後葉・19c 前葉、243No.2 と接合
109	232	磁器	中碗	9.8	4.0	5.6	緻密	良	白灰色	半球碗 (JB1-f)、ロクロ成形、透明釉・青磁釉・呉須、口縁口跡、内面花文、見込二重線内手描五弁花、高台内「大明年製」銘、内面漆付着	ほぼ完形	肥前系、17c 末葉・18c 中葉
110	233	陶器	中碗	(12.8)	5.0	7.1	密	良	灰黄色	灰釉丸碗 (TC-1-c)、ロクロ成形、灰釉	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、17c 前葉・19c 前葉
111	241	陶器	中碗	(9.4)	4.0	5.5	密	良	灰黄色	せんじ碗 (TD-1-f)、ロクロ成形、灰釉・鉄絵、見込目跡 (3)	口縁部～底部	京・信楽系、18c 前葉・19c 前葉
112	241	陶器	小皿	(8.2)	(5.6)	1.9	緻密	良	白灰色	変形皿、ロクロ・型打成形、灰釉・鉄絵	口縁部～底部	製作地不明
113	244	陶器	小鉢	(13.6)	7.0	4.6	密	良	灰褐色	ロクロ成形、灰釉、見込陰刻梅花文・目跡 (2)、畳付目跡 (2)	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
114	244	陶器	中瓶	—	6.8	[16.0]	密	良	灰褐色	志野織部、ロクロ成形、灰釉・鉄絵、草文	頸部～底部	瀬戸・美濃系、17c 初頭・前葉
115	244	陶器	大鉢	(31.6)	(12.6)	9.9	緻密	良	橙褐色	刷毛目鉢 (TB-5-a)、ロクロ成形、灰釉・白泥・鉄釉流し、刷毛目文、見込目跡 (2)、畳付目跡 (3)	口縁部～底部	肥前系、17c 後葉・18c 初頭
116	244-4	陶器	中甕	—	(14.8)	[6.0]	緻密	良	褐色	四耳壺か、ロクロ成形、鉄釉、底面施書「祖傳」	胴部～底部	瀬戸か、No.20 と接合
117	244	磁器	五寸皿	(15.6)	7.6	4.6	緻密	良	白色	ロクロ成形・型打、内面陽刻牡丹文	口縁部～底部	肥前系、17c 後葉・18c
118	244-5	磁器	中碗	(12.0)	4.5	6.1	緻密	良	白灰色	高台断面三角 (JB-1-c)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面花文、高台内「宣徳年製」銘	口縁部～底部	肥前系、1650-17c 後葉
119	244-5	磁器	中碗	10.0	4.4	5.6	緻密	良	白色	高台断面シャープU字状 (JB-1-e)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面生垣文、高台内一重線内「大明成化年製」	口縁部～底部	肥前系、17c 末葉・18c 前葉
120	244-5	磁器	小皿	(10.2)	(6.4)	2.1	緻密	良	白灰色	変形皿、ロクロ・型打成形、透明釉・呉須、口縁口跡、外面コンニャク印草花文、内面型紙摺草花文・鳥文	口縁部～底部	肥前系、17c 後葉・18c 中葉
121	245	磁器	小皿	9.2	5.8	2.9	緻密	良	白灰色	輪花皿、ロクロ・型打成形、透明釉・呉須、外面草文、内面風景文	口縁部～底部	肥前系
122	248	土器	カワラケ	8.0	3.8	1.4	密	良	褐色	カワラケ (DZ-2b)、ロクロ成形、底部系切・黒書「中」	ほぼ完形	江戸在地系、17c 中葉以降
123	250	陶器	土瓶	—	10.4	[12.2]	密	良	灰白色	ロクロ成形・注口貼付、灰釉、底部目跡 (3)	胴部～底部	製作地不明、二次焼成
124	250	磁器	五寸皿	13.2	6.8	3.6	緻密	良	白灰色	ロクロ成形、透明釉・呉須、外面草摺ぎ文・内面松竹梅文・見込二重線内コンニャク印草花文、高台内「大明年製」前し銘	ほぼ完形	肥前系、18c 初頭・後葉、二次焼成、284-4 と接合
125	250	磁器	水差	(6.8)	7.0	[15.7]	緻密	良	白灰色	ロクロ成形・蔓状把手貼付、透明釉・呉須、外縁飾菊草文・雲龍文・注口付根刻菊文	把手～底部	肥前系
126	250	陶器	捏鉢	19.4	11.4	9.1	密	良	灰黄色	ロクロ成形、灰釉・緑釉散し、見込目跡 (3)、畳付幅広	ほぼ完形	瀬戸・美濃系、高台煤付着
127	252 No.1	土器	焼塩壺	6.0	6.0	8.4	密	良	橙褐色	板作り成形 (DZ-51-g)、刻印「泉漢■■」	ほぼ完形	泉州系、18c 前葉・後葉、全面煤付着、二次焼成
128	252	陶器	中碗	(12.0)	4.8	6.5	密	良	灰色	脊背碗 (TC-1-p)、ロクロ成形、鉄釉・灰釉、口縁外面灰釉・下半鉄釉・長石釉散し、内面灰釉	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、18c 後葉・19c 前葉
129	252	陶器	中瓶	—	7.4	[17.1]	緻密	良	暗褐色	べこかん徳利、底部部分割形刻印	頸部～底部	肥前系、18c 後葉以降、全体に煤付着
130	272	陶器	台付灯明受皿	4.3	4.4	7.6	緻密	良	褐色	ロクロ成形・油受け貼付、灰釉	完形	製作地不明
131	276	陶器	盃台	3.4	4.5	4.4	密	良	橙褐色	ロクロ成形、白泥・鉛透明釉	口縁部～底部	江戸在地系か、二次焼成
132	276	陶器	小碗	8.8	3.8	4.7	密	良	灰黄色	小杉碗 (TD-1-b)、ロクロ成形、灰釉・鉄絵、外面若松文	口縁部～底部	京・信楽系、18c 前葉・19c 前葉
133	278	陶器	灯明受皿	4.9	6.2	5.5	密	良	褐色	容器付、ロクロ成形、灰釉、底部系切	口縁部～底部	製作地不明、京・信楽系に類似
134	284-4	瓦	平瓦	長さ [5.2]	幅 [5.1]	厚さ 1.8	やや粗	良	灰色	円盤に転用	ほぼ完形	
135	284-4	陶器	香炉	11.6	8.4	8.4	密	良	灰白色	ロクロ成形、灰釉・上絵付 (赤・緑)、外面篋文、高台内判読不明黒書	口縁部～底部	京・信楽系、二次焼成、057・252・284-1 と接合
136	284-4	磁器	香炉	9.4	7.2	4.1	緻密	良	白灰色	ロクロ成形、青磁釉、底部蛇の目凹形高台	口縁部～底部	肥前系
137	284-4	磁器	灰吹	—	6.4	[6.3]	緻密	良	白灰色	ロクロ成形、青磁釉	胴部～底部	肥前系、057・284-3 と接合
138	284-1	陶器	乗燭	(10.6)	5.8	6.9	密	良	灰黄色	脚付乗燭 (TC-44-a)、ロクロ成形、鉄釉、底部系切	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
139	284-4	陶器	五寸皿	12.6	5.8	2.8	密	良	灰白色	灰釉丸皿 (TC-2-a)、ロクロ成形、灰釉	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、17c 初頭・18c 中葉、二次焼成
140	285	磁器	中碗	(10.0)	3.8	5.2	緻密	良	白灰色	くらわんか手 (JB-1-w)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面草花文、高台内「大明年製」前し銘	口縁部～底部	肥前系、18c 初頭・後葉
141	285	陶器	土瓶	(9.2)	9.0	10.5	緻密	良	灰色	ロクロ成形、注口・耳貼付、灰釉・鉄釉・呉須	口縁部～底部	製作地不明、底部煤付着
142	285	陶器	灯明皿	10.8	5.2	1.9	密	良	灰色	ロクロ成形、鉄釉、内外面重ね焼痕	口縁部～底部	志戸呂系、17c 末葉・18c 後葉
143	285	陶器	中碗	(10.0)	4.6	7.0	緻密	良	黒灰色	ロクロ成形、灰釉・白泥、畳付目跡	口縁部～底部	肥前系
144	285	陶器	中甕	(29.0)	18.4	31.3	密	良	灰色	輪植成形、外面鉄釉、内面灰釉、底部環状重ね焼痕	口縁部～底部	製作地不明、326・368・324-2 と接合

第15表 遺物観察表(4)

No.	出土位置	種別	器種	法量cm			胎土	焼成	色調	器形・成・整形・文様等の特徴	遺存状況	備考
				(口) : 推定 [口] : 遺存	口径	底径						
145	285	土製品	瓦灯(傘)か	長さ [12.9]	幅 28.0	奥行 23.0	密	良	橙褐色	家形、手握ね成形、屋根瓦黒色漆、底赤色漆、土師質	屋根部	在地系か
146	294	陶器	小瓶	—	6.2	[17.9]	密	良	灰色	細德利、ロクロ成形、灰釉・鉄釉流し、底部黒書「 ■ 町生野屋■ ■ 」	頸部～底部	地方窯か、19c以降
147	294	磁器	小碗	10.6	3.6	4.6	緻密	良	白色	ロクロ成形、透明釉・人工呉須、外面隈文・唐子文・内面外面隈文・唐子文・蓮弁文	口縁部～高台部	肥前系(三川内)、明治以降
148	294	磁器	蓋	摘み径 3.6	9.6	2.2	緻密	良	白色	小碗蓋、ロクロ成形、透明釉・人工呉須、摘み内一重隈線、内外面隈文・唐子文	摘み部～口縁部	肥前系(三川内)、JB-1-pに器形類似、明治以降
149	294	磁器	小皿	(10.8)	3.8	(3.0)	密	良	灰白色	ロクロ成形、透明釉・呉須、見込一重隈線内文字文、外面草花文、基筒底	口縁部～底部	中国、16c中葉
150	294	陶器	小鉢	(8.6)	5.6	4.0	密	良	褐灰色	ロクロ成形、灰釉、底部糸切・判読不明黒書	口縁部～底部	地方窯か
151	294	石製品	温石	長さ9.8	幅6.0	厚さ3.0	—	—	黄白色	長方形、穿孔(1)、外面灰白色	3/5	
152	294	陶器	植木鉢	(16.8)	8.6	12.0	密	良	白黄色	ロクロ成形・付三足、灰釉・人工呉須、口唇部・外面隈文、底部黒書「タロ」	口縁部～底部	製作地不明
153	294	磁器	植木鉢	(20.0)	17.6	7.3	緻密	良	赤褐色	ロクロ成形、付三足、底部判読不明黒書	口縁部～底部	肥前系か、明治以降
154	294	磁器	水差(蓋・身)	5.8	7.4	18.4	緻密	良	白色	ロクロ成形・注口・把手・摘み貼付、クロム青磁釉	ほぼ完形	瀬戸・美濃系か、明治以降
155	294	ガラス	小瓶	—	3.2	[8.5]	—	—	透明	前後型合せ、エンボス「高崎衛成病院」	頸部～底部	1888-1936
156	北トレンチ 2面	磁器	小瓶	1.8	2.5	6.2	緻密	良	白灰色	神酒徳利、ロクロ成形、透明釉・人工呉須、隈文・梅花文、底部糸切、底部黒書	完形	製作地不明、胎土は瀬戸・美濃系に類似、明治以降
157	南トレンチ	磁器	小瓶	1.7	2.8	6.2	緻密	良	白色	神酒徳利、ロクロ成形、透明釉・人工呉須、隈文・梅花文、底部糸切・判読不明黒書	ほぼ完形	製作地不明、胎土は瀬戸・美濃系に類似、明治以降
158	南トレンチ	磁器	小瓶	1.6	2.2	4.9	緻密	良	白色	神酒徳利、ロクロ成形、透明釉・人工呉須、隈文・梅花文、底部糸切・判読不明黒書	ほぼ完形	製作地不明、胎土は瀬戸・美濃系に類似、明治以降
159	南側調査区 トレンチ	磁器	小瓶	1.5	2.8	6.4	緻密	良	白灰色	神酒徳利、ロクロ成形、透明釉・呉須、隈文・梅花文、底部黒書「竜」	完形	肥前系か
160	302	陶器	変形皿	(14.6)	5.6	3.4	密	良	灰白色	木葉形、型打・付高台、灰釉	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
161	303下層	磁器	中碗	10.0	6.0	5.5	緻密	良	白灰色	統制陶器、ロクロ成形・把手貼付(欠損)、透明釉・人工呉須、外面草花、高台内「陶師」銘	ほぼ完形	美濃系か
162	303	ガラス	円盤状	(6.0)	—	—	—	—	濃緑色	型流し、上面エンボス蓮弁文・三つ巴文	1/2	
163	308	磁器	小碗	(9.6)	(5.0)	6.5	緻密	良	白灰色	朝顔形(JB-1-r)、ロクロ成形、透明釉・呉須、口縁内面蓮弁文、口縁外面隈文、外面雲龍文・蓮弁文	口縁部～底部	肥前系、19c前葉以降
164	312	磁器	小碗	7.0	3.2	6.8	緻密	良	灰白色	半筒碗(JB-1-j)、ロクロ成形、透明釉・呉須、見込一重隈線内雄な五弁花、外面竹文	完形	肥前系、18c前葉-19c初頭
165	312	磁器	仏花瓶	6.0	—	[10.5]	緻密	良	灰白色	仏花瓶(JB-22)、ロクロ成形・双耳貼付、青磁釉、耳環状	口縁部～底部	肥前系(波佐見)、17c後葉-18c中葉
166	314	土器	カワラケ	8.8	6.0	1.8	密	良	灰色	ロクロ成形、底部糸切	口縁部～底部	在地系、転用取鍋
167	314	磁器	仏飯器	6.4	3.8	5.5	緻密	良	白灰色	脚部の挟り浅く畳付外周面取り(TB-8-c)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面斜格子文	口縁部～底部	肥前系、18c後葉-19c中葉
168	314	磁器	小碗	7.6	4.2	6.5	緻密	良	白色	筒形碗(JB-1-j)、ロクロ成形、透明釉・呉須、口縁内面四方洋文、見込二重隈線内コンニャク印判五弁花、外面米裂文・菊花文、高台内銘	口縁部～底部	肥前系、18c中葉-19c初頭、No.1と接合
169	314	磁器	小坪	(6.8)	2.4	3.7	緻密	良	白灰色	端反形(JB-6-b)、ロクロ成形、透明釉	口縁部～底部	肥前系
170	314	磁器	小碗	9.0	4.4	4.4	緻密	良	白色	端反碗(JB-1-m)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面草花文・鳥文	口縁部～底部	肥前系、19c初頭以降
171	314	土器	羽口	長さ [8.9]	幅 5.2	孔径 3.2	密	良	灰褐色	板作り成形	片端部	
172	314	陶器	餌猪口	(3.8)	(3.4)	2.4	密	良	灰色	餌猪口(TC-30)、ロクロ成形・環境摘み欠損、灰釉、底部糸切	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、転用取鍋
173	314	陶器	餌猪口	(3.8)	(3.0)	2.1	密	良	灰色	餌猪口(TC-30)、ロクロ成形・環境摘み貼付、灰釉、底部糸切	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、転用取鍋
174	314	石製品	砥石	長さ [17.4]	幅 3.0	厚さ 2.7	—	—	—	名倉砥石・良質・県外搬入	端部欠損	
175	314	磁器	中鉢	15.6	9.2	7.6	緻密	良	白灰色	輪花形、ロクロ成形、青磁釉、蛇の目凹形高台	口縁部～底部	肥前系、18c中葉-19c前葉
176	314	陶器	中碗	10.0	5.8	6.2	密	良	灰黄色	広東碗(TC-1-j)、ロクロ成形、灰釉・呉須、見込一重隈線内花文、外面花文、太白手	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、18c末葉以降
177	321	陶器	小皿	10.6	4.6	2.6	密	良	灰褐色	灰釉丸皿(TC-2-q)、ロクロ成形、灰釉、基筒底	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、地方窯の可能性あり
178	318	陶器	小皿	6.8	3.8	1.3	密	良	灰褐色	灰釉丸皿(TC-2-q)、ロクロ成形、灰釉、基筒底	完形	瀬戸・美濃系、地方窯の可能性あり
179	322	瓦	軒丸瓦	長さ 11.6	幅 11.6	厚さ 3.5	密	良	灰色	板造り成形・木型打込み	瓦当部	
180	322	石製品	鋳型か	長さ3.0	幅 2.1	厚さ 0.5	—	—	—	粘板岩・木葉砥	3/4	
181	322	陶器	中碗	10.8	4.2	6.4	密	良	灰白色	拳骨碗(TC-1-p)、ロクロ成形、鉄釉・長石釉、漆継	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、18c後葉-19c前葉、No.3と接合
182	322	陶器	中碗	9.2	4.8	5.6	密	良	灰白色	腰銘碗(TC-1-u)、ロクロ成形、灰釉・鉄釉掛分け	ほぼ完形	瀬戸・美濃系、18c初頭-19c前葉
183	322	磁器	中碗	9.8	3.8	4.7	緻密	良	白灰色	半球碗(JB-1-f)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面松竹梅文、漆継	口縁部～底部	肥前系、17c末葉-18c中葉
184	322	磁器	中碗	11.8	4.6	6.4	緻密	良	白灰色	朝顔形(JB-1-r)、ロクロ成形、青磁釉・呉須、口縁内面四方洋文、内面二重隈線内手描き五弁花、底部二重方角「簡江」銘	口縁部～底部	肥前系、18c中葉・後葉
185	326	磁器	火入	8.6	7.6	7.7	緻密	良	白灰色	ロクロ成形、青磁釉・鉄釉、底部蛇の目凹形高台	口縁部～底部	肥前系、326-1と接合
186	330	土器	カワラケ	9.8	5.6	1.7	密	良	灰褐色	ロクロ成形、底部糸切	口縁部～底部	在地系、転用取鍋
187	330	陶器	小碗	(9.0)	3.2	4.7	密	良	灰褐色	せんじ碗(TD-1-j)、ロクロ成形、灰釉・上絵付(赤・緑)、外面草花文、見込目跡(3)	口縁部～底部	京・信楽系、18c前葉-19c前葉
188	330	陶器	小皿	(12.2)	7.0	2.9	密	良	灰褐色	灰釉掛絵皿(TC-2-a)、ロクロ成形、灰釉・鉄銑、内面梅樹文、漆継	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、18c初頭-19c中葉、二次焼成
189	330	陶器	香炉	(3.6)	4.6	5.0	密	良	灰黄色	鉄釉、灰釉掛分け(TC-9-e)、ロクロ成形、鉄釉・灰釉、外面龍位託髻・縦提鉤	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
190	330	磁器	仏飯器	(8.8)	4.2	6.1	緻密	良	白灰色	脚部の挟り浅く畳付外周面取り(TB-8-c)、ロクロ成形、透明釉	口縁部～底部	肥前系、18c後葉-19c中葉
191	330	土器	カワラケ	7.0	4.0	1.2	密	良	橙褐色	カワラケ(DZ-2b)、ロクロ成形、底部糸切・判読不明黒書	口縁部～底部	江戸在地系、17c中葉以降
192	330	磁器	中碗	(10.0)	(3.8)	5.7	緻密	良	白灰色	青磁染付(JB-1-j)、ロクロ成形、透明釉・青磁釉・呉須、口縁内面四方洋文、漆継	口縁部～底部	肥前系、18c中葉・後葉
193	330	磁器	中碗	(11.0)	5.0	6.9	緻密	良	灰白色	くらわんか手(JB-1-w)、ロクロ成形、透明釉・呉須、口縁外面渦巻文、外面風景文、漆継	口縁部～底部	肥前系、18c後葉
194	336	陶器	餌猪口	3.2	2.9	2.1	密	良	灰色	餌猪口(TC-30)、ロクロ成形・環境摘み貼付、灰釉、底部糸切	完形	瀬戸・美濃系、転用取鍋

第16表 遺物観察表(5)

No.	出土位置	種別	器種	法量cm			胎土	焼成	色調	器形・成・整形、文様等の特徴	遺存状況	備考
				() : 推定 [] : 遺存								
				口径	底径	器高						
195	339	陶器	中碗	—	4.6	[4.3]	緻密	良	灰褐色	ロクロ成形、灰釉	胴部～底部	京焼系か
196	339	磁器	五寸皿	12.8	4.6	3.3	緻密	良	灰白色	見込蛇の目軸割ぎ高台無釉薬 (JB-2-k)、ロクロ成形、青磁釉、内面環状重ね焼き痕、漆継	口縁部～底部	肥前系、17c 中葉 -18c
197	345 No.2	土器	羽口	長さ [11.5]	幅 [4.9]	—	やや粗	良	灰褐色	板作り成形、内面竹節痕	破片	外面煤付着
198	351	陶器	灯明受皿	7.2	4.8	2.8	緻密	良	灰色	灯明受皿 (TF-40)、ロクロ成形・油受け貼付、鉄釉	口縁部～底部	志戸呂系
199	351	陶器	香炉	9.0	6.4	8.1	密	良	褐色	香炉 (TD-9-a)、型作り成形、灰釉・上絵付 (緑)、外面菊花文・梅樹文、口唇部敲打痕	口縁部～底部	京・信楽系
200	351	陶器	小碗	(9.4)	3.4	5.0	密	良	灰褐色	せんじ碗 (TD-1-j)、ロクロ成形、灰釉・上絵付 (青・緑)、外面草花文、見込目跡 (3)、見込目跡上に花文の化粧掛け	口縁部～底部	京・信楽系、18c 前葉 -19c 前葉
201	351	磁器	中碗	9.8	4.0	5.2	緻密	良	白灰色	くらわんか手 (JB-1-v)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面雪輪草花文、高台内「大明年製」崩し銘	口縁部～底部	肥前系、18c 後葉
202	351	陶器	中鉢	(18.6)	5.8	6.8	密	良	灰褐色	輪割鉢 (TB-5-b)、ロクロ成形、灰釉・銅緑釉	口縁部～底部	肥前系、17c 中葉 -18c 前葉
203	351	磁器	中碗	10.2	4.5	6.6	緻密	良	灰褐色	陶胎染付 (TB-1-f)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面風景文	口縁部～底部	肥前系、18c 中葉
204	351	磁器	五寸皿	13.6	7.7	3.4	緻密	良	白色	高台断面シャープU字状 (JB-2-e)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面唐草繋ぎ文、内面草花文、見込二重圓線内コニヤク印判五弁花、高台内一重圓線「大明年製」崩し銘	口縁部～底部	肥前系、18c-19c 前葉
205	351	陶器	小鉢	11.6	3.6	4.2	密	良	黄白色	平碗 (TD-1-h)、ロクロ成形、灰釉・上絵付 (赤)、内面梅花文、漆継	口縁部～底部	京・信楽系、17c 末葉 -19c 中葉
206	348	土器	瓦灯 (傘・皿)	13.0	16.6	[5.0]	密	良	橙白色	傘部、ロクロ成形、斜方向スリット (2)、皿部、ロクロ成形・皿部貼付、底部中央貫通しない穴、皿部施書き	胴部～底部	製作地不明
207	348	陶器	片口	17.6	8.6	9.7	密	良	黄灰色	ロクロ成形・注口貼付、灰釉、見込目跡 (3)	口縁部～高台部	瀬戸・美濃系、漆付首
208	352	陶器	中碗	—	4.2	[1.6]	密	良	灰白色	ロクロ成形、長石釉、内面漆付着	底部	瀬戸・美濃系
209	352	磁器	中碗	10.4	4.2	5.0	緻密	良	白色	半球碗 (JB-1-f)、ロクロ成形、青磁釉・呉須、見込手描き五弁花、高台内二重角内「簡江」銘	口縁部～底部	肥前系、17c 末葉 -18c 中葉
210	355	土器	カワラケ	9.0	5.6	2.1	密	良	灰色	ロクロ成形、底部糸切	口縁部～底部	在地系、転用取柄
211	355	土器	カワラケ	10.0	6.0	2.3	密	良	灰色	ロクロ成形、底部糸切	口縁部～底部	在地系、転用取柄
212	355	石製品	砥石	長さ 14.0	幅 4.0	厚さ 2.4	—	—	—	流紋岩・砥沢砥 (南牧)	ほぼ完形	
213	355	磁器	中碗	(10.8)	4.6	6.3	緻密	良	白灰色	端反形、ロクロ成形、透明釉・瑠璃釉・呉須、見込二重圓線内手描き五弁花、旋継	口縁部～底部	肥前系
214	355-1	磁器	中碗	(15.6)	5.6	6.8	緻密	良	白灰色	うかい碗 (JB-1-i)、ロクロ成形・白磁釉、漆継	口縁部～底部	肥前系、19c 前葉・中葉
215	355-2	土器	焼塩壺	7.0	5.0	6.8	やや粗	良	橙白色	板作り成形、刻印判読不明	ほぼ完形	泉州系、内外面煤付着
216	357	土製品	香炉か	(4.6)	—	[4.3]	密	良	橙褐色	ロクロ成形・双耳貼付、耳部胡粉、胴部三ツ星状の穿孔	口縁部～胴部	製作地不明
217	363	陶器	創猪口	3.4	3.0	2.0	密	良	灰白色	創猪口 (TC-30)、ロクロ成形・環境積み貼付、灰釉、底部糸切、転用粗端、内面金属焼着	完形	瀬戸・美濃系
218	365	磁器	小壺	5.6	4.4	8.1	緻密	良	白色	壺 (JB-15)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面梅樹文	ほぼ完形	肥前系
219	365	土器	焙烙	(38.0)	(34.0)	5.1	密	良	褐色	ロクロ・底部貼合せ・耳貼付、三耳 (残 1)、瓦質 (軟質)	口縁部～底部	在地系、外面煤付着
220	365	磁器	小坪	7.4	3.0	3.8	緻密	良	灰白色	ロクロ成形、透明釉・呉須、外面蓮文、漆継、内面漆付着	口縁部～底部	肥前系
221	368	石製品	磨石	長さ 6.1	幅 [3.0]	厚さ 1.7	—	—	灰白色	中央穿孔	1/2	
222	370	土器	焙烙	—	—	—	密	良	褐色	平底、見込押印菊花文	底部破片	在地系
223	376	陶器	掃鉢	—	—	[10.4]	密	良	黄白色	ロクロ成形、鉄釉、内面内内に「大」刻印、漆継	破片	瀬戸・美濃系
224	381	陶器	小皿	11.2	4.8	2.8	密	良	灰白色	ロクロ成形・内面突起 (3)、灰釉、漆継	口縁部～底部	地方窯か
225	381	磁器	小碗	6.6	2.6	3.5	緻密	良	白灰色	ロクロ成形、透明釉・呉須、外面絵蓮文、内面漆付着	ほぼ完形	肥前系 (波佐見)
226	381	陶器	土瓶	11.2	7.0	13.2	緻密	良	灰色	糸目土瓶 (TZ-34-d)、ロクロ成形、注口・耳貼付・付三足、灰釉	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
227	384-1	土器	焼塩壺	5.2	3.8	5.2	やや粗	良	橙褐色	ロクロ成形、無刻印	口縁部～底部	江戸在地系、18c 中葉以降
228	384	陶器	中碗	(9.8)	(3.6)	5.7	密	良	灰白色	半球碗 (TD-1-b)、ロクロ成形、灰釉・上絵付 (赤・金・緑)、内面蓮文、外面梅樹文	口縁部～底部	京・信楽系、18c 前葉 -19c 前葉、二次焼成
229	384	磁器	小碗	9.6	3.8	5.2	緻密	良	白色	小広東碗 (JB-1-j)、ロクロ成形・呉須、見込一重圓線内風景文、外面漢詩文	口縁部～底部	肥前系、18c 後葉 -19c 初頭
230	387	磁器	中碗	9.8	3.6	4.8	緻密	良	白灰色	腰張碗、ロクロ成形、透明釉・呉須、内外面環状文、漆継	胴部～底部	肥前系、18c 中葉 -19c 初頭
231	387	磁器	五寸皿	(13.4)	8.0	2.8	緻密	良	白灰色	器高が低く腰が張る皿 (JB-2-o)、透明釉・呉須、外面草繋ぎ文、内面風景文、高台内一重圓線	胴部～底部	肥前系、17c 後葉以降
232	387	磁器	小碗	8.6	3.4	4.9	緻密	良	白灰色	小広東碗 (JB-1-j)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面四方滑文・菊花文・格子文、見込二重圓線内花文	口縁部～底部	肥前系、18c 後葉 -19c 初頭、漆付着
233	387	磁器	小皿	8.1	5.8	1.8	緻密	良	白灰色	変形皿、型打、透明釉・呉須、外面草文、内面葉文	完形	肥前系
234	387	磁器	仏花瓶	—	5.6	18.8	緻密	良	白灰色	仏花瓶 (JB-22)、ロクロ成形・双耳貼付、透明釉・呉須、外面風景文、耳取面	口縁部～底部	肥前系 (波佐見)、17c 後葉 -18c 中葉
235	387	陶器	中瓶	2.8	8.0	21.8	密	良	褐色	五合徳利 (TC-10-d)、ロクロ成形、灰釉・うのふ輪流し	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
236	387	磁器	火入	5.4	5.6	8.3	緻密	良	白灰色	火入 (JB-9-d)、ロクロ成形、青磁釉・鉄錆、底部判読不明施書き	口縁部～底部	肥前系
237	387	瓦	平瓦	長さ [4.6]	幅 [4.8]	厚さ 1.6	やや粗	良	灰色	穿孔円盤に転用	ほぼ完形	
238	387	陶器	小碗	8.4	4.2	5.3	密	良	灰黄色	京焼風陶器 (TB-1-b)、ロクロ成形、灰釉・鉄絵、外面棧間山水文、高台内刻印「小松吉」	口縁部～底部	肥前系、17c 後葉 -18c 中葉、二次焼成
239	387	陶器	小碗	9.2	3.6	4.9	密	良	灰白色	端反碗 (TD-1-g)、ロクロ成形、灰釉	口縁部～底部	京・信楽系、18c 後葉 -19c 中葉
240	387	陶器	香炉	(4.4)	3.8	4.3	密	良	灰白色	ロクロ成形・付三足、灰釉・鉄絵、摺絵生垣文	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、18c 初頭・後葉
241	387	陶器	掃鉢	(31.8)	—	[14.9]	密	良	褐色	ロクロ成形・片口部作出、鉄釉、袴部欠損、漆継	口縁部～底部	肥前系、18c 以降
242	385	陶器	花生	—	7.0	[5.2]	緻密	良	灰褐色	樹木形、板作り成形、灰釉・鉄釉、底面墨書	胴部～底部	瀬戸・美濃系
243	390	土器	焙烙	40.0	36.4	5.2	やや粗	良	黄褐色	ロクロ・底部貼合せ・耳貼付、三耳、瓦質 (軟質)	口縁部～底部	在地系、外面煤付着、389 と接合

第17表 遺物観察表(6)

No.	出土位置	種別	器種	法量cm			胎土	焼成	色調	器形・成・整形・文様等の特徴	遺存状況	備考
				(): 推定 [] : 遺存								
				口径	底径	器高						
244	390下層	陶器	小坏	7.6	3.4	3.9	密	良	灰黄色	小坏 (TC-6)、ロクロ成形、鉄釉・うのふ釉散し	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、底部煤付着
245	388	磁器	五寸皿	14.0	7.2	3.9	緻密	良	灰白色	輪花皿 (JB-2-f)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面唐草繫文、内面花唐草文、見込二重園縁内コンニャク印判五弁花、高台内一重園縁「大明年製」崩し銘	完形	肥前系、18c-19c 前葉
246	388	磁器	中碗	(11.0)	4.4	5.9	緻密	良	白色	高台が「ハ」の字状に開く碗 (JB-1-q)、ロクロ成形、透明釉・呉須、口縁内面四方唐文、見込二重園縁内コンニャク印判五弁花	口縁部～底部	肥前系、18c 中葉 -19c 初頭
247	388	陶器	中碗	10.2	4.0	5.0	密	良	灰色	せんじ碗 (TC-1-v)、ロクロ成形、灰釉・鉄釉	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、18c 前葉 -19c 前葉、二次焼成
248	395	陶器	灯明受皿	8.0	5.6	1.8	密	良	灰色	灯明受皿 (TC-40-c)、ロクロ成形・油受け貼付、鉄釉	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
249	395	磁器	猪口	6.8	4.8	5.5	緻密	良	白色	底部輪高台状 (JB-7-b)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面風景文	口縁部～底部	肥前系
250	399	土器	カワラケ	8.6	4.0	1.3	密	良	褐灰色	カワラケ (DZ-2b)、ロクロ成形、底面墨書「中」	口縁部～底部	江戸在地系、17c 中葉以降、前面に煤付着
251	399	磁器	中碗	11.2	4.4	6.6	緻密	良	白色	絵付・作りの粗雑な碗 (JB-1-g)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面風景文、高台内一重方角内「大明年製」崩し銘、内面赤色漆付着	口縁部～底部	肥前系、17c 末葉 -19c
252	399	磁器	中碗	(11.4)	4.6	6.2	緻密	良	白灰色	青磁染付 (JB-1-i)、ロクロ成形、透明釉・青磁釉、呉須、口縁内面四方唐文、見込二重園縁内コンニャク印判五弁花、高台内二重方角「満福」銘、漆継	口縁部～底部	肥前系、18c 中葉 -後葉
253	402	陶器	中碗	(8.4)	3.4	5.1	密	良	灰黄色	せんじ碗 (TD-1-i)、ロクロ成形、灰釉・鉄絵、見込目跡 (3)	口縁部～底部	京・信楽系、18c 前葉 -19c 前葉、二次焼成
254	402	陶器	五寸皿	12.8	6.6	2.9	密	良	灰色	灰釉丸皿 (TC-2-b)、ロクロ成形、灰釉、見込環状重ね痕	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、17c 初頭 -1760、二次焼成
255	402	陶器	中瓶	—	8.2	[14.2]	密	良	灰黄色	五合徳利 (TC-10-d)、ロクロ成形、灰釉、上部打欠	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、内面煤付着
256	414	陶器	灯明受皿	(8.8)	4.4	2.4	緻密	良	灰黄色	灯明受皿、ロクロ成形・灯心立て貼付、灰釉、底面墨書	口縁部～底部	製作地不明、京・信楽系に類似
257	427	陶器	土瓶	—	7.6	—	緻密	良	灰色	三彩土瓶 (TZ-34-c)、ロクロ成形、灰釉、風景文 (鉄釉・緑釉)、底面墨書	胴部～底部	製作地不明、19c 中葉以降
258	423	磁器	猪口	(6.8)	(5.6)	5.3	緻密	良	白灰色	底部蛇の目凹形高台 (JB-7-a)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面花唐草文	口縁部～底部	肥前系
259	428	磁器	小皿	(9.4)	3.4	2.0	緻密	良	灰白色	輪花形、透明釉・呉須、内面梅樹文	口縁部～底部	肥前系、17c 中葉 -後葉
260	428	陶器	中碗	10.2	4.2	7.0	密	良	白灰色	尾呂茶碗 (TC-1-o)、ロクロ成形、灰釉・うのふ釉・鉄絵	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、18c 前葉 -中葉
261	434	ガラス製品	小瓶	2.2	4.8	12.5	—	—	青色	前後型合せ、胴部エンボス「乗附眼科医院」	完形	
262	434	陶器	小坏	—	3.0	[3.3]	密	良	灰色	ロクロ成形、灰釉・鉄絵、見込走り駒文	胴部～底部	大塚相馬系
263	434	陶器	蓋	摘み径 6.0	16.4	4.0	密	良	褐灰色	土鍋蓋、ロクロ成形、灰釉・鉄釉、外面同心円文	摘み部～裾部	製作地不明
264	434	陶器	土鍋	19.6	10.8	8.9	密	良	灰褐色	ロクロ成形・耳貼付、白泥・灰釉・人工呉須、外面文字文	口縁部～底部	製作地不明、近代以降
265	434	土器	植木鉢	17.2	11.6	11.2	密	良	暗灰色	ロクロ成形、瓦質	口縁部～底部	在地系か
266	440	陶器	中碗	(9.4)	3.8	6.1	密	良	黄灰色	半球碗 (TD-1-b)、ロクロ成形、灰釉・上絵付 (緑・金)、外面雷文・右持ち地抜き立ち沢瀉文、高台内墨書「小」	口縁部～底部	京・信楽系、17c 後葉 -18c 後葉
267	440	磁器	中碗	10.0	4.0	5.3	緻密	良	灰白色	くらわんか手 (JB-1-v)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面雪輪草花文、高台内「大明年製」崩し銘	口縁部～底部	肥前系、18c 初頭 -中葉
268	440	磁器	香炉	(9.2)	5.0	7.1	密	良	灰色	陶胎込付 (TB-9-a)、ロクロ成形、透明釉・呉須・鉄絵、外面風景文	口縁部～底部	肥前系、18c 初頭 -中葉
269	440	磁器	五寸皿	14.8	8.8	3.2	緻密	良	白色	高台断面シャープU字状 (JB-2-e)、ロクロ成形、透明釉・呉須、内面挖花文、高台内一重園縁内二重方角「福」銘、ハリ支え (1)、漆継	口縁部～底部	肥前系
270	440	磁器	中鉢	(21.0)	8.4	6.3	緻密	良	灰白色	ロクロ成形・付三足、青磁釉・呉須・鉄絵、内面花文、底付環状重ね焼痕、漆継	口縁部～底部	肥前系 (波佐見)、17c 後葉 -18c 中葉
271	440	磁器	小鉢	9.2	5.2	6.1	緻密	良	白灰色	輪花形、ロクロ成形・型打、白磁釉	口縁部～底部	肥前系、1650-18c
272	440	土器	カワラケ	9.6	6.2	1.5	密	良	灰褐色	ロクロ成形、底部糸切	完形	在地系、口唇部煤付着
273	441	陶器	小皿	10.4	4.8	1.9	密	良	褐灰色	ロクロ成形・型打、内面陰刻蓮弁文・見込陰刻菊花文	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、16c
274	445	陶器	掬鉢	30.4	13.6	16.6	密	良	灰黄色	ロクロ成形、灰釉、見込目跡 (3)	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、440 と接合
275	445	陶器	掬鉢	(27.6)	11.8	9.8	密	良	灰黄色	ロクロ成形、鉄釉、掬目 22 本 1 単位	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、440 と接合
276	447	磁器	中碗	(9.8)	4.4	5.4	緻密	良	白色	高台断面シャープU字状 (JB-1-e)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面草花文、高台内「大明年製」崩し銘	口縁部～底部	肥前系、17c 後葉 -18c 前葉
277	447	磁器	中碗	10.0	4.0	5.5	緻密	良	白灰色	ロクロ成形、透明釉・呉須、外面二重割目文、高台内「満福」	口縁部～底部	肥前系、18c 初頭 -19c
278	447	土器	瓦灯 (傘)	—	(20.0)	[19.5]	密	良	橙褐色	土端欠損、輪桶成形、正面スリット (2)・穿孔 (2)、内面墨書、土師質	胴部～裾部	江戸在地系か、440 と接合
279	483	陶器	小皿	—	(4.8)	[2.0]	密	良	暗褐色	鉄絵唐皿、ロクロ成形、灰釉・鉄絵、見込草文	口縁部～底部	肥前系、17c 前葉 -中葉
280	531下層	磁器	小碗	7.2	2.8	3.2	緻密	良	灰白色	端反碗 (TC-1-a)、ロクロ成形、透明釉・赤絵・上絵付 (青・緑)	完形	瀬戸・美濃系、19c 初頭以降
281	532	磁器	小鉢	(8.8)	4.0	6.6	緻密	良	白色	端反碗、ロクロ成形、白磁釉	口縁部～底部	肥前系、17c 中葉 -18c
282	539	土器	カワラケ	9.4	6.6	1.8	密	良	橙褐色	ロクロ成形、底部糸切	ほぼ完形	在地系
283	536	陶器	小鉢	—	4.6	[2.4]	密	良	褐灰色	ロクロ成形、灰釉・鉄絵、見込草文	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、17c 前葉 -中葉
284	533	陶器	中瓶	—	7.4	[14.7]	密	良	黄褐色	ロクロ成形、鉄釉	頸部～底部	瀬戸・美濃系か、二次焼成
285	540	磁器	五寸皿	13.4	4.2	3.7	緻密	良	白灰色	見込蛇の目軸割ぎ高台無釉葉 (JB-2-k)、ロクロ成形、青磁釉	口縁部～底部	肥前系、17c 中葉 -18c
286	540	磁器	小皿	(9.0)	(3.4)	3.0	緻密	良	白灰色	ロクロ成形、白磁釉・上絵付 (赤・青)、内面梅樹文、見込蛇の目軸割ぎ	口縁部～底部	肥前系
287	540	磁器	小碗	(8.0)	3.0	4.6	緻密	良	白灰色	くらわんか手 (JB-1-v)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面草花文	口縁部～底部	肥前系、18c 初頭 -後葉
288	540	陶器	中碗	11.0	5.0	7.3	密	良	褐灰色	呉器手碗 (TB-1-a)、ロクロ成形、灰釉	口縁部～底部	肥前系、17c 中葉 -末葉
289	540	土器	カワラケ	8.6	6.0	1.8	密	良	褐灰色	ロクロ成形、底部糸切	完形	在地形、口唇部煤付着
290	540	土器	カワラケ	9.0	5.8	2.1	密	良	灰白色	ロクロ成形、底部糸切	口縁部～底部	在地系、転用取鍋
291	561	陶器	火入	(10.6)	10.4	9.1	密	良	褐灰色	ロクロ成形、灰釉・呉須・緑釉・鉄釉、外面花文、底面墨書「御金利」、刻印「廻山」	口縁部～底部	製作地不明、京・信楽系に類似
292	576	磁器	小鉢	8.8	4.0	6.0	緻密	良	白色	端反形・口縁輪花形、ロクロ成形・型打、透明釉・呉須、口縁内面花繫文、見込二重園縁内花文、外面花文、高台内方角銘、焼継、高台内焼継印	口縁部～底部	中国

第18表 遺物観察表(7)

No.	出土位置	種別	器種	法量cm			胎土	焼成	色調	器形・成・整形・文様等の特徴	遺存状況	備考
				() : 推定 [] : 遺存								
				口径	底径	器高						
293	571 No.1	土器	カワラケ	10.2	6.2	1.9	密	良	橙白色	ロクロ成形、底部系切	完形	在地形、口唇部煤付着
294	574	陶器	小皿	7.6	4.2	1.8	密	良	灰褐色	ロクロ成形、灰釉、碁碁底	完形	製作地不明、瀬戸・美濃系に類似
295	542	土器	乗燭	5.6	3.4	3.8	密	良	褐灰色	ロクロ成形・灯芯立貼付(欠損)、鉛透明釉、底部系切	ほぼ完形	製作地不明、江戸在地系に類似
296	589	磁器	中碗	10.6	5.8	5.9	緻密	良	白灰色	広東碗(JB-1-m)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面風景文・鳥文、見込一重線内花文、碁碁	口縁部～底部	肥前系、18c 後葉 -19c 中葉
297	589 下層	磁器	火入	9.4	8.2	7.3	緻密	良	白色	ロクロ成形、鉄釉、底部黒書	口縁部～底部	上層と接合
298	589	土器	焼塩壺蓋	8.4	孔径1.8	1.5	密	良	橙褐色	凹形(DZ-00-c)、板作り成形、内面布目痕、中央に穿孔	完形	泉州系、18c 前葉
299	589	磁器	小皿	9.2	5.4	2.4	緻密	良	白色	ロクロ成形・型打、透明釉・呉須、口縁口銘、内面鶴亀文	ほぼ完形	瀬戸・美濃系
300	589 下層	磁器	小杯	6.4	3.0	3.8	緻密	良	白色	端反形、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面花唐草文、高台内判読不明銘	ほぼ完形	中国
301	589 下層	磁器	小杯	6.8	2.6	4.4	緻密	良	白色	端反形、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面風景文、高台無釉	完形	京都系
302	589 下層	土器	焼塩壺	—	6.2	[9.3]	密	良	褐灰色	板作り成形(DZ-51-a)か	端部	泉州系、17c 前葉 - 中葉、羽口転用
303	589 上層	土器	焼塩壺	—	—	6.9	密	良	橙褐色	ロクロ成形(DZ-51-w)、底部系切	口縁部～底部	江戸在地系、18c 中葉以降、内面煤付着
304	589 下層	磁器	急須	4.8	4.8	6.6	緻密	良	赤褐色	急須(TI-16)、木型打込み成形・注口・把手貼付け、上絵付(赤・白・黄)、胴部花文・「萬古」刻印	口縁部～底部	万古系、19c 前葉以降
305	589 下層	土器	七厘	(18.6)	15.8	18.0	密	良	褐灰色	朝顔形、輪植成形、外面黒色仕上げ・細かい菱形型押文・胴部窓、底部三足	口縁部～底部	在地系か
306	589 下層	土器	焙烙	32.0	—	6.6	密	良	灰褐色	ロクロ・底部貼合せ・耳貼付、二耳、土師質	口縁部～底部	在地系か、全面煤付着
307	589 上層	陶器	捏鉢	30.4	14.4	11.8	密	良	暗灰色	ロクロ成形、灰釉・鉄釉・緑釉流し、見込目跡(5)	口縁部～底部	製作地不明、地方窯か
308	594	磁器	猪口	7.4	4.4	5.3	緻密	良	白色	底部輪高台状(JB-7-b)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面松竹梅文・花唐草文	口縁部～底部	肥前系
309	594	磁器	五寸皿	11.4	3.8	3.0	緻密	良	白灰色	見込蛇の目輪割ぎ高台無釉葉(JB-2-k)、ロクロ成形、透明釉・呉須、内面草文	ほぼ完形	肥前系、17c 中葉 -18c
310	594	陶器	小碗	(10.4)	4.0	6.2	密	良	灰色	小杉碗(TD-1-d)、ロクロ成形、灰釉、高台内に「京焼」刻印	口縁部～底部	京・信濃系、18c 前葉 -19c 前葉
311	594	磁器	中皿	(20.4)	(6.8)	6.3	緻密	良	灰白色	ロクロ成形、青磁釉、内面陰刻草文、見込蛇の目輪割ぎ	胴部～底部	肥前系(波佐見)、17c 後葉 -18c 中葉
312	594	磁器	中碗	—	5.0	[5.2]	密	良	灰色	陶胎染付(TB-1-f)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面唐草文	胴部～底部	肥前系、18c 初頭 - 中葉
313	597	陶器	蓋	—	25.4	[2.1]	密	良	赤褐色	ロクロ成形・描み貼付(欠損)、白泥・灰釉、三島手	口縁部～底部	肥前系
314	595	磁器	小皿	(8.4)	5.0	1.7	緻密	良	白灰色	ロクロ成形、透明釉・呉須、外面花繁文、内面桐文、高台内判読不明銘	口縁部～底部	肥前系
315	595	磁器	中碗	(9.8)	3.4	5.2	緻密	良	白色	半球碗(JB-1-f)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面花文、高台内「大明年製」崩し銘	口縁部～底部	肥前系、17c 末葉 -18c 中葉
316	621	磁器	小杯	8.0	3.6	5.1	緻密	良	白灰色	端反形、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面蔓草文・蝶文	完形	肥前系、漆器として使用
317	628	陶器	小鉢	(12.8)	4.6	5.4	密	良	灰色	ロクロ成形、灰釉、口縁部敲打痕	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
318	658	土器	瓦灯(傘)	—	(17.8)	[18.9]	やや粗	良	灰白色	上端欠損、輪植成形、屋根根に鈐、正面スリット(3)、裏面穿孔(3)・三日月状スリット、瓦質	胴部～裾部	在地系か、673 と接合
319	635	土器	火鉢	(31.0)	23.2	12.8	密	良	灰褐色	輪植成形・脚貼付、脚部(1)、瓦質(軟質)	口縁部～三足	在地系、内外面煤付着
320	633	陶器	植木鉢	15.2	9.2	12.6	密	良	灰褐色	ロクロ成形、鉄釉、底部切込(1)	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
321	633	磁器	小鉢	(9.4)	(3.8)	6.6	緻密	良	灰白色	端反形、ロクロ成形、透明釉、碁碁底	口縁部～底部	肥前系、底部煤付着
322	647	陶器	中碗	(11.4)	—	[5.8]	緻密	良	灰褐色	呉器手碗(TB-1-a)、ロクロ成形、灰釉	口縁部～胴部	肥前系、17c 中葉 - 末葉、653・包含層と接合
323	653	土器	カワラケ	(20.8)	12.8	3.8	密	良	橙褐色	胞衣皿か、ロクロ成形、底部系切	口縁部～底部	江戸在地系、17c 中葉以降
324	663	陶器	片口	22.8	10.4	11.1	緻密	良	赤褐色	片口鉢(JB-23-a)、ロクロ成形・注口貼付、灰釉・白泥、内外面刷毛目文	口縁部～底部	肥前系、416 と接合
325	665	磁器	蓋	摘み径3.0	—	[1.1]	緻密	良	白色	中碗蓋、ロクロ成形、青磁釉・呉須、摘み内一重線内「大明成化年製」、内面草花文、天井部二重線内草花文	摘み部～胴部	肥前系、18c 中葉 - 後葉
326	665	陶器	中碗	(13.6)	4.8	6.5	密	良	灰色	柳碗形(TC-1-g)、ロクロ成形、灰釉・鉄絵、外面柳文	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、18c 中葉 -19c 前葉
327	665	陶器	中碗	12.2	4.4	5.4	密	良	灰色	柳碗形(TC-1-g)、ロクロ成形、灰釉・鉄絵、外面草花文、漆継	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、18c 中葉 -19c 前葉
328	673 No.19	磁器	中碗	8.8	3.4	6.2	緻密	良	白色	小丸碗(JB-1-j)、ロクロ成形、透明釉・呉須、口縁内面四方押文、見込二重線内松竹梅繁文、外面牡丹文・連弁文、漆継	口縁部～底部	肥前系、18c 中葉 -19c 初頭、トレンチと接合
329	673 上層	磁器	中碗	8.2	4.0	6.6	緻密	良	白灰色	半筒碗(JB-1-i)、ロクロ成形、青磁釉・呉須、口縁内面四方押文、見込二重線内コンニャク印判五弁花	口縁部～底部	肥前系、18c 中葉 -19c 初頭
330	673 上層	磁器	中碗	7.4	4.2	6.5	緻密	良	白色	半筒碗(JB-1-i)、ロクロ成形、透明釉・呉須、口縁内面四方押文、見込二重線内手描き五弁花、外面丸文、高台内二重角内「満福」銘	口縁部～底部	肥前系、18c 中葉 -19c 初頭
331	673 上層	磁器	中碗	10.2	4.6	6.1	緻密	良	白色	絵付・作りの粗雑な碗(JB-1-g)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面花唐草文、高台内二重角内「満福」銘、漆継	口縁部～底部	肥前系、18c 前葉 - 後葉
332	673 上層	磁器	中碗	8.8	3.6	4.8	緻密	良	白色	半球碗(JB-1-f)、ロクロ成形、透明釉・青磁釉・呉須、口縁口銘、内面花文	完形	肥前系、17c 後葉 -18c 中葉
333	673	石	材料か	長さ3.2	幅2.5	—	—	—	—			
334	676 北側	磁器	小碗	9.0	3.6	4.7	緻密	良	灰色	端反碗(JB-1-n)、ロクロ成形、透明釉・呉須、口縁内面花文繁文、見込二重線内花文、外面草花文、高台内「成化年製」銘、漆継	口縁部～底部	肥前系、19c 初頭以降
335	676 北側	磁器	小碗	(7.6)	3.2	3.9	緻密	良	灰色	端反碗(JB-1-n)、ロクロ成形、透明釉・上絵付(赤)、外面和歌文、漆継	口縁部～底部	肥前系、19c 初頭以降
336	675	土器	不明	4.0	—	0.9	密	良	褐灰色	転用円盤、外周丁寧に研磨、底部判読不明黒書	完形	
337	678	陶器	中碗	(9.0)	—	[4.9]	密	良	灰褐色	せんじ碗(TC-1-v)、ロクロ成形、灰釉	口縁部～胴部	瀬戸・美濃系、18c 前葉 -19c 前葉
338	678	土器	焼塩壺	—	(4.6)	[4.2]	やや粗	良	橙褐色	板作り成形、判読不明刻印、胴部焼成後穿孔(1)	胴部～底部	泉州系、転用取鍋
339	678	土器	焼塩壺蓋	—	7.6	2.0	密	良	橙褐色	凹形(DZ-00-c)、板作り成形、内面布目痕、上面・下面に判読不明黒書	ほぼ完形	泉州系、18c 前葉
340	678	土器	カワラケ	7.6	3.6	1.1	密	良	褐灰色	カワラケ(DZ-2b)、底部黒書「中」、底部系切	口縁部～底部	江戸在地系、17c 中葉以降
341	1001	土器	カワラケ	—	7.0	[1.3]	密	良	橙褐色	ロクロ成形(DZ-2-c)、底部系切	胴部～底部	江戸在地系、17c 中葉以降

第19表 遺物観察表(8)

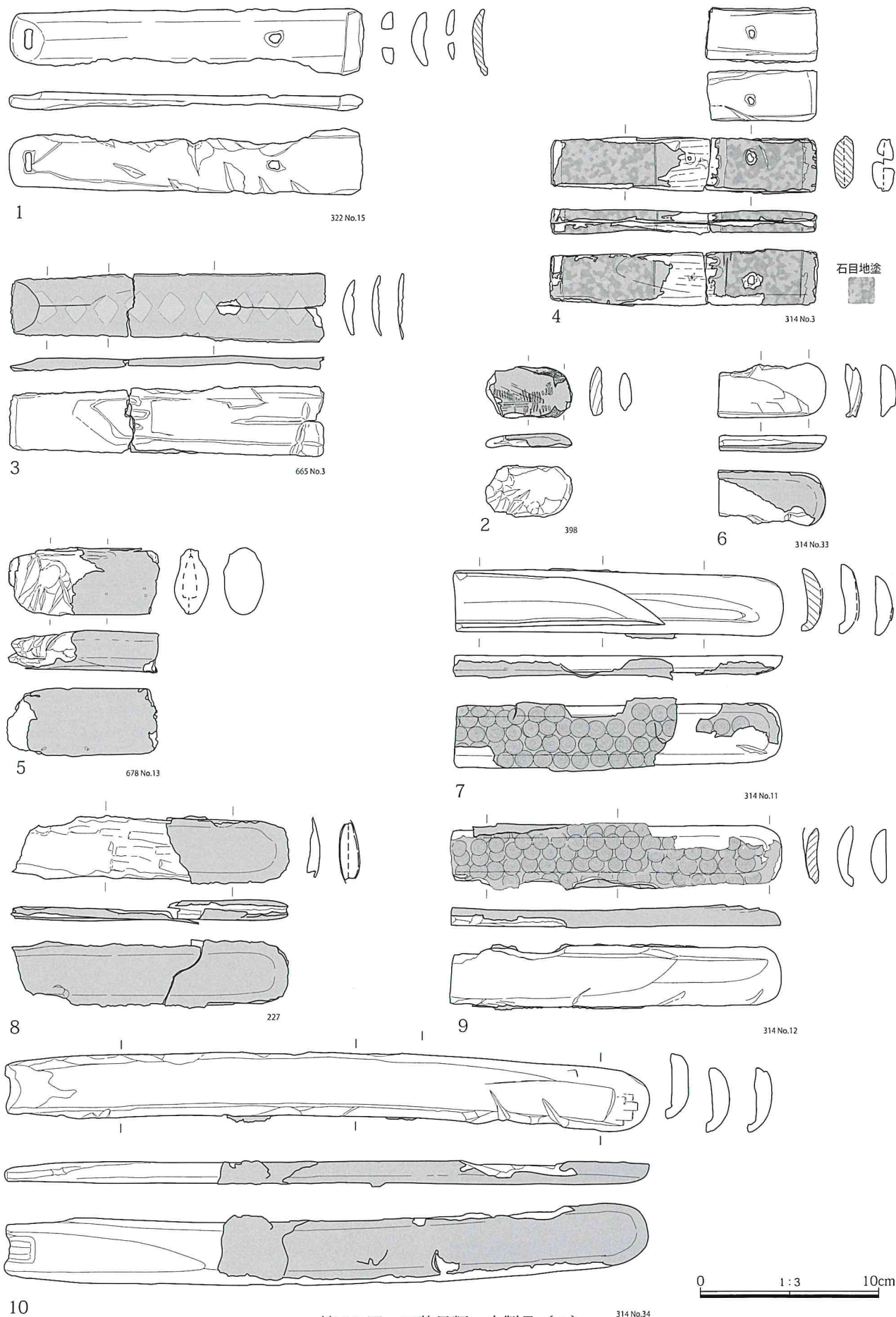
No.	出土位置	種別	器種	法量cm			胎土	焼成	色調	器形・成・整形・文様等の特徴	遺存状況	備考
				() : 推定 [] : 遺存	口径	底径						
342	1008	土器	カワラケ	9.4	5.6	2.0	密	良	橙褐色	ロクロ成形、底部系切	口縁部～底部	在地系
343	1008	陶器	小皿	—	4.6	[3.5]	密	良	褐灰色	ロクロ成形、灰釉・鉄絵、見込草文	胴部～底部	肥前系、16c 後葉・17c 初頃
344	1008	磁器	中碗	(9.8)	3.4	5.0	緻密	良	白灰色	絵付・作りの粗雑な碗 (JB-1-g)、ロクロ成形、透明釉・呉須、内外面二重網目文	口縁部～底部	肥前系、18c-19c
345	1008	土器	焼塩壺	(7.0)	5.2	6.4	密	良	橙褐色	ロクロ成形 (DZ-51-w)、底部系切	口縁部～底部	江戸在地系、18c 中葉以降、外面煤付着
346	1008	土器	鍋	(27.4)	—	[5.2]	やや粗	良	橙褐色	内耳鍋、輪積成形・内耳貼付 (I)	口縁部破片	在地系、16c 末葉、外面煤付着
347	1015	土器	カワラケ	(10.2)	6.0	2.5	密	良	橙褐色	ロクロ成形、底部系切	口縁部～底部	在地系
348	1015	土器	カワラケ	10.8	5.8	2.3	密	良	橙褐色	ロクロ成形、底部系切	口縁部～底部	在地系、中世か、内面煤付着
349	1030	土器	焼塩壺	6.2	5.8	7.5	密	良	橙褐色	板作り成形 (DZ-51-g)、刻印「泉■■■■」	完形	泉州系、18c 前葉・後葉
350	1021	土器	焼塩壺	6.4	5.8	7.1	密	良	橙褐色	ロクロ成形 (DZ-51-w)、底部系切	口縁部～底部	江戸在地系、18c 中葉以降
351	1021	磁器	中碗	(9.4)	4.0	4.5	緻密	良	白色	半球碗 (JB-1-f)、ロクロ成形、透明釉、呉須・色絵・金泥、外面風景文、高台外面金泥	口縁部～底部	肥前系、17c 末葉・18c 中葉
352	1014	陶器	御猪口	4.8	3.0	2.9	密	良	灰褐色	御猪口 (TC-30)、ロクロ成形、環境描み貼付 (欠損)、灰釉、底部系切、底部判読不明墨書	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
353	1025	土製品	ミニチュア	3.8	2.0	3.0	密	良	褐色	釜形、型作り成形、緑釉、外面陽刻草花文	ほぼ完形	江戸在地系
354	1033	磁器	小碗	(5.8)	—	[4.9]	緻密	良	白色	筒丸形湯呑碗、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面「酒保厨■■」	口縁部～胴部 1/3 周	製作地不明、統制陶器か
355	1032	磁器	中碗	9.8	3.8	5.5	緻密	良	白色	高台三角 (JB-1-c)、透明釉・呉須、外面風景文、見込二重網線宝文	口縁部～底部	肥前系、17c 中葉・後葉
356	1032	陶器	灯明皿	10.2	4.9	1.8	緻密	良	灰褐色	灯明皿 (TC-2-o)、ロクロ成形、鉄釉、見込環状重ね焼き痕	口縁部～底部	瀬戸・美濃系
357	1036	土器	カワラケ	9.2	5.8	2.1	密	良	褐灰色	ロクロ成形、底部系切	口縁部～底部	在地系
358	1036	陶器	小碗	8.8	3.0	5.5	密	良	灰褐色	鉄釉丸碗、ロクロ成形、鉄釉	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、17c 中葉以前
359	1036	磁器	中碗	9.6	4.0	4.6	緻密	良	白色	ロクロ成形、透明釉・呉須、松樹文、作りは半球碗に類似するが、口縁部に縁を有する	口縁部～底部	肥前系、17c 末葉・18c 中葉
360	1036	磁器	小皿	11.8	4.0	3.2	緻密	良	白灰色	見込蛇の目軸割ぎ高台無釉葉 (JB-2-k)、ロクロ成形、透明釉・呉須、内面草文	口縁部～底部	肥前系、17c 後葉・18c
361	1036	磁器	大碗	14.8	6.4	7.5	緻密	良	白灰色	ロクロ成形、透明釉・呉須、見込二重網線内吉祥文、外面嬰路文・草花文、高台内二重方角内「筒江」銘	口縁部～底部	肥前系
362	1043	陶器	中碗	(10.0)	3.8	6.0	密	良	橙褐色	刷毛目碗 (TB-1-d)、ロクロ成形、灰釉・白泥、刷毛目文	口縁部～底部	肥前系、17c 後葉・18c 中葉、外面漆付着
363	1040	磁器	中碗	—	6.6	(10.0)	緻密	良	白灰色	広東碗 (JB-1-m)、ロクロ成形、透明釉・呉須、外面草花文、見込二重網線内花文、高台内一重網線内方角銘	胴部～底部	肥前系、18c 後葉・19c 中葉
364	E9 グリッド	陶器	小皿	—	—	[3.5]	緻密	良	白灰色	ロクロ成形、全体に銅付着	口縁部～底部	瀬戸・美濃系、埴輪転用
365	北側調査区 東西トレンチ	土器	羽口	長さ [21.7]	幅 5.4	孔径 3.3	やや粗	良	灰褐色	板作り成形、外面ナデ調整	片端部欠損	製作地不明
366	北トレンチ	陶器	中瓶	3.0	6.4	19.4	密	良	灰色	二合半灰釉徳利 (TC-10-c)、ロクロ成形、灰釉つけ掛け、釘書き「△中に一」	ほぼ完形	瀬戸・美濃系、19c 前葉・中葉
367	北側中央 ベルト	陶器	小碗	7.5	3.0	4.5	緻密	良	灰色	ロクロ成形、灰釉・鉄釉、外面下半削り後刷毛文	口縁部～底部	大塚相馬系
368	北側調査区 南2面 (西)	磁器	小碗	6.4	3.0	6.5	緻密	良	白色	統制陶器、筒丸形湯呑碗、ロクロ成形、透明釉・赤絵・上絵付 (緑・黄・桃)、統制番号「岐 276」	ほぼ完形	美濃系 (多治見市)、1940-1945
369	南調査区西 (中間)	磁器	小碗	7.0	3.6	4.4	緻密	良	白色	ロクロ成形、透明釉・赤絵、外面「岩田眼科醫院」、高台内無釉	口縁部～底部	製作地不明
370	南調査区西 (中間)	磁器	合子(蓋)	—	5.6	1.2	緻密	良	白色	ロクロ成形、型押、透明釉・色絵 (緑・桃)、上面花唐草文	完形	肥前系か、転用、銅付着

補足 2-2

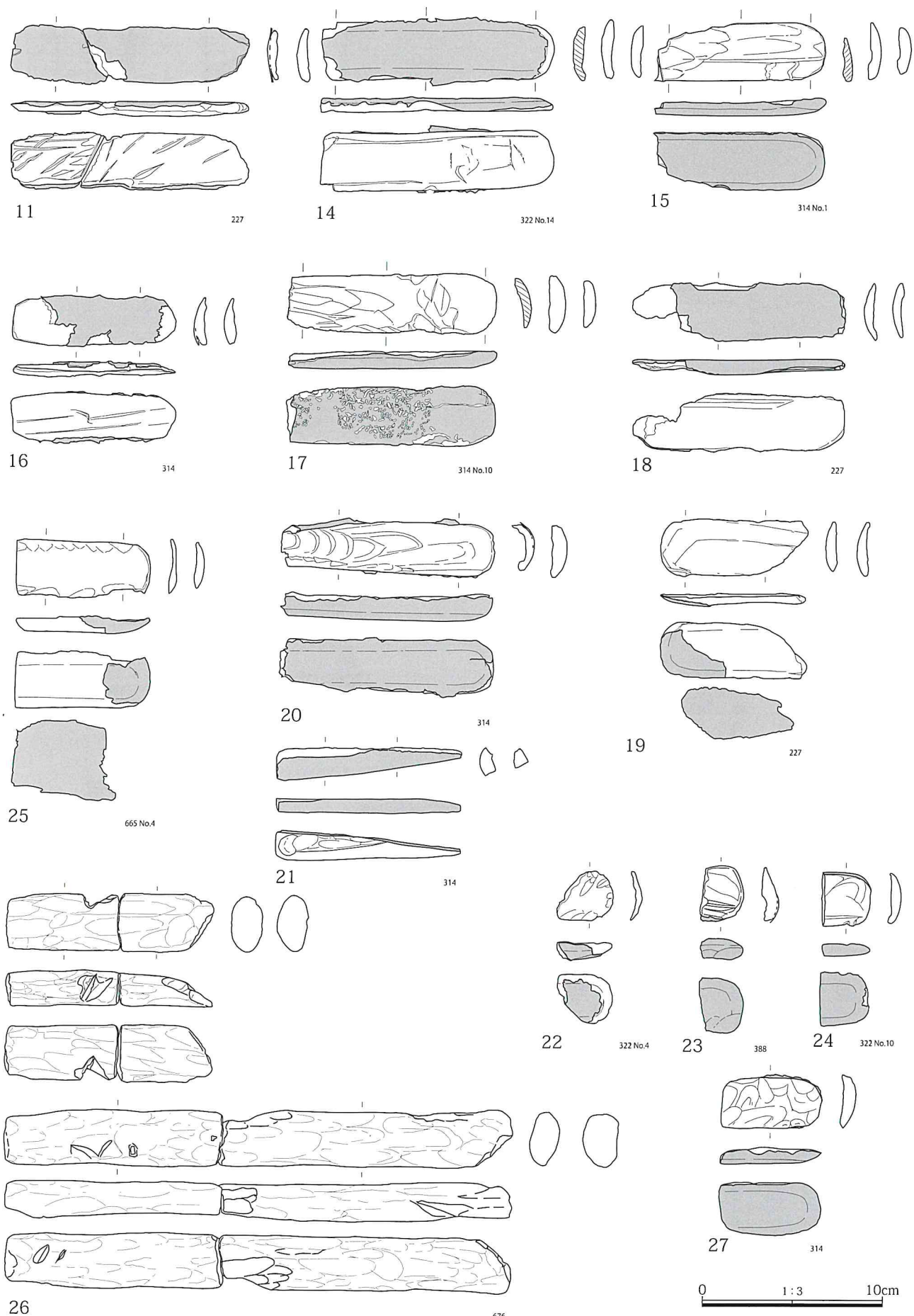
白銀色物質の入った灯明皿 (351 出土)



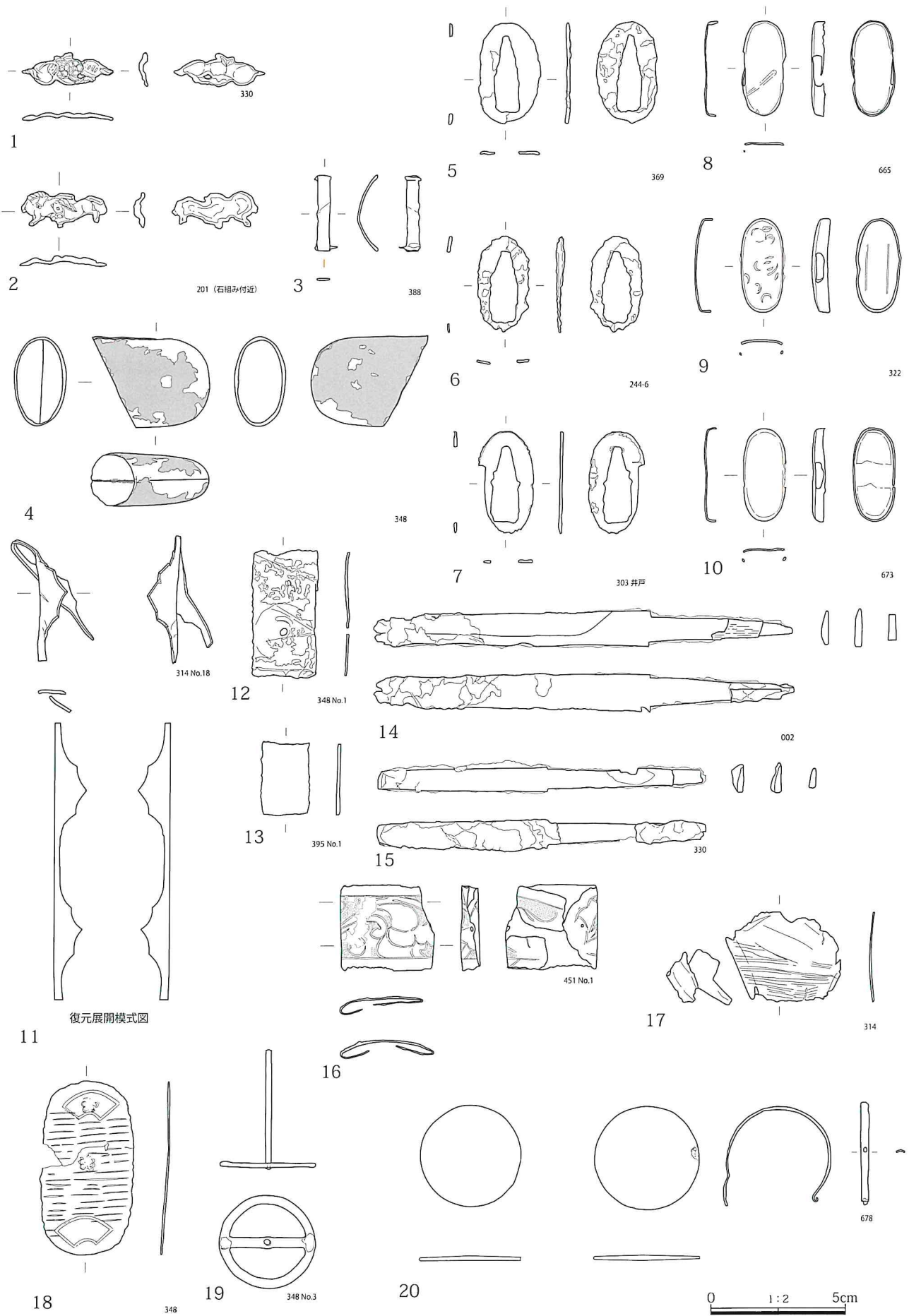
志都呂産と思われる灯明皿の中を満たす土を剥がしたところ、鈍く光る白銀色の物質が確認された。手触りや肉眼観察による質感で最も近いものは雲母であるが、何に使われた、何の為なのか、目下のところ見当がつかない。



第38図 刀装具類 木製品 (1)



第 39 図 刀装具類 木製品 (2)



第 40 図 刀装具類 金属製品

第20表 刀装具類 木製品 観察表

No.	遺構 番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	小尻 形状	刀身 刳込	差表・ 差裏	品種名	漆の 状態	切断 面	備考	遺構廃絶時期
1	322	19.35	緑 3.65 頭 2.4	緑 1.0 頭 0.9			差表	柄下地	なし		柄下地・目釘孔・内側に茎を収めるための溝が彫られている。目釘穴のほかには目貫穴はない。	18 世紀中葉以前
2	398	(4.9)	(2.9)	(0.75)	丸小尻	不明	不明	漆鞘 (5 条の平行 線あり)	黒漆塗			19 世紀前葉以降
3	665	17.65	緑 3.9 頭 3.0	0.6			差表	漆柄	黒漆塗		漆柄。柄差表に刳り込みあり。漆表面に菱形に印影あり柄巻の跡か。	19 世紀前葉以降
4	314	15.0	緑 3.0 頭 2.6	1.4			差表・ 差裏	漆柄	黒漆塗		2 個体接合する。頭金具一部残存。石目地塗のような表面の凹凸あり。	19 世紀前葉以降
5	678	(8.2)	3.3	2.1		○	差表・ 差裏	漆鞘	黒漆塗		両面に金箔付着あり。差表側に傷あり。	18 世紀後葉以降
6	314	(6.0)	(3.0)	0.9	丸小尻	○	差表	漆鞘	黒漆塗	工具	刀身の刳り込み・小尻に近い。	19 世紀前葉以降
7	314	(18.1)	3.3	0.9	丸小尻	○	差表	漆鞘	黒漆塗	工具	No.9 と同一個体 (表)。 黒漆に連続同心円の模様塗りあり。 表裏合わせた状態で切断されている。	19 世紀前葉以降
8	227	(15.05)	3.4	1.1	丸小尻		差表・ 差裏	漆鞘	黒漆塗		接合する。漆の光沢強い。	近代 (時期幅あり 要検討)
9	314	18.5	3.5	0.8	丸小尻	○	差裏	漆鞘	黒漆塗	工具	No.7 と同一個体 (裏)。 黒漆に連続同心円の模様塗りあり。 表裏合わせた状態で切断されている。	19 世紀前葉以降
10	314	36.2	3.4	1.0	丸小尻	△	差裏	漆鞘	黒漆塗	不明	鯉口部分は切断面ではなく、鞘の丸みが鯉口部分に向かって削ぎ落とされたようになっている。小柄装着部分か。小柄榫あり。鞘内側峰部分に刃物傷あり。	19 世紀前葉以降
11	227	(13.1)	(3.1)	0.6		△	差表 か	漆鞘	黒漆塗	工具	内側から直線的に刃物を当てた後押し切るように切断されている。	近代 (時期幅あり 要検討)
12	621	5.89	3.47	1.9				鮫皮	備考		表面には赤漆・黒漆が塗られている。 裏面には黒漆塗。5 片接合する。	18 世紀中葉以降
13	313										金属加工あり。光沢部は銅製。	不明 (18 世紀中 葉以降の可能性)
14	322	(13.1)	3.4	0.8	丸小尻	○	差表	漆鞘	黒漆塗	工具		18 世紀中葉以降
15	314	(9.5)	3.2	(0.75)	丸小尻	○	差裏 か	漆鞘	黒漆塗	割れ・ 工具	切先の部分は明瞭に観察できないが、 段差が削り出されており、鞘尻の部分 の差裏と考えられる。	19 世紀前葉以降
16	314	(9.0)	(2.6)	(0.5)	?	不明	不明	漆鞘	黒漆塗	工具 が	表面の漆と木質削ぎ取られる。削ぎ 取られた部分で漆が丁寧に磨かれて いる様子が確認できる。	19 世紀前葉以降
17	314	(11.7)	3.35	0.9	丸小尻	○	差表	漆鞘	黒漆塗		漆塗表面の凹凸に注意。装飾の可能 性?あるいは鞘尻側から 3.5cm ほど には凹凸がないため鑑装着部分と非 装着部分との使用痕の差異か。	19 世紀前葉以降
18	227	11.6	3.1	0.5		○	差裏	漆鞘	黒漆塗		乾燥のため表面にひびが入るが、漆 被膜厚く平滑であったと考えられる。 鞘尻残存しないが、先端の木質がや や厚く、鞘尻付近の部材と考える。 木質の残存よくないが、塗の被膜厚 い。	近代 (時期幅あり 要検討)
19	227	(8.0)	3.0	0.6	丸小尻	不明	不明	漆鞘	黒漆塗		漆表面に気泡あり	近代 (時期幅あり 要検討)
20	314	11.8	2.9	0.9	丸小尻	○	差裏	漆鞘	黒漆塗	切断 面 不整	変形あり (乾燥)	19 世紀前葉以降
21	314	10.3	1.65	0.9		○	差表	漆鞘	黒漆塗	工具	鞘尻は残らないが刀身のふくら部分 の削出が切先の先端部分にかかって いるため鯉口部分は残っておらず、 工具による切断と判断した	
22	322	(3.0)	(2.6)	(0.4)	丸小尻	不明	差裏 か	漆鞘	黒漆塗		腐食と乾燥により薄くなっている。	18 世紀中葉以降
23	388	(4.8)	(2.8)	(0.6)	丸小尻	△	差裏 か	漆鞘	黒漆塗	工具		18 世紀中葉以降
24	322	(2.7)	(2.9)	0.5	丸小尻	△	差裏	漆鞘	黒漆塗	工具	棟部分の刳り込みか	18 世紀中葉以降
25	665	(7.4)	(3.4)	(0.5)	丸小尻	△	差裏 か	漆鞘	黒漆塗	工具	本体が薄くなっている。	19 世紀前葉以降
26	676	短 (11.6) 長 (28.4)	短 3.2 長 3.1	短 1.7 長 2.0				白鞘か			4 個体あり最低 2 個体に接合。全体 に加工痕あり。	18 世紀中葉以降 と 19 世紀前葉の 2 時期あり
27	314	(5.6)	3.0	0.8	丸小尻	不明	差裏 か	漆鞘	黒漆塗		鞘尻付近の裏面は不整に削られた凹 凸あり。	19 世紀前葉以降

※ 12、13 は巻頭図版 15 のみ掲載

() は残存値を表す。

第21表 刀装具類他 金属製品 観察表

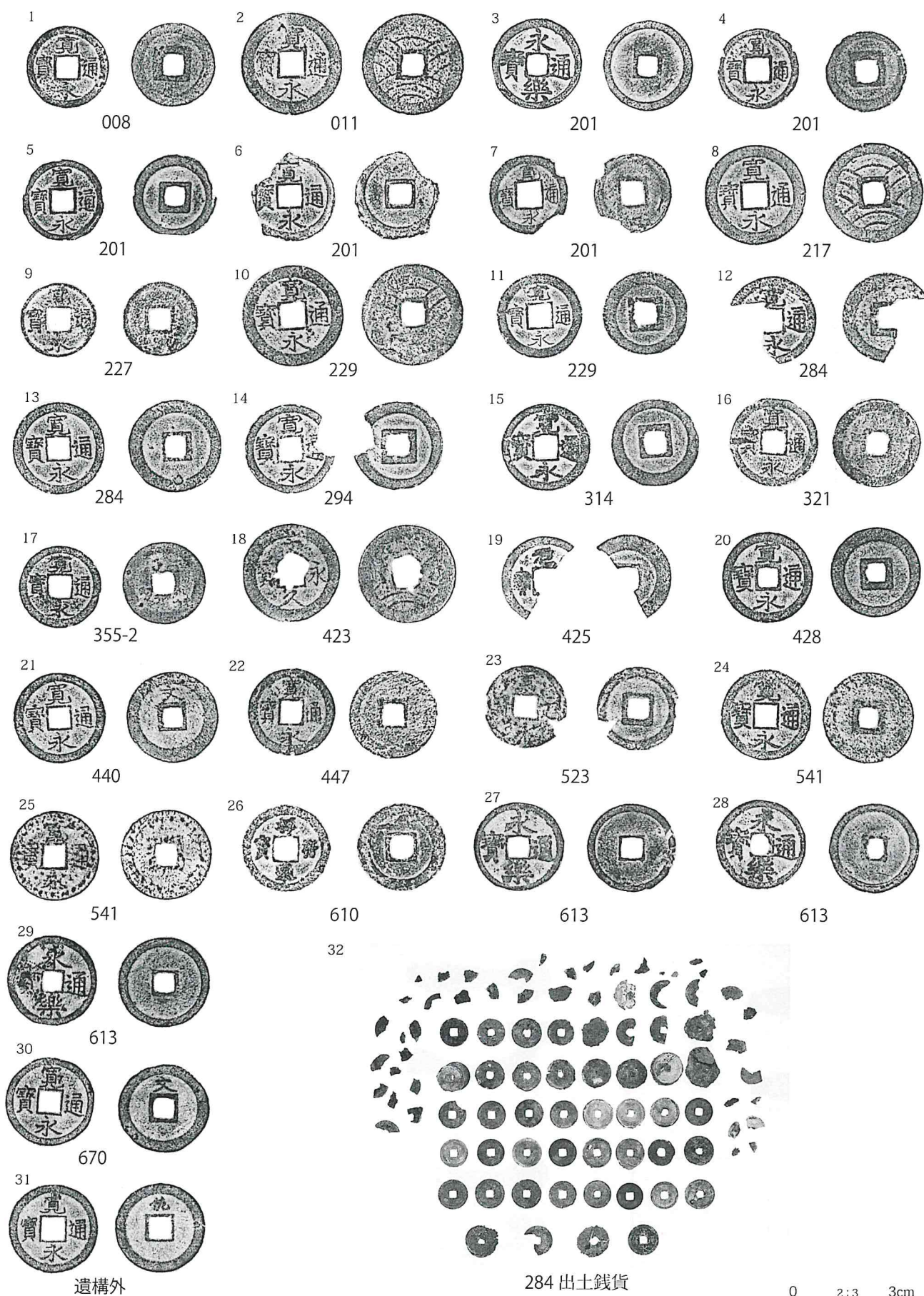
No.	遺構 番号	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
1	330	目貫	銅	縦幅 1.3	横幅 3.4	0.3	中央に花紋が2つ 添え装飾が左右につく中央の一部に透かしあり もう一方は欠損 全体的に火中している
2	201	目貫	銅	縦幅 1.35	横幅 3.3	0.4	相馬 目貫の足はなく町彫普及品か
3	388	裏瓦	銅合金	2.85	0.49 (突起 0.8)	0.08	両端に突起ありロウ付けされている
4	348	鑑	銅合金	4.4	3.4	1.9	板金 ロウ付けで合わせたのち黒漆塗 器厚: 0.09cm
5	369	切羽	銅	3.75	2.25	0.12	茎孔下方の茎厚さは尋常 江戸中期以降
6	244	切羽	銅合金	3.6 (内径 2.65)	1.9 (内径 1.1)	0.1	茎受け孔の下方は刀身に厚みがあるため豪刀か
7	303	切羽	銅合金	3.8	2.05	0.1	菊座状鑿跡あり(3か所)金属表面がめくれている合せ金の痕跡か
8	665	頭金具	銅合金	3.55	1.6	0.5	両側に鵝目穴あり 江戸前期以前 内外面漆かけている 鵝目穴の長さ: 1.2cm (右) 1.1cm (左) 鵝目穴の幅: 0.35cm (右) 0.22cm (左)
9	322	頭金具	銅	3.5	1.6	0.6	平に線刻あるいは打痕あり意匠ははっきりしない 元禄以前 鵝目穴の長さ: 1.05cm (右) 1.05cm (左) 鵝目穴の幅: 0.25cm (右) 0.32cm (左)
10	673	頭金具	銅合金	3.5	1.55	0.45	両側に鵝目穴あり 江戸前期以前 鵝目穴の長さ: 1.0cm 鵝目穴の幅: 0.3cm
11	314	带状金具	銅合金	4.8	1.0	0.1	鑿状の工具痕あり
12	348	带状金具	銅合金	4.8	2.5	0.06	黒漆塗 穿孔あり 穿孔を中心に円状の擦痕あり
13	395	板状金具	銅合金	2.75	1.8	0.09	二重鑑の内側か
14	002	小柄穂先	鉄	15.7	1.3 (区部分)	0.31	大小柄穂先を小刀に転用 大小柄は江戸初期と幕末に多く、これは茎元に小柄受けの区(まち)がなく、江戸前期以前か
15	330	小柄穂先	鉄	12.2	1.0 (区部分)	0.32	刀匠打 18世紀第3四半期以前(茎元に小柄受けの区(まち)がないため) 肉厚で作り込み良い
16	451	飾り金具	銅	約 5.35	3.2	0.05	線刻あり 七子地が確認できる 2か所穿孔あり 櫃または長持の飾り金具
17	314	飾り金具	銅合金	3.35	(9.5)	0.05	表面に擦痕あり
18	348	当て小判	銅合金	6.5	3.5	0.05	小判を模倣 上下に扇形に花文、莫薩目あり 裏なし 元文小判金(1736~1818)または文政小判金(1819~1828)に比定できる
19	348	灯心立て	真鍮	縦幅 3.5	横幅 3.6	器高 4.5	
20	678	眼鏡	銅合金	—	—	—	レンズ2枚と縁金具の一部残存。レンズ一方は平坦だが1方はRあり 鼻眼鏡 レンズの厚さ: 0.19cm (右) 0.16cm (左) レンズの径: 3.8cm (右) 3.8cm (左)
21	330	玉状装飾3点		上 0.32 右 0.26 左 0.36		0.23 0.25 0.16	玉と金属台座(大1 小1 台座のみ?) 漆碗の中の土より出土 玉状になったロウ滓か
22	314	板状金具	銅	3.32	1.9	0.15	台形 穿孔の痕跡あり半球状の打痕あり
23	314	板状金具	真鍮	3.27	2.81	0.13	台形 11と素材近い
24	348	带状金具	真鍮	(10.6)	1.69	0.14	带状金具
25	009	不明金具	鉄	4.36	1.5	0.3	
26	025	不明	銅	5.81	1.03	0.68	筒金潰れの個体であり、本来の意図不明
27	314	鑑	銅	2.75	0.44	0.08	足 1.46cm
28	330	針金	銅合金			太さ 0.15	輪の部分推径9cm、全体推定長 14.5cm
29	314	金属切片	不明	—	—	—	2点
30	314	金属切片	不明	—	—	—	16層覆土中に含まれていたもの

※21~30は巻頭図版16のみ掲載

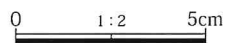
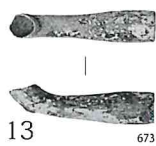
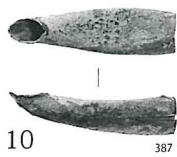
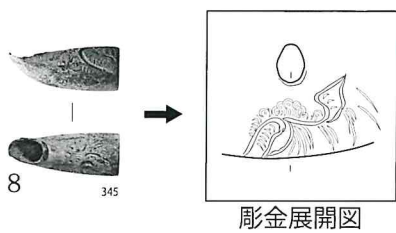
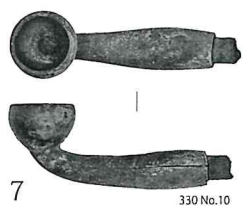
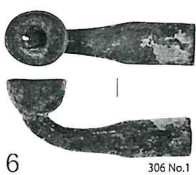
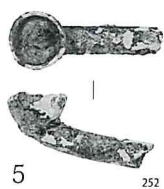
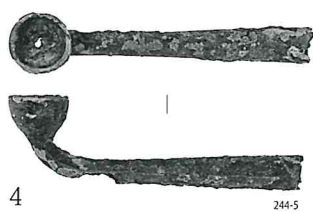
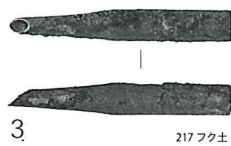
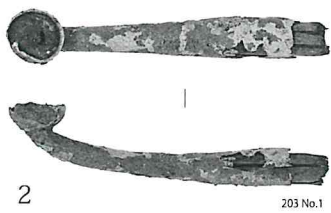
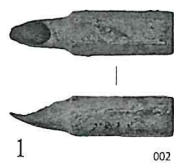
第22表 漆濾し紙 観察表

No.	遺構 番号	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	色調
31	216	漆濾し紙	紙	左 4.36 中 3.25 右 2.39	0.39 0.45 0.37	10R5/8 赤色 7.5YR3/3 暗褐色 7.5YR4/2 灰褐色
32	322	漆濾し紙	紙	左 (2.98) 左中 1.03 右中 0.78 右 1.05	0.2 0.2 0.16 0.2	10R4/3 赤褐色 10R4/3 赤褐色 10R4/3 赤褐色 10R4/3 赤褐色
33	330	漆濾し紙	紙	左 5.07 右 2.45	0.56 0.60	10YR4/3 にぶい赤褐色
34	355-2	漆濾し紙	紙	4.94	0.60	2.5YR4/3 暗赤灰色
35	381	漆濾し紙	紙	2.73	0.73	10R4/3 赤褐色
36	398	漆濾し紙	紙	2.83	0.35	10R4/4 赤褐色
37	621	漆濾し紙	紙	3.7	0.47	10YR6/4 にぶい黄橙色

※31~37は巻頭図版16のみ掲載



第 41 図 錢貨



第 42 図 煙管

第 23 表 錢貨観察表

No.	遺構 番号	錢貨名		材質	外径 (cm)	内径 (cm)	重さ (g)	備考
1	008	寛永通寶	新	銅	2.33	0.60	3.0	
2	011	寛永通寶	新	銅	2.84	0.63	5.0	裏波
3	201	永樂通寶		銀	2.55	0.57	3.0	炭化あり
4	201	寛永通寶	新	銅	2.28	0.65	2.5	4 枚癒着
5	201	寛永通寶	新	銅	2.34	0.57	3.0	4 枚癒着
6	201	寛永通寶	新	銅	2.45	0.64	(2.5)	4 枚癒着
7	201	寛永通寶	新	銅	2.20	0.69	(1.0)	4 枚癒着
8	217	寛永通寶	新	銅	2.83	0.63	5.0	裏波 (11 波) 4 文銭
9	227	寛永通寶	新	銅	2.11	0.65	2.5	
10	229	寛永通寶	新	鉄	2.84	0.68	4.0	裏波
11	229	寛永通寶	新	銅	2.38	0.63	3.0	
12	284	寛永通寶	?	銅	2.51	(0.58)	(2.0)	1/4 割れ
13	284	寛永通寶	新	銅	2.58	0.60	3.5	炭化あり
14	294	寛永通寶	古	銅	2.53	0.62	(2.5)	欠けあり
15	314	寛永通寶	古	銅	2.46	0.64	3.0	
16	321	寛永通寶	新	銅	2.45	0.63	2.5	炭化あり
17	355-2	寛永通寶	新	銅	2.30	0.63	2.0	
18	423	文久永寶		銅	2.72	—	(3.0)	裏波 真文 中心欠けあり
19	425	元豊通寶か		銅	2.48	—	(1.5)	文字潰れている 半分欠けあり
20	428	寛永通寶	古	銅	2.53	0.53	3.5	
21	440	寛永通寶	新	銅	2.55	0.57	3.5	裏に「文」
22	447	寛永通寶	新	銅	2.44	0.60	2.5	
23	523	寛永通寶	新?	銅	2.31	0.62	(1.5)	欠けあり 付着物多い
24	541	寛永通寶	古	銅	2.53	0.57	3.0	炭化あり
25	541	寛永通寶	古	銅	2.49	0.60	2.5	炭化あり
26	610	祥符通寶		銅	2.46	0.66	2.5	文字潰れている
27	613	永樂通寶		銅	2.47	0.60	2.5	
28	613	永樂通寶		銅	2.48	(0.59)	3.0	2 枚癒着 表面赤黒い
29	613	永樂通寶		銅	2.48	0.56	3.5	2 枚癒着
30	670	寛永通寶	新	銅	2.49	0.59	3.0	裏に「文」 炭化あり
31	遺構外	寛永通寶	新	銅	2.45	0.64	2.5	裏に「佐」 炭化あり
32	284	—	—	—	—	—	—	主に寛永通寶 癒着と炭化激しい 総量 168g

[] は推定値、() は残存値を表す。

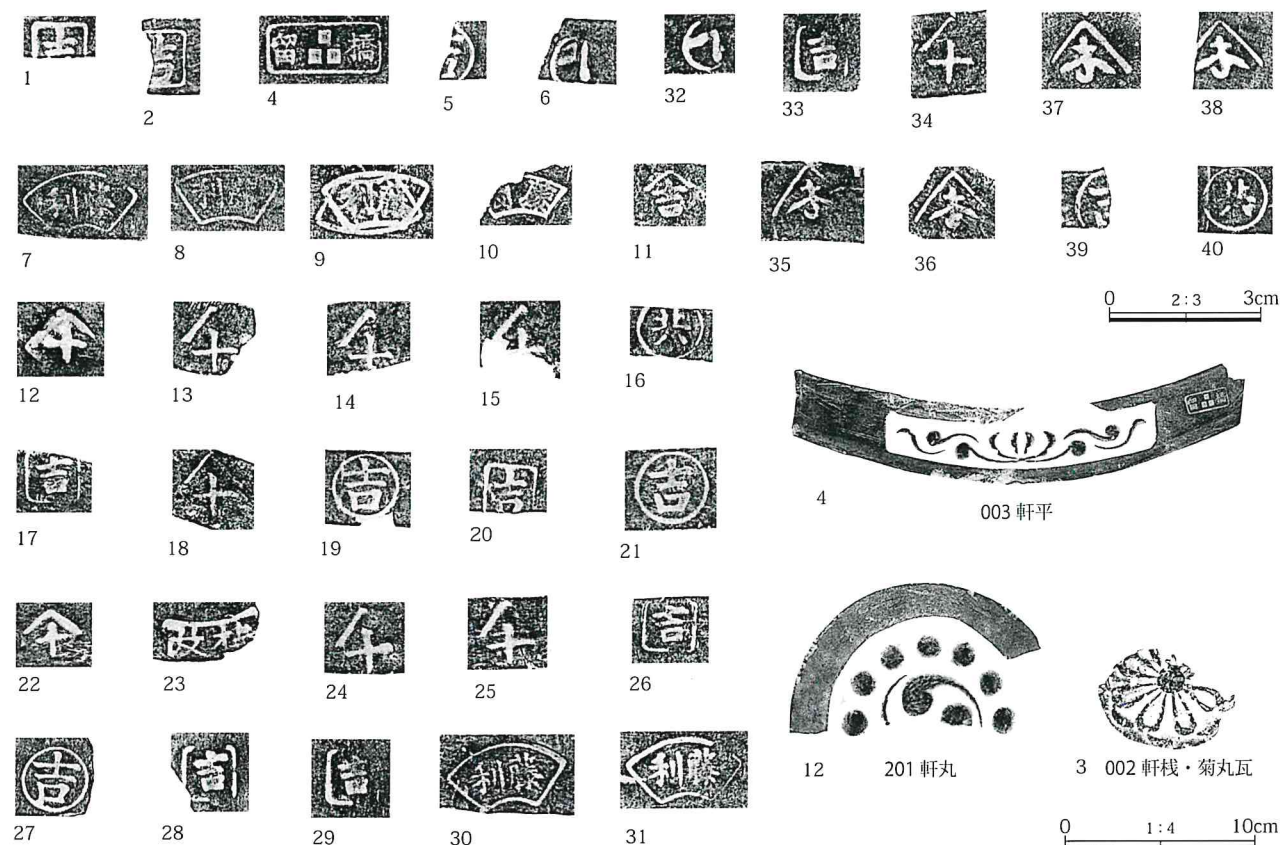
第 24 表 煙管観察表

No.	遺構		器種	材質	長さ	幅	火皿径	重さ	備考欄
1	002		雁首	真鍮	(4.37)	1.28	1.01	8.0	火皿欠損・断面六角形
2	203	No.1	雁首	真鍮	(7.44)	1.19	1.31	7.0	羅字残存
3	217	フク土	吸口	真鍮	(5.97)	0.98	—	6.0	
4	244		雁首	真鍮	(7.94)	1.07	1.36	9.5	
5	252		雁首	真鍮	(4.01)	0.74	1.22	5.5	
6	306	No.1	雁首	真鍮	4.94	1.12	1.41	7.5	羅字残存
7	330	No.10	雁首	真鍮	4.86	1.05	1.31	8.0	羅字残存
8	345		雁首	真鍮	(2.97)	1.11	0.81	5.5	火皿欠損・彫金あり
9	351		雁首	真鍮	(6.92)	0.93	0.48	5.0	火皿欠損・羅字残存
10	387		雁首	真鍮	(4.41)	1.24	0.93	3.5	火皿欠損
11	398	No.5	雁首	真鍮	(6.51)	1.15	0.51	7.0	火皿欠損
12	416		雁首	真鍮	(5.94)	1.11	0.58	6.0	火皿欠損
13	673		雁首	真鍮	(3.89)	0.83	0.61	2.5	火皿欠損
14	676	北側	雁首	真鍮	(5.46)	1.19	1.24	6.0	
15	1005		雁首	真鍮	(4.41)	0.97	1.38	4.0	
16	330	No.9	吸口	真鍮	5.03	1.03	—	4.5	羅字残存
17	330	No.22	吸口	真鍮	(6.73)	1.04	—	4.5	
18	351		吸口	真鍮	(5.58)	1.01	—	3.0	
19	387		吸口	真鍮	4.93	0.81	—	3.5	
20	386		吸口か	真鍮	(3.51)	1.06	—	2.0	羅字本貫わずかに残存
21	415		吸口	真鍮	(5.92)	1.16	—	6.0	断面六角形
22	533		吸口	真鍮	(5.11)	0.91	—	3.0	
23	440		吸口	真鍮	(5.52)	1.16	—	4.0	
24	589		吸口	真鍮	6.11	0.95	—	4.0	内部に羅字残存
25	676	北側	吸口	真鍮	5.48	0.91	—	3.0	
26	647		吸口	真鍮	5.51	1.23	—	4.5	
27	670		吸口	真鍮	7.37	0.94	—	4.0	
28		F11 グリッド	吸口	真鍮	10.11	1.24	—	15.0	大型 羅字残存

[] は推定値、() は残存値を表す。

第 25 表 その他木製品観察表

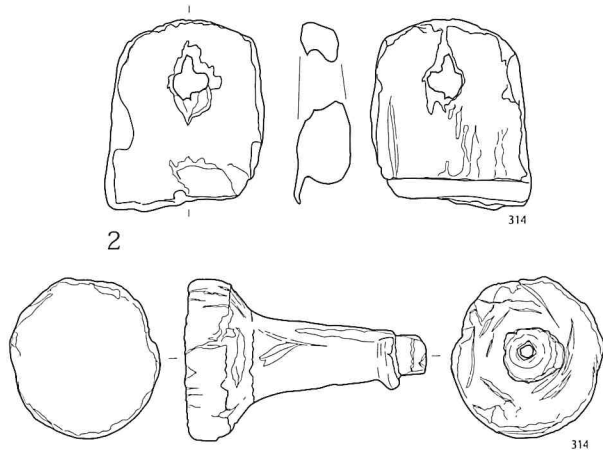
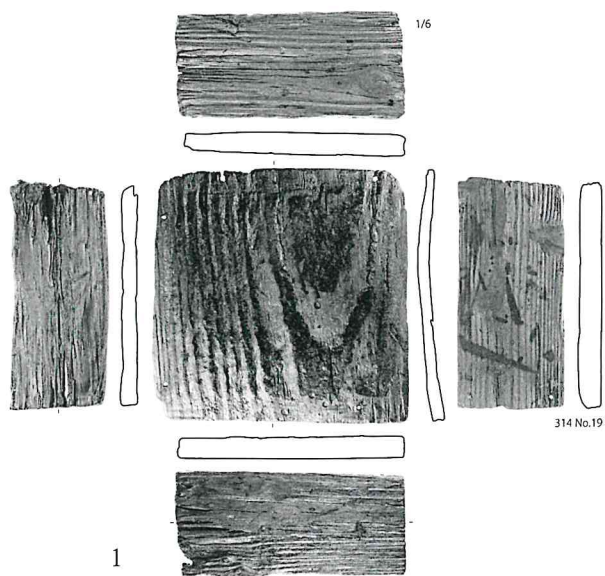
No.	出土 遺構	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
1	314	箱型木製品	20	20	9	正方形の底板に小口を 2 本の釘で平打ちして枠状にしたものを各辺 2 本の釘を用いて組み合わせる。内面の底全体と側面に枠状の施目多数入る。工具痕か。
2	314	差歯下駄	(7.6)	6.1	2.2	先端部分から
3	314	把手	9.6	最大径 6.4	最小径 2	円柱状の部品に鉄釘で接続する構造
4	330	板材	24.7	6.7	1	ほぞ穴あり ほぞ穴の周囲とほぞ穴の下 7 cm の部分で板幅狭くなる
5	367	漆付着曲物	底部径 6.7	器高 (2.4)	(0.1)	黒色の内面に付着
6	678	差歯下駄	16.5	台部 6.7 歯部 8.7	台部 0.7 ~ 1 歯部 2.4 ~ 3.5	歯先幅が台部より広がる
7	348	曲物	径 (18.0)	器高 6.5	0.5	枠部分のみ残存。



第 43 図 瓦刻印図

第 26 表 瓦刻印

刻印番号	出土遺構	瓦の種類	胎土	焼成	厚さ (cm)	刻印位置	形状	内容
1	002	平瓦	灰色	焼	1.8	小口	□	吉
2	002	棧瓦	灰色	焼	1.8	小口	□	吉
3	002	軒棧瓦	にぶい黄橙色	素焼き	1.8	一	瓦当面	
4	003	軒平瓦	灰色	焼	1.6	瓦当面	長方形	留品橋 (品は記号)
5	003	平瓦類	黄灰色	焼	1.6	小口	○	吉
6	098	平瓦類	黄灰色	焼	1.7	小口	○	八?
7	201	平瓦類	灰色	焼	1.8	小口	扇型	利藤
8	201	棧瓦類	灰色	焼	1.8	小口	扇型	利藤
9	201	軒平瓦	灰色	焼	1.7	瓦当面	扇型	利藤 (上下に重なっている)
10	201	平瓦類	灰色	焼	1.9	小口	扇型	■藤
11	201	平瓦類	灰色	焼	2.1	小口	山型	吉
12	201	軒丸瓦	灰色	焼	2.0	凸面	山型 (菱形?)	十
13	240	棧瓦	にぶい橙色	素焼き	1.8	小口	山型 (右側欠けて短い)	十
14	240	棧瓦	にぶい橙色	素焼き	1.9	小口	山型 (右側欠けて短い)	十
15	240	棧瓦	灰黄色	素焼き	1.7	小口	山型 (右側欠けて短い)	十
16	240	軒平・軒棧瓦	にぶい黄橙色	素焼き	1.8	瓦当面	○	共
17	240	棧瓦	灰色	焼	1.7	小口	□	吉
18	242	平瓦類	暗灰色	焼	1.9	小口	山型 (右側欠けて短い)	十
19	258	平瓦類	灰色	焼	1.9	小口	○	吉
20	290	平瓦類	黄灰色	焼	1.8	小口	□	吉
21	294	平瓦類	灰色	焼	2.0	小口	○	吉
22	294	平瓦	黄灰色	焼	1.7	小口	山型	十
23	305	棧瓦類	灰色	焼	1.8	小口	逆さ扇型	改梅?
24	374	棧瓦	にぶい橙色	素焼き	1.8	小口	山型	十
25	374	棧瓦	にぶい橙色	素焼き	1.8	小口	山型	十
26	374	棧瓦	灰色	焼	1.7	小口	□	吉
27	374	棧瓦	にぶい褐色	焼	1.9	小口	○	吉
28	374	丸瓦	灰色	焼	1.7	凸面	□	吉
29	374	丸瓦	灰色	焼	1.9	凸面	□	吉
30	374	棧瓦	灰色	焼	1.8	小口	扇型	利藤
31	374	軒棧瓦	灰色	焼	1.8	瓦当面	扇型	利藤
32	386	棧瓦	にぶい黄橙色	素焼き	1.9	小口	○	八
33	433	丸瓦	灰色	焼	1.7	凸面	□	吉
34	564	棧瓦	灰色	焼	1.9	小口	山型	十
35	622	棧瓦	橙色	素焼き	1.7	小口	山型	木? (ハネ大きい)
36	622	破片	にぶい褐色	素焼き	1.9	小口	山型	木? (ハネ大きい)
37	622	丸瓦	明黄褐色	素焼き	2.0	凸面	山型	木? (ハネ大きい)
38	622	丸瓦	灰色	焼	2.0	凸面	山型	木? (ハネ大きい)
39	637	棧瓦類	灰色	焼	1.6	小口	○	吉
40	西壁セクション	棧瓦類	灰色	焼	1.9	小口	○	共

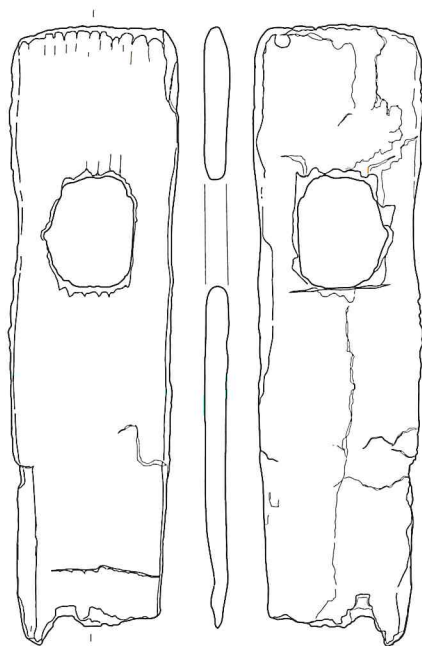


1

2

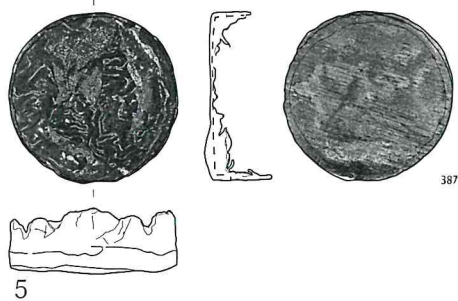
314

3



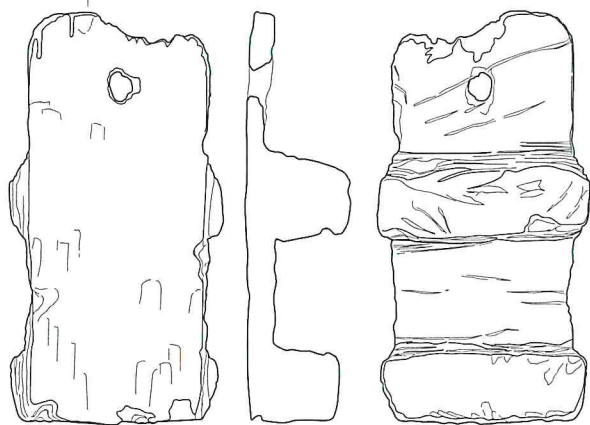
4

330



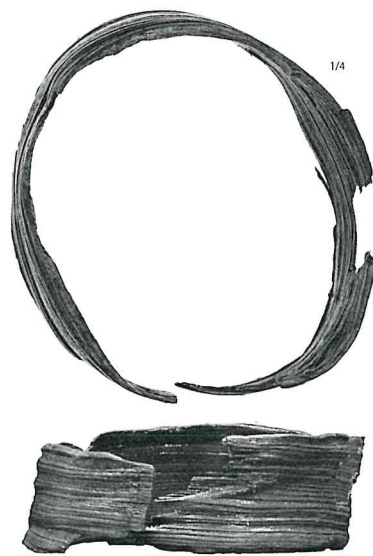
5

387



6

678



7

384

0 1:3 10cm 0 1:4 10cm 0 1:6 10cm

第 44 図 その他木製品



第 45 図 中世の遺構



第 46 図 古代の遺構

6. 中世の遺構と遺物（第 45 図）

第 2 面と第 3 面において検出された遺構である。面の違いは調査の手順に由来するもので、堆積土は基本層序 VI 層とした、As-B を多量に含む暗褐色砂（B 混土）を主体としている。遺構としては溝跡（350、1001）と井戸跡（606）、土坑（666）、Pit（626）、浅井戸と考えられる近接した深い土坑 3 基（580、568・1028、1027）があり、溝からは 15 世紀代と推定されるカワラケ、井戸跡から志野皿、土坑・Pit から 15 世紀代の内耳土器の破片が出土している。

溝跡（350、1001）は、途中を近世後半の大規模な池状遺構によって破壊・分断された、本来は同一と考えられるもので、特に 1001 とした西端近くでは複数回掘りなおされ、部分的な水流痕跡も認められる。カワラケが僅か 1 点出土している他、流れ込みと考えられる古代の土師器・須恵器の細片が出土した。問題となるのはその走軸で、後述する条里型地割とも、近世以降の町割とも異なる。烏川の浸食した崖線に直行しており、中世鎌倉街道に直行とも言える。その性格は俄かに断じ難いが、何らかの区画であった事は明白であろう。井戸跡（606）、土坑（666）、Pit（626）は調査区北東で互いに近い位置関係にある。遺物の出土を根拠としたが、下位の第 3 面で検出された礎盤石をもつ Pit は中世の可能性もある。しかしながら調査精度の問題もあり、明確な建物跡としての認定は叶わなかった。とはいえ井戸跡や土坑の存在、内耳鍋の出土からは、調査区北東部は生活の場であった可能性が高い。反面、調査区西端から近接して検出された浅井戸は出土遺物皆無で、生活臭は希薄であることを思えば農業用であった可能性が考えられよう。これら遺構・遺物は、高崎城以前の土地利用を考える上で興味深い存在であるが、如何せん断片的な情報であり、残念ながら検討に耐えうるものではない。和田城跡との関係も含め、今後の課題としたい。

7. 古代の遺構と遺物（第 46 図）

第 3 面として調査を行ったもので、As-B 直下の水田関係遺構が検出された。水田跡は、低く潰れ気味の畦畔によって区画された田面を計 16 面確認した。田面は東西方向では東へ行くほど標高が低くなるが、南北方向では標高にほぼ差がなく、基本的に水掛かりは西から東の方向性をもっていたことは明らかである。水口は近世以降の攪乱が激しい為に大半不明であるが、田面②の南東隅と、③との間の畔に 1 か所確認できた。水口の在り方からは、田面の標高差にほとんど現れないような傾斜、北から南への水掛かりも推定される。各田面は大小の長方形を呈しているが、完掘できた田面は無い。

畦畔は、畦畔が丁字ないしは十字に交差することで田面を区画している。田面②の北辺のように畦畔がほぼ直角に屈曲する場合、あるいは田面②・③間のようにやや蛇行気味なもの等々だが、基本的には正方位を意識していると考えられ、条里型地割と呼ぶに相応しい。また、田面⑤・⑩間の東西方向の畔は一際幅広で、いわゆる大畦畔と認定される。南北方向の大畦畔こそ調査区内では確認できなかったが、少なくとも東西方向の大畦畔は、条里の坪線に相当していたと思われる。

畦畔以外に、田面からは歩行列と判断される、不規則に乱れた部分が 2 か所、帯状に認められた。歩行列 1 は田面⑨・⑫間の畦畔上から田面⑤・⑪間の大畦畔にかけて L 字状に検出されたもので、複数の列が束となった状態であった。歩行列 2 は田面⑥・⑦間の畦畔を踏んだ状態で検出され、歩行列 1 の延長にあることから同一遺構と考えられる。歩行列以外に、田面②の南端西寄りから、東西方向の「へこみ」が検出された。幅 0.5 m、長さ 1.5 m 程度で底面は平滑であることから、歩行列を牛馬とすれば、「へこみ」は人間の歩行によって形成された可能性があるだろう。

今回の As-B 直下の水田跡は、条里型地割に則って形成され、その後の使用で各田面が変貌した後、放棄された様子を示していると考えられる。そして耕作を放棄された草原の中を、条里型地割の畦畔を意識するかのよう、牛馬を連れた人々が時折往来する景観があったと推定される。

条里型地割の復元は、高崎市街地での調査事例が極端に少ない為、今回は言及を控える。ただ、本遺跡の北東 0.8m の江木諏訪西遺跡の As-B 直下では条里型地割の水田跡が検出されているし、東方 0.6m の八島町遺跡の Hr-FA 混土層下の水田跡も条里型地割の可能性もある。なお、八島町遺跡の As-B 直下では不定形な田面、しかも耕作放棄されていた可能性が指摘されており、今回調査の As-B 直下と、田面や畔の状況は類似しているようである。今後の検討課題としたい。

第IV章 宮元町遺跡の自然科学分析

株式会社 古生態研究所

はじめに

江戸時代の鞘工房跡と考えられる地点から出土した刀剣の柄及び鞘、端材、炭化材を対象として、用材選択を検証するための樹種同定を実施した。また、埴塼等に付着した金属や目貫の金属組成を明らかにするための蛍光 X 線分析を実施した。

I. 樹種同定

1. 試料

試料は、刀剣の鞘と柄 25 点、一括採取された木屑から抽出した 3 点、一括採取された炭化材から抽出した 5 点の合計 33 点である。

2. 分析方法

鞘と木屑は、木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）、柁目（放射断面）、板目（接線断面）の 3 断面について徒手切片を直接採取した。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとした。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察した。炭化材は自然乾燥させた後、3 断面の割断面を作製し、アルミ合金製の試料台に固定した。走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察した。各試料で観察された特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定した。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にした。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にした。

3. 結果

刀剣の鞘と柄の樹種同定結果は、第 33 表に併せて記した。木屑と炭化材の樹種同定結果を第 25 表に示す。刀剣の鞘と柄は広葉樹 2 分類群（モクレン属、コナラ属コナラ節）、木屑は針葉樹 2 分類群（ヒノキ、スギ）とタケ亜科、炭化材は針葉樹 1 分類群（マツ属複維管束亜属）と広葉樹 1 分類群（クリ）に同定された。なお、鞘の No. 13 は、塗膜片に僅かに木部が残っている資料である。広葉樹であることは確認できたが、観察範囲が狭いために種類は不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15 細胞高。

・ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1 分野に 1～3 個。放射組織は単列、1～10 細胞高。

第 27 表 木屑と炭化材の樹種同定結果

遺構	時期	試料名	器種	木取り	樹種
314	19 世紀 前葉以降	木屑 1	木屑	柁目	スギ
		木屑 2	木屑	板目状	タケ亜科
		木屑 3	木屑	柁目	ヒノキ
252	18 世紀 中葉以降	炭化材	木炭	破片	マツ属複維管束亜属
				破片	マツ属複維管束亜属
				角棒状	クリ
				破片	クリ
				破片	クリ

・スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don ヒノキ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・モクレン属 *Magnolia* モクレン科

散孔材。道管は単独または2～4個が放射方向に複合して散在する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は階段状～対列状となる。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～40細胞高。

・コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

環孔材。年輪の始め(早材部)に大型の道管が1～2列配列した後、急激に道管径を減少させる。晩材部では小径の道管が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科クリ属

環孔材。年輪の始め(総葉部)に大型の道管が3～4列配列した後、急激に道管径を減少させる。晩材部では小型の道管が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・タケ亜科 subfam. Bambusoideae イネ科

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成するが、繊維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

4. 考察

刀剣の鞘と柄、木屑、炭化材には合計7分類群が認められた。各分類群の材質等についてみると、針葉樹のマツ属複維管束亜属は、本州ではアカマツまたはクロマツである。アカマツは二次林、クロマツは海岸砂丘等に生育するほか、各地で植林される常緑高木である。マツ属複維管束亜属の木材は、強度と保存性が比較的高い。ヒノキは山地・丘陵地、スギは谷筋や沖積地等に生育する他、各地で植栽される常緑高木である。木材はいずれも割裂性と耐水性が比較的高い。広葉樹のモクレン属は、溪畔や二次林等に生育する落葉高木であり、木材は軽軟で強度と保存性は低い。コナラ節は、二次林の主要な較正種となるコナラや山地の冷温帯性落葉広葉樹林の主要な較正種となるミズナラ等を含む。いずれも落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。クリは、二次林等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。タケ亜科は、木屑の大きさと木取りから、比較的大型の種類と考えられる。大型のタケ亜科には、マダケやモウソウチクなど、植栽されて竹林を形成する種類が含まれる。材は、強度、靱性、耐水性が比較的高い。

刀剣の鞘と柄についてみると、塗膜片で木部の観察範囲が狭いために広葉樹としたNo.13と白鞘?とされるNo.26を除く資料が全てモクレン属に同定された。18世紀中葉以降、18世紀後葉以降、19世紀前葉以降の資料があり、端部の作り方などから複数の形態が含まれているが、時期や形態による樹種の違いは認められなかった。この結果から、鞘や柄の素材としてモクレン属が継続的に利用されていたことが推定される。

刀剣の鞘については、寛政13(1801)年の「万金産業袋」に、「刀脇差ともに、鞘の下地はみな厚朴(ホオノキ)なり」と記され、その理由として木材に油脂が少なく、磁石を隔てる効果があることを挙げている。また、「木材ノ工芸的利用」(農商務省山林局,1912)には、刀剣類の鞘・柄ともにホオノキを用いることが記されており、その理由として樹液が少なく、刀身に錆が生じる恐れが少ないこと、秋材部分も柔らかく刀を引くことが無いこと、良く乾燥すれば割裂や狂いを生じることが無いこと等を挙げている。鞘と柄の木取りについてみると、側面が柂目になる資料が多いが、東京都練馬区に残る刀剣鞘師の聞き取り調査ではホオノキの柂目材を使うとされている(東京都教育庁生涯学習部文化課,1994)。鞘及び柄の樹種同定結果や木取りは、こうした記述とも整合的である。一方、高崎藩では、右京柄と呼ばれる刀装があり、その素材として外国産木材である紫檀(シタン)、黒檀(コクタン)、カリン、タガヤサン(鉄刀木)が挙げられている(平野・小山,2007)。今回の資料中にも右京柄の可能性のある資料が含まれ

ているが、右京柄の素材として挙げられている樹種は確認できなかった。伊東・山田（2012）のデータベースによれば、江戸時代の調査事例が2万点を超える東京都の事例でも外国産木材はシタン属等が数例認められる程度であり、その確認数は非常に少ない（伊東・山田,2012）。外国産木材の利用は、特別なものに限られていた可能性がある。

白鞘？とされるNo.26は、削出棒状の資料であり、鞘とすれば未成品である。同じ木取りの資料が2点（短・長）あり、接合することができないが、木目の状況と樹種が同じコナラ節であることから、同一個体に由来する可能性がある。刀剣鞘の未成品として見た場合、側面が柃目になる状況は他の鞘材と同様である。一方、コナラ節は鞘と柄には認められず、またモクレン属とは材質が異なることから、鞘や柄とは異なる可能性もある。

木屑は、何らかの加工で生じた端材に由来する可能性がある。いずれも板状を呈しており、ヒノキ、スギ、タケ亜科が認められた。スギやヒノキは、伊東・山田（2012）のデータベースをみても、江戸時代に利用の多い樹種であり、高崎藩に関連する資料でも曲物、樽、板など、板状の加工を施す器種を中心に多くの報告例がある。これらの木屑が鞘工房内での加工に伴うものとすれば、鞘や柄以外の加工も行っていた可能性を示唆する。

炭化材は、全体が均質に炭化しており、燃えさし等が炭化したものではなく、意図的に製炭した木炭の可能性はある。

炭化材はマツ属複雑管束亜属とクリに同定され、マツ炭とクリ炭が混在した状態が推定される。マツ炭は軽軟で燃焼性が高い。クリも生木は重硬であるが、製炭すると柔らかく燃焼性の高い炭になる。民俗事例では、マツ炭とクリ炭は高い火力から鍛冶燃料材として利用される（岸本・杉浦,1980）。本調査区では金属を溶解するための坩堝等が出土していることから、こうした金属加工のため燃料材として高い火力を有するマツ炭とクリ炭が利用された可能性がある。

II. 蛍光 X 線分析

1. 試料と方法

分析対象は、カワラケ2点に付着する溶融物と、目貫1点である（第28表）。時期は、近世～近代とみられている。カワラケ2点は、溶融物が付着する内面について、元素マッピング分析および特徴的な

第28表 蛍光 X 線分析試料

分析 No.	遺物 No.	出土 遺構	種別	器種	残存部位	元素 マッピング	通常の 蛍光 X 線
1	211	355	土器	カワラケ	口縁～底部	○	
2	186	330	土器	カワラケ	口縁～底部	○	
3	1	330	金属製品	目貫	完形		○

箇所ポイント分析（照射径100 μ m）を行った。

目貫は、精密グラインダーを用いて裏面の一部の錆を除去した金属面について、通常の蛍光 X 線分析（照射径1mm）を行った。

元素マッピング分析には、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置の一種である株式会社堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-9000 を使用した。装置の仕様は、X 線管が最大50kV、1000 μ A のロジウム（Rh）ターゲット、キャピラリ径が100 μ m または15 μ m、X 線検出器は SDD 検出器で、検出可能元素は炭素（C）～アメリシウム（Am）である。本装置は、試料ステージを走査させながらの測定により

第29表 蛍光 X 線分析装置仕様

		SEA1200VX	XGT-9000
管球	最大電圧	50kV	
	最大電流	1000 μ A	
	ターゲット	Rh	
照射径		8mm or 1mm	100 μ m or 15 μ m
集光素子		コリメータ	ポリキャピラリ
一次フィルタ		内臓（4種）	無し
照射方式		下面照射	上面照射
検出機構		エネルギー分散型	
検出器		SDD	
検出可能元素		Na～U	C～Am
元素 マッピング分析		不可	可能

元素マッピング分析が可能となる。元素マッピング分析を行った後、さらにマッピング図を基に特徴的な箇所を選び、ポイント分析を行った。元素マッピング分析の測定条件は、管電圧50kV、管電流1000 μ A（自動設定）、キャピラリ径100 μ m、ピクセルタイム180msを1回走査で測定後、ピーク分離を行った。ポイント分析の測定条件は、管電圧50kV、管電流自動設定、キャピラリ径100 μ m、測定時間500sに設定し、定量分析はノンスタンダード FP 法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。得られた値は、合計が100%になるようノーマライズされている。

第 30 表 カワラケの元素マッピング図中ポイントの半定量分析結果 (mass%)

分析 No.	位 置	Ni	Cu	Zn	As	Se	Ag	Sn	Au	Pb	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O5	SO3	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3
1	a	—	92.56	—	0.10	0.02	—	—	—	0.30	—	—	0.81	1.41	4.00	0.20	—	0.28	—	—	0.32
	b	0.09	11.26	0.20	0.30	—	—	38.63	—	1.39	—	1.09	4.99	17.17	5.40	0.21	—	8.91	0.42	0.18	9.73
	c	0.05	18.28	0.05	0.11	—	—	0.45	—	9.58	—	1.02	14.60	43.69	2.54	0.33	1.49	2.97	0.73	0.13	3.98
	d	0.02	10.17	0.09	2.13	—	—	0.54	—	1.35	—	0.99	8.09	34.05	11.38	0.20	1.89	22.86	0.40	0.06	5.79
	e	—	1.12	2.37	—	—	—	—	—	0.19	1.49	1.35	18.08	53.78	3.44	0.55	3.83	5.54	1.01	0.16	7.10
	f	—	73.76	—	0.24	—	—	—	—	0.51	—	0.47	1.33	3.38	14.50	0.37	—	2.13	0.08	0.30	2.95
2	a	—	86.26	—	0.07	0.02	0.32	0.39	1.81	0.08	—	—	1.32	2.71	5.70	0.43	—	0.57	0.04	—	0.27
	b	0.08	14.65	0.21	0.67	—	0.05	29.84	—	1.48	—	0.37	4.71	15.09	16.94	0.23	—	4.37	0.18	0.06	11.09
	c	—	42.86	0.20	0.21	—	3.04	—	19.01	0.13	—	0.58	7.52	12.81	8.80	0.88	0.07	2.25	0.28	—	1.37
	d	0.03	5.67	0.21	4.94	—	—	16.46	—	0.78	—	—	10.62	33.51	8.94	0.18	0.31	6.36	0.64	0.05	11.29
	e	0.03	18.62	0.19	1.32	0.08	0.65	2.72	6.98	1.83	—	0.22	9.72	38.04	5.71	0.64	0.28	5.37	0.46	0.02	7.12

通常の蛍光 X 線分析には、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX を使用した。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV、1000 μ A のロジウム (Rh) ターゲット、X 線照射径が 8mm または 1mm、X 線検出器は SDD 検出器である。また、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入して複数条件で測定することで S/N 比の改善が図れ、先述の XGT-9000 よりも微量元素の検出に優れる。検出可能元素はナトリウム (Na) ～ウラン (U) である。測定条件は、管電圧 50kV、一次フィルタ Pb 測定用・Cd 測定用の 2 条件、測定時間 (s) が 300s・1000s、管電流自動設定、照射径 1mm、試料室内雰囲気は大気に設定した。定量分析は、ノンスタンダード FP 法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。得られた値は、合計が 100% になるようノーマライズされている。

第 29 表に各蛍光 X 線分析装置の仕様の一覧を示す。蛍光 X 線分析は表面分析であり、均一とは限らない遺物の正確な組成比を必ずしも示しているとはいえないが、おおよその化学組成、含まれている微量元素を知る上では非常に有効な手法である。

2. 結果

カワラケ内面の元素マッピング分析により得られたケイ素 (Si)、銅 (Cu)、亜鉛 (Zn)、ヒ素 (As)、銀 (Ag)、スズ (Sn)、金 (Au)、鉛 (Pb) のマッピング図を図版 2、3 に、各マッピング図に示した a、b、c、…の各ポイントの半定量分析結果を表 4 に示す。ポイント分析で検出された金属元素は、ニッケル (Ni)、銅 (Cu)、亜鉛 (Zn)、ヒ素 (As)、セレン (Se)、銀 (Ag)、スズ (Sn)、金 (Au)、鉛 (Pb) である。

目貫の金属露出部の蛍光 X 線分析により得られた半定量分析結果を第 29 表に示す。鉄 (Fe)、銅 (Cu)、ヒ素 (As)、銀 (Ag)、スズ (Sn)、アンチモン (Sb)、鉛 (Pb) が検出された。

第 31 表 目貫の半定量分析結果 (mass%)

分析 No.	Fe	Cu	As	Ag	Sn	Sb	Pb
3	0.35	98.50	0.39	0.03	0.32	0.01	0.40

3. 考察

分析 No.1 のカワラケは、元素マッピング分析では、銅 (Cu)、鉛 (Pb) の輝度が高い箇所との分布がみられた。また、亜鉛 (Zn)、ヒ素 (As)、スズ (Sn) も、一部の分布ながら輝度の高い箇所がみられた。ポイント分析においては、銅 (Cu)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) の含有量の多い箇所が確認され (ポイント a～c)、亜鉛 (Zn) とヒ素 (As) の含有量がやや多い箇所が確認された (ポイント d、e)。ほかに、微量のニッケル (Ni)、セレン (Se) が検出された。青銅 (銅とスズの合金) や真鍮 (銅と亜鉛の合金) といった類の銅合金の溶解に利用されたと考えられる。

第 32 表 分析結果一覧

分析 No.	遺物 No.	器種	主な検出元素	推定される金属素材
1	211	カワラケ (溶融物 付着)	Cu,Sn,Pb,Zn,As	青銅、真鍮
2	186	カワラケ (溶融物 付着)	Cu,Sn,As,Pb,Au,Ag	青銅、赤銅 or 金
3	1	目貫	Cu	銅

分析 No.2 のカワラケは、元素マッピング分析では、銅 (Cu)、ヒ素 (As)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) の輝度が高い箇所
の分布がみられた。ポイント分析においても、銅 (Cu) やスズ (Sn) の含有量が多い箇所が確認され (ポイント
a、b、d)、ヒ素 (As) や鉛 (Pb) の含有量がやや多い箇所も確認された (ポイント b、d)。青銅の類の銅合金の溶
解に利用されたと考えられる。また、元素マッピング分析では金 (Au) や銀 (Ag) の輝度が高い箇所が点在しており、
ポイント分析においても特に金 (Au) が多く含まれる箇所が確認された (ポイント c、e)。しかし、該当箇所を実体
顕微鏡で観察したが、金粒などは特に確認できなかった。表面的に視認できないが蛍光 X 線では検出できる程度の
深さに金粒が埋もれている可能性や、銅 (Cu) も多く伴っているため、赤銅 (銅と金の合金) の類の溶解に利用さ
れていた可能性が考えられる。ほかに微量のニッケル (Ni)、亜鉛 (Zn)、セレン (Se) が検出された。

分析 No.3 の目貫は、ほぼ銅 (Cu) のみからなる化学組成であった。ほかに、微量の鉄 (Fe)、ヒ素 (As)、銀 (Ag)、
スズ (Sn)、アンチモン (Sb)、鉛 (Pb) が検出された。

各遺物から検出された主な金属元素と推定される金属素材を第 32 表に示す。

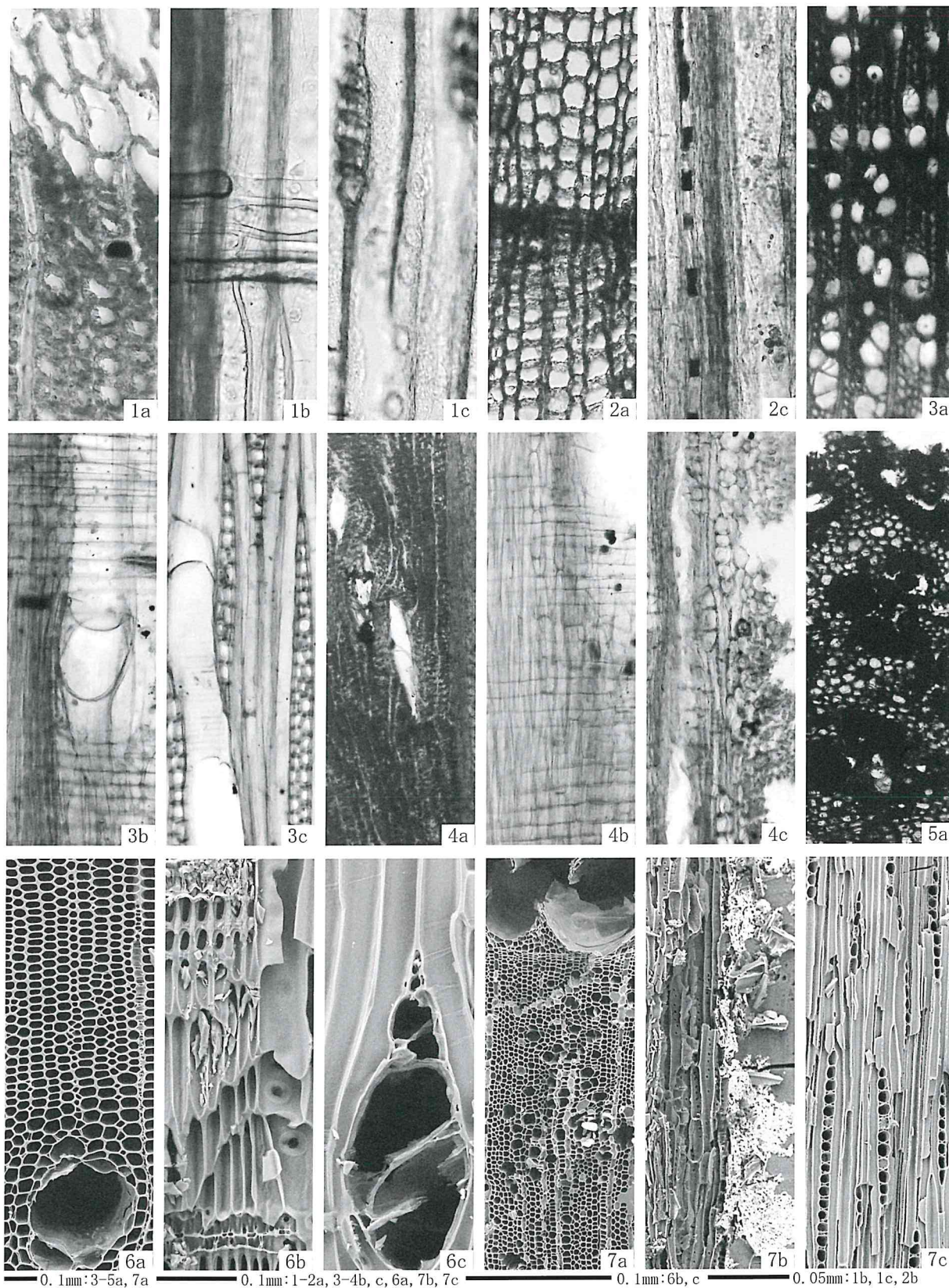
第 33 表 刀剣鞘及び柄の樹種同定結果

遺構	遺物	No.	時期	器種	木取り	樹種	備考
227	19	覆土	近代	漆鞘	柾目	モクレン属	
227	11	覆土	近代	漆鞘	柾目	モクレン属	
227	8	覆土	近代	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	15	1	19 世紀前葉以降	漆鞘	追柾状	モクレン属	
314	4	3	19 世紀前葉以降	(漆鞘)	柾目	モクレン属	
314	17	10	19 世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	7	11	19 世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	9	12	19 世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	6	33	19 世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	10	34	19 世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	16	覆土	19 世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	27	覆土	19 世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	21	覆土	19 世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	20	覆土	19 世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
322	—	5	18 世紀中葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	報告書未掲載
322	24	10	18 世紀中葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
322	14	14	18 世紀中葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
322	1	15	18 世紀中葉以降	柄	柾目	モクレン属	
398	2	1	19 世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
665	3	3	19 世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
665	25	4	19 世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
676	26			白鞘? (短)	削出	コナラ属コナラ節	
676	26			白鞘? (長)	削出	コナラ属コナラ節	
678	5	13	18 世紀後葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
313	13			漆鞘	柾目?	広葉樹	塗膜片

引用・参考文献

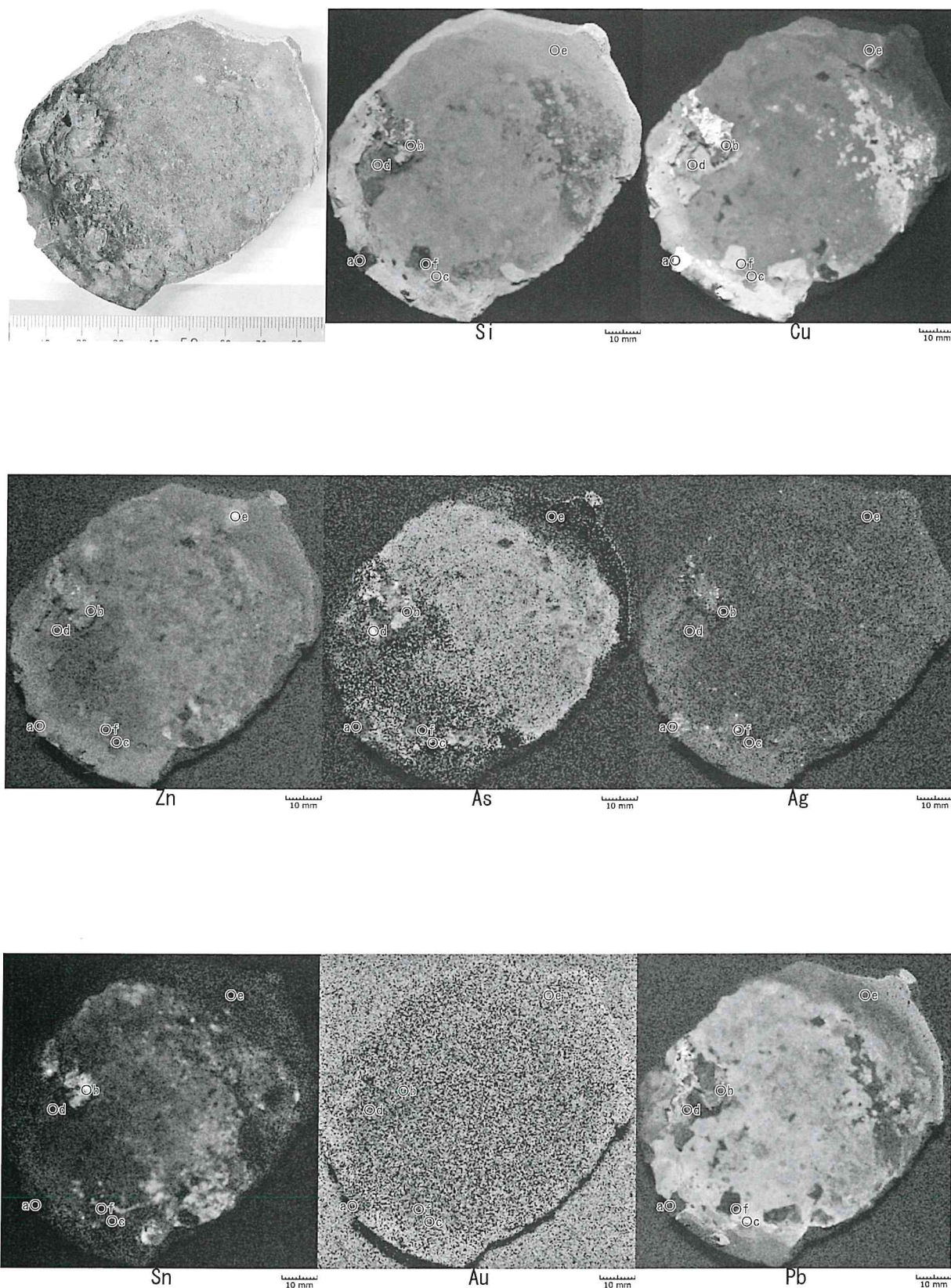
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所。
 平野進一・小山友孝,2007,右京柄考—上野国高崎藩の特色ある刀装について。群馬県立歴史博物館紀要,28,93-115。
 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ。木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181。
 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ。木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176。
 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ。木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201。
 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ。木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166。
 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ。木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216。
 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース,海青社,444p。
 香取正彦・井尾敏雄・井伏圭介,1986,金工の伝統技法,理工学社,230p。
 岸本定吉・杉浦銀治,1980,日曜炭やき師入門,総合科学出版,250p。
 村上 隆,2003,金工技術,日本の美術,443,至文堂,98p。
 長野 裕・井尾建二,1998,金工の着色技法,理工学社,157p。
 中井 泉(編),2005,蛍光 X 線分析の実際,朝倉書店,242p。
 農商務省山林局(編著),1912,木材ノ工芸的利用,大日本山林会,1308p。
 Richter H.C.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日
 本語版監修),海青社,70p。
 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p。
 東京都教育庁生涯学習部文化課,1994,江戸東京の諸職 下,東京都諸職関係民俗文化財調査報告,385p。
 Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p。

第47図 木材・炭化材



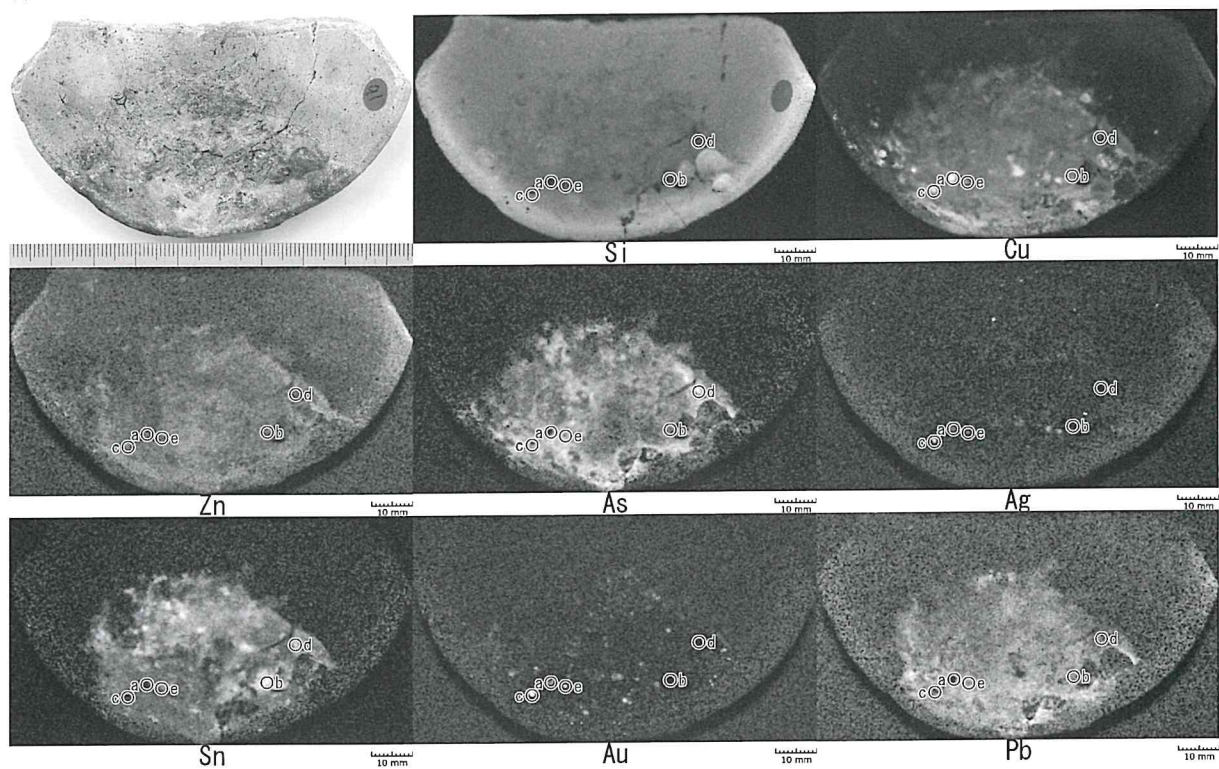
1. ヒノキ(木屑3)、2. スギ(木屑1)、3. モクレン属(No.6)、4. コナラ属コナラ節(No.26)、5. タケ亜科(木屑2)、6. マツ属複維管束亜属(252遺構;炭化材)、7. クリ(252遺構;炭化材) a:木口,b:柁目,c:板目

第 48 図 溶融物付着土器（分析 No. 1）内面の元素マッピング図



Si : ケイ素 Cu : 銅 Zn : 亜鉛 As : ヒ素 Ag : 銀 Sn : スズ Au : 金 Pb : 鉛

第 49 図 溶融物付着土器（分析 No. 2）の元素マッピング図および目貫（分析 No. 3）の測定位置



Si : ケイ素 Cu : 銅 Zn : 亜鉛 As : ヒ素 Ag : 銀 Sn : スズ Au : 金 Pb : 鉛

第V章 総括

今回の宮元町遺跡の調査においては、非常に多くの知見が得られたが、膨大な遺構・遺物量からすべての成果を提示することは難しかった。ここでは、数多く検出された遺構の変遷を時期別に整理することで、不足を補いたい。

また、江戸時代から続く地名である「鞘町」から数多くの鞘や柄、刀装具類が検出されたことは特記される。それらの観察や調査時の知見から、高崎城下における職人町の実態について若干の考察を加えることで、本調査の総括としたい。

1. 城下町の区画

検出された遺構のうち、区画溝、排水溝等で区切られた区画は町域、あるいはその中での町屋の区画を表し、それぞれが様相を異にする。また、間隙地としての機能を果たしていたと考えられる部分がある。今回の調査区では、まず 201 や中央の南北の区画、あるいは 1008 を含む東西の区画がそれにあたる。各時期で大型の遺構が多く、土取りや集水など公共の用途に用いられた性格の遺構が多い。鞘町側は現在まで踏襲されている町屋の区画が残り、今回は 5 軒分の範囲に及んでいる（図 50 図 町屋①～⑤）。

町屋①は近世において比較的早い段階から遺構が現れ始める。18 世紀中葉以降と 19 世紀前葉以降廃絶の土坑から鞘片や取鍋などが検出され、当該期には金属加工を伴う加工を行っていたと考えられる。これらの遺構は主に西側に分布する。

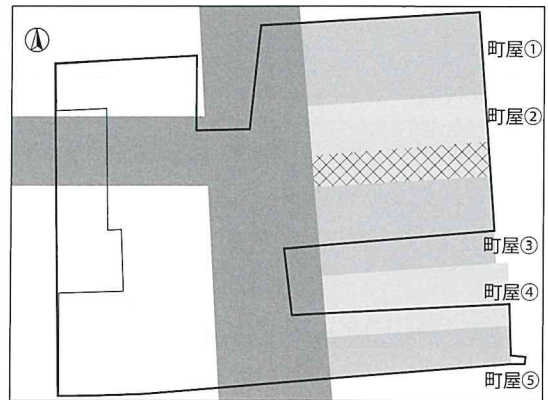
町屋②は両隣の区画とは性格が異なる。取鍋などの金属加工の痕跡はほとんど見られない。比較的近世期の盛り土が厚かったと考えられ、19 世紀前葉に東側に盛んに焼土坑などが掘削されるが、第 2 面を検出した V 層堆積層まで及ぶ遺構は少ない。

町屋②と③の間には最大 2 間ほどの細い間隙地があり、18 世紀中葉を中心とする時期には炭化物を多く含む土坑 252 他や 284 が東西の軸を同じくして並び、また 284 は町屋③の区画内である 057 と接合関係があるため町屋②よりは③と関連の深い区域と考えられるが、町屋③で当該期に特徴的な取鍋などの遺物がほとんど見られないため、屋外、屋内などの別があったと考えられる。その傍証となるのが As-A 降下後の処理坑の分布であり（図 55）、同じ南北軸の部分のみ他の処理坑が分布するラインより東側に処理坑が並ぶため、建屋の外であったと考えられる。

町屋③は多量の鞘や取鍋等の金属加工や漆加工の痕跡が濃密に分布する。関連遺物の検出は東西を問わず分布するが、18 世紀中葉は中央部分に、19 世紀前葉には東寄りに分布の中心が移るようである。西寄りからも出土するが、区画溝付近は比較的廃棄土坑的な性格が強い。

町屋④は既存建物とその南側を含むが、調査区内も上層の攪乱が激しく、土坑 402、403、404 が検出された他は詳細が不明である。

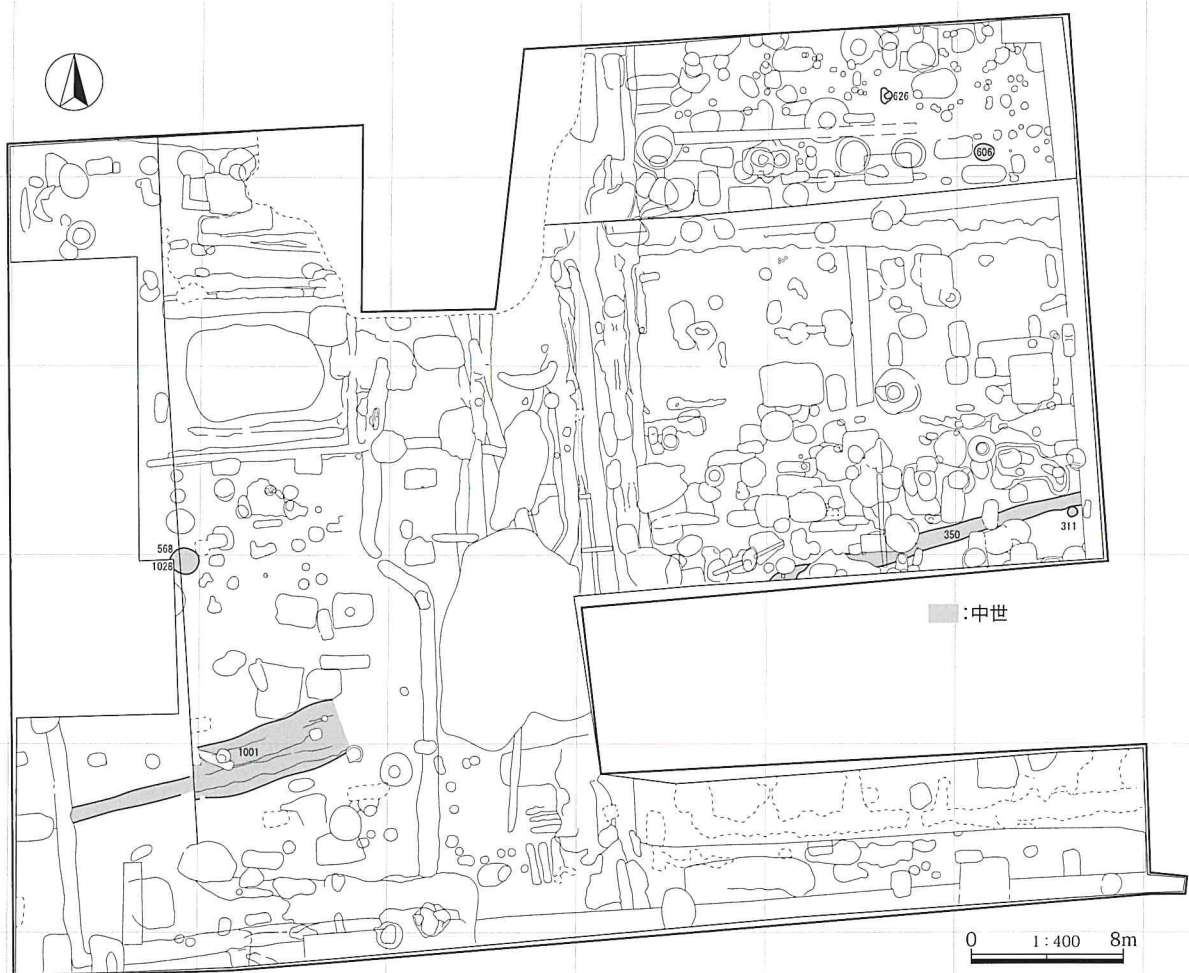
町屋⑤は調査できた部分は少ないが、227 等の鞘の廃棄土坑を含む点では町屋①、③と近似するが、取鍋等の金属加工の痕跡は確認できない。



第 50 図 宮元町遺跡 町屋 第 2 面

2. 遺構の時期別変遷

今回の調査では調査時層位的に遺構を分離することは困難であったが、整理作業を進める中で比較的遺構の密度が低い近世前葉、As-A の降下を挟み製作関連の遺構が盛行する 18 世紀中葉と 19 世紀前葉、幕末から近代にかけてと、粗削りではあるが様相の違いが抽出できた。出土遺物の下限年代を示した遺構廃絶年代をもとにしているため、必ずしも同時期の遺構分布を正確に示しているわけではないが、以下に時期別の変遷を示し、理解の助けとしたい。



第 51 図 宮元町遺跡全体図（中世）

中世～17世紀初頭

中世に属する遺構は溝1条、井戸2基、柱穴2基である。

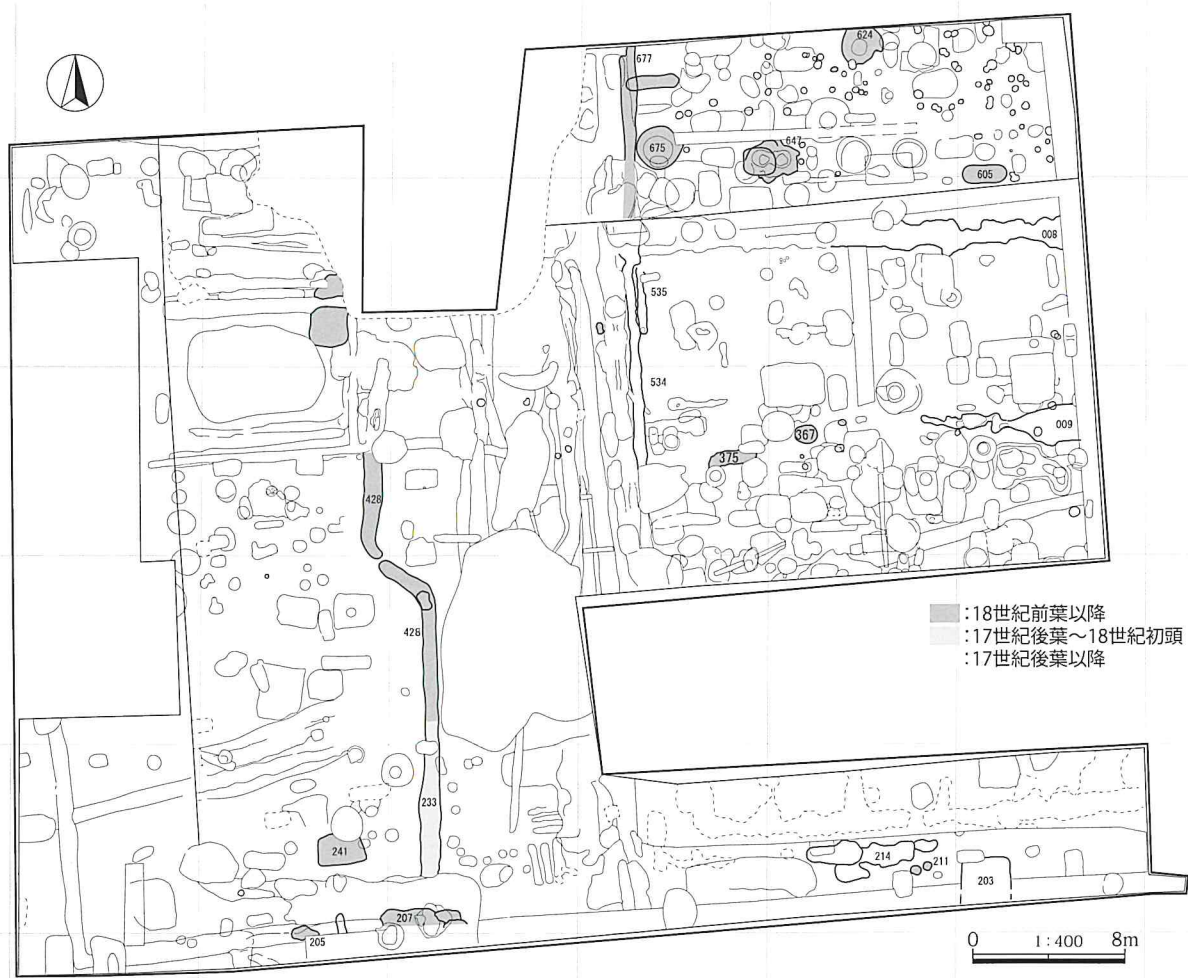
溝 350 は基本層序Ⅴ層上面より掘り込まれ、溝底はⅦ層に達し、覆土は As-B を含むラミナ状を呈し、水流があり自然堆積で埋まったと考えられる浅い溝である。調査区西側は第3面のみの調査で、東側では上面を複数土坑に切られるため1条のみの検出であったが、調査グリッド P、U 付近では断面が詳細に観察でき、複数の溝として検出された溝 1001 は同一遺構である。主軸は北東から南西に向かって傾き、近世以降のほぼ東西南北に近い区画とは異なる。調査区東側の烏川沿いの微高地と低湿地の境界に直行しており、自然地形に沿ったものと考えられる。出土遺物は少ないが、内耳鍋と陶器片が出土している。

井戸 606 は素掘りの井戸である。直線的に掘り込まれ、東側に丸木の木材が打込まれている。湧水のため完掘はしていない。

井戸 568 は検出面に向かって漏斗状に開く。遺構の東西で検出時期が異なるため、東側に附番した 1028 は同一遺構である。深掘りを行い、第3面の検出面から 1.12m で井戸底を検出した。遺物は検出されなかったが、As-B 混土を多量に含む覆土であるため、中世期の井戸と判断した。

柱穴は近世期の土坑 626 の底面より検出され、礎盤石を持たない柱穴である。内耳鍋片が出土している。明確に中世期の遺物を検出したのは当遺構のみであるが、周囲では複数の柱穴を検出している為、中世期の掘立柱建物が存在していた可能性がある。

柱穴 311 は礎盤石を持つ柱穴である。絵唐津の陶器片が出土しており、中世あるいは近世初頭の可能性がある。周囲にはやはり柱穴が複数検出されているが、同様の深さを持つ遺構は検出されなかった。先述の 350 と隣接しており、明確な切り合いはないが 350 廃絶後に掘り込まれたものとする。



第 52 図 宮元町遺跡全体図（17C 後葉～18C 後葉）

17 世紀後葉～18 世紀前葉

近世初頭の遺構は明確に検出されていない。先述の 311 の存在を考えると、明確な時期判定できない柱穴がそれにあたる可能性もあると考えるが、当該期の遺物も少なく、全体として希薄な時期である。008 には石組の時期より前に素掘りの溝遺構が層位で確認できる。As-B 漸移層上から掘り込まれているため、この時期には存在していた可能性がある。

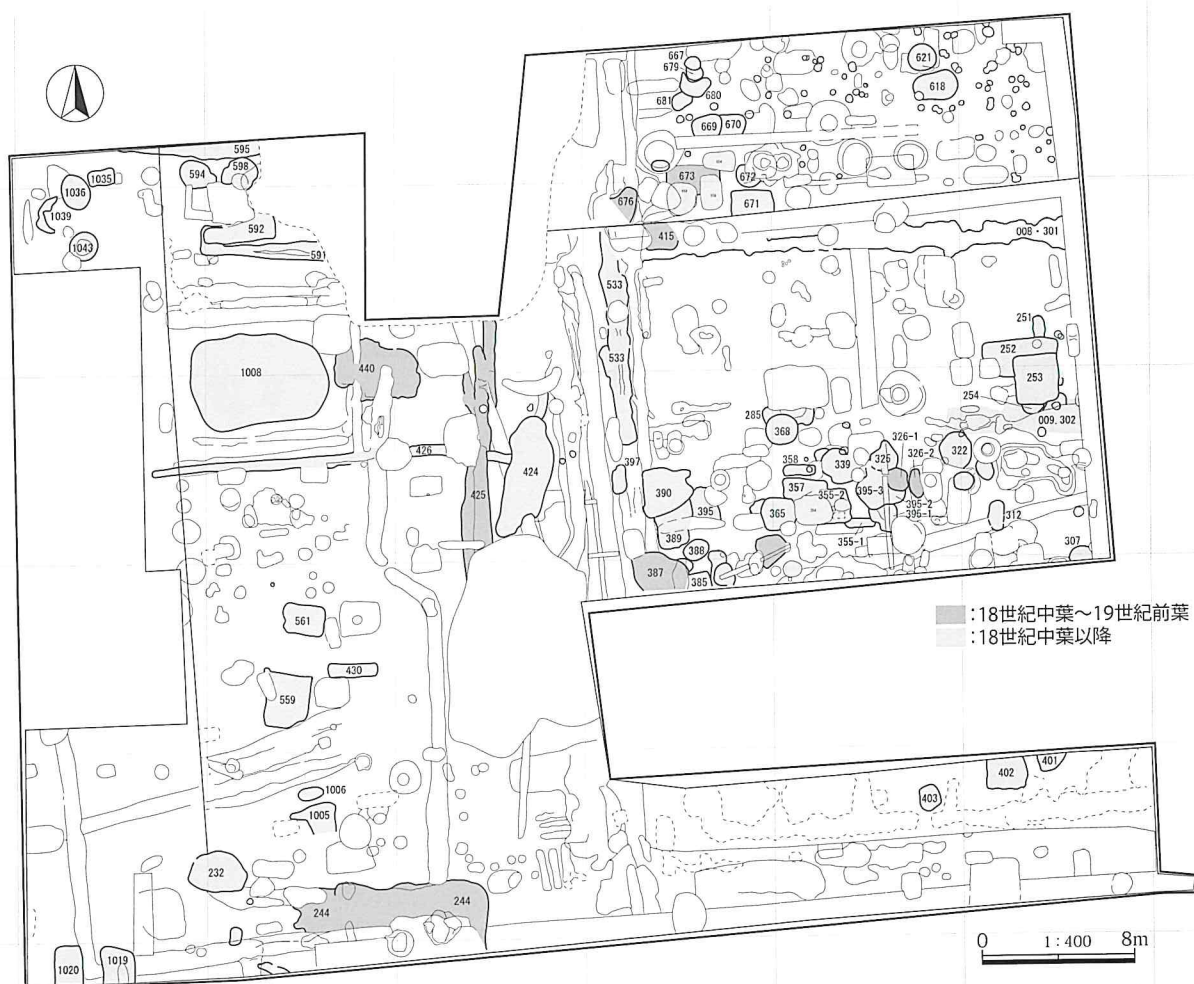
明確な遺構が検出されるのは 17 世紀後葉になってからである。南北の区画溝 233 は 428 と接続する溝であり、調査時期の違いで別に附番したが、時期差は継続時期を表すものとする。

また、677 も同じく南北の溝であり 2 本の溝が重なっている。535、534 は近代としたが、遺物の混入の可能性もあり、677 につながる溝であった可能性がある。当該溝より西側にはこの時期以降複数の溝が掘りなおされており、この時期頃町割が整備されはじめ、東の鞘町側と西の宮元町側に様相の違いが出始めている。また、2 本の溝に挟まれた中央の区画も存在し、間隙地あるいは路地のような状態であった可能性もある。

鞘町側の 675、624 は素掘りの井戸である。675 が開口部が漏斗状に開き、624 はテラス状になる。また、624 は焼土塊を多量に含む土で埋没している。647 は桶埋設遺構の抜き取り後と考えられる。方形の土坑の底面に溝が円形に掘り込まれており、同様のプランが東西に連続しており、東側が西側に切られている。

宮元町側の遺構 205 は皿 8 枚を上限とする同一柄の組み物の磁器を中心とし、覆土には炭化物が多量に含まれていた。火災後の一括廃棄の可能性がある。鞘町側の 211 を中心に出土した皿も 8 枚を上限とし、近接する 203、214 と接合関係にある。

当該期の遺構はまだ希薄であり、北東と南西にやや偏りが見られる。



第 53 図 宮元町遺跡全体図（18C 中葉～18C 後葉）

18 世紀中葉～18 世紀後葉

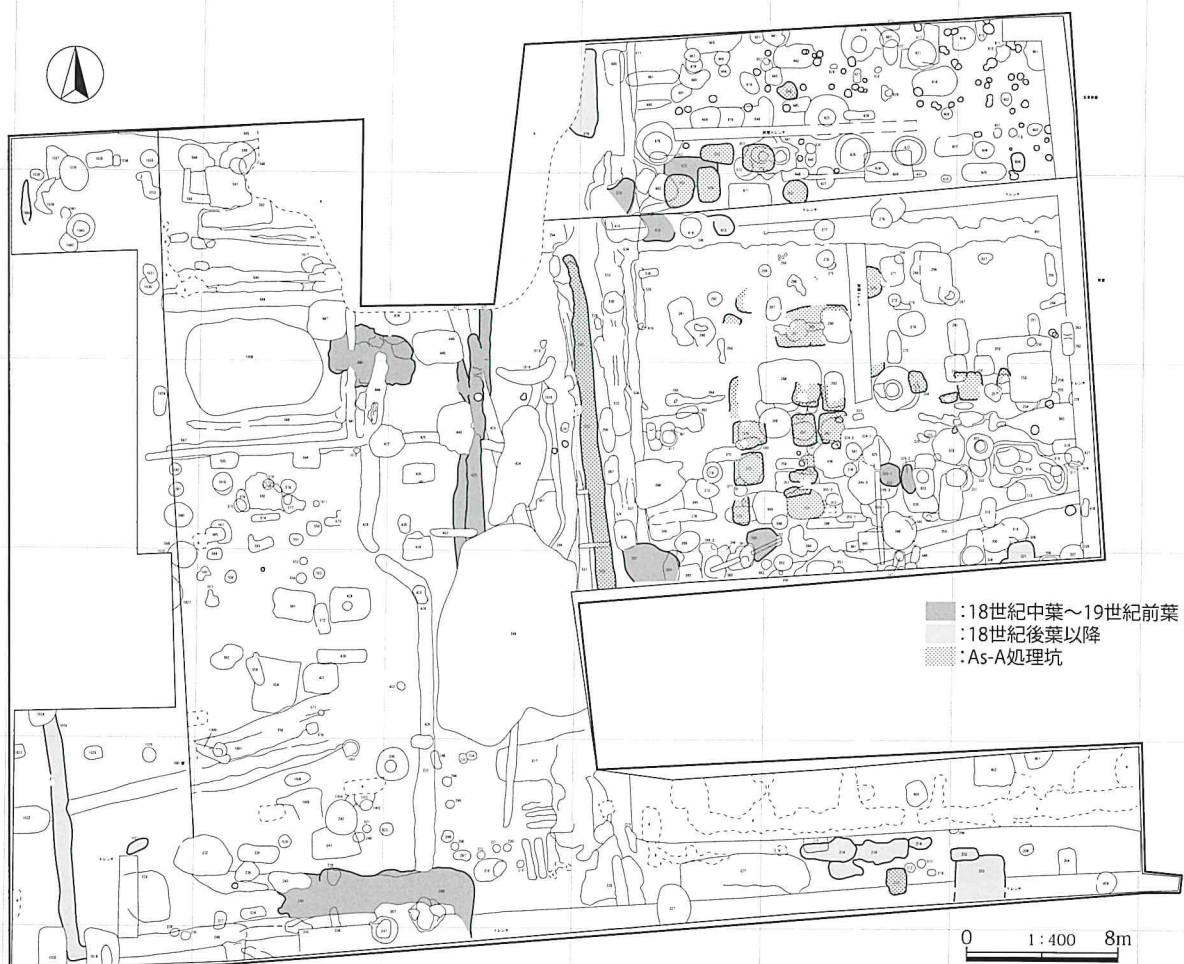
18 世紀中葉に遺構数は爆発的に増加する。南北区画溝 533、423、425 は内側に向かって掘りなおされ、東西方向の溝 301（008 と同一遺構）、302（009 と同一遺構）もこのころには石組みを備えた作りに変化しているなど、東の鞘町側では町屋の区画が明確になっている。

301 の北側、302 の南側は、濃密に遺構が分布する。焼土や炭化物を含み、鞘の破片や取鍋などの製作関連遺物を多数含み、隣接して複数の土坑が繰り返し掘られている。301 北側区画では西寄りに遺構が集中するのに対し、302 南側では東側から西側の区画溝付近まで全体的に分布する。

南西側の 244 は広く浅い溝状遺構で近接する土坑 232、241 と共に覆土に均質な炭化物と陶磁器類の他に鉄釘が多く含まれている。これらの遺構の出土遺物は当該期の他の土坑に比べ上手のことが多い。

焼土坑が多数検出されており、401、402、561、559、618 は橙色の焼土塊を多量に含み、検出地点は離れているが非常によく似た覆土であった。鞘町側、宮元町側の別なく分布することから、被害が両町にまたがるような火災の処理坑の可能性がある。18 世紀中葉以降の廃絶年代を考えると宝暦 9 年（1759）に当遺跡の北西にあたる北郭（今の柳川町西）より出火し、南にあたる千歳町（今の下横町）まで焼失したという大火によるものか。

一方、252、253 は、炭化物を多量に含む黒色の覆土である。焼土もわずかに含むが、均質な大きさの炭化物が主体であり、鍛冶関連の燃料の可能性も考えられる。また、廃絶年代は異なるが 252 は 284 と遺物の接合関係があり、同時期に存在していたと考えられる。これらは、金属加工に伴う燃料の貯蔵、あるいは製造に用いられていた可能性も考えられる。



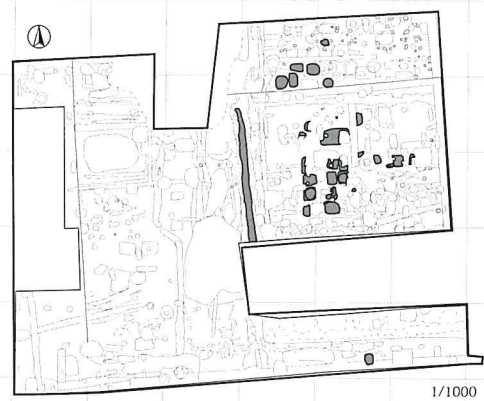
第54図 宮元町遺跡全体図 (As-A 降下前後)

As-A 降下前後

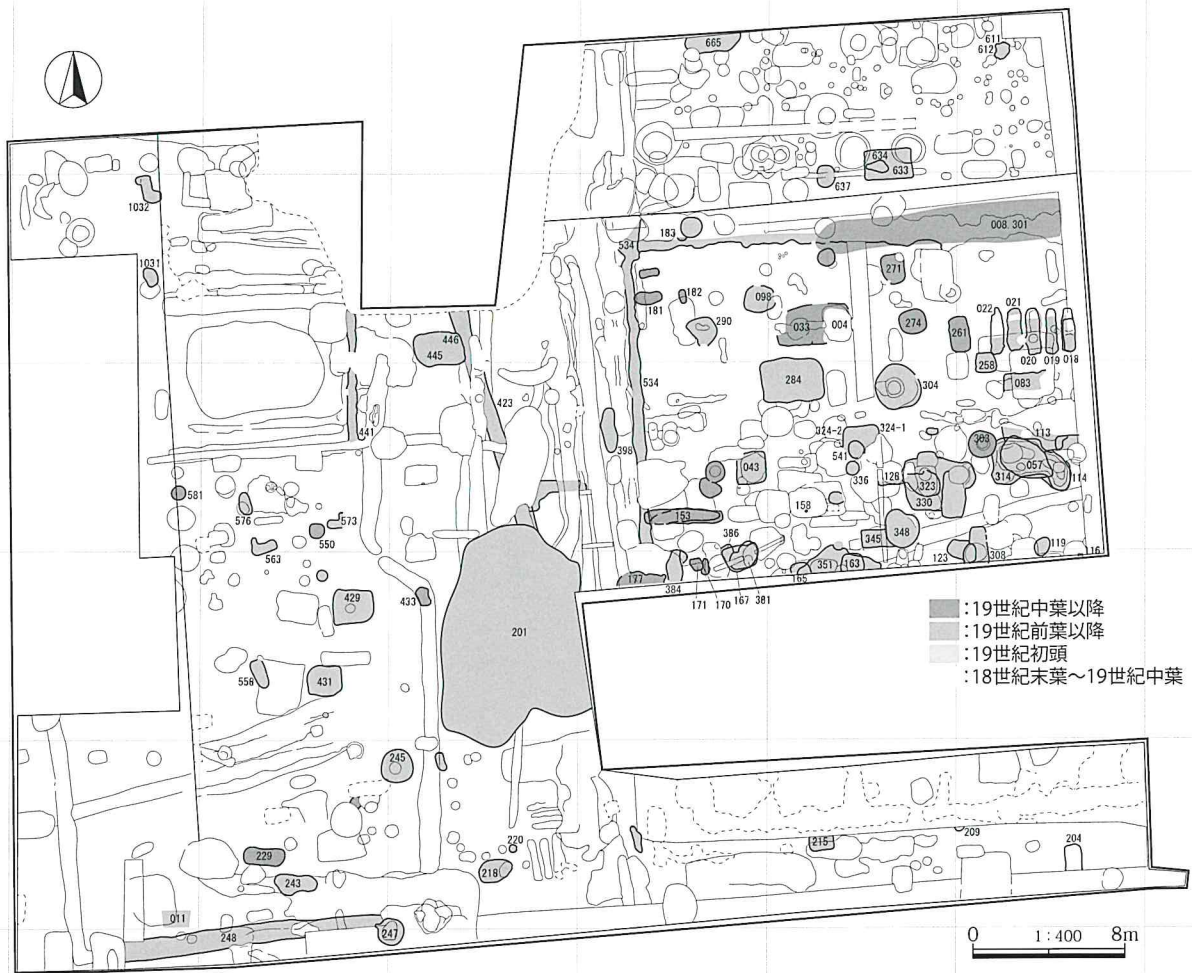
天明3年(1783)の浅間山の噴火による降灰(As-A)の影響は調査区の各所でみられるが、一次堆積は確認できなかった。

溝352は前項の溝533のさらに西側に掘りなおされ、As-Aを多量に含む土で埋没している。

As-Aは、遺跡内各所で取り片付け坑として確認できる、鞘町側では東西に長い区画の中央より西側に集中して検出される。中央より東側に分布する処理坑があるのは、排水溝脇の通路のような区間であったのだろう。いずれも遺物はほとんど含まず、処理坑の集中は建屋を避けたためと考えられる。降灰は建屋に影響が出るような被害ではなく、敷地内の建屋の間隙地に処理することで済む程度であったと考えられる。一方、区画溝を挟んだ宮元町側では、南側の断面にわずかに処理坑が確認できた以外はあまりAs-Aの痕跡が見られなかった。敷地外に搬出して処理した可能性もあるが、上面が攪乱を受けている部分も多かったため今回の調査区内で単純に比較するのは難しい。



第55図 宮元町遺跡 As-A 処理坑全体図 (18C 後葉～)



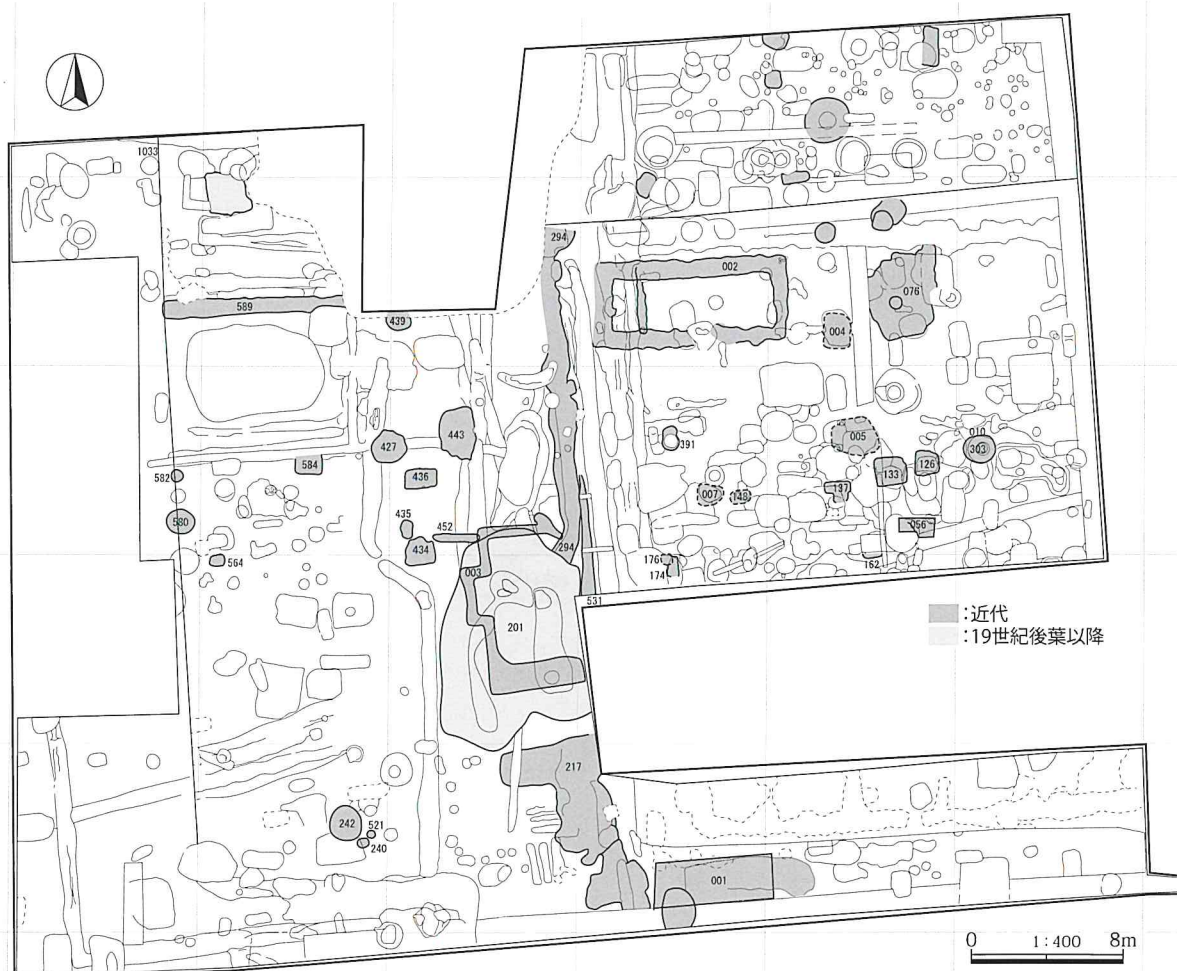
第 56 図 宮元町遺跡全体図 (19C 前葉～中葉)

19 世紀前葉以降～幕末

少なくともこの時期には調査区中央付近に池状遺構 201 が掘削されている。溝 423 は開削に近い時期に 201 に接続していたと考えられる。201 の最下層堆積は比較的遺物が少なく、比較的美しく保たれていたと考えられる。

第 1 面では長方形に規則的に並んだ焼土坑が検出された。橙色の焼土や炭化物を多量に含み、多量の遺物を含むものが多い。そのうち 020、021、022 から検出された破片が接合している。また、429、431 も同様の時期の焼土坑であり、やはり鞆町と宮元町の別なく焼土坑が存在する。検出遺物からは 19 世紀前葉以降の廃絶と考えられ、文化 9 年 (1812) 本町から出火し 900 軒焼失した大火に比定できるのではないかと考えられる。焼土坑 429、431 は前項の 561、559 と時期が異なるがプランや配置が近似している。

再び鞆町側では製作関連遺構が増加する。特に 302 南側では関連土坑は同一の位置に複数回土坑が掘りなおされている状況も認められる。最終的な廃絶は当該期であるが、前代から継続して利用されていた可能性が高い一方、これだけ遺構が重複する中で、僅かだが重複の少ない部分もあり、その対照が示すものは、ある程度作業場としての空間の固定化であるとも考えられる。一方で 301 北側は、As-A 降下前は盛んであった鞆製作が下火になるようである。池状遺構 201 は幕末頃一度大量の有機物や遺物で廃絶している。さながらゴミ捨て場の様相であり、石組みや堰を持つ当初の景観はここで失われている。



第 57 図 宮元町遺跡全体図（19C 後葉～近代）

幕末～近代以降

池状遺構 201 は幕末頃大量の遺物で急速に埋まったのち再掘削され、明治時代に溝 294 の延長の木枠を持つ溝状遺構になる。

東西溝 589 と土坑 217 も 294 と同時期の遺構で、それぞれに遺物の接合関係が認められた。いずれの遺構も大量の遺物廃棄により埋没している。217 は現代まで複数回掘りなおされ、いずれも遺物が大量廃棄されている。

001、002 をはじめとした蔵基礎が鞘町側の区画溝付近で検出され、近世以降の区画が維持されながらも街並みの変化が感じられる。前項まで見られた鍛冶関連遺物は見られない。鞘を出土した 227 は近代以降廃絶としたが、001 建設時等の攪乱による混入とみて鞘関連土坑は近世に収まるものと考えたい。

宮元町側は上層を攪乱により失っている部分が多く、詳細は不明であるが、調査区の南西で礎石群 011（第 7 図参照）を検出している。やはり地盤改良のため丸木の杭を打ち込んだ後礎石を据えている。また、床面が焼土化しており、火災により建て替えられている。土層中に漆喰に挟まれた土壁が観察でき、漆喰塗の建物が想定できる。

この時期に廃絶する井戸 303、242、1033 はともに上層に多量の炭層で埋没している。白色の部分が多いことから亜炭層の可能性もある。また、303 は 161、1033 は 354 と統制陶器や軍関連の遺物を含んでいる。溝 297 にはのちの高崎陸軍病院の前身であり明治 21 年から昭和 11 年にかけて使用された名称である「高崎衛戍病院」とエンボスのある瓶 155 が含まれており、営内ではないもののこの地域も第十五連隊との関連をうかがわせる。

当該期は遺構分布に偏りがあるが、遺構の存在がないわけではなく、むしろ激しい攪乱のため遺構認定が困難であったという調査上の問題点を反映したものであることを明記しておきたい。

3. 刀装具類

今回の調査では 18 世紀中葉と 19 世紀前葉を中心とした時期の遺構から多くの刀装具や製作関連遺物が出土した。これらの出土状況から、いくつかの考察を試みたい。

検出された鞘や柄はいずれも漆が厚く塗られ、工具により切断、あるいは引きはがしたような痕跡が残るものが多い。調査の精度の問題もあると思うが、柄は比較的長さが残るのに対し、鞘は先端部分である小尻部分を残す部位の出土が圧倒的に多い。このように鞘に完形品がないことは、曲がった裏瓦に代表されるように鞘の柄側の部分は箆櫃や小柄櫃等を使用された金具類を取り外して再利用するため、鞘の鯉口側はさらに細分され破棄されていたのではないかと考える。また、柄 3 点の内 2 点は柄巻をしていた痕跡を残すものであり、その 2 点を検出した土坑からはやはり柄巻を施す痕跡である鵜目穴のある頭金具が検出されている。それぞれ平と鵜目穴の距離が異なるため同時使用されていたものではないが、同じ遺構から柄巻の痕跡が検出されている。

今回の調査では刀装具類の他に金属加工に伴う取鍋や轆羽口、針金や金属板の加工品、工具類等多量に検出された他、土坑 314 の覆土中には金属板片や細かな金属切片が含まれており、金属の切断・溶解を伴う加工を行っていたと考えられる。多量に出土したカワラケを用いた取鍋の内、土坑 330 と 355-2 から出土した 2 点（186 と 211）を分析し、それぞれから銅や亜鉛、錫等が検出されたが、186 からは 211 に含まれない金、銀の成分も含まれており、加工に用いられた材料は均質ではない。

漆加工に用いる漆漉し紙やパレットにした陶磁器類も多く出土している。これらは金属加工にかかわる遺物と同じ遺構に混在した形で検出されているものも多く、出土状況から明確にこれらの作業工程を区分することは困難であった。出土した刀装具類を観察すると、鐙や筒金など金属を装着する前後に漆を重ね塗りした痕跡が確認できるものがあり、やはり金属加工と漆塗りは作業工程として分化していないようである。

これらの状況から、当遺跡内では鞘や柄などの刀の拵を解体して部品を取り出して一部を再利用しながら、切金やロウ付けなどの金属加工や漆塗りの技術を組み合わせて新たな拵を製作していたと考えられる。

新たな拵の候補として挙がるのが右京柄ではないだろうか。右京柄とは、高崎藩主大河内輝貞（8 代在位 1695 ～ 1710 年、10 代在位 1717 ～ 1745 年）が創始したとされるもので、輝貞の受領名が右京の亮・右京大夫と称したことに由来する。右京柄とは、それまでの鮫皮や柄巻を用いた拵とは異なり、太刀拵の姿を残した柄で、太刀金具をつけ、木地柄に筒金を嵌めた刀装に特徴がある。

当遺跡の出土品を見ると、4 の柄は柄巻をせず、筒金といわれる金属の帯を巻いた痕跡があり、出し目貫を止めた針金が残る。同じ土坑 314 からは帯状金具 11 が出土しており、これは鍬形状の筒金を鑿で切り出した切片と考えられる。右京柄がエンジュやタガヤサンなどの堅木の還孔材を用いて木地柄とするのに対し、4 の柄は樹種同定で散孔材である朴の木を使用していることがわかっており、漆柄であるから単純に右京柄に比定することはできない。しかし「柄巻をする柄から筒金を巻く柄へ」という大きな需要の変化があったことが読み取れる。

大河内輝貞の城主就任により藩士たちは拵を作り替える必要に迫られ、受注を受ける側の職人も需要の変化を受け、それまでの職人間の役割分担に大幅な変更を迫られたであろう。今回の調査で検出された刀装具関連の出土状態はそういった技術の転換に伴う変化を表していると考えられる。

4. 職人町の成立と変遷

刀の拵は通常、刀工、研師、白銀師、鞘師、塗師、柄巻師、鐙師など複数の職人の間を行き来しながら制作される。鞘町の町名の由来ともなった鞘師は主として刀身を保護するための白木の鞘を制作し、漆で仕上げられる拵についても、鞘や柄の芯となる下地の制作を行う職種であるとされる。

寛政 9 年（1797）に発行された『高崎志』によると、鞘町は「鞘町ハ舁形食違木戸外北方ノ町也是□モ慶長年中箕輪ヨリ従ルト云此町鞘師多ク居ル故に名ツク」とあり、高崎城城下町成立時から存在していたことがわかる。しかし、当遺跡で 17 世紀代の遺構や遺物の検出は限られており、鞘製作の痕跡が顕著になるのは 18 世紀中葉以降である。

そこで同じ『高崎志』の白金町の項目を見ると「昔此町白銀師アリ故ニ名ツク元ハ鞘町ノ分也其頃住シ後藤某以下皆鞘町ニ移リシ後人漸ク多クナリテ別町トナル今ハ名ノミニテ金具師ナシ」とある。少なくとも『高崎志』が発行された 18 世紀末にはすでに白金町の金具師は鞘町に移住していたことになる。

近世城下町の地割は、公権力形成期に見られる城を中心とした縦町型から立地によって秩序の生じない横町型の地割へと変化していくことが指摘されており、高崎城城下町も例外ではない。安政期の地図を見ると鞘町も高崎城を正面とした東西方向の縦町の地割を残しており、田町を挟んで延長上に白金町がある。現代でも鞘町の町域は縦横両方の地割が残る十字型をしており、同様の現象は連雀町・鍛冶町・檜物町・新紺屋町など、箕輪城からの移城時に移ってきた複数の町に認められる。

城下町成立当初は鞘町、白金町が一続きの町として東西の道沿いに刀装具関連の職人たちが集まり、刀や拵が各職人間を行き来し制作を行っていたのであろう。ところが、中山道の開通に伴い高崎城下は横町型の南北方向の地割に転換する。田町によって鞘町と白金町は分断され、街道筋がにぎわうにつれ職人間に行き来には次第に不都合が生じたことは想像に難くない。先に示したような拵の需要の変化は、さらにその傾向を強めたであろう。『高崎志』に見える白金町の金具師の移動は、そういった文脈の中で生じたものではないだろうか。

移動先の候補になったのは、鞘町の中でも城下町成立時、縦町の地割に挟まれ、近世初頭には比較的間隙地に近かった当調査地を含む区域であったのではなかろうか。実際、遺構として検出した現在の地割にも引き継がれる南北の道に面する東西方向に長い地割は後出となる横町型の地割に一致する。

部分的ではあるが、白金町にかかる区域が発掘調査されており（『連雀町遺跡』2016）取鍋転用カワラケや鞘羽口、砲弾型の埴塙等が検出され、鍛冶遺構の存在が指摘されている。砲弾型の埴塙の出土はないものの当調査区と様相に類似点がある。また、溝に多量に廃棄された陶磁器類が当調査区では出土量の少ない17世紀末葉～18世紀前葉である点も特記される。直接今回の調査結果と結びつけるのは早計かもしれないが、高崎城下町の様相を知るうえで、非常に示唆的な成果であるといえるのではないだろうか。

今回の報告において刀装具に関しては大江正行氏と平野進一氏に多くのご教示をいただいた。特に大江氏には生涯にわたり情熱を注いでこられた刀装具研究の知識を惜しげなくご教示いただいた。本書は氏のご協力がなければ成立しえなかったことを記して感謝の言葉としたい。筆者の力量不足故十分に成果が生かしきれなかった部分が多々あるが、今後の課題としていきたい。

参考文献

- 群馬地域文化振興会 2019 『高崎志 上中下 復刻版』原著発行 1797（寛政9年）
- 南田法正 2016 『連雀町遺跡』高崎市教育委員会
- かみつけの里博物館 2005 『高崎藩の考古学—近世城郭、城下町を読み解く—』
- 平野進一・小山友孝 2007 「右京柄考—上野国高崎藩の特色ある刀装について—」『群馬県立歴史博物館紀要 第28号』
- 福永酔剣 1993 『日本刀大百科辞典』
- 藤岡瓦治革史編纂委員会 1977 『藤岡のかかわり史』
- 国立歴史民俗博物館 2013 『時代を作った技—中世の生産革命—』
- 国立歴史民俗博物館 2017 『URUSHI ふしぎ物語—人と漆の12000年史—』
- 第66回埋蔵文化財研究集会事務局 2017 『幕藩体制下の瓦—近世都市遺跡における生産と流通—』
- 高崎市 2004 『新編 高崎市史 通史編3 近世』
- 高崎市 2000 『新編 高崎市史 通史編2 中世』
- 高崎市 1999 『新編 高崎市史 通史編1 原始古代I』
- 鞘町史編集委員会 1978 『高崎市 鞘町史』
- 高崎市鞘町史刊行委員会 2000 『高崎市 鞘町史II』
- 宮本雅明 都市史研究会 1994 「城下町の空間類型」『年報 都市史研究 2 城下町の類型 都市史研究会』
- 高崎市教育委員会 1998 『高崎市遺跡分布地図 高崎市内遺跡詳細分布調査報告書』



宮元町遺跡 写真図版





010 井戸完掘 西から



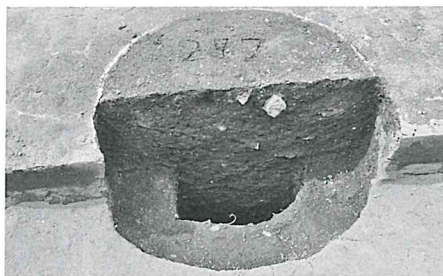
242 井戸断ち割り 南から



245 井戸完掘 東から



247 井戸完掘 西から



277 セクション 東から



285 完掘 南から



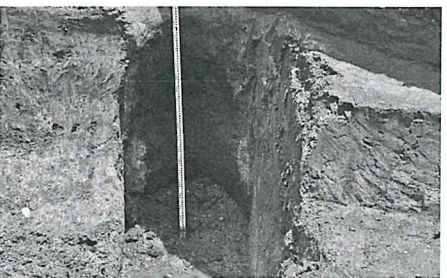
292 セクション 東から



303 井筒 南から



304 セクション 南から



308 井戸 深掘り 北から



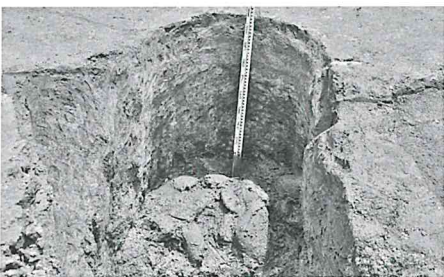
309 井戸 深掘り 北から



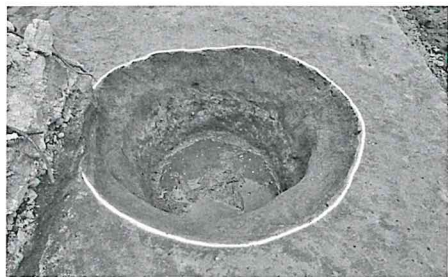
351 井戸 深掘り 北から



374 井戸 完掘



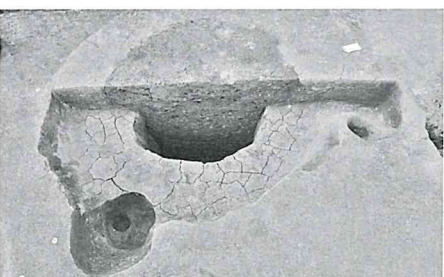
437 井戸 深掘り 北西から



568 完掘 東から



606 全景 西から



624 セクション 南から



632 検出状況 西から



635 検出状況 西から



672 完掘 西から



675 井戸 東から



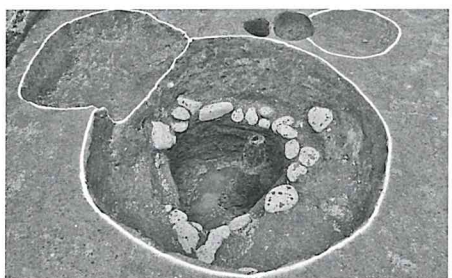
683 完掘 南から



1028 井戸断ち割り 東から



1033 セクション 南から



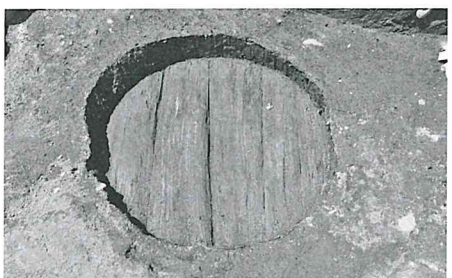
1042, 1043 完掘 南東から



054 完掘 西から



211 セクション 南から



413 検出状況 南から



521 セクション 東から



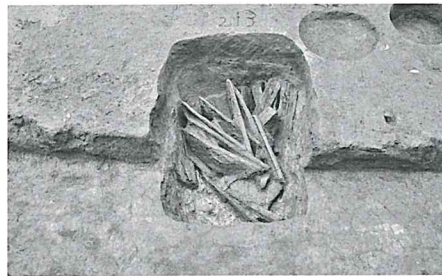
541 検出状況 南西から



581, 582 セクション 東から



609 検出状況 西から



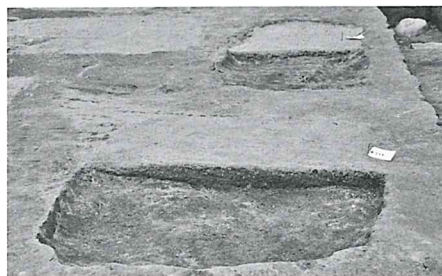
213 木材出土状況 南から



283 セクション 西から



645 完掘 東から



653, 654 セクション 東から



311 完掘 南から



410 カワラケ出土状況 南から



539No.1 検出状況 西から



626 完掘 西から



227 板出土状況 北から



255-2 完掘 西から



313 セクション 南から



314 完掘 北から



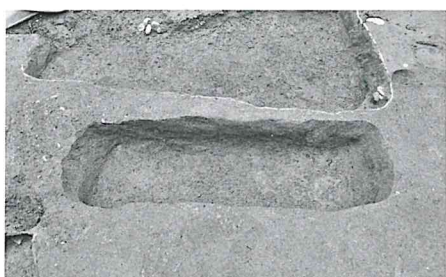
318, 316, 317 完掘 東から



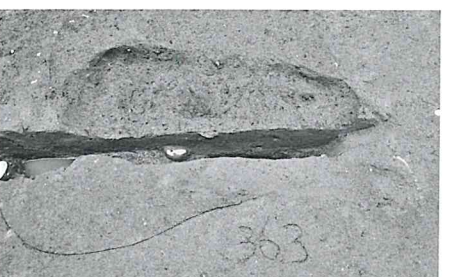
322 完掘 西から



330 完掘 北から



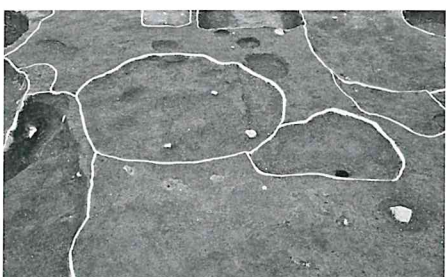
358 完掘 北から



363 完掘 南から



364, 381, 383 完掘 南から



372, 377 完掘 西から



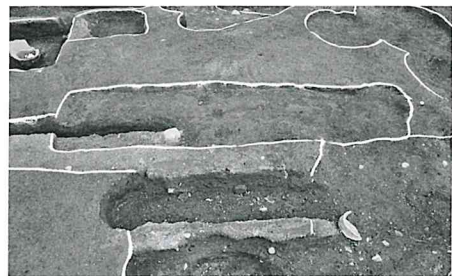
390, 395, 376, 389 南から



391, 392 完掘 北から



395 完掘 北から



396 完掘 北から



398 セクション 南から



415 検出状況 南から



540 完掘 北から



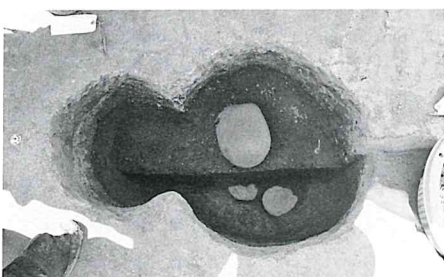
602 検出状況 西から



605 完掘 西から



607, 608 完掘 西から



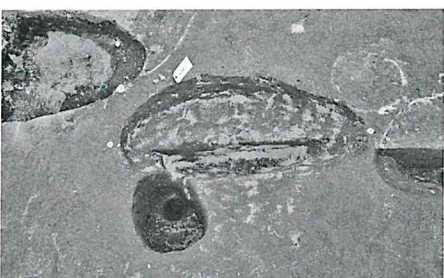
614, 613 礎盤石検出状況 南東から



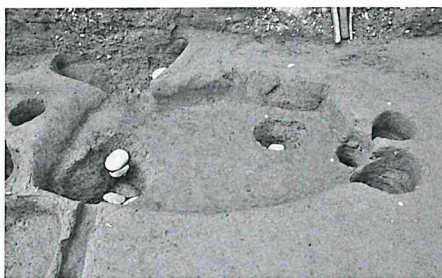
621, 622 セクション 東から



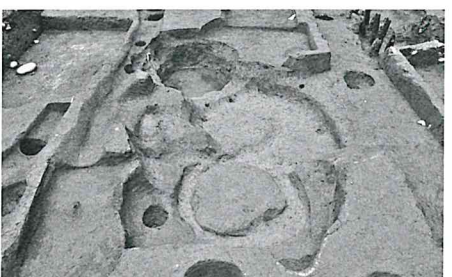
628 完掘 南から



638 完掘 西から



642 完掘 南から



647, 672, 673 完掘 東から



660 完掘 西から



661 完掘 西から



673 完掘 南から



676 完掘 南から



678 完掘 西から



217 検出状況 北から



249 木杵検出状況 南から



425, 423 完掘 北から



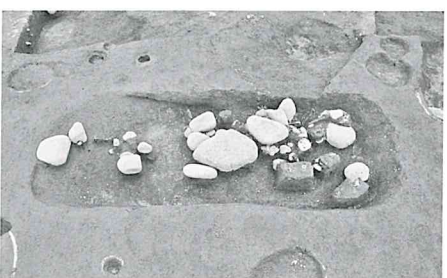
428 完掘 南から



436 完掘 北から



1008 完掘 西から



229 出土状況 東から



232 出土状況 北から



244 溝完掘 東から



424, 1016 完掘 北から



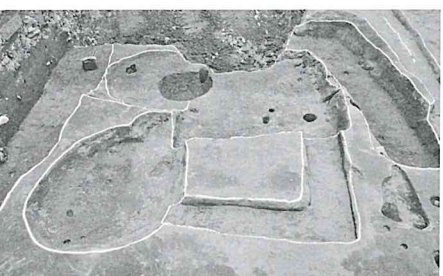
430 セクション 東から



440, 444, 445 完掘 北から



586 完掘 東から



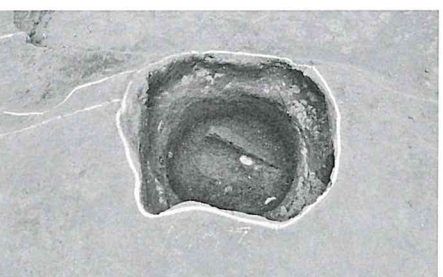
592, 594, 595, 597, 598 完掘 西から



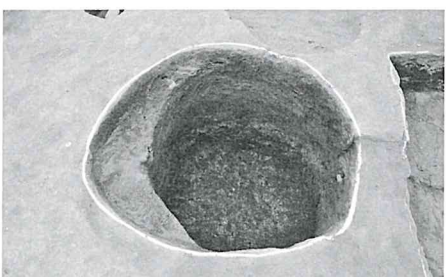
592, 591 完掘 西から



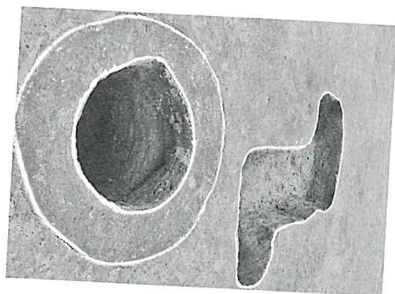
1000 完掘 南西から



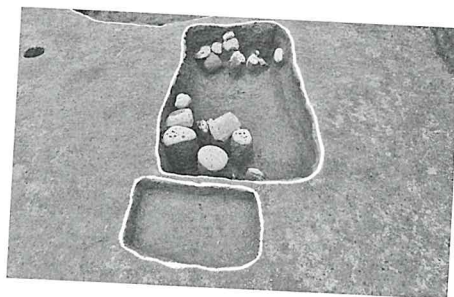
1007 遺物出土状況 南から



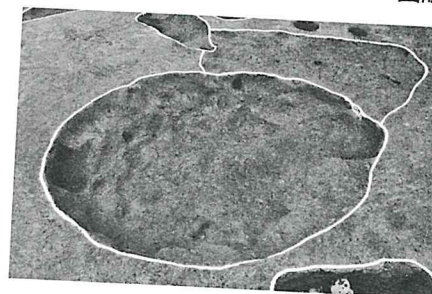
1010 完掘 東から



1033, 1032 完掘 北から



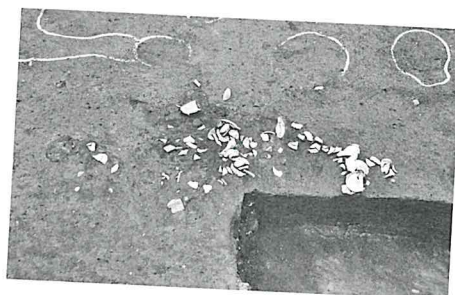
1034, 1035 完掘 東から



1036, 1037 完掘 東から



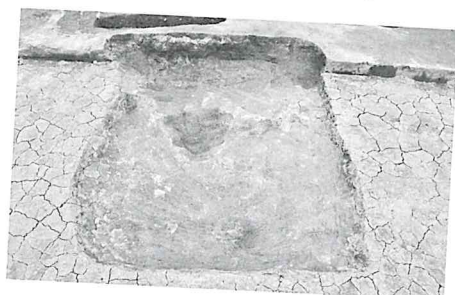
1039, 1040 完掘 南から



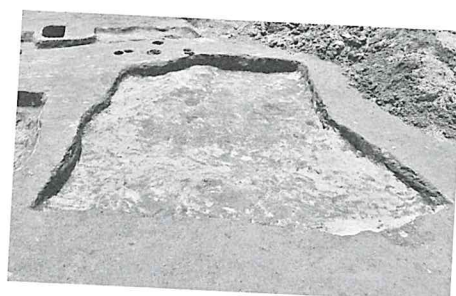
205 遺物出土状況 南から



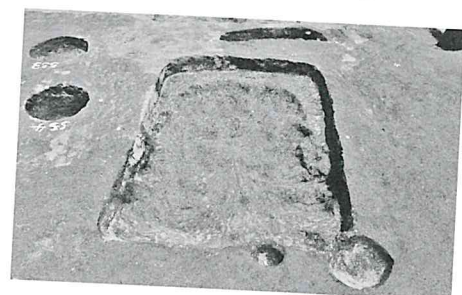
284 セクション 南から



429 完掘 東から



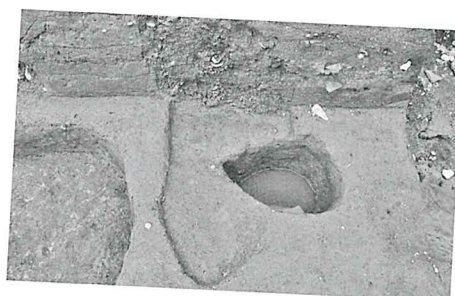
559 完掘 北から



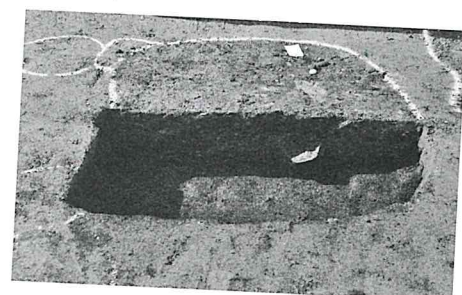
561 完掘 西から



601 セクション 南から



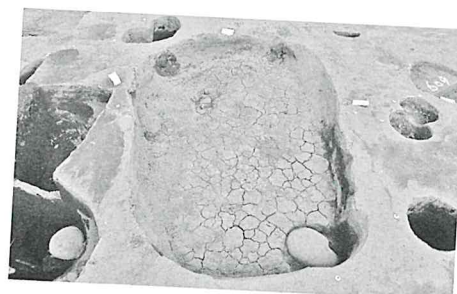
615 完掘 南から



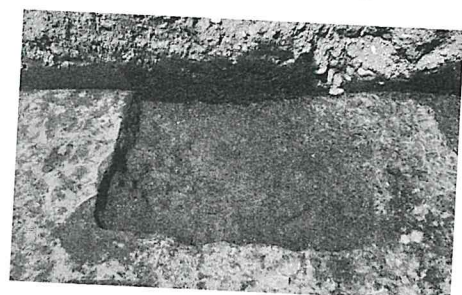
616 セクション 南から



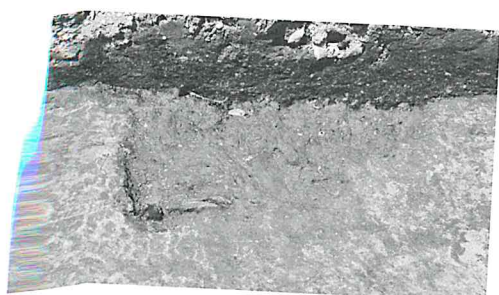
617, 724 セクション 北から



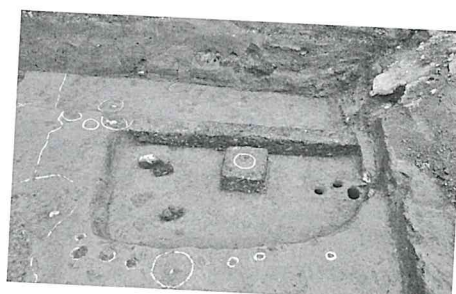
618, 619 完掘 西から



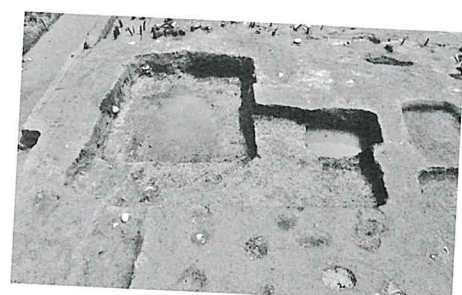
402 全景+セクション 南から



401 全景+セクション 南から



223 セクション 東から



250, 251, 252, 253 完掘 北から

報告書抄録

ふりがな	みやもとちょういせき							
書名	宮元町遺跡							
副書名	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 490 集							
編著者名	辻口菜穂子 永井智教 高橋 敦							
編集機関	山下工業株式会社 文化財事業部 〒 371-0244 群馬県前橋市鼻毛石町 207-8							
発行機関	高崎市教育委員会 文化財保護課 〒 370-0829 群馬県高崎市高松町 35-1							
発行年月日	2023 年 5 月 10 日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査対象 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宮元町遺跡	群馬県高崎市宮元町 10-2 外、鞆町 1-1 外	102020	840	36°-19'-30"	139°-00'-19"	2022.4.11) 2022.7.25	4,729.32㎡ (2面調査)	店舗建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮元町遺跡	水田跡	平安時代	畦畔	土師器・須恵器		近世高崎城城下町の宮元町・鞆町に該当し、境界の区画溝を検出。鞆町側からは鞆等の刀装具類や金属加工や漆塗りの痕跡を確認した。		
	集落跡	中世	溝・井戸・柱穴	土器・陶器				
	集落跡 (城下町)	近世	溝・井戸・土坑・柱穴	土器・陶磁器				
	集落跡	近代以降	溝・井戸・土坑・石組み					

宮元町遺跡

—店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2023 年 5 月 1 日 印刷
2023 年 5 月 10 日 発行

発 行 高 崎 市 教 育 委 員 会
編 集 山 下 工 業 株 式 有 限 公 司 文 化 財 事 業 部
印 刷 朝 日 印 刷 工 業 株 式 有 限 公 司